

京都府遺跡調査概報

第 77 冊

1. 中海道遺跡第42次
2. 長岡京跡右京第547次
3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡
4. 菟道遺跡・西牟上り遺跡
5. 芝山遺跡
6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡
7. 柿添遺跡第3次
8. 森垣外遺跡第1次

1 9 9 7

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方の協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を「京都府埋蔵文化財情報」によって、通常の発掘調査成果を「京都府遺跡調査概報」によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、「京都府遺跡調査報告書」を刊行しております。

本書は、「京都府遺跡調査概報」として、平成8年度に実施した発掘調査のうち、京都府乙訓土木事務所、京都府土木建築部住宅課、京都府宇治土木事務所、京都府土木建築部の依頼を受けて行った中海道遺跡第42次、長岡京跡右京第547次、長岡京跡右京第541次・脇山遺跡、菟道遺跡・西牟上り遺跡、芝山遺跡、府道八幡木津バイパス関係遺跡(田辺城跡ほか)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、田辺町教育委員会・宇治市教育委員会・城陽市教育委員会・精華町教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | | |
|--------------------------|----------------|---------------------|
| 1. 中海道遺跡第42次 | 2. 長岡京跡右京第547次 | 3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡 |
| 4. 菟道遺跡・西牟上り遺跡 | | 5. 芝山遺跡 |
| 6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡(田辺城跡他) | | 7. 柿添遺跡第3次 |
| 8. 森垣外遺跡第1次 | | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 中海道遺跡第42次	向日市物集女町御所海道・中海道	平8.10.28～ 平9.2.27	京都府乙訓土木事務所	田代 弘
2. 長岡京跡右京第547次	長岡京市井ノ内・西ノ京	平8.10.7～ 平9.2.13	京都府乙訓土木事務所	伊野 近富 柴 暁彦
3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡	乙訓郡大山崎町大字円明寺小字鳥居前	平8.9.9～ 12.6	京都府土木建築部住宅課	野々口陽子
4. 菟道遺跡・西牟上り遺跡	宇治市菟道森本・出口	平8.11.25～ 平9.2.13	京都府宇治土木事務所	石尾 政信
5. 芝山遺跡	城陽市寺田築留	平8.12.17～ 平9.1.27	京都府土木建築部	古瀬 誠三
6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡(田辺城跡他)	綴喜郡田辺町大字田辺小字奥ノ城・丸山	平8.5.1～ 8.29	京都府土木建築部	石尾 政信
7. 柿添遺跡第3次	相楽郡精華町北稻八間柿添・下狛・柿添	平8.8.19～ 12.6	京都府土木建築部	引原 茂治
8. 森垣外遺跡第1次	相楽郡精華町大字南稻八妻小字森垣外	平8.12.17～ 平9.2.13	京都府土木建築部	有井 広幸

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 中海道遺跡第42次発掘調査概要(3NNANK-42)-----	1
2. 長岡京跡右京第547次発掘調査概要(7ANGTE-3・GKN-2)-----	11
3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要(7ANSTE-18)-----	25
4. 菟道遺跡・西牟上り遺跡発掘調査概要-----	41
5. 芝山遺跡発掘調査概要-----	49
6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要-----	53
7. 柿添遺跡第3次発掘調査概要-----	75
8. 森垣外遺跡第1次発掘調査概要-----	85

挿 図 目 次

1. 中海道遺跡第42次

第1図	中海道遺跡と周辺の遺跡-----	1
第2図	中海道遺跡第42次調査トレンチ配置図-----	2
第3図	第1区検出遺構配置図-----	3
第4図	第1区西壁断面実測図-----	3
第5図	第1区土坑(S K01)実測図-----	4
第6図	第1区土坑(S K01)出土遺物実測図-----	4
第7図	第1区包含層出土遺物実測図-----	4
第8図	第2区検出遺構図-----	5
第9図	第1区断面実測図-----	5
第10図	第1区検出遺構実測図-----	6
第11図	竪穴式住居跡(S H01)断面図-----	6
第12図	竪穴式住居跡(S H01)出土遺物実測図-----	6
第13図	竪穴式住居跡(S H02・03)実測図-----	7
第14図	竪穴式住居跡(S H02・03)断面図-----	7
第15図	竪穴式住居跡(S H02・03)復原図-----	7
第16図	竪穴式住居跡(S H03)出土遺物実測図-----	8
第17図	縄文土器実測図-----	8
第18図	掘立柱建物跡(S B01)掘形断面図-----	9

2. 長岡京跡右京第547次

第19図	調査地位置図(1)-----	11
第20図	調査地位置図(2)-----	12
第21図	北地区北壁及び南壁土層断面図-----	13
第22図	北地区検出遺構平面図-----	14
第23図	土坑S K54703遺物出土状況実測図-----	14
第24図	北地区遺構土層断面図-----	15
第25図	北地区拡張部平面図-----	16
第26図	東壁拡張部分(上)及び洪水層畦(下)土層断面図-----	16
第27図	南地区土層断面図-----	17
第28図	南地区上層及び下層遺構平面図-----	18

第29図	出土遺物実測図(1)-----	19
第30図	出土遺物実測図(2)-----	20
第31図	出土遺物実測図(3)-----	22
第32図	調査地関係図-----	23

3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡

第33図	調査地位置図-----	25
第34図	トレンチ配置図-----	26
第35図	第1トレンチ遺構平面図-----	27
第36図	第1トレンチ土層断面図-----	28
第37図	溝S D03・13・21実測図-----	29
第38図	土坑S K02実測図-----	30
第39図	溝S D15・掘立柱建物跡S B20実測図-----	30
第40図	遺物実測図(1) 土器1-----	32
第41図	遺物実測図(2) 土器2-----	33
第42図	遺物実測図(3) 土器3-----	34
第43図	遺物実測図(4) 石器1-----	35
第44図	遺物実測図(5) 石器2-----	36
第45図	第2トレンチ遺構平面図-----	37
第46図	第2トレンチ土層断面図-----	38
第47図	土坑S K101～103実測図-----	39
第48図	遺物実測図(6) 土器4-----	39

4. 菟道遺跡・西隼上り遺跡

第49図	調査地及び周辺遺跡分布図-----	41
第50図	菟道遺跡調査地平面図-----	43
第51図	菟道遺跡土層断面図-----	44
第52図	菟道遺跡出土遺物実測図-----	45
第53図	西隼上り遺跡調査地平面図-----	46
第54図	西隼上り遺跡土層断面図-----	47
第55図	西隼上り遺跡出土遺物実測図-----	47

5. 芝山遺跡

第56図	調査地周辺遺跡分布図-----	50
第57図	調査地位置図(網掛け部)-----	51
第58図	トレンチ平面図-----	51
第59図	第1トレンチ南西壁断面図-----	52

6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡

第60図	調査地及び周辺遺跡分布図	53
第61図	遺構平面図及び地形測量図	55
第62図	方形周溝墓実測図	56
第63図	土器棺墓実測図	56
第64図	竪穴式住居跡1実測図	57
第65図	2号墳周濠及び排水施設平面図	58
第66図	排水溝1実測図	58
第67図	土層断面図	59
第68図	推定虎口平面図	61
第69図	石垣(石壁)実測図	62
第70図	出土遺物実測図・拓影(1) 弥生土器	63
第71図	出土遺物実測図(1) 石器類	64
第72図	出土遺物実測図(2) 金属器	65
第73図	出土遺物実測図(3) 形象埴輪	66
第74図	出土遺物実測図(4)	67
第75図	出土遺物実測図・拓影(2) 土器類	68
第76図	出土遺物実測図・拓影(3) 瓦類	69
第77図	出土遺物実測図・拓影(4) 平瓦	70
第78図	出土遺物実測図(5) 瓦質土管	73
第79図	古墳状隆起測量図	74

7. 柿添遺跡第3次

第80図	調査地位置図	76
第81図	トレンチ配置図	77
第82図	Ⅱ区平面図	78
第83図	土坑S K9603実測図	79
第84図	Ⅲ区平面図	80
第85図	溝状遺構S D9604実測図	81
第86図	出土遺物実測図	83

8. 森垣外遺跡第1次

第87図	調査地位置図	85
第88図	調査地周辺遺跡分布図	86
第89図	トレンチ配置図	88
第90図	トレンチ土層断面図	89
第91図	遺構全体図	90

付 表 目 次

6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡
付表1 調査遺跡一覧表-----54

図 版 目 次

1. 中海道遺跡第42次

図版第1 (1)第1区遺構検出状況(東から) (2)第1区S K01検出状況(南から)

図版第2 (1)第2区遺構検出状況(西から) (2)第2区S A01検出状況(北から)

図版第3 (1)第2区S H01検出状況(南から) (2)第2区S K01検出状況(南から)

図版第4 (1)S H02・S H03検出状況(東から) (2)S H02・S H03検出状況(北東から)

図版第5 (1)S H01遺物出土状況 (2)S H02・S H03遺物出土状況

図版第6 出土遺物

2. 長岡京跡右京第547次

図版第7 (1)調査地全景(南から) (2)調査地全景(左が北)

図版第8 (1)北地区全景(左が北) (2)北地区北部遺構検出状況(南から)

図版第9 (1)土坑S K54703遺物出土状況(北西から)
(2)土坑S K54703出土土器細部(南東から)

図版第10 (1)井戸跡S E54718堆積状況(西から)
(2)井戸跡S E54718遺物出土状況(西から)

図版第11 (1)井戸跡S E54718完掘状況(東から) (2)北地区主要部の状況(南から)

図版第12 (1)溝跡S D54715埋土の状況(北西から) (2)北地区拡張部全景(北から)

図版第13 (1)南地区上層遺構全景(南から) (2)南地区下層遺構全景(南から)

図版第14 出土遺物(1)

図版第15 出土遺物(2)

図版第16 長岡京跡の植物珪酸体

3. 長岡京跡右京第541次・臨山遺跡

- 図版第17 (1)第1トレンチ調査前全景(東から) (2)調査地遠景(北東から)
(3)第1トレンチ全景
- 図版第18 (1)第1トレンチ北壁土層断面(南から)
(2)第1トレンチ溝S D03・13・21(東から)
(3)第1トレンチ溝S D03遺物出土状況(北から)
- 図版第19 (1)第1トレンチ土坑S K02検出状況
(2)第1トレンチ土坑S K02(東から)
(3)第1トレンチ土坑S K02遺物出土状況
- 図版第20 (1)第1トレンチ溝S D15(南から)
(2)第1トレンチ掘立柱建物跡S B20
(3)第2トレンチ全景
- 図版第21 (1)第2トレンチ土坑群(東から)
(2)第2トレンチ土坑S K101・102・103(東から)
(3)第2トレンチ土坑S K106(北から)
- 図版第22 出土遺物(1)
- 図版第23 出土遺物(2)
- 図版第24 出土遺物(3)

4. 菟道遺跡・西隼上り遺跡

- 図版第25 (1)菟道遺跡調査前風景(南から) (2)菟道遺跡調査トレンチ全景(南から)
- 図版第26 (1)菟道遺跡北トレンチ中・下層(南から)
(2)菟道遺跡南トレンチ下層(北から) (3)菟道遺跡試掘A地点(南から)
(4)菟道遺跡試掘B地点(南西から)
- 図版第27 (1)菟道遺跡南トレンチ東壁断面 (2)菟道遺跡作業風景
(3)菟道遺跡北トレンチ東壁断面 (4)菟道遺跡北トレンチ南壁断面
- 図版第28 (1)西隼上り遺跡調査前風景(北から)
(2)西隼上り遺跡調査トレンチ全景(南から)
- 図版第29 (1)西隼上り遺跡調査トレンチ北壁断面
(2)西隼上り遺跡調査トレンチ東壁断面
- 図版第30 (1)西隼上り遺跡断ち割りと南壁断面
(2)西隼上り遺跡方形土坑(南西から)

5. 芝山遺跡

- 図版第31 (1)調査地全景(北西から) (2)第1トレンチ精査風景(北西から)
- 図版第32 (1)第1・第2トレンチ完掘状況(北西から)
(2)第1トレンチ南西壁断面(北から)

6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡

- 図版第33 (1)調査地遠景(南から) (2)調査地全景(南東から)
- 図版第34 虎口全景(北東から)
- 図版第35 (1)虎口平場と石段1(北から) (2)虎口西面の石垣(東から)
- 図版第36 (1)石垣下層及び平場断ち割り状況(北北東から)
(2)石垣断面(南から) (3)石垣下層の根石裾付け状況(北から)
- 図版第37 (1)平場東端の城門南礎石 (2)平場東端の城門北礎石
(3)石垣部分・矢穴のある花崗岩 (4)瓦敷き排水溝2南端(東から)
- 図版第38 (1)石列(北東から) (2)2号墳周濠底部の柱穴と石組遺構(西から)
(3)瓦敷き排水溝3(東から) (4)平場東側の石段と排水溝(北東から)
- 図版第39 (1)2号墳周濠と石組遺構ほか(南から) (2)暗渠排水溝1(北西から)
(3)導水溝と柵列(東から)
- 図版第40 (1)堀切1断面(北から) (2)溝3(東から) (3)溝1(西から)
- 図版第41 (1)奥ノ城1号墳北周濠西壁土層断面
(2)奥ノ城1号墳南周濠西壁土層断面
(3)奥ノ城1号墳北周濠(西から)
(4)1号墳北周濠南側テラスの埴輪出土状況(南から)
- 図版第42 (1)方形周溝墓周溝内土器出土状況(南から) (2)土器棺墓(西南から)
(3)方形周溝墓(西から) (4)方形周溝墓第1主体部(西から)
- 図版第43 (1)竪穴式円形住居跡1(南から)
(2)円形住居跡1の中央土坑と排水溝(西から)
(3)竪穴式円形住居跡2(東から、手前は中世土坑)
(4)竪穴式円形住居跡3(東から)
- 図版第44 出土遺物(1)
- 図版第45 出土遺物(2)
- 図版第46 出土遺物(3)

7. 柿添遺跡第3次

- 図版第47 (1)Ⅱ区・南トレンチ全景(西から) (2)Ⅱ区・北トレンチ西半部(西から)
- 図版第48 (1)Ⅱ区・北トレンチ東半部(東から)
(2)Ⅱ区・北トレンチ土坑S K9603(南から)
- 図版第49 (1)Ⅲ区全景(南から) (2)Ⅲ区溝状遺構S D9604(北から)
- 図版第50 (1)Ⅲ区溝状遺構S D9605(東から)
(2)Ⅲ区溝状遺構S D9605遺物出土状況(東から)
- 図版第51 出土遺物(1)
- 図版第52 (1)出土遺物(2) (2)出土遺物(3)

8. 森垣外遺跡第1次

- 図版第53 (1)調査前風景(南から、右端丸山古墳) (2)16bt西壁断面(南東から)
(3)17bt南端付近東壁断面(西から)
- 図版第54 (1)10bt中世面全景(南から) (2)11bt中世面全景(南から)
(3)16bt中世面全景(南から) (4)17・18bt中世面全景(南から)
- 図版第55 (1)17bt中世建物跡群全景(北から)
(2)S B 65(ピット177)遺物出土状況(南東から)
(3)S B 75(ピット75)遺物出土状況(南東から)
(4)18bt中世建物跡(S B 47)全景(南から)
(5)S B 47(ピット49)遺物出土状況(東から)
- 図版第56 (1)10bt古墳時代面全景(南から) (2)11bt古墳時代面全景(南から)
(3)11bt中央付近S D 85遺物出土状況(西から)
- 図版第57 (1)16bt古墳時代面全景(南から) (2)17・18bt古墳時代面全景(南から)
(3)18bt北端付近S D 223・S D 227遺物出土状況(西から)
- 図版第58 出土遺物

1. 中海道遺跡第42次発掘調査概要(3NNANK-42)

1. はじめに

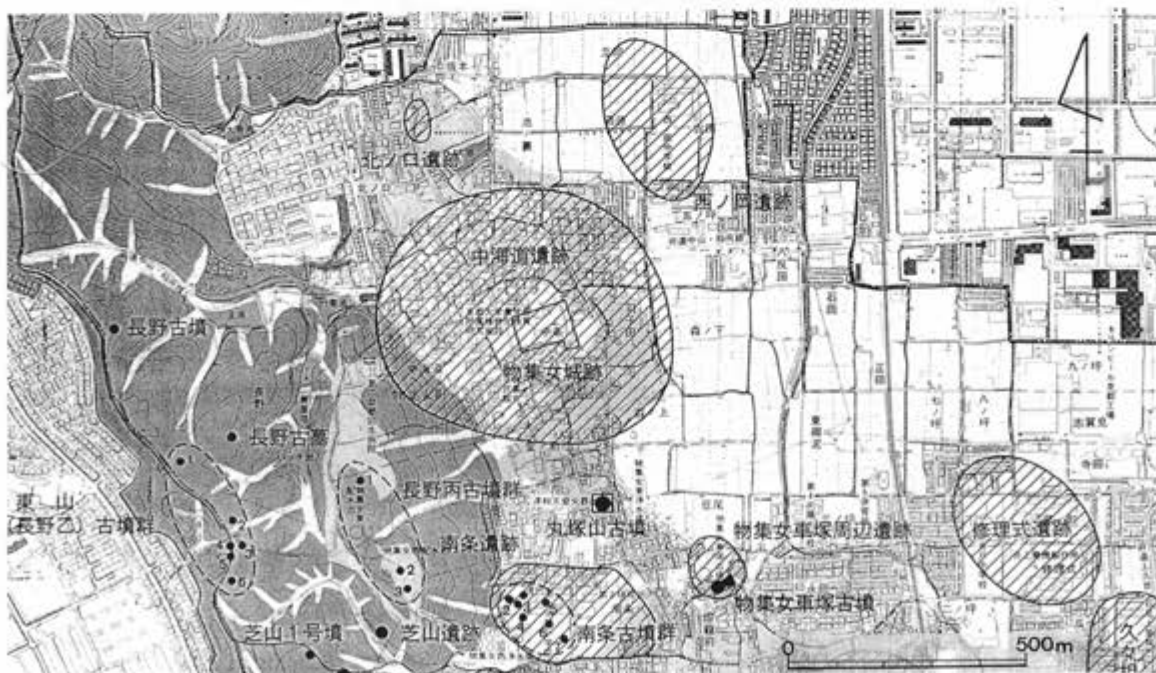
今回の調査地点は、向日市物集女町御所海道、中海道地内にある。

中海道遺跡は、向日丘陵と呼ばれる標高90m前後の丘陵地の東側斜面裾部に形成された段丘上に位置する集落遺跡である。遺跡の広がり、東西約500m・南北400mと推定され、弥生時代から近世に至るまで、断続的に形成された複合遺跡である。

中海道遺跡は、これまで向日市や京都府、当調査研究センターによって断続的に発掘調査が実施されている。第1次・第17次調査では、溝から弥生時代後期末頃の一括資料が出土し、乙訓地域の後期の弥生土器編年を補強する資料として注目された。韓式土器(第3次調査)や初期須恵器の出土(第17次調査)などから、古墳時代のこの集落の先進性が推測された。向日市教育委員会が実施した第32次調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の一画が検出され、この時期に建造された棟持ち柱を持つ大型の掘立柱建物跡が見つかった。この建物跡は、この時期に中海道遺跡が乙訓地域で主要な位置を占めた集落遺跡であったことを示す遺構として注目されている^(註2)。

今回、中海道遺跡地内で、広域幹線アクセス街路整備工事が計画された。当調査研究センターでは、京都府乙訓土木事務所の依頼を受け、記録保存資料を作成する目的で発掘調査を実施した。

調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美と同調査員田代 弘が担当した。調査期間は、平成8年10月28日から平成9年2月27日である。4地点、合計455㎡を調査した。



第1図 中海道遺跡と周辺の遺跡(「向日市遺跡地図」から)

2. 調査概要

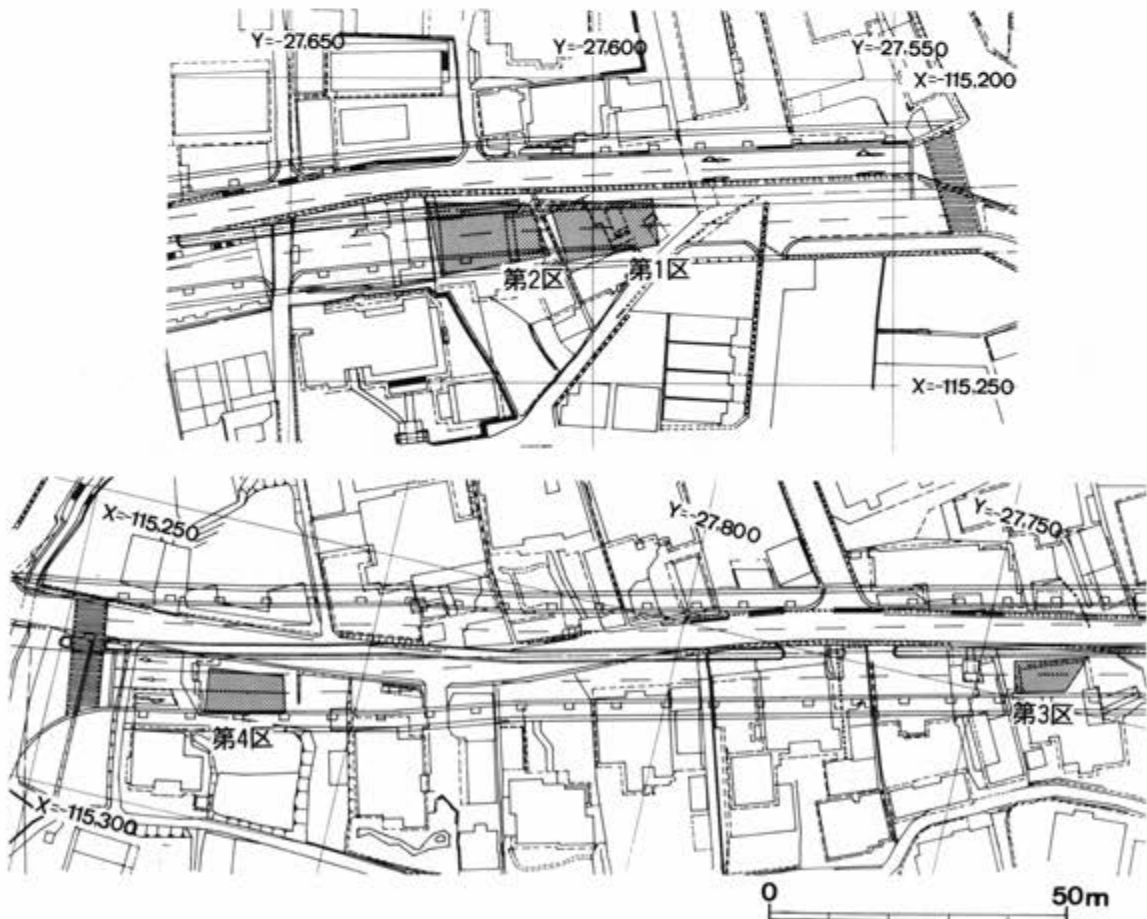
調査対象地は、南北に長い上、未買収地などを含んでいるため、今回の調査は京都府教育委員会と協議の上、4地点を対象とした。調査地区は、南から第1区、第2区、第3区、第4区と名付けた。

発掘調査にあたっては、まず、宅地の整地層、遺物包含層の一部などを重機によって除去した後、人力によって掘削作業を行った。調査地が交通量の多い道路に接していること、調査対象地内での土砂の処理が困難であることから、掘削によって生じた土砂は、発掘調査用地外へ搬出することとした。上層の土砂除去後、精査した。作業の進行に応じて、適宜、写真撮影や遺構の実測などの記録の作成につとめた。

調査は、諸般の事情により、第3区、第4区、第1区、第2区の順に実施した。第3区、第4区は、遺構面が削平されていたために、遺構・遺物ともに検出することができなかった。ここでは、主に第1・2区の成果を報告する。

(1) 第1区

調査対象地の西端にあたり、中海道遺跡第17次調査地に隣接する地点に位置している。したがって、第17次調査地で検出された弥生時代後期や古墳時代中期頃の遺構や遺物に関連する資料が得られるものと期待された。



第2図 中海道遺跡第42次調査トレンチ配置図

掘削の結果、この地区は丘陵と沖積地境界にあたる地点で、水田関連施設あるいは排水路などを設けるために近代・現代に地形が大きく改変されていることがわかった。さらに、上層は近年の都市整備や道路整備に伴う攪乱、整地が行われていたため、遺構の遺存状況は当初予想に反して希薄であった。

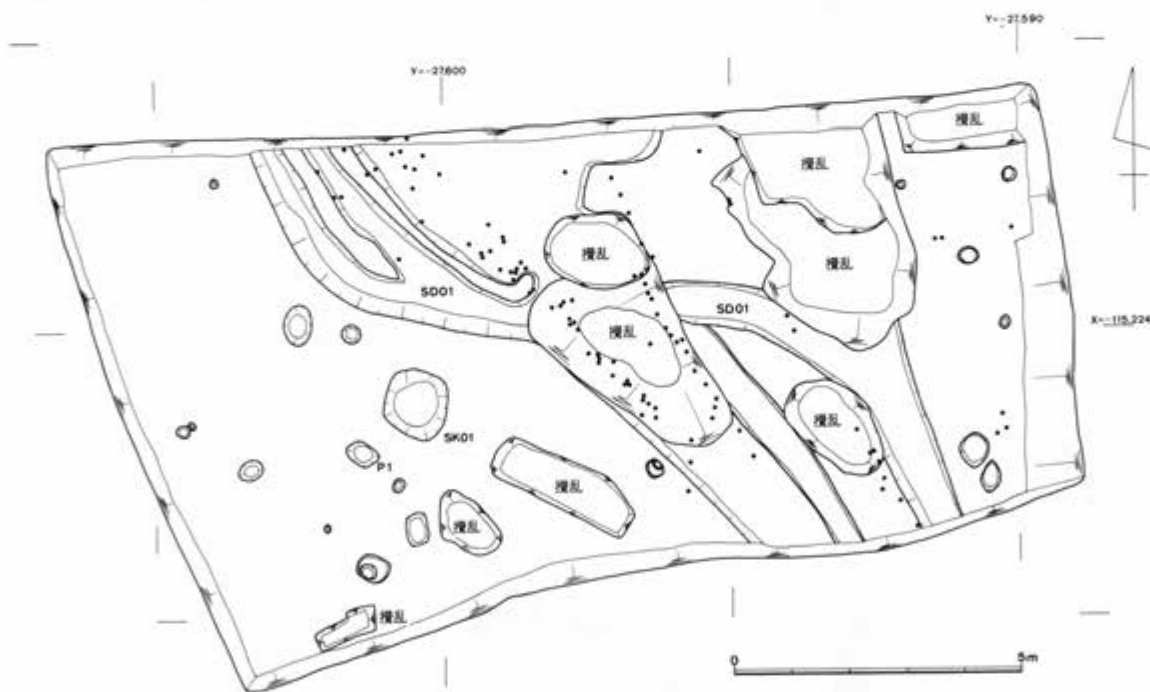
検出遺構 水路(SD01・02)、土坑(SK01)、ピット(P.1)などを検出した。

SD01・02は現代の溝である。SD02は竹杭(第3図中に●で表記)を伴っており、SD01を切っていた。SD02の埋土には、ゴム長靴やビニールなど現代の遺物が含まれていた。ピット(P.1)には弥生時代後期壺の頸部破片が含まれていた。

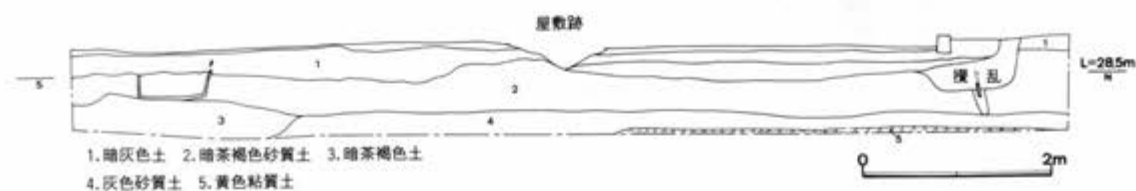
SK01は、東西径約1m・深さ約0.5mの楕円形で、素掘りの土坑である。埋土の第2層上面で、土師器皿8枚が一括して出土している(第5・6図)。

出土遺物 第6図は、SK01出土土師器実測図である。土師器には、口径約7~8cmの小形のもの(第6図1~6)と、約14~15cmのもの(第6図7・8)の二者がある。前者には底部を丸く仕上げるもの(1)と、へそ皿状に屈曲させるもの(2~6)がある。7が京都産、他は地元を含む南山城産とみられる。15世紀後半頃の土師器一括資料として注目される。

第7図に示した資料は、包含層出土のものである。9・10は瓦片である。9は焼成のあまい、暗灰色を呈する平瓦である。器表面には板木口による調整痕が明瞭に残っている。10は丸瓦で、

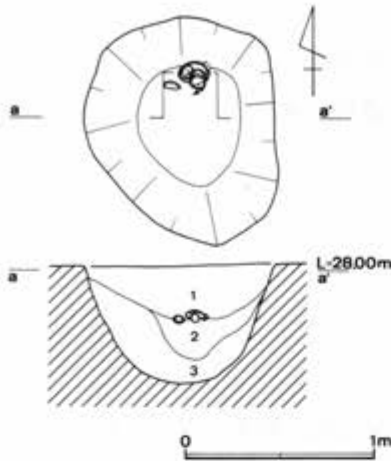


第3図 第1区検出遺構配置図

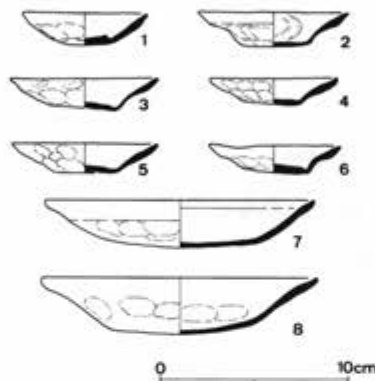


1.暗灰色土 2.暗茶褐色砂質土 3.暗茶褐色土
4.灰色砂質土 5.黄色粘質土

第4図 第1区西壁断面実測図



第5図 第1区土坑(SK01)実測図



第6図 第1区土坑(SK01)
出土遺物実測図

9と同様、焼成はあまりよくない。凹面に布目圧痕がみられる。いずれも時期は明らかでない。11は、緑釉陶器の椀である。濃緑色を呈しており、近江産とみられる。12は、近世の土師器皿である。底面中央に方形の孔を穿った燈明皿である。

第1区の包含層からはこれら以外に、須恵器甕体部破片、瀬戸産とみられる灰釉の瓶の体部破片をはじめとする中世陶磁器類や近世陶磁器類の細片など、各時代の遺物がわずかではあるが、現代の遺物とともに出土している。

(2)第2区

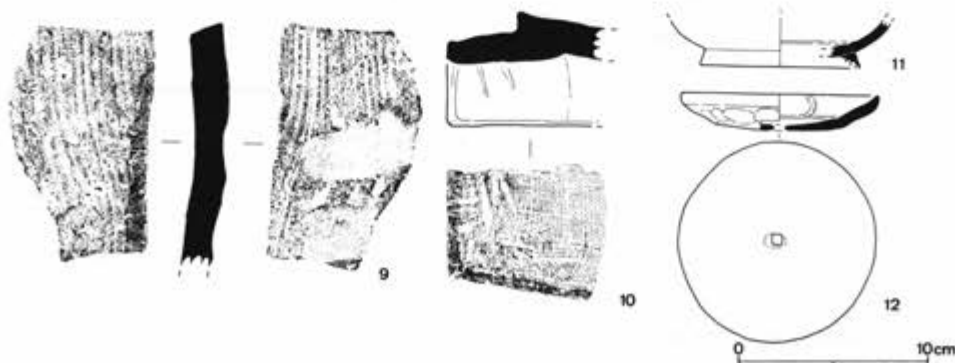
第1区の西に隣接するトレンチである。第1区調査時には、移転前の民家があったため、移転を待って第1区調査終了後に調査を始めた。

この地区は、第1区と異なり、表土を除去した段階で、暗茶褐色の包含層が認められた。このため、上面での遺構判別は困難であったが、この土層をあまり削り取らずに遺構の検出につとめた。最終的に遺構は、茶褐色土と黄色粘土の漸移層から黄色粘土上面で検出した。

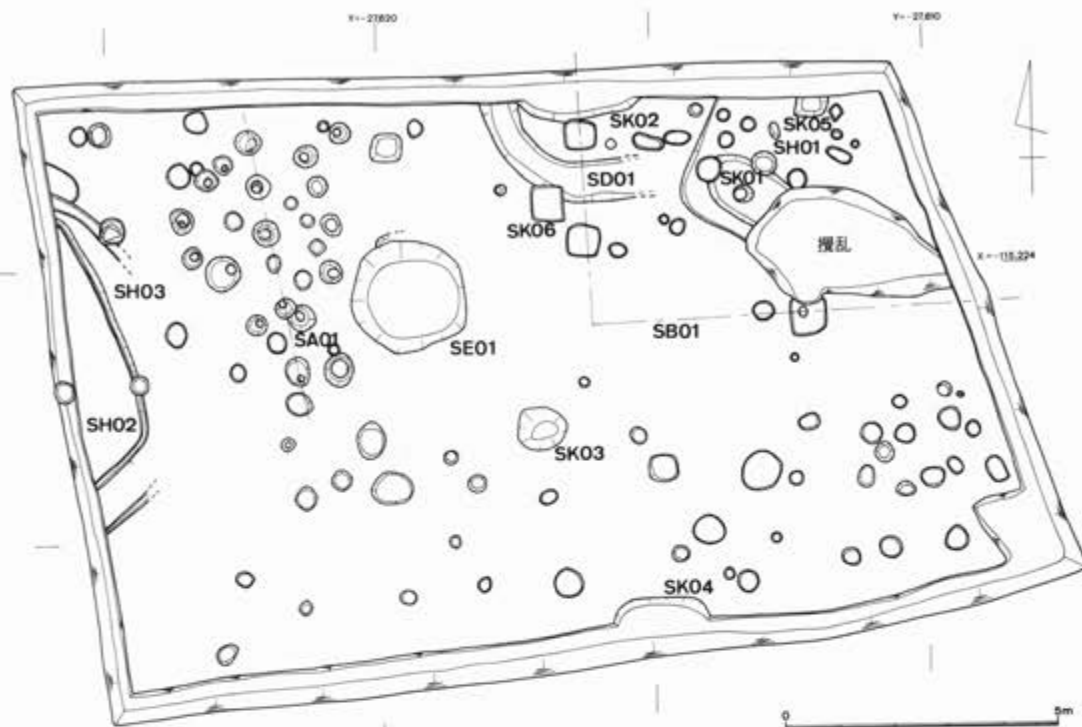
土層堆積状況 第2区の標準的土層堆積は、上層から、現代の整地層である表土、暗灰色土、茶褐色土、暗茶褐色砂質土、黄色粘質土の順に堆積している。黄色粘質土の下層は黄色粘質土がまじる礫層である。黄色粘質土以下を一部掘り下げたが、この範囲では遺構、遺物を確認できなかったため、黄色粘質土以下を地山と認識して調査に当たった。

検出遺構 この地区では、竪穴式住居跡、溝、土坑、柱穴などの遺構と遺物を多数検出した。

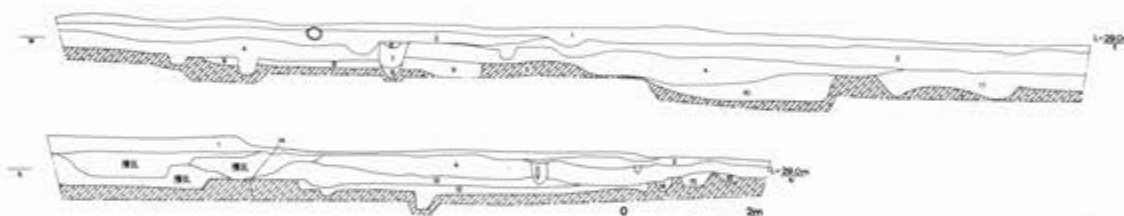
①竪穴式住居跡 竪穴式住居跡は3基(SH01~03)を検出した。弥生時代のものと古墳時代の



第7図 第1区包含層出土遺物実測図



第8図 第2区検出遺構図



第9図 第1区断面実測図

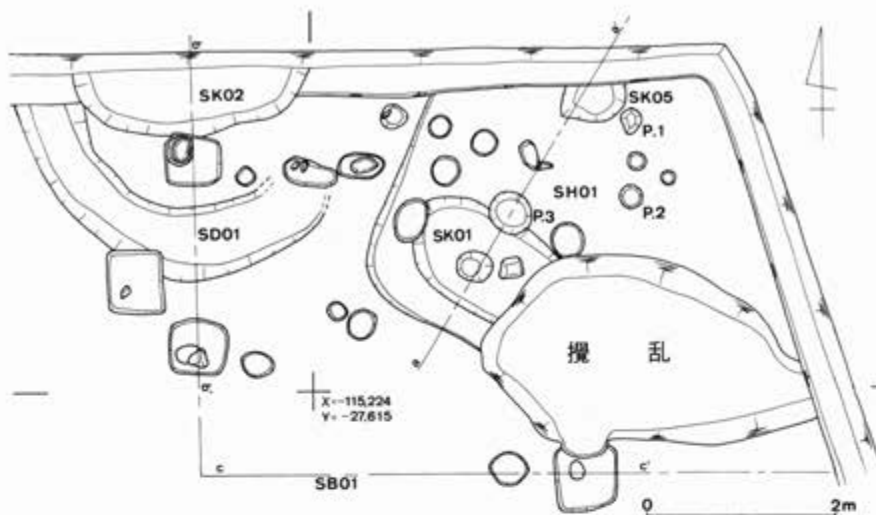
- | | | | | |
|------------|------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 整地層 | 2. 暗灰色土 | 3. 茶褐色土 | 4. 暗茶褐色砂質土 | 5. 黄色粘質土 |
| 6. 灰色粘土 | 7. 暗茶褐色砂質土 | 8. 黒色粘砂質土 | 9. 黒褐色粘質土 | 10. 暗茶褐色粘質土 |
| 11. 黒褐色粘質土 | 12. 黒褐色土 | 13. 黒色粘質土 | 14. 暗茶褐色土 | 15. 暗茶褐色土 |

ものがある。

SH01は、調査区の北東端で部分的に検出した隅丸方形の竪穴式住居跡である。古墳時代後期初頭頃に属するものである(第12図)。南西の一角を検出したのみなので、全体の規模は不明である。第11図は、SH01の断面形状を示したものである。

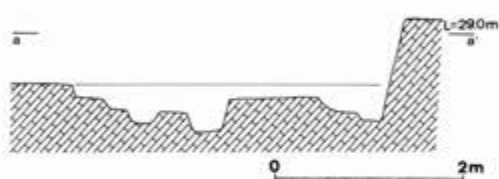
この住居跡に伴うのは、P. 1～3とSK05である。P. 1からは、須恵器把手(第12図17)、P. 2からは、第12図17と同型式とみられる高杯脚部破片2個、SK05はSH01埋土と近似しており、断面の状況からも同一の遺構と判断した。炭が多く混入していた。P. 3は、住居跡床面から深さ約30cmほど掘り抜いたしっかりしたもので、支柱穴の一つと考えられる。

SH02・03は、調査地区の西端で検出した弥生時代後期の竪穴式住居跡である。2基が重複して検出された。遺構相互の切り合いは明らかでないが、以下に記すように埋土の状況からSH02→SH03の順に造られたものと判断した。



第10図 第1区検出遺構実測図

SH02は、東辺と南東のコーナーを検出した。一辺6m前後の方形の竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは約20cmほど遺存していた。床面には壁に沿って幅約10cm・深さ約5cmの壁溝が掘られていた。床面は、遺構ベースの黄色粘土層で



第11図 竪穴式住居跡(SH01)断面図

あるが、凹凸部分に土を貼り込んだとみられ、貼り床状のところもみられた。しかし、貼り床というほど均一ではなく、床面を均一にならしたという程度のものであった。トレンチ側溝内で支柱穴とみられるピットを検出している。第14図は、SH02の断面

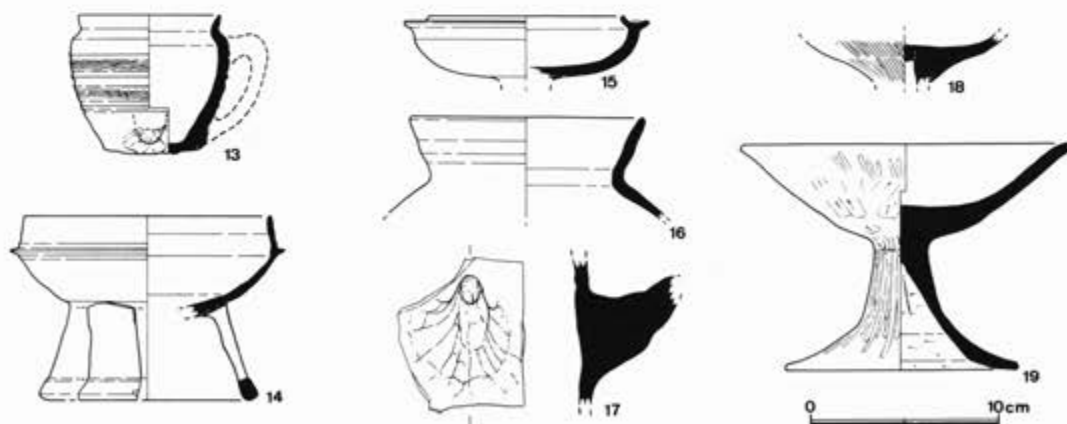
形状を示している。

SH02の埋土は、黒色粘質土(第9図第13層)であるが、SH03の床面に削平されて水平となっていることから、SH02廃棄後にSH03が築造されたことがわかる。

SH02からは、図化できるような良好な遺物は出土しておらず、築造時期ははっきりしない。

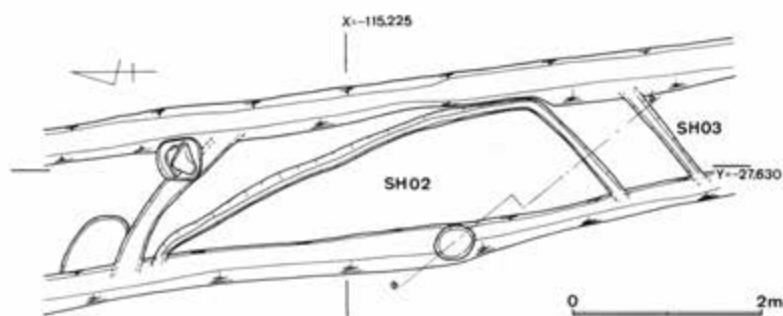
SH03は、壁溝のみを検出した。今回検出した弧状の溝のみでは性格がわからないが、中海道遺跡第34次調査で検出した竪穴式住居跡(SH201)^(注3)とあわせてみると、その東端にあたる遺構であることがわかる(第15図)。

SH03は、直径約8mの円形竪穴式住居跡である。



第12図 竪穴式住居跡(SH01)出土遺物実測図

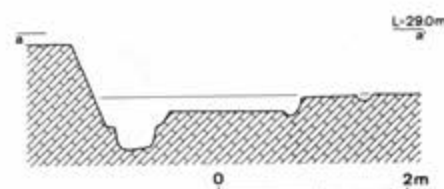
壁溝の埋土は、暗茶褐色土である。溝掘形の内側のレベルが住居跡床面のレベルを示すが、壁溝検出時には下層住居跡であるSH02の埋土(黒色粘質土)が露出した状態となっていたことから、



第13図 竪穴式住居跡(SH02・03)実測図

SH03は、SH02の削平面をほとんどそのまま床面として利用したと思われる。

SH03は、暗茶褐色砂質土(第9図第4層)と黒褐色土(第9図第12層)によって削平されている。黒褐色土は、SH03の埋土が攪乱されて形成された土層とみられ、第16図に示すような弥生時代後期の土器が多数含まれていた。



第14図 竪穴式住居跡(SH02・03)断面図

②掘立柱建物跡

SB01からは一辺約60cm前後の方形掘形を3個検出した。深さは5~15cmである。埋土は暗茶褐色粘質土である。2穴は南北に並び、柱間は約2mを測る。軸は座標ラインに乗っている。もう一つの柱穴はX=-115,225、Y=-27,612付近で検出した。さきの柱穴と同様の規模と埋土を有する。この3個は整然と並ぶものではないが、直交する位置関係にあり、これを同一建物の一部と考えた。断片的であるので、建物跡の規模、性格などはわからない。時期も不明である。

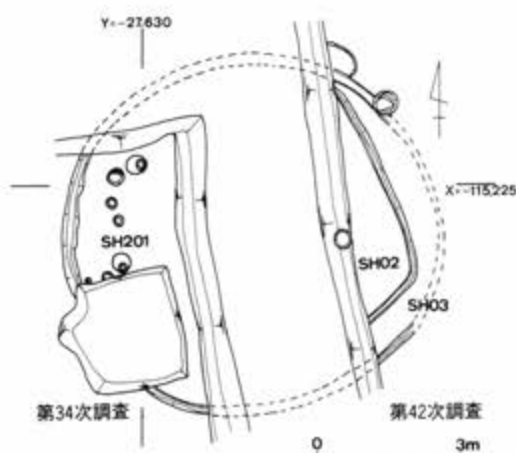
③柵列

SA01は、暗灰色土、暗茶褐色土を埋土とする柱穴列である。時期は明らかでない。根石のあるものと素掘りのものがある。この周辺には多数の柱穴が分布しているので、複数の掘立柱建物跡の一部であるかもしれない。

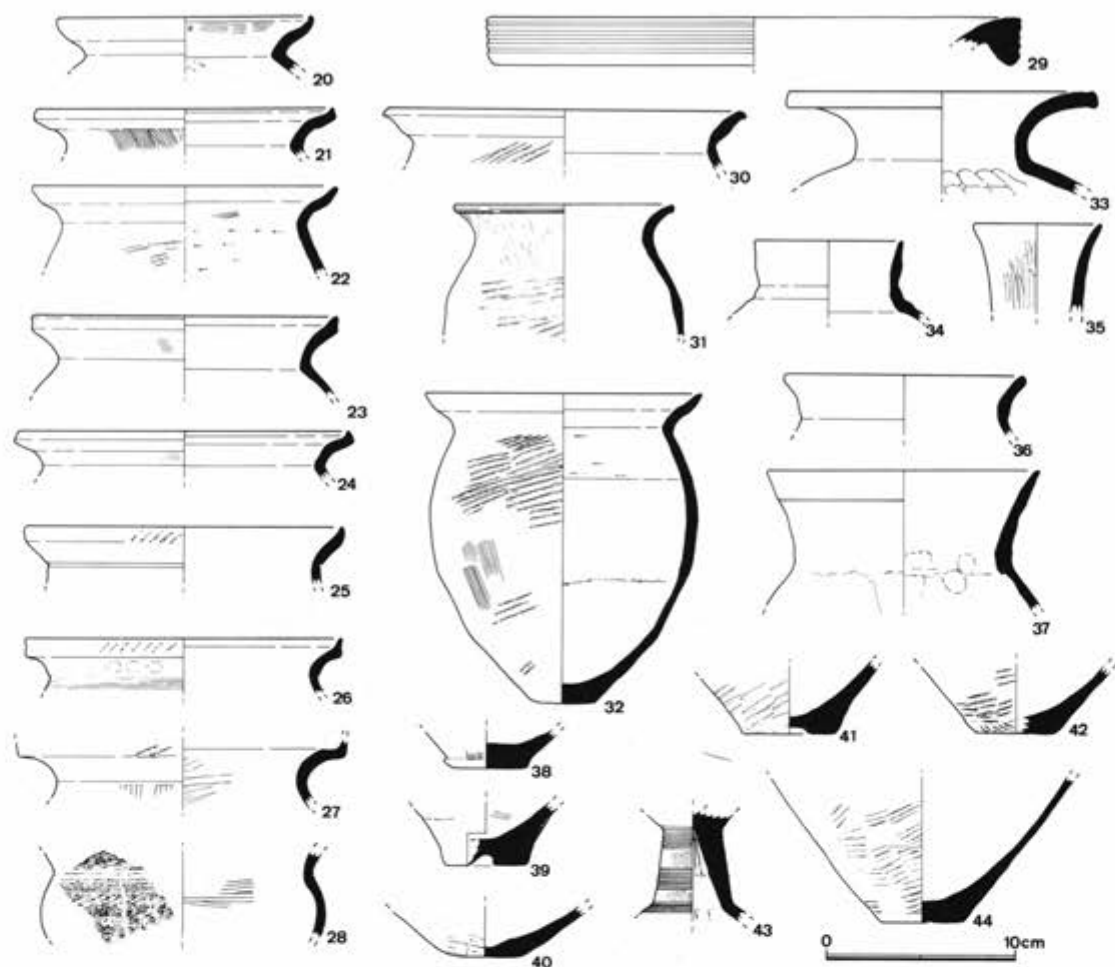
④土坑

SK01は、SH01に削平された長楕円形の土坑である。残存長約1.5m・幅約1m・深さ約0.3mを測る。埋土は暗茶褐色土である。掘削時期は明らかでない。

SK02は、暗茶褐色砂質土を埋土とする長楕円形の土坑である。長さ約2.6m・検出幅約0.7m・深さ約0.5mを測る。SH01で出土した高杯と同型式の高杯細片、須恵器などが出土していることから、古墳時代の住居跡SH01と関連する遺構とみられる。



第15図 竪穴式住居跡(SH02・03)復原図



第16図 竪穴式住居跡(SH03)出土遺物実測図



第17図 縄文土器実測図

S K03は、黒色土を埋土とする不整円形の土坑である。東西約0.8m・南北約0.7m・深さ約0.1mである。掘削時期は、明らかでない。

S K04は、黒褐色粘質土を埋土とする長楕円形の土坑である。東西約1.8m・南北約0.4m・深さ約0.6mである。掘削時期は明らかでない。

S K06は、東西約0.6m・南北約0.65m・深さ約0.2mの方形土坑である。S B01掘形に類似していたが、埋土を異にしている。埋土は、黒褐色土である。時期は明らかでない。

出土遺物

S H01出土遺物(第12図) S H01埋土中で検出したものである。須恵器(13~15・17)と土師器(16・18・19)がある。13は把手付碗、14・15は高杯である。14は短脚一段透かしである。口縁端部と受け部の形状などからMT15型式に属するものだろう。17は甌の把手である。16は甕である。18・19は、高杯である。

S H03出土遺物(第16図) S H03を削平している黒褐色土(第9図第12層)から弥生土器が比較

的まとまった状況で出土した。黒褐色土は、SH03埋土と床面を攪乱、削平した状況にあることから、この層から出土した遺物はSH03に伴うものであると判断した。

SH03から出土した土器には、壺、甕、高杯などがあり、以下に記すような形態各種が認められる。

壺(29・33~37) 29は、暗茶褐色の胎土に角閃石を含むいわゆる生駒西麓山の広口壺である。口縁端面に4条の凹線がめぐる。復原径は約28cmである。33は、広口壺である。大きく外反する口縁と張りのある体部が特徴的である。34・37は、長頸壺である。34は口縁部が退化して短くなったものである。35は、偏球形の体部と小さな平底を有する細頸壺の口縁部である。36は、短く外反する口縁部をもつ。

甕(20~28・30~32・38~42・44) 甕には口縁部が「く」の字状に屈曲するもの(甕A；20~24・30~32)と受け口状のもの(甕B；25~28)とがある。甕Aには口縁部が屈曲してゆるやかに立ち上がるもの(20・22)、端部に面を作り上方に拡張するもの(21・23・24)とがある。20・22は、体部内面にヘラ削りを施している。甕Bはいわゆる近江系の甕である。口縁外面に櫛描き列点文を施す(25~28)。頸部には櫛描き直線文がある。

高杯(43) 裾部が大きく開く小形の高杯である。脚柱部には、擬凹線文が施されている。

第17図は、縄文時代晩期の長原式土器である。生駒西麓産である。第12層から出土した。

3. ま と め

今回の調査では、上述したように弥生時代後期から中世にかけての遺構や遺物を検出することができた。調査地は、第17次・第34次調査地区の中間に位置しており、それぞれ同様の時期の遺構や遺物が検出されている。これらの成果とあわせて考えると、弥生時代後期末と古墳時代中期末~後期前半頃を中心とする時代に、この周辺に集落が広がっていたことが明らかとなった。

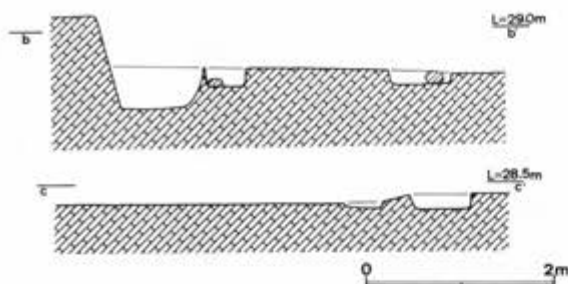
成果をまとめておく。

①縄文時代晩期長原式期の深鉢を検出した。

②SH03は、第34次調査で検出した竪穴式住居跡(SH201)と同一遺構であることを確認した。弥生時代の竪穴式住居跡は後期末頃の土器が出土しており、第32次調査で確認された弥生時代後期末~古墳時代初頭頃の住居跡群との関連が注目される。

③古墳時代の竪穴式住居跡は、第17次調査で検出された古式の須恵器を含む遺構などとの関連がうかがえる。今回、竪穴式住居跡を検出したことで、この地点に近接した地点に古墳時代中期末頃から後期初頭頃の居住域があったことが判明した。

④第17次調査で、平安時代に属するとみられる瓦片が散発的に出土し、近接地にこの時代の瓦葺き建物跡などがあったことが推測された。今回の調査でも、数点であるが類似する平瓦が出土



第18図 掘立柱建物跡(SB01)掘形断面図

している。第2区で、時期が明らかでない一辺約60cmほどの方形掘形をもつ掘立柱建物跡の一部を確認しているが、こうした建物跡に瓦が伴っていた可能性も否定できず、検討を要するところである。

⑤第1区で検出した土坑S K01からは、土師器皿が一括して検出された。土師器皿は、15世紀前半頃の指標となる資料である内膳町跡S K386^(注4)に併行する資料である。京都産のものと地元産を含む山城南部地域産があり、流通の一端を知る資料としても重要であろう。

(田代 弘)

注1 中川和哉「中海道遺跡第17次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注2 梅本康広「古墳時代成立前後の大型建物—中海道遺跡をめぐって—」『京都考古』第83号 1996

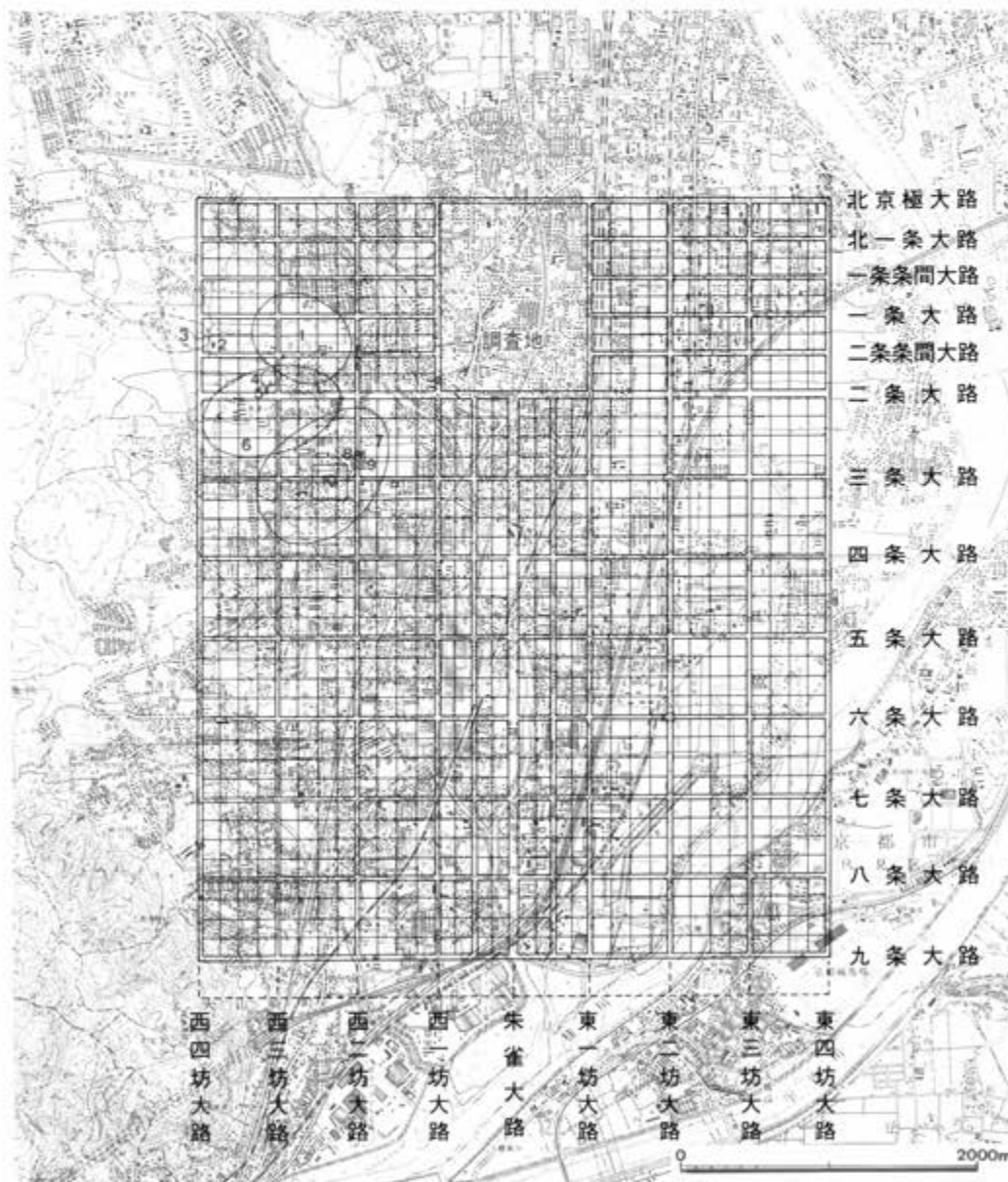
注3 奈良康正「中海道遺跡第34次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第70冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注4 「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会) 1980

2. 長岡京跡右京第547次発掘調査概要 (7ANGTE-3・GKN-2)

1. はじめに

今回の調査は、外環状線緊急街路整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は、長岡京市井ノ内・西ノ京地内にあつて、長岡京跡の条坊推定地では、西二坊大路及び二条条間大路(新条坊)との交差点部分に当たる。過去の周辺地域の調査では、西二



第19図 調査地位置図(1) (新条坊による)

- | | | | | |
|----------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 上里遺跡 | 2. 井ノ内車塚古墳 | 3. 芝古墳群 | 4. 小西古墳群 | 5. 稲荷塚古墳 |
| 6. 井ノ内遺跡 | 7. 今里遺跡 | 8. 今里庄ノ瀨古墳 | 9. 今里車塚古墳 | 10. 乙訓寺 |



第20図 調査地位置図(2) (新条坊で表記)

坊大路東側溝や路面の轍などや、今回の調査地と同じ台地上(現在の長岡第十小学校グラウンド)では、長岡京期から奈良時代の大規模な掘立柱建物跡が見つかった。また、時代はさかのほるが、弥生時代前期には、上里遺跡といった集落が営まれていた。

調査は、平成8年10月7日に開始し、平成9年2月13日に現地の掘削及び測量作業を終了し、同月20日に埋め戻し作業を行って調査を終了した。

調査面積は、合計約

1,100㎡である。現地調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員柴 暁彦が担当した。調査時の空中写真撮影及び図化作業はワールド航測コンサルタント株式会社に委託した。また、整理及び執筆は伊野及び柴が分担した。期間中、長岡京市教育委員会をはじめとして、乙訓管内の埋蔵文化財関係者ならびに補助員・整理員のお世話になった。^(注1)ここに記して感謝する。

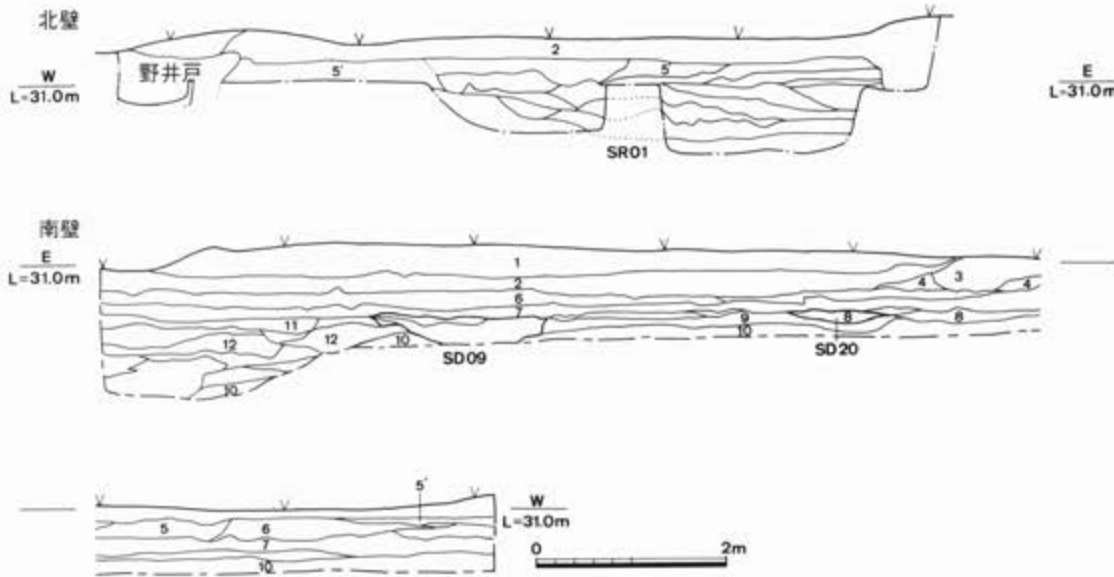
なお、調査に係わる経費は京都府乙訓土木事務所が負担した。

2. 調査概要

調査地は、東西方向の生活道路を挟んで、北と南の2か所に分かれている。これらは調査の便宜上、北側の調査地を北地区、南側を南地区とした。なお、北地区は排土処理の都合上、2回に分けて調査を行った。

(1) 基本層序(第21・27図)

調査地周辺は生産緑地帯となっており、今回の調査地部分も元は水田及び畑地であった。調査地の層序は、基本的に耕作土の上に盛り土が乗っていた。耕作土の下には床土が見られた。この床土の下が中世～近世段階の包含層となっていた。この包含層は、調査地の周辺地形では西側が高く、東側に行くにしたがって低くなっているため、調査地の東側ほど堆積層が厚い傾向にあった。遺構検出面は、中世の遺構面が灰褐色粘質土(9層)、古墳時代から弥生時代の遺構面は暗茶褐色粘質土(10層)であった。しかし、北側に行くほど10層が消失し、灰褐色粘質土に変化する。



第21図 北地区北壁及び南壁土層断面図

- | | | | | | |
|-----------------|-------------------|-------------|--------|-------|-------------|
| 1. 盛り土(コン砕) | 2. 盛り土 | 3. 耕作土 | 4. 耕作土 | 5. 床土 | 5'. 灰褐色粘砂質土 |
| 6. 黄灰褐色粘砂質土(床土) | 7. 灰褐色粘砂質土(粘性強) | 8. 灰黄褐色粘質土 | | | |
| 9. 灰褐色粘質土 | 10. 暗茶褐色粘質土(しまり強) | 11. 暗灰褐色粘質土 | | | |
| 12. 灰黄褐色砂礫 | | | | | |

この灰褐色粘質土に対応する層は、南側では灰緑色粘質土となる。この層は無遺物層である。

(2) 検出遺構(第22図)

①北地区

a. 中世の遺構

溝 S D 54709 南北方向の地境溝で、座標北から西側に振る。約76mにわたって検出した。溝の規模は、最大幅約1.2m・深さ約0.15mを測る。南側の拡張部分で検出した南北方向のピット列は、この溝に伴うと思われる。埋土中から丸瓦片1点、須恵器杯・壺などが出土した。なお、北地区拡張部分の洪水層は、暗茶褐色粘質土の遺構面を挟っていたが、この洪水層が安定した段階で、この溝が掘削されている(第25・26図)。

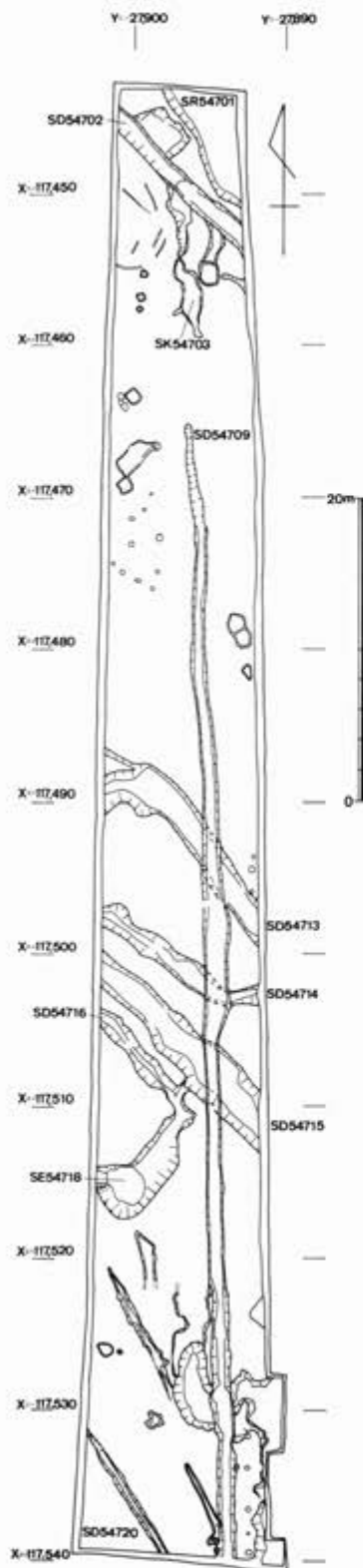
ピット列(第25図) 溝 S D 54709の東側で、溝に平行して5つ確認した。ピットの規模は直径約0.25m・深さ約0.2m前後を測る。いずれのピットからも出土遺物は見られなかった。

b. 奈良時代の遺構

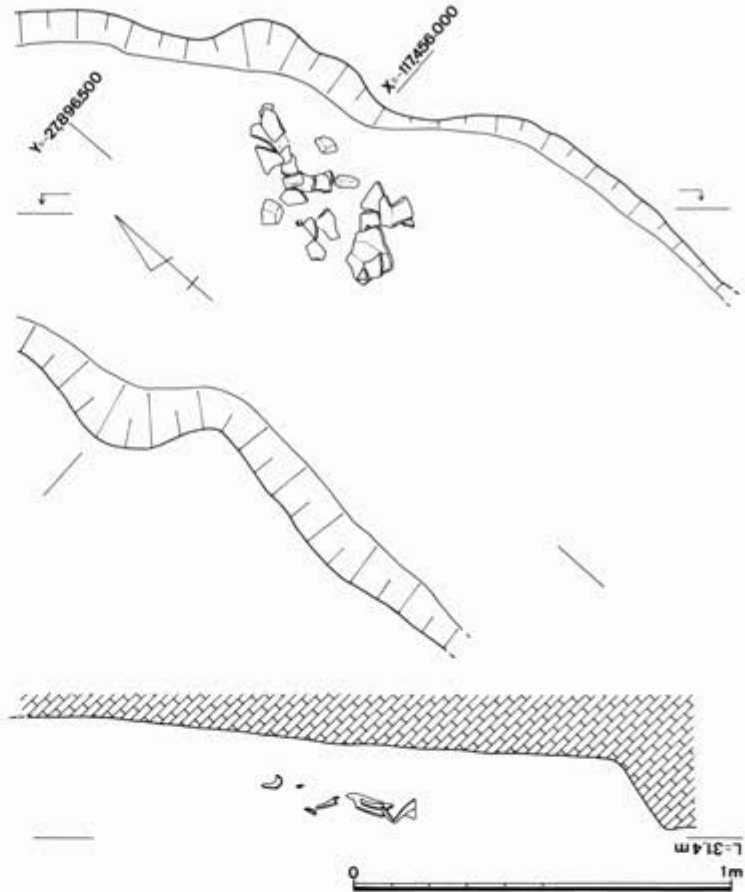
ピット54730(第25図のP.30) 拡張区で検出した、径約0.15mを測る穴である。溝 S D 54709に伴うピット列とは関連が見られない。埋土中から、土師器の墨書土器とともに、万年通寶・神功開寶と銭面が不明なものの計3枚が錆着した状態で出土した。

c. 古墳時代の遺構

井戸 S E 54718 直径約2m・深さ1.1mを測る素掘りの井戸である。埋土中から土師器の高杯3点、緑色凝灰岩製の管玉1点や、井戸底部からは先端を尖らせた棒が1本出土した(第30図34)。出土土器から、井戸跡の年代は古墳時代中期と思われる。出土した高杯や管玉などは祭祀遺物と考えられる。関連は不明であるが、溝 S D 54716は井戸 S E 54718の排水用の溝の可能性はある。



第22図 北地区検出遺構平面図



第23図 土坑 S K 54703遺物出土状況実測図

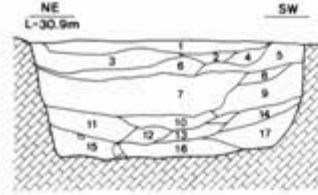
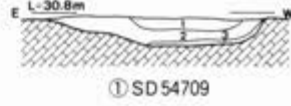
d. 弥生時代の遺構

自然流路 S R 54701 調査地北端で確認した。流路の方向は、北西—南東方向を示す。この部分は、旧地形の台地の張り出しの北縁辺部と思われる。流路は砂礫の流入によって埋没した状況で見つかった。この砂礫の中から、弥生時代前期(畿内第 I 様式)の土器片が 1 点出土した。このことから、弥生時代前期以降は流路として機能していなかったと思われる。

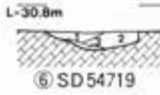
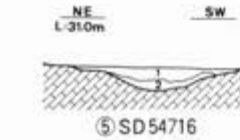
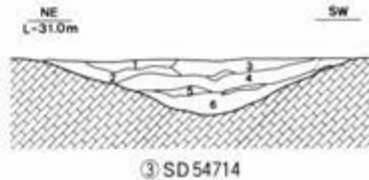
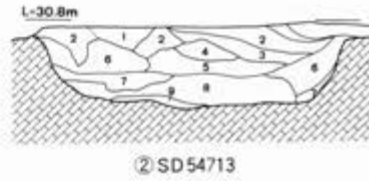
土坑 S K 54703 南北に長い不整形の土坑である。長さ約 5.5m・幅約 1.3m・深さ約 0.25m を測る。埋土は暗灰色砂質土である。埋土上面から土師器壺などが出土した(第 23 図)。時期は弥生時代後期(畿内第 V 様式)と思われる。

流路 S D 54713・54714・54715 北西—南東方向の流路跡である。なかでも S D 54715 は規模が大きく、最大幅約 2.3m・深さ約 1.1m を測る。いずれの埋土も砂礫であり、埋土中に、弥生時代前期の土器を含んでいた。流路は傾斜から見て、北西から南東方向に流れていたと思われる。また、土器

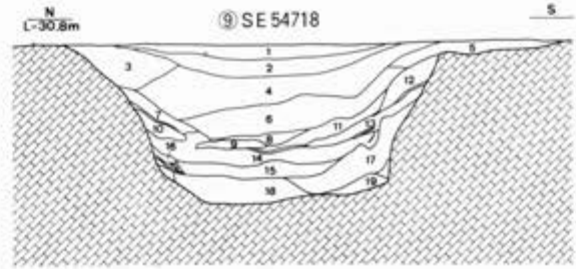
- ①
 1. 暗灰褐色粘砂質土(しまり強)
 2. 灰褐色シルト(しまり強)
 3. 灰褐色粘砂質土(しまり強)



- ②
 1. 灰褐色シルト
 2. 灰褐色砂礫(しまり中)
 3. 灰褐色細砂
 4. 灰褐色細砂(やや砂粒)
 5. 茶褐色砂
 6. 灰褐色シルト(しまり中)
 7. 灰褐色シルト
 (上面に炭化物を含む)
 8. 灰褐色砂礫
 (1cm大の礫多量)
 9. 灰色粗砂(やや粘質土を含む)



- ③
 1. 灰色細砂(しまり中)
 2. 黄灰色細砂(やや粘質)
 3. 黄灰色砂礫
 4. 黄灰褐色細砂
 5. 暗灰色細砂
 6. 灰黄褐色粘砂(炭化物を含む)



- ④
 1. 暗灰褐色砂礫(0.5～5cm大の礫含) 2. 暗灰褐色砂礫(砂主体) 3. 黄茶褐色砂礫(0.5～3cm大の礫含)
 4. 黄灰褐色砂礫(3cm大の礫含) 5. 暗灰色砂 6. 黄灰褐色砂礫(0.5～2cm大の礫含)
 7. 暗茶灰色砂礫(3～5cm大の礫含) 8. 茶灰色砂礫(1cm大の礫含) 9. 黄灰褐色砂礫(砂主体、2cm大の礫含)
 10. 灰黄褐色砂礫(0.5～1cm大の礫含) 11. 茶灰色砂礫(3～5cm大の礫含) 12. 暗茶灰色粘質泥礫(0.5～1cm大の礫含)
 13. 黄茶褐色礫(上部は砂主体、0.5～3cm大の礫含) 14. 暗黄灰褐色砂礫(砂主体)
 15. 茶灰褐色砂礫(0.5～5cm大の礫含) 16. 茶灰色細砂 17. 暗灰色砂

- ⑤
 1. 暗茶灰色粘質土(しまり強) 2. 茶灰色粘質砂(しまり中)

- ⑥
 1. 灰褐色砂礫 2. 灰色砂 3. 灰色粘砂土

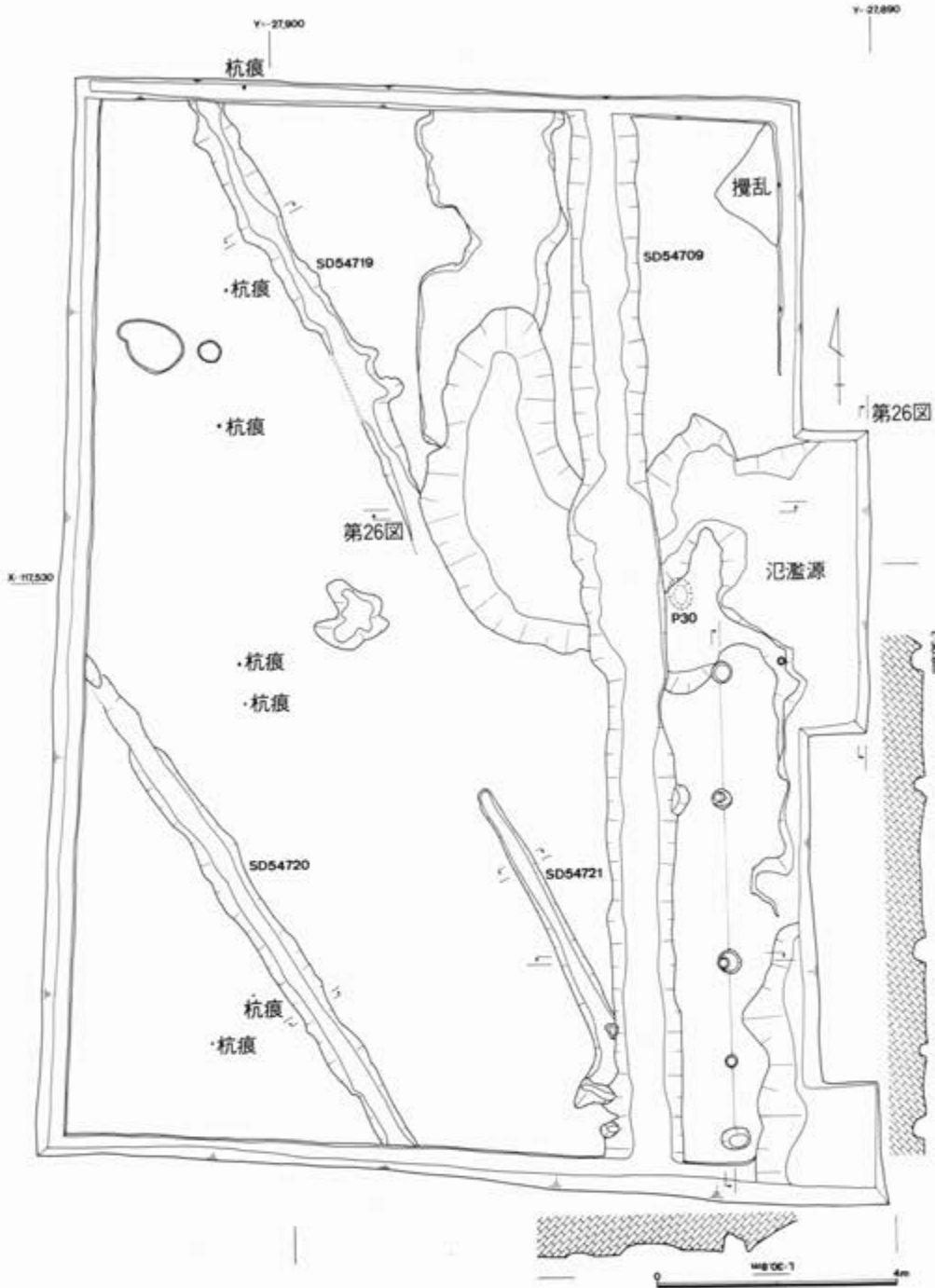
- ⑦
 1. 灰黄褐色砂礫

- ⑧
 1. 灰黄褐色砂礫

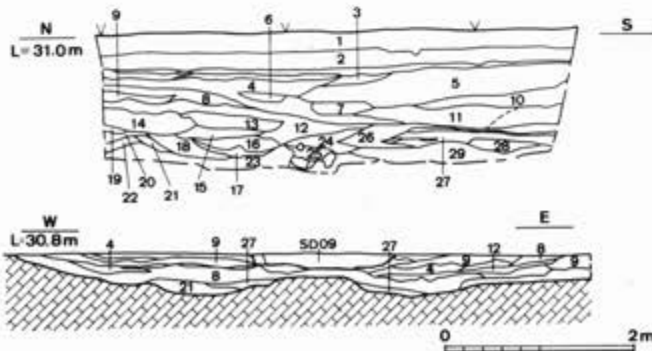
- ⑨
 1. 灰黄褐色粘砂質土(しまり強、やや粗) 2. 灰黄褐色粘砂質土(しまり強、粗砂) 3. 暗灰褐色粘質土(しまり強)
 4. 灰黄褐色シルト 5. 灰黄褐色粘砂質土 6. 暗灰褐色シルト
 7. 暗灰褐色砂 8. 暗灰褐色シルト 9. 黄褐色砂
 10. 暗灰褐色砂 11. 灰褐色シルト 12. 灰褐色細砂
 13. 灰褐色シルト(やや砂質) 14. 暗灰色シルト 15. 暗灰色シルト(暗灰褐色土塊含)
 16. 暗灰褐色混砂 17. 黒灰色シルト 18. 暗灰色粘細砂
 19. 褐色砂

第24図 北地区遺構土層断面図

の流路への混入状況から、集落の中心は、西側に存在していたと考えられる。

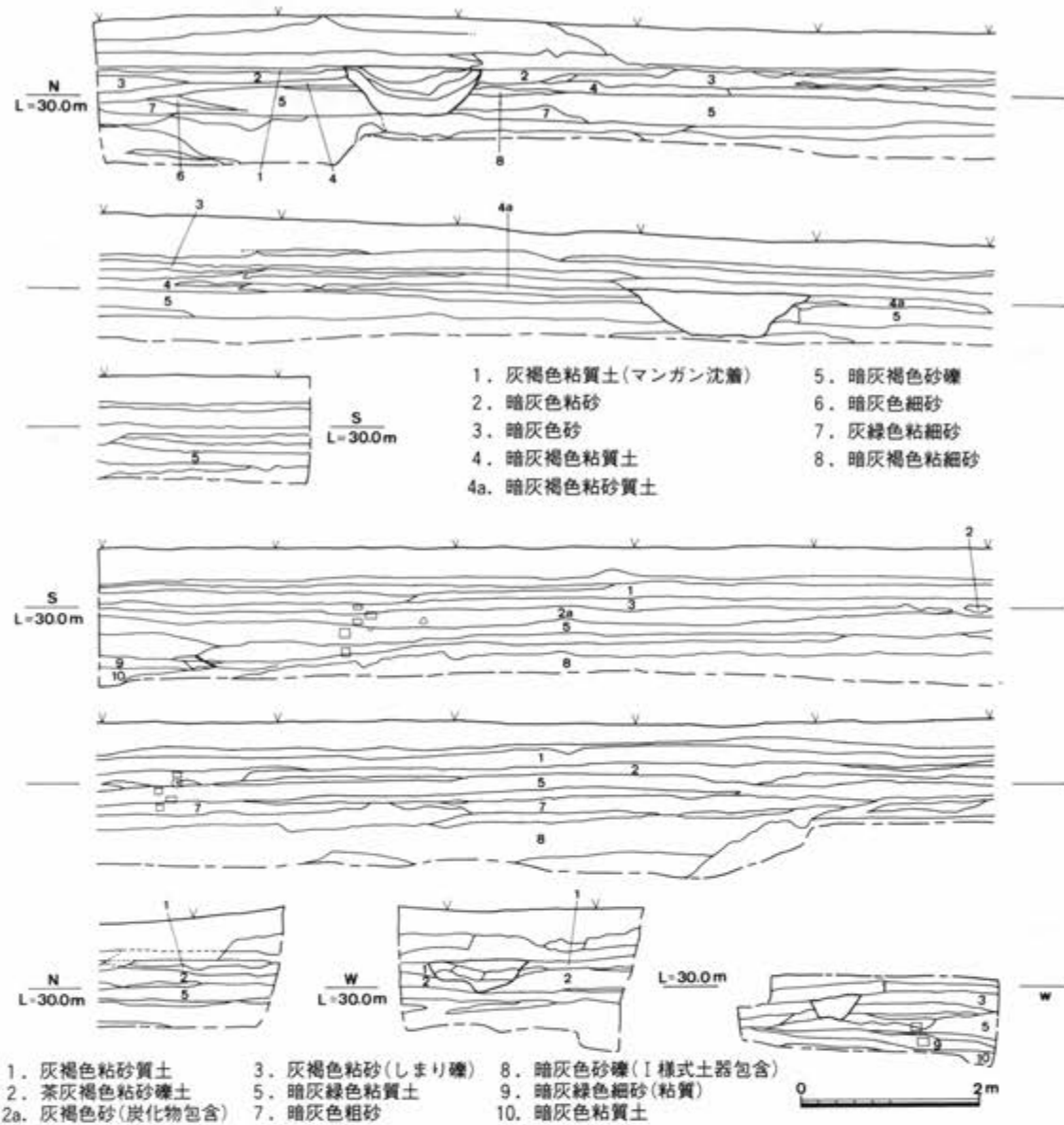


第25図 北地区拡張部平面図



第26図 東壁拡張部分(上)及び洪水層畦(下)土層断面図

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 淡灰色粘砂(しまり強) | 17. 暗灰色粘砂(植物遺体含) |
| 2. 灰褐色粘粗砂 | 18. 黄灰色砂 |
| 3. 灰褐色粗砂 | 19. 黄褐色細砂 |
| 4. 灰色細砂(しまり弱) | 20. 暗灰色シルト |
| 5. 灰褐色砂礫(3cm大の礫含) | (植物遺体含) |
| 6. 灰褐色粘粗砂 | 21. 黄灰色砂 |
| 7. 灰茶褐色砂礫 | 22. 黄褐色細砂(19層より黄) |
| 8. 灰色砂(4層よりやや粗) | 23. 茶灰色粗砂(しまりなし) |
| 9. 灰色粗砂 | 24. 暗灰色シルト(やや砂質) |
| 10. 茶灰褐色砂礫(マンガン沈着) | |
| 11. 灰色砂礫(5層より砂質) | 25. 暗灰色シルト |
| 12. 灰色シルト(植物遺体含) | 26. 灰色砂礫 |
| 13. 暗灰色砂礫 | 27. 灰色細砂 |
| 14. 灰色砂 | (植物遺体を層状に含) |
| 15. 黄灰色砂 | 28. 灰黄色粗砂 |
| 16. 黄褐色砂 | 29. 黄茶褐色粗砂 |



第27図 南地区土層断面図(層中の□は試料採取位置)

②南地区

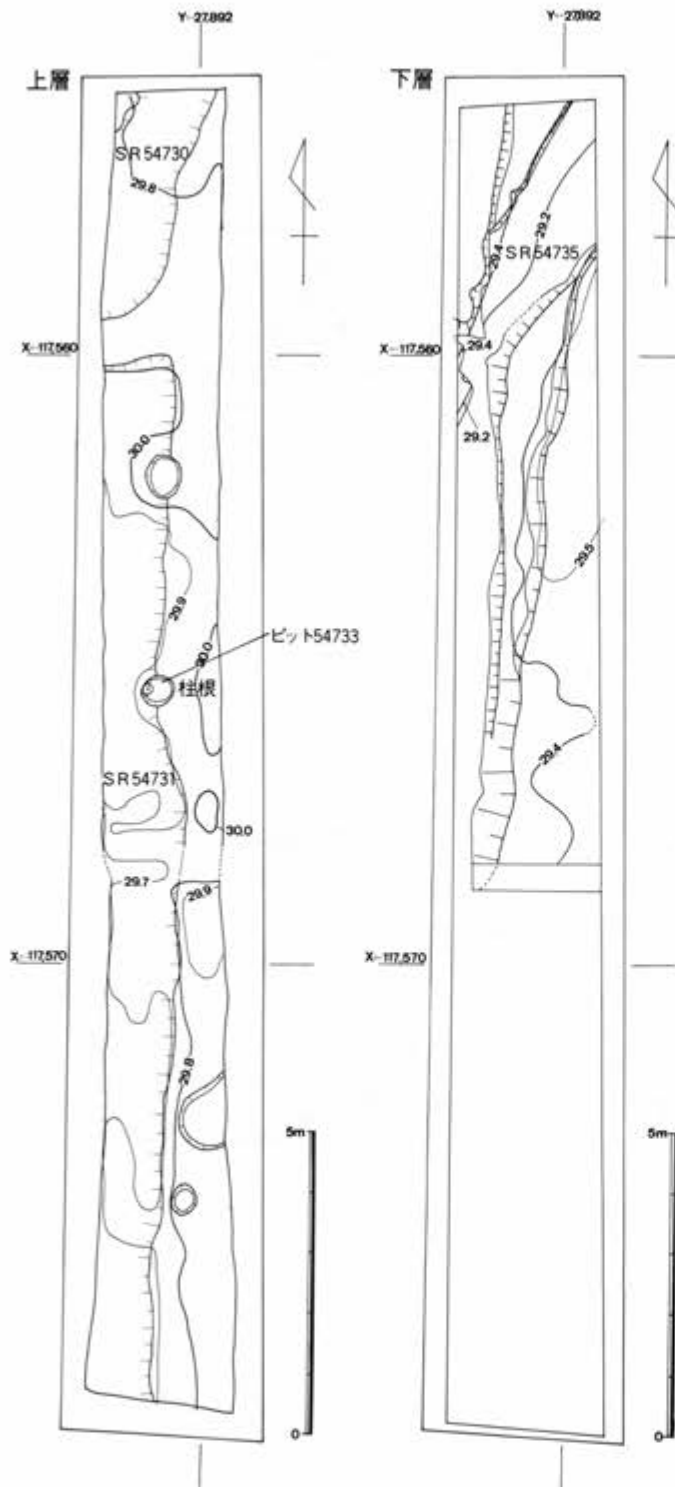
I. 上層遺構(第28図)

a. 中世以降の遺構

ピット54733 直径約0.3m・深さ約0.1mを測る柱穴である。穴には、直径15cmの当時の柱の残欠が見られた。層序から見て、中世以降のものと考えられる。今回、北地区で検出したピット列と、昨年度見つかっている柱根は、一連のものの可能性がある。

b. 弥生時代の遺構

自然流路 S R 54730・54731 断面皿状の浅い流路である。流路を埋めていた土は、枝や植物の種子などを含んだ暗灰色粘質土である。流路というよりも耐水した湿地に近い状態だったと思われる。遺物の出土状況から、この流路は、弥生時代前期にはすでに埋没していたようである。



第28図 南地区上層及び下層遺構平面図

と思われる。9は、須恵器の壺である。壺Gと思われるが高台が付く。10は、無釉陶器である。色調は、淡黄灰色を呈している。12は、土師器の壺である。球形の体部に斜め上方に立ち上がる口縁が付く。口径11.5cmを測る。体部外面には、櫛描き沈線の間に櫛描き波状文が施される。胎土には砂粒を多量に含む。13は、壺あるいは鉢の底部と思われる。底径3.6cmを測る。15は、石庖

II. 下層遺構(第28図)

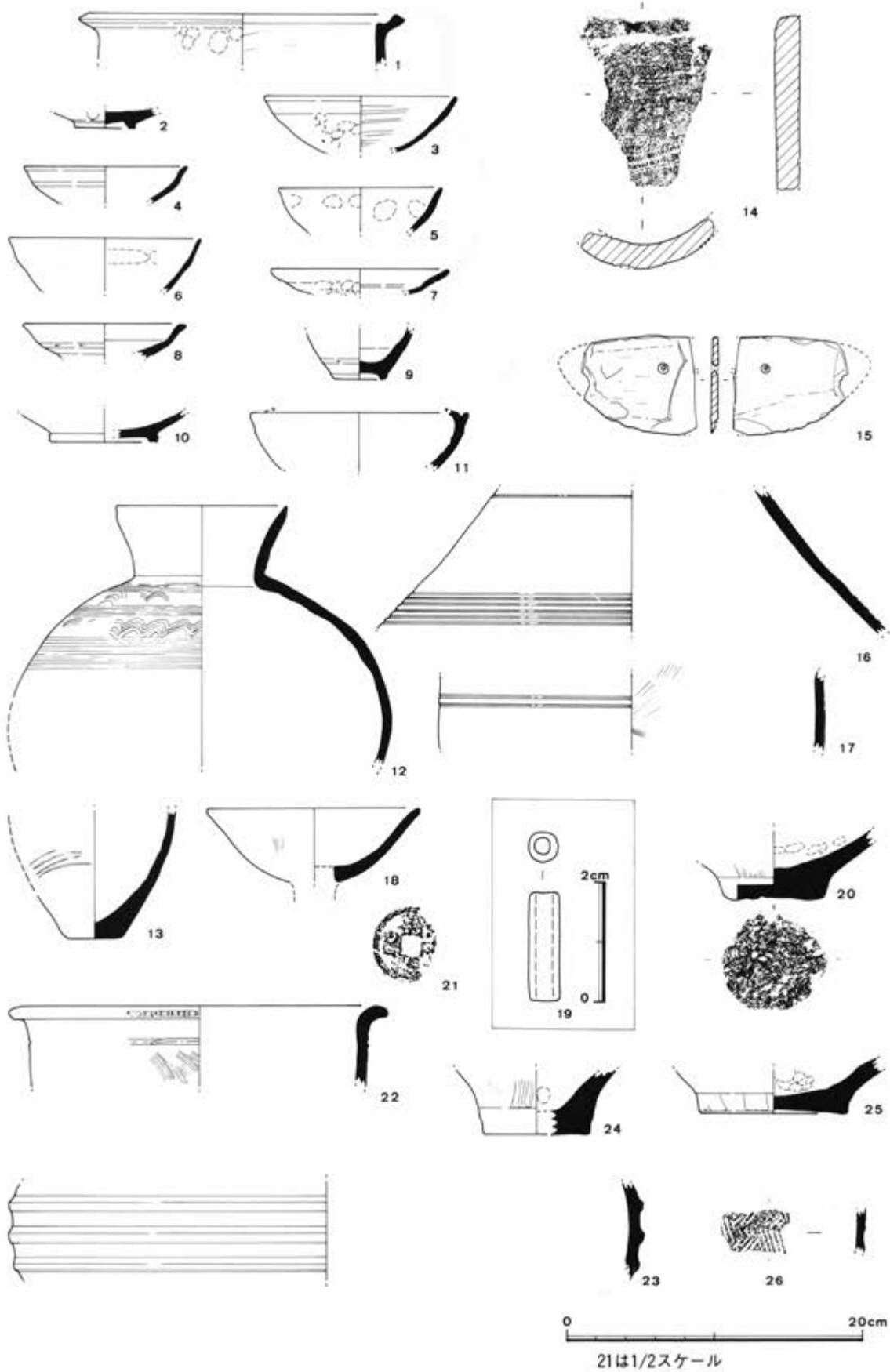
a. 弥生時代の遺構

自然流路SR 54735 北東から南西方向に流れる流路である。幅約1.2m・深さ約0.4mを測る。埋土は砂礫であり、埋土中に若干の弥生土器の破片を含んでいた。土器は、上層流路出土のものと比較して、流れ込みによると思われる磨滅が認められた。流路は、弥生時代前期頃のものと思われる。

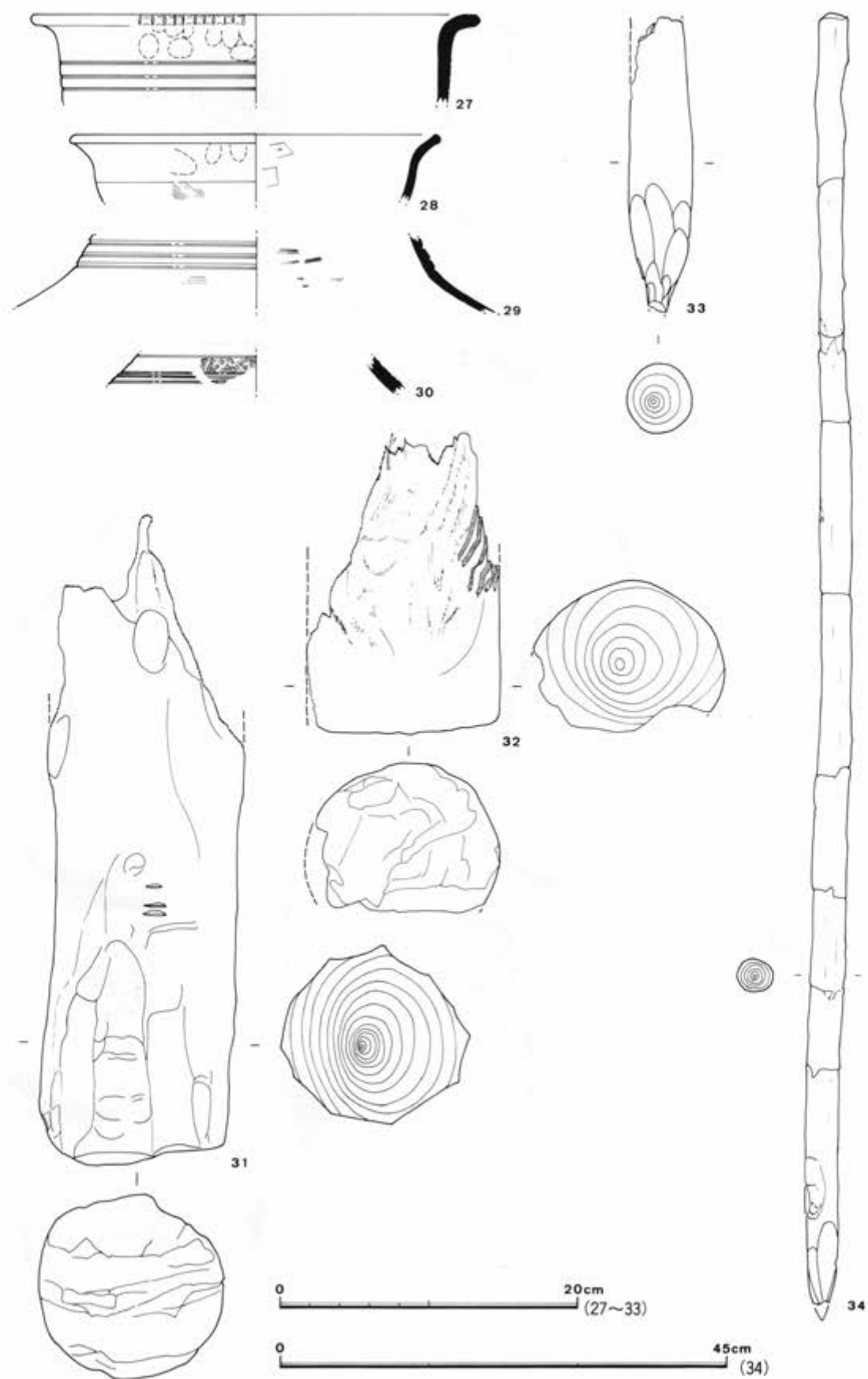
3. 出土遺物(第29・30図)

瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器・弥生土器・石庖丁・緑色凝灰岩製管玉・軒瓦・銭貨などが出土した。遺物の量は整理用コンテナ・バットに2箱である。資料としては破片資料ばかりで、完形となるものは見られない。

1は、瓦質土器の鍋である。2は、唐津焼皿の底部である。高台は削り出しによる。釉は灰白色を呈している。見込み部分に重ね焼きの痕跡が見られる。3～6は、瓦器椀である。包含層から出土した。3の内面にはヘラミガキによる暗文が見られる。7は、土師器皿である。8は、緑釉陶器の皿である。復原口径約11cmを測る。須恵器質の焼きで、釉は淡緑色である。京都市内で製作されたと



第29図 出土遺物実測図(1)



第30図 出土遺物実測図(2)

丁である。外湾刃の片刃である。二孔が穿たれているが、穿孔部分で折損している。石材は粘板岩である。18は、土師器の高杯の杯部である。口径14.2cmを測る。脚部との接合部で剝離している。色調は、明褐色を呈する。19は、緑色凝灰岩製の管玉である。長さ1.8cm・径0.5cm・孔径0.27cmを測る。20・24・25は、壺あるいは甕の底部片である。20は、底径6.6cmを測る。底部には顕著に刳圧痕が残る。21は、万年通寶である。初鑄年は天平宝字4(760)年である。16・17・22・23・27～30は、弥生土器である。22・27は、甕の口縁である。22は、破片が小さいため不正確であるが、口径23.8cmを測る。頸部には1条のヘラ描き沈線が施される。口縁端部には工具によるタテ方向の刻み目が入る。沈線以下は、ハケ調整である。27は、3条のヘラ描き沈線が施される。26は、押型文土器の体部片である。外面にはネガティブな綾杉状の文様が施されている。器壁は厚さ7mmを測る。色調は明褐色を呈する。包含層の出土である。31・32は、柱根である。31は、残存長43.5cm・直径約12cmを測る。工具による加工痕が見られる。34は、樹皮のついた自然木の先端を杭状に尖らせた棒状木製品である。残存長は130.5cm・径3.6cmを測る。

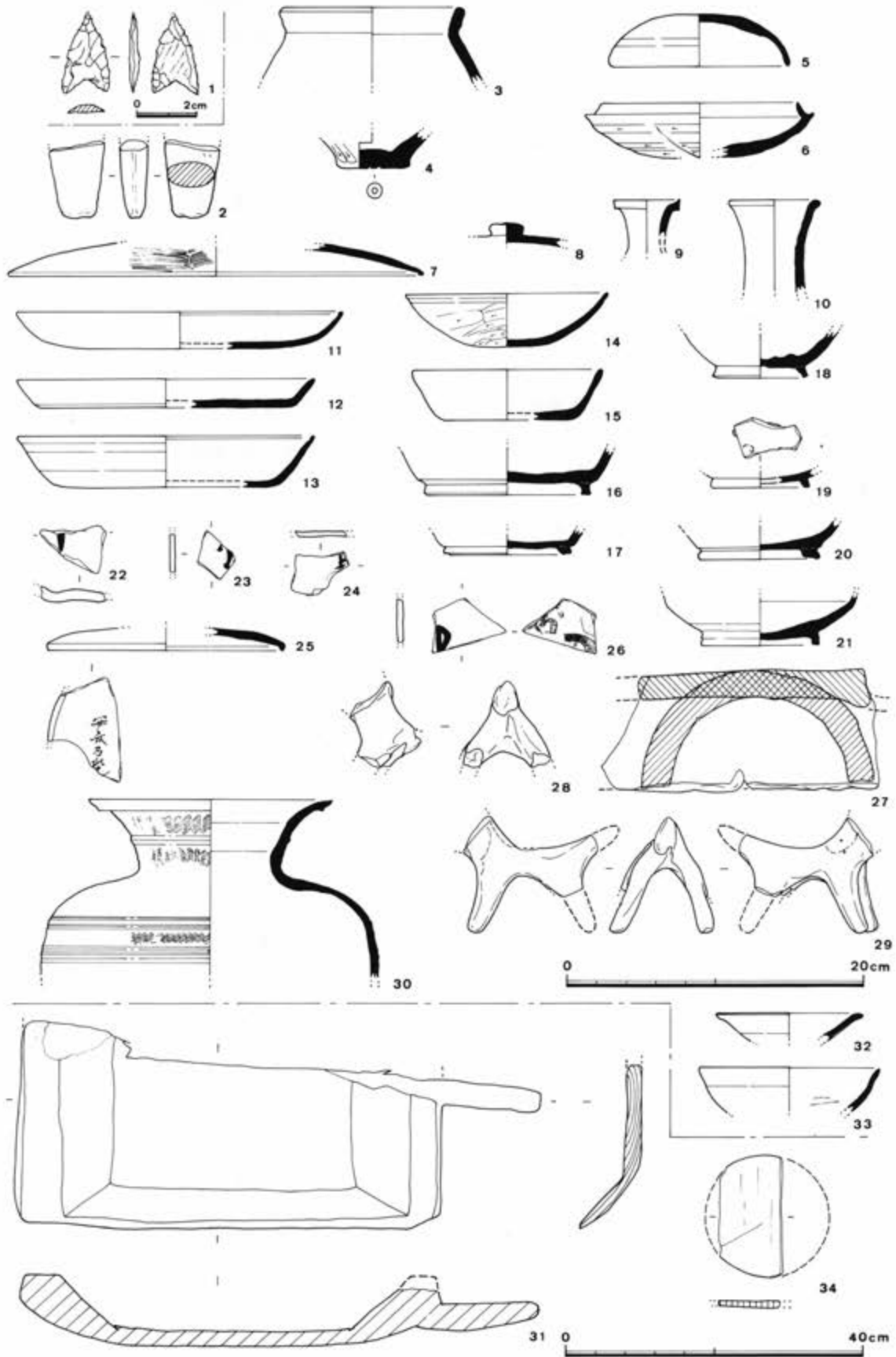
4. 平成7年度調査出土遺物

前年度は、検出遺構について主として報告したので、今回は出土遺物について報告する。

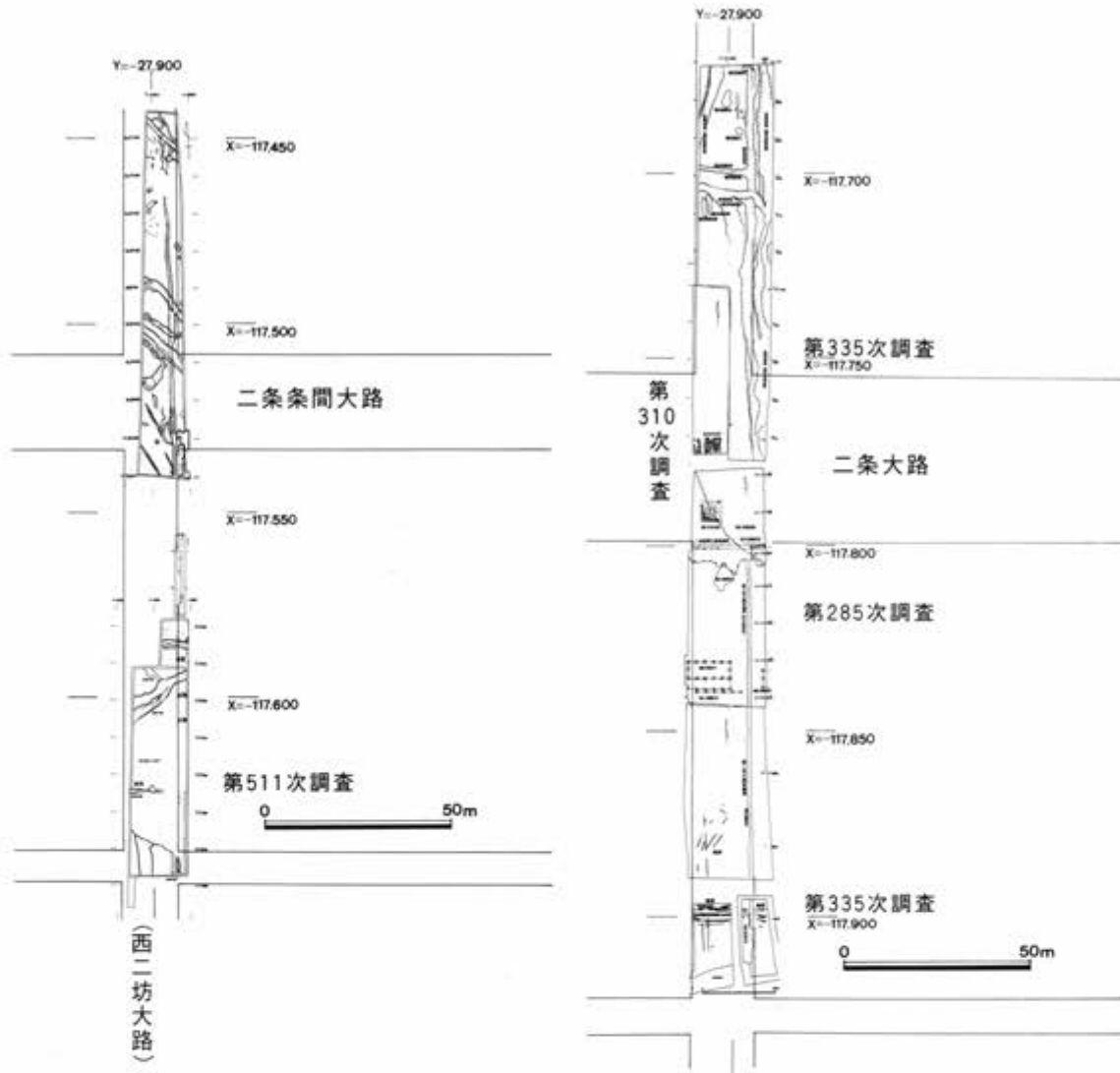
1は、サヌカイト製の石鏃である。色調は灰色で、表面は磨滅している。2は、弥生時代の磨製石斧の基部である。3・4は、弥生土器である。4は、外底面中央に竹管文が施される。5・6は、古墳時代後期の須恵器である。6の外面にはヘラ記号が施される。

奈良時代以降のものとしては、以下がある。7は、土師器蓋である。色調は茶褐色で、外面にはミガキを施している。8は、須恵器蓋である。9・10は、須恵器壺の口縁部である。9の端部は、上下とも肥厚しており、亀岡市篠窯系統のものである。11は、土師器皿である。色調は淡橙褐色である。12は、須恵器皿である。色調は淡灰色である。13は、須恵器皿である。色調は乳灰色である。14は、土師器杯である。色調は淡茶色である。外面はヘラケズリ、内面はナデである。15は、須恵器杯である。色調は乳灰色である。内外面ともロクロナデである。16は、須恵器杯である。外底面・高台の内側に墨痕があり、転用碗の可能性もある。17は、須恵器杯である。色調は淡灰色で、内面にかすかな墨痕が認められる。18は、須恵器壺である。色調は灰色である。内外面ともロクロナデである。19は、緑釉陶器皿である。釉調は黄緑色で、素地は灰色である。内底面には刻花文を施している。20は、須恵器壺である。色調は乳灰色で、内外面ともロクロナデである。21は、須恵器碗である。色調は乳灰色で、内外面ともロクロナデである。22～24・26は、須恵器の破片で、墨書土器と思われるが、全容は不明である。25は、須恵器蓋である。色調は暗青灰色である。内面に墨書があり、「安麻呂此□」と読める。27は、丸瓦片である。28・29は、土馬である。28は、頭部のみ遺存している。29は、頭部及び後ろ足が欠損している。30は、須恵器壺の上半部である。頸部には2段に波状文を施している。31は、木製の槽である。片方に把手を付けている。32は、中国製の白磁皿である。33は、瓦器碗である。34は、木製円板である。

以上のほとんどは長岡京期のもので、わずかに30が古墳時代で、32・33が中世に属する。遺構



第31図 出土遺物実測図(3)



第32図 調査地関係図

に伴うものとしては、S D51105出土が14・18・20・21・28で、S D51103が26である。他は、包含層から出土した。

5. まとめ

過去における外環状線緊急街路整備事業(以下、外環とする。)に伴う発掘調査は、木製呪物(木の埴輪)が出土した、今里車塚古墳などの調査があるが、ここでは、今回の調査地を含めた、外環関係の隣接地の調査について簡単にまとめてみる(第32図)。

右京域の調査も調査次数を重ね、今回の調査で547番目の調査となる。その中で外環関係の調査は、第32図に示すように、第285次・第310次・第335次・第511次そして今回の第547次調査である。この外環部分にかかる長岡京跡右京の遺構は、主に、西二坊大路^(註2)といった南北方向の大路の路面と東側溝である。この道路に、東西方向の大路や小路などが交差するかたちとなっている。以下、調査次数ごとに検出された長岡京期前後の主な遺構を見る。

第285次調査では、側溝西二坊大路の路面、東側溝や東西方向の二条大路南側溝などが確認されている。路面部分では、掘立柱建物跡が検出されているが、長岡京期には路面の下に埋め立てられており、この時期の遺構ではない。第310次路面では、西二坊大路路面とその路面に残された轍群が検出された。この調査では、西二坊大路と二条大路との交差点部分で、井戸の周囲に敷石の配水施設を伴う井戸が検出されたが、長岡京期以前の奈良時代の遺構とされている。第335次調査では、西二坊大路の東側溝や自然流路を埋め立て、路盤改良した丸太敷き遺構などが確認された。この路盤改良遺構は、長岡京跡では初出である。第511次調査及び今回の調査では、明確に長岡京期の遺構とされるものは確認されていない。平安時代以前の遺構のほとんどが自然流路(洪水)によって削平されている。特に、今回の第547次調査では、第25次調査(長岡第十小学校地点)で見つかった、大邸宅跡と同一台地上の調査にもかかわらず、長岡京期の遺構は検出されなかった。

(柴 暁彦)

注1 調査参加者 大熊宏子・中尾清之・中島恵美子・永田優子

注2 石尾政信ほか「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注3 石尾政信「長岡京跡右京第511次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

補1 南地区の水田グライ化土壌(第27図参照)の機動植物珪酸体(以下、珪酸体とする。)分析(対象試料を含め、計5点)を(株)パレオ・ラボに委託した。分析の結果、試料1gあたりに含まれるイネの珪酸体の検出個数は、最大で3,000個、他も1,000個程度であった。この数値は稲作の行われていた可能性を示す、1gあたり5,000個を下回り、検出個数から判断すると、調査地付近での稲作の可能性は低いとされる。また、5点の試料とも砂分が目立ったことから、河川などによってイネの珪酸体が運ばれてきた可能性が高いようである。

補2 今回の調査地は弥生時代前期の集落跡とされる上里遺跡に隣接する場所であったこともあり、同時期の流路跡などから畿内第I様式の土器が一定量出土した。当時の土器の流通を知る目的で、出土土器のうち、5点の胎土分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果、5点のうち3点は、調査地を京都盆地南部としてみた場合、在地の土器の可能性が高いということである。ほかの2点については、近畿地方で該当地を探すと、大阪府南部と奈良県の府県境にある二上層群である。このごく限られた試料のみで判断はできないが、少なくとも土器の地域間の移動の可能性は考えられる。

なお、補1・2の分析結果は当センターが保管している。

3. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要 (7ANSTE-18)

1. はじめに

今回の調査は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺小字鳥居前における府営住宅円明寺団地(仮称)建設に伴い、京都府土木建築部住宅課の依頼を受けて実施した。

調査地は、大山崎町北部の長岡京市域と隣接する地点で、長岡京跡右京八条四坊五町・六町(旧右京八条四坊七町)に相当する。^(注1)また、弥生時代の遺物散布地として知られる脇山遺跡の範囲内でもある。調査は、2棟の建物建設予定地内にそれぞれトレンチを設定して開始したが、遺構を検出したため一部拡張した。調査面積は、最終的に延べ約830㎡を測る。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同調査員野々口陽子が担当した。調査期間は、平成8年9月9日から12月6日までの延べ57日間を充てた。調査を実施するにあたり、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、(財)向日市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関からご指導、ご協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。^(注2)

なお、本調査概要は、調査を担当した野々口陽子が執筆した。



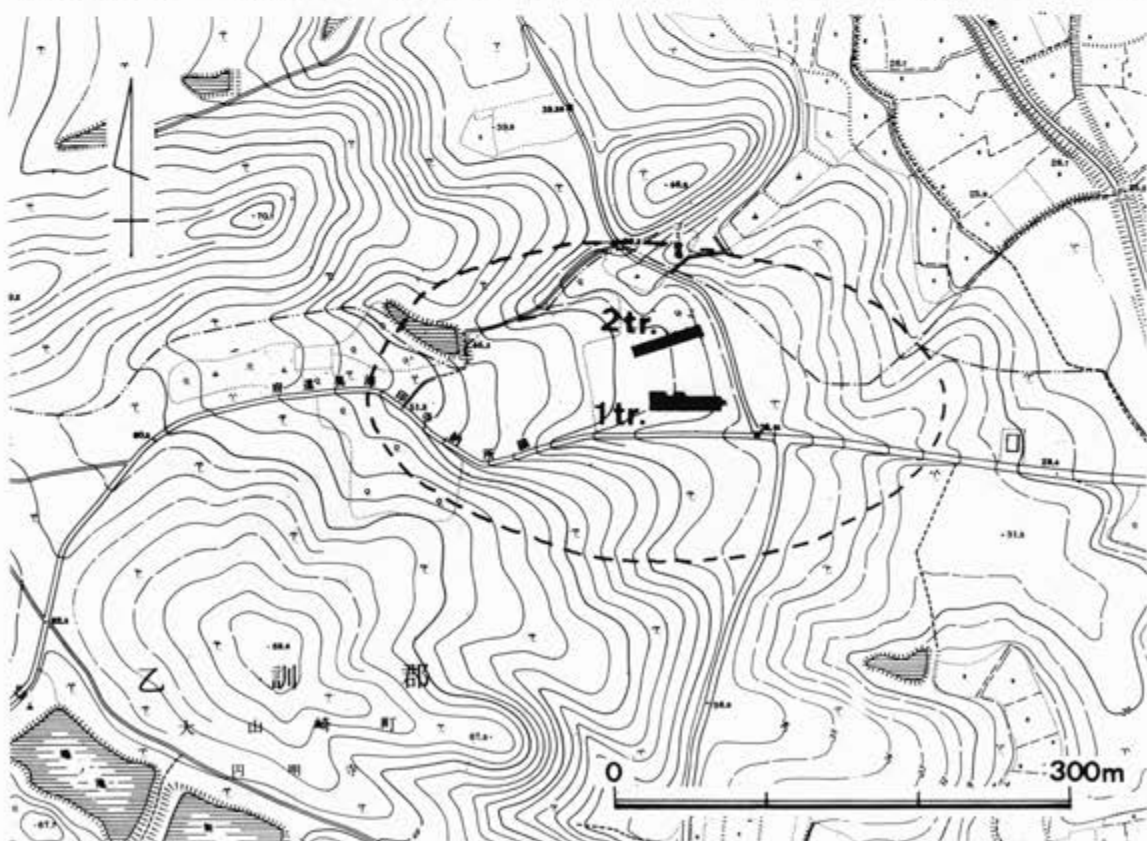
第33図 調査地位置図(1/10,000)

1. 調査地 2. 鳥居前古墳 3. 小倉古墳 4. 石倉古墳 5. 葛原親王塚

2. 位置と環境

調査地は、天王山の東麓にあたる標高約30~40mの丘陵上に位置する。周辺の地形は、近年の宅地開発により一変しているが、かつては南北の小尾根に挟まれたゆるやかな傾斜地を形成していたようである。遺跡は、東西約450m・南北約200mにわたる広がりを持つと推定される。

調査地の北方約600mの台地上には、乙訓地域でも数少ない旧石器時代の遺跡として知られる下海印寺遺跡があり、国府型ナイフ形石器や細石器が採集されている。同遺跡は、発掘調査により、縄文時代後期の土坑や集石遺構が見つかり、縄文時代の生活面の存在が明らかになった。弥生時代には、調査地の東方約1.7kmに乙訓地域の中期の拠点集落である神足遺跡があり、また南東方約1.5kmの範囲内には、弥生時代の宮脇・松田遺跡が立地する。古墳時代になると、西方約150mの丘陵頂部に帆立貝式前方後円墳の鳥居前古墳が築造される。鳥居前古墳は、全長約60mを測り、乙訓南部地域の前期の盟主墳的性格を持つが、周辺ではこれまでのところ、前期の集落遺跡は確認されていない。鳥居前古墳の東方の丘陵には、石倉古墳、小倉古墳などの後期古墳が分布している。また、飛鳥~平安時代の遺跡としては東方に鞍岡廃寺があり、前述した下海印寺周辺における右京七条四坊の調査では、溝内から墨書人面土器や多量の小形模造土製品などの祭祀遺物が出土した。この地点は、長岡京期の京域西辺の祭祀場と推定されている。この南方の丘陵は、条坊の範囲内ではあるが、従来、長岡京期の土地利用が疑問視される地域であり、調査地周辺のこの時期の遺構は、鳥居前周辺の竹林から蔵骨器が発見されたことに留まる。また、円明寺団地内には葛原親王塚の伝承を持つ古墓があるが、これは平安時代に帰属するとされる。



第34図 トレンチ配置図(1/5,000 1978年京都市都市計画図)

3. 調査概要

調査地の隣接地では、大山崎町教育委員会が過去に2度の発掘調査を行っている。昭和54年度の調査地西側の調査では、集石遺構や土坑が検出され、弥生土器片が出土している^(註3)。また、昭和57年度には、調査地南側約20mの地点が調査され、北にのびる池状の落ち込みが確認されたが、遺物は出土していない^(註4)。

今回の調査は、南北2棟の建物建設予定地内に、それぞれの床面積に応じた東西に長いトレンチを設定し、南側のトレンチを第1トレンチ、北側のトレンチを第2トレンチと呼称した。その結果、特に第1トレンチを中心に遺構を検出したことから、その広がりも推定されたため、調査範囲を一部拡張した。調査地は、最近まで竹林として利用されてきたもので、重機掘削により、厚さ約0.3mの表土を除去した後、遺構面の確認できる面まで掘り下げ、人力で以下の調査を進めた。

(1) 第1トレンチ概要

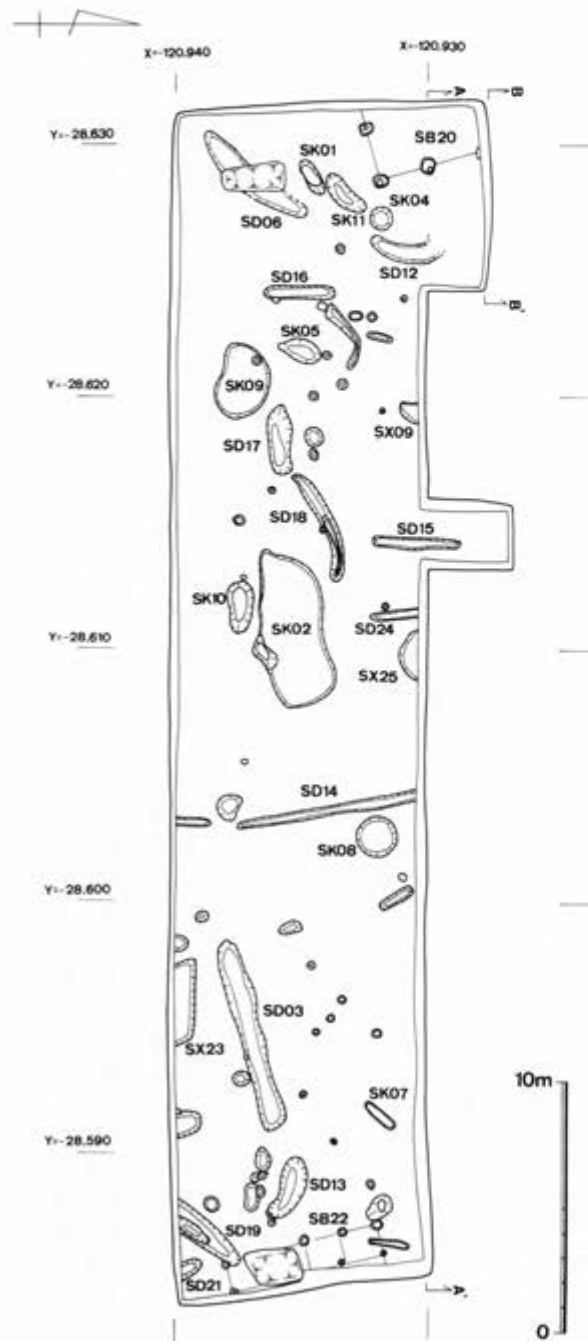
a. 第1トレンチの遺構

調査面積は、当初の南北8m・東西44mのトレンチを設定したが、一部拡張し延べ約494㎡を測る。

基本層序は、第1層—表土・層厚約0.3m、第2層—暗褐色粘質土・層厚約0.2m(長岡京期～近世遺物包含層)、第3層—淡黄褐色粘質土・層厚約0.1～0.2m(弥生遺物包含層)、第4層—黒灰褐色粘質土・層厚約0.2～0.3m(無遺物層、黒ボク堆積か)、第5層—淡黄灰褐色砂礫混じり粘質土(無遺物層・地山)である。

① 弥生時代の遺構

溝SD03・SD13・SD21 トレンチ東側で検出した方形周溝墓の一面をなすとみられる溝群である。溝SD03は、幅約1.0m、東西方向に約7.6mにわたって掘削されている。埋土は、黄灰褐色粘質土と暗茶褐色粘質土で、底から約5cm浮

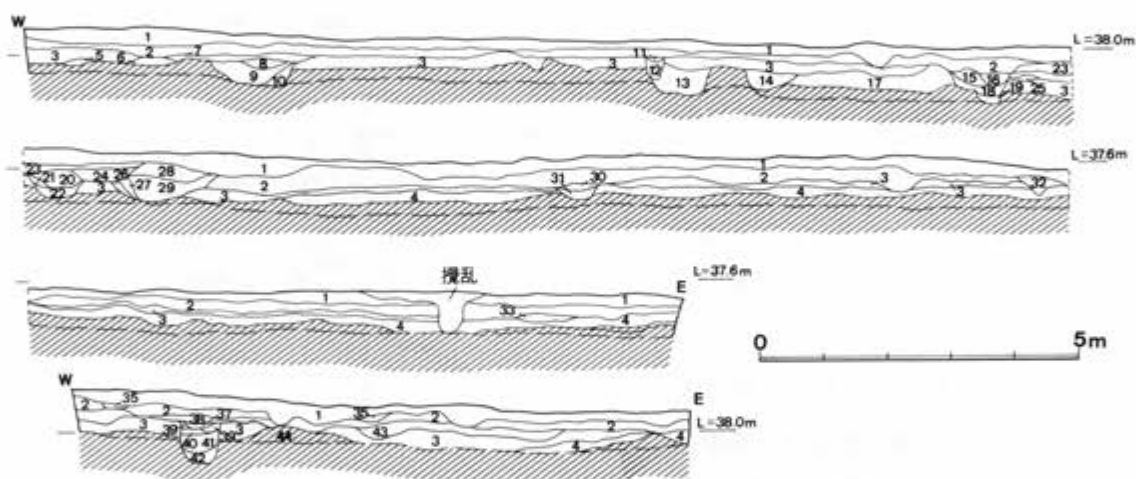


第35図 第1トレンチ遺構平面図

き上がったレベルで、甕や壺などの弥生土器が出土し、弥生時代中期前半頃のものであることが判明した。溝SD13からは、弥生土器片が出土しており、ゆるやかに南東に屈曲する。また、溝SD03に対して直交する溝SD21は、SD03と同じ暗茶褐色土を埋土としており、調査範囲外に続くと推定される。以上から、溝SD03・SD13・SD21はほぼ同時期のものであり、方形周溝墓の二辺とみられる。なお、溝SD19は、埋土に黒灰褐色粘質土が含まれており、弥生時代以前のものである可能性が高い。

溝SD12 トレンチ西側で検出した幅約1.4m・深さ約0.1mの浅い溝で、やや屈曲する。溝内から土器とともに、サヌカイトの剥片1点が出土しており、時期は弥生時代中期前半頃と推定される。

土坑SK01 トレンチ西端で検出した長径約2.6m・短径約1.1m・深さ約0.4mの不整形な土坑である。拡張前のトレンチ西断面に、土坑の半分がかかったため、良好な状態で遺物を取り上げられなかったが、ほぼ完形に復原できる甕などが出土しており、中期前半頃に帰属する。



第36図 第1トレンチ土層断面図

- | | | |
|-----------------------------|----------------------|------------------|
| 1. 灰褐色粘質土(表土) | 15. 黄灰褐色粘質土 | 32. 黄褐色粘質土 |
| 2. 暗褐色粘質土(第2層—長岡京期～近世遺物包含層) | 16. 暗灰褐色粘質土 | 33. 淡黄褐色粘質土 |
| 3. 淡黄褐色粘質土(第3層—弥生遺物包含層) | 17. 暗茶褐色粘質土 | 34. 暗茶褐色粘質土 |
| 4. 黒灰褐色粘質土(第4層—黒ボク堆積か) | 18. 淡黄褐色粘質土(溝SD15埋土) | 35. 暗灰褐色粘質土 |
| 5. 茶灰褐色粘質土 | 19. 暗黄褐色粘質土(溝SD15埋土) | 36. 淡黄褐色シルト |
| 6. 淡茶褐色粘質土 | 20. 淡黄褐色粘質土 | 37. 黄灰褐色粘質土 |
| 7. 黒灰褐色粘質土 | 21. 淡褐色砂質土 | 38. 暗黄灰褐色粘質土 |
| 8. 茶灰褐色礫混じり粘質土 | 22. 暗褐色礫混じり粘質土 | 39. 暗茶褐色粘質土 |
| 9. 茶褐色粘質土(炭化物含む) | 23. 淡黄褐色粘質土 | 40. 黒灰褐色炭混じり粘質土 |
| 10. 淡茶褐色粘質土 | 24. 暗褐色粘質土 | 41. 暗黄褐色粘質土 |
| 11. 黒褐色炭混じり粘質土 | 25. 暗茶褐色粘質土 | 42. 暗黄灰褐色粘質土 |
| 12. 暗褐色粘質土 | 26. 黒褐色粘質土 | 43. 淡灰褐色粘質土 |
| 13. 黒褐色粘質土(風倒木の影響か) | 27. 暗黄褐色礫混じり粘質土 | 44. 暗黄灰褐色粘質土(地山) |
| 14. 黒灰褐色礫混じり粘質土 | 28. 淡黄褐色礫混じり粘質土 | |
| | 29. 淡褐色礫混じり粘質土 | |
| | 30. 明黄褐色シルト | |
| | 31. 黄灰褐色粘質土 | |

土坑SK04 土坑SK01の北側で検出した直径約0.8m・深さ約0.2mの円形土坑である。土坑内から、安山岩製の剥片1点が出土した。

土坑SK02 トレンチ中央部で検出したもので、長さ約6.5m・幅約2.2m・深さ0.1~0.3mの浅い落ち込み状の不整形な土坑である。埋土は茶褐色粘質土で、土器とともに、サヌカイト打製石鏃や剥片及び砂岩製砥石が出土しており、弥生時代中期前半頃に比定できる。土器は細かな破片が多く、石材とともに一括廃棄された可能性が高い。剥片が出土したため、埋土を水洗いして選別した結果、約1cm以上の剥片28片、1cm以下の微細剥片61片を採取した。また、土坑底から出土した約20cm大の粘板岩の破片は、磨製石器の石材として持ち込まれた可能性がある。

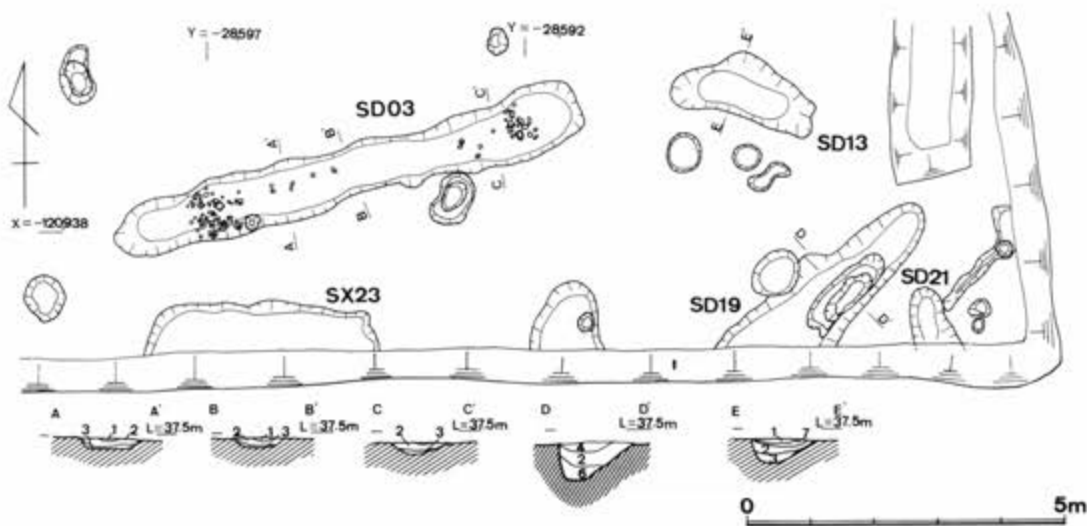
土坑SK10 土坑SK02の南側の不整形な土坑で、長さ約2.1m・幅約0.8m・深さ約0.4mを測る。土坑内から、打製石鏃1点と石錐1点、及び剥片1点が出土した。

②長岡京期の遺構

溝SD15 トレンチの中央付近西寄りで検出したもので、長さ3.5m・深さ約0.2~0.3mの南北にのびる溝である。溝内には、2か所のピット状の落ち込みがある。遺物は、上層から口頸部を打ち欠いた須恵器壺や、溝底から土師器椀などが出土しており、長岡京期と推定される。東側に約3.0m離れて平行する溝SD24を検出しており、関連遺構の可能性はあるが、時期は確定できない。

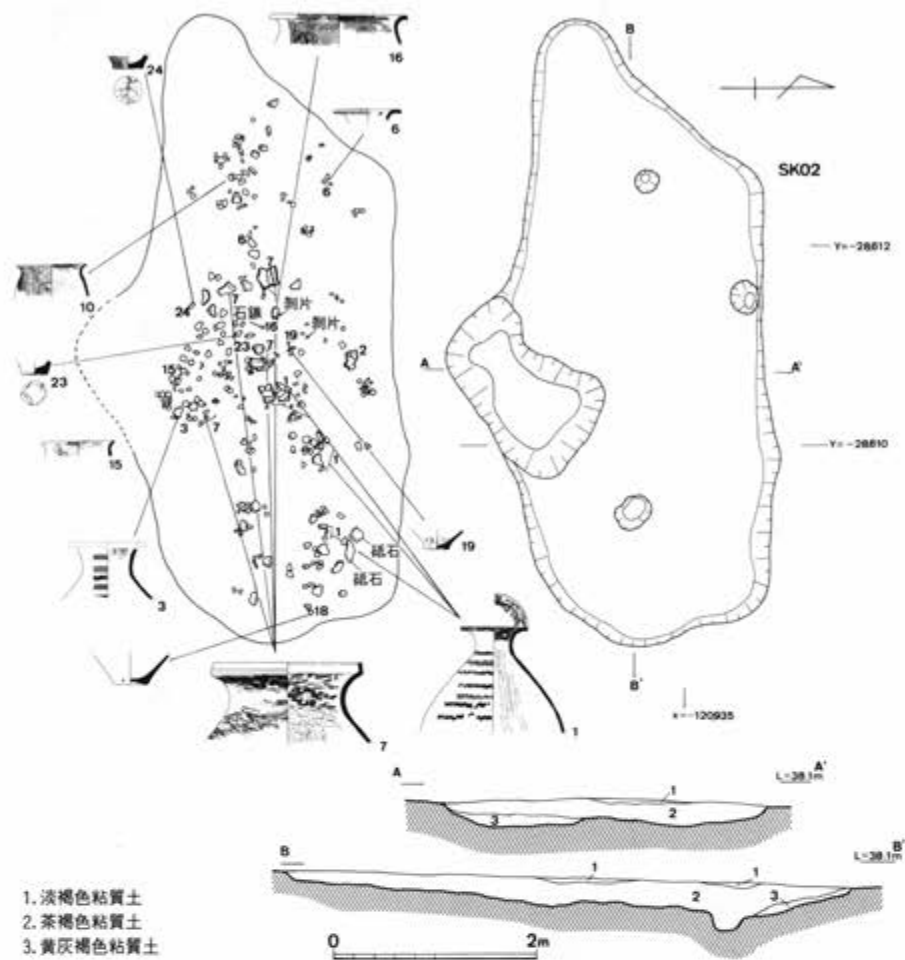
③その他の遺構

掘立柱建物跡SB20 トレンチ西端で一部検出した建物跡で、2間×1間以上の規模をなす。柱間は約1.9~2.2mを測り、柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形をなす。主軸は、N-16°-Wを測る。柱掘形は、弥生時代の包含層を切り込むことから、建物跡の帰属時期は弥生時代以降であるが、主軸が長岡京跡の一般的な建築方位よりもやや西に振るため、長岡京期以前か、あるいは中世以降に構築されたものであろう。

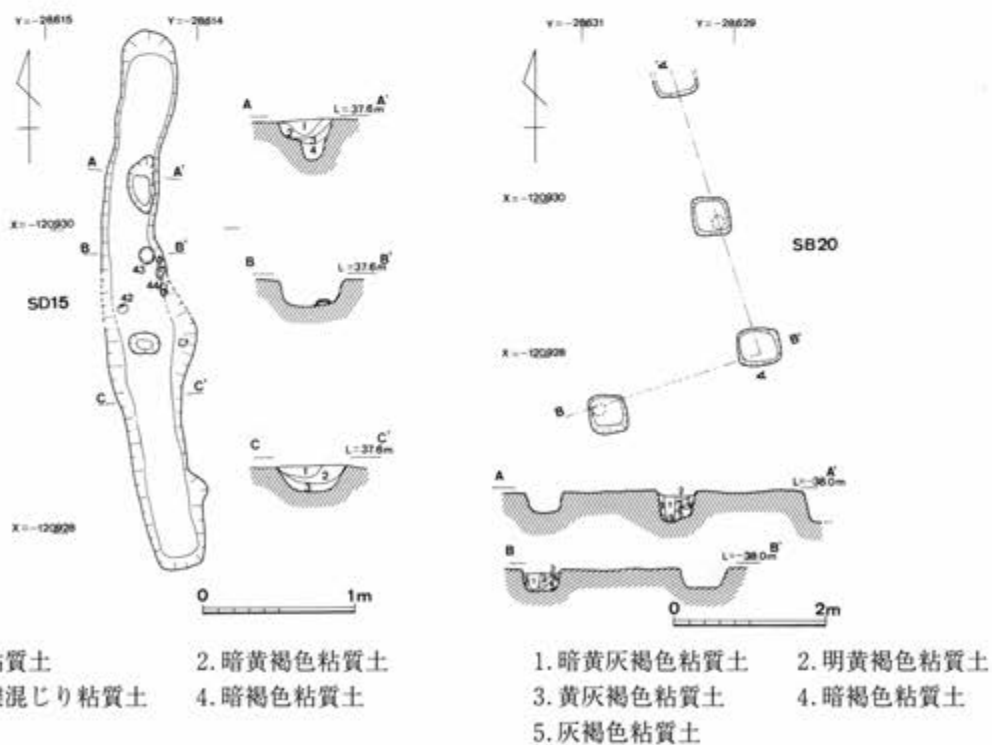


第37図 溝SD03・13・21実測図

- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1. 茶灰褐色粘質土 | 2. 黄灰褐色粘質土 | 3. 暗茶褐色粘質土 | 4. 黒灰褐色粘質土 |
| 5. 暗褐色土 | 6. 暗黄褐色粘質土 | | |



第38図 土坑SK02実測図



第39図 溝SD15・掘立柱建物跡SB20実測図

掘立柱建物跡 S B 22 トレンチ東端で一部検出したもので、4間×1間以上の建物跡である。柱間は約1.4~1.5mで、主軸はN-15°-Wを測る。トレンチの東断面にかかる柱穴が、弥生時代の包含層を切り込むことや、掘立柱建物跡 S B 20と主軸方向が近似することから、同様の時期とみられる。

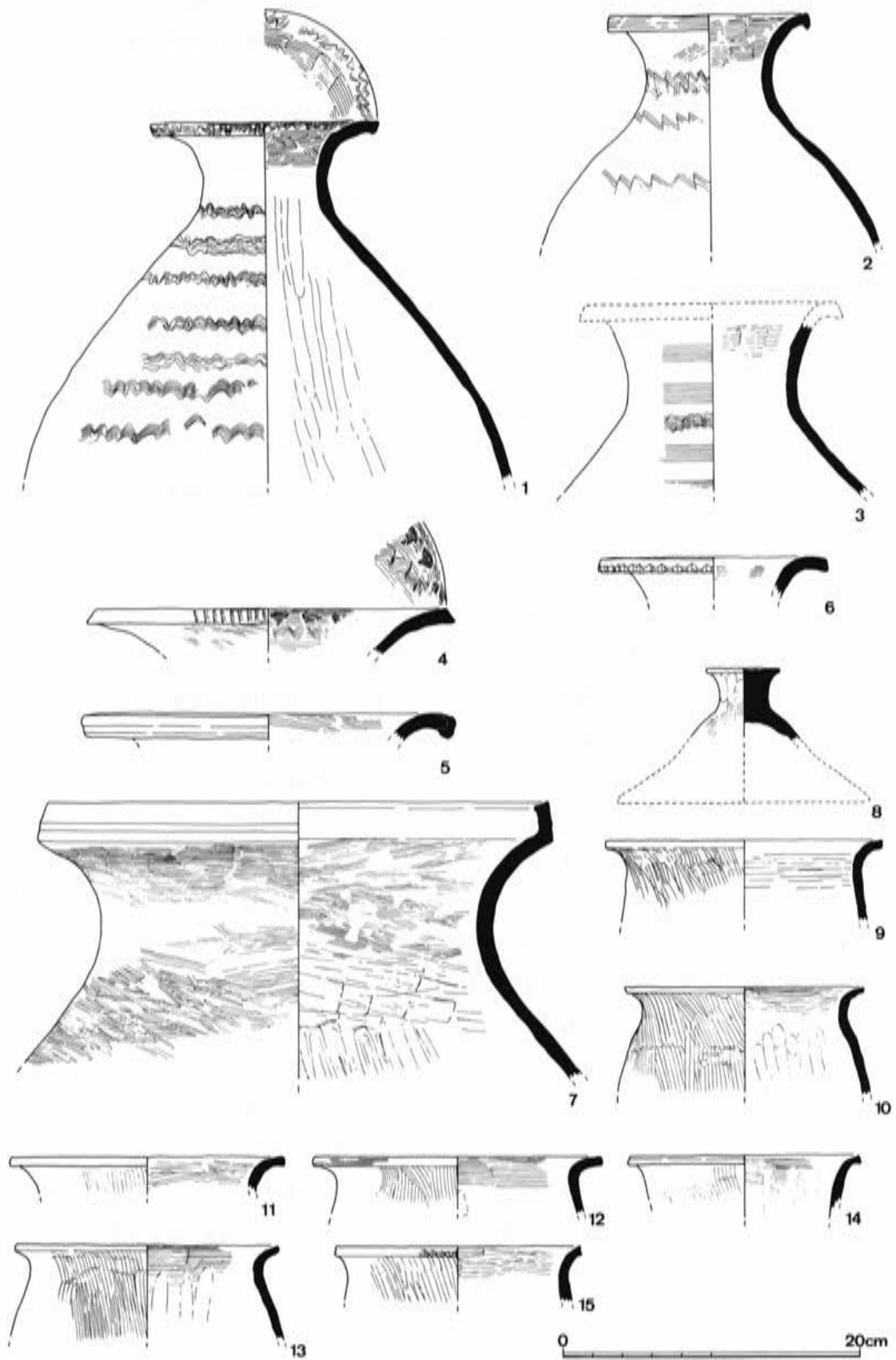
溝 S D 14 幅約0.5mの南北にのびる溝で、方位はN-9°-Wとやや西に振る。埋土は暗灰褐色粘質土で、掘立柱建物跡 S B 22などより新しい時期のものと推定される。

土坑 S K 07 約1.6m×約0.4mの方形土坑で、須恵器片が出土している。

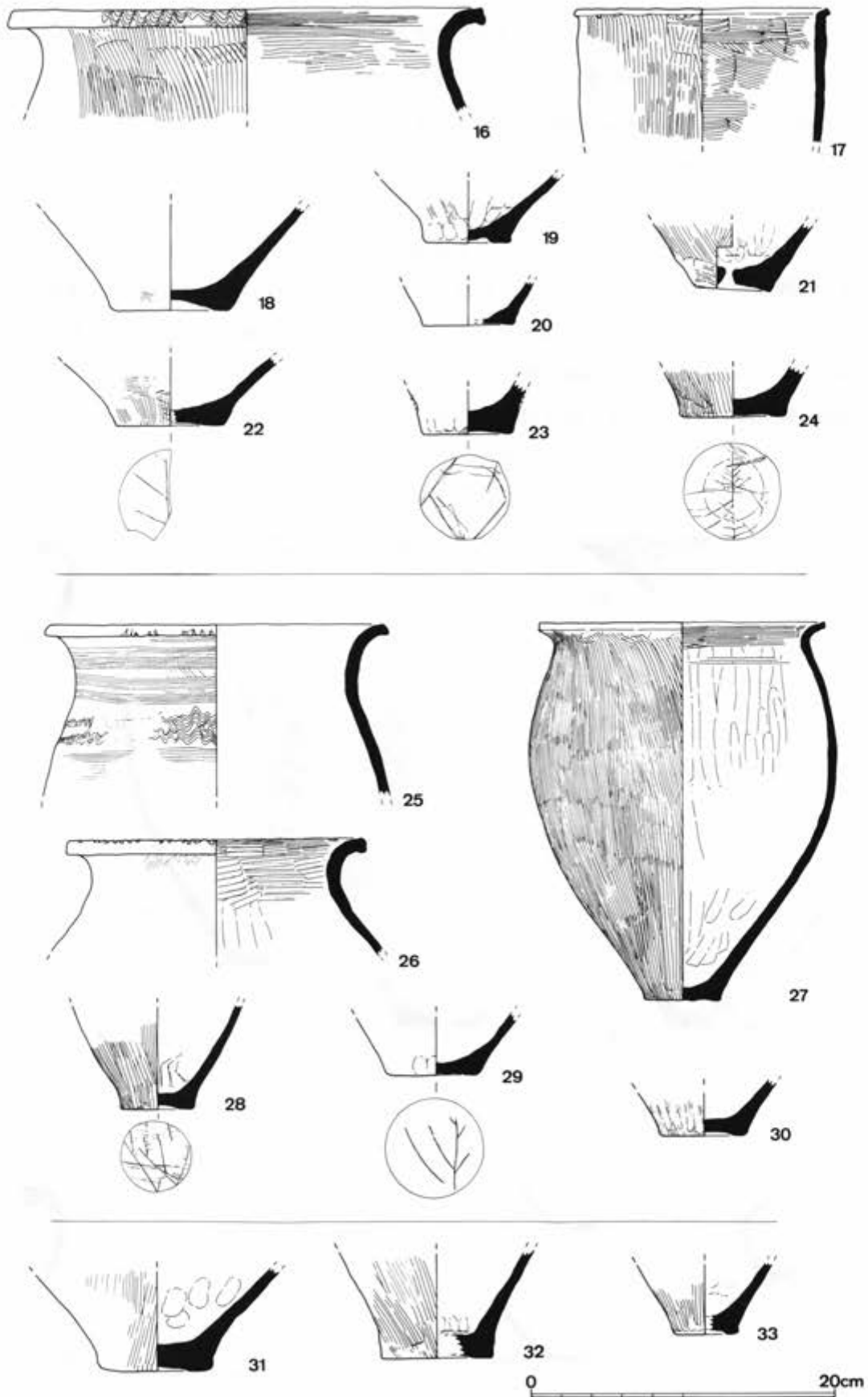
b. 第1トレンチの出土遺物

弥生土器(第40・41図) 1~24は、土坑 S K 02から出土した。1は、短く外反する口頸部をもち、体部に櫛描き波状文を施す広口壺である。口縁端部は面をなし、波状文で飾る。口縁部内面は、粗いヨコハケのち波状文を施し、頸部以下は植物原体を用いたと推定される縦方向のナデ調整がみられる。胎土に、赤色斑粒を多く含む。口径15.3cm、橙褐色。2は、短く外反する口頸部をもち、体部に波状文を施す。口縁端部はわずかに下方に拡張し、端面と内面にヨコハケを施す。口径13.2cm、淡黄褐色。3は、大きく外反する壺で、頸部から体部にかけて櫛描き直線文と波状文を施す。磨耗が著しいが、口縁部内面に粗いヨコハケを施す。淡黄褐色。4は、大きく水平に開く口縁部をもつ壺で、口縁部内面に粗いヨコハケを施した後、扇形文と波状文を施す。口縁部端面には、櫛描き刺突文を施す。復原口径約23.6cm、茶灰褐色。5は、口縁部が大きく外反し、端部が肥厚する壺である。口縁内面には、ヨコハケを施す。復原口径約23cm、淡黄褐色。6は、水平に近く大きく開く壺で、口縁部端面下半には刻み目を加える。口縁部内面には、わずかにヨコハケが認められる。復原口径約13.0cm、淡橙褐色。7は、無飾の有段口縁の大形壺である。口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁外面下部に1条の凹線を施す。頸部外面はヨコハケ、体部外面はヘラミガキを施す。頸部内面はヨコハケを施し、同下半は若干の砂粒の移動を伴う板状工具によるナデ、体部内面上半には縦方向のナデが残る。胎土は1と同様に赤色斑粒を多く含み、橙褐色を呈する。口径33.6cm、8は、笠形の甕蓋として復原したが、ツマミ部分の引き出しが明瞭なタイプは中期前半にはあまり例を見ず、高杯あるいは台付鉢の脚部となる可能性も否定できない。9~16までは、いずれも短く外反する口縁をもち、体部外面をハケ調整し、口縁部内面にヨコハケを施すものである。口縁端部の形態には、下端に刻み目を施す15(口径16.4cm)や、面をなす14(口径15.4cm)がある。10・13・14は、体部内面に縦方向のナデ調整が確認できる。10・13は、口径(それぞれ16.0cm・17.6cm)に対して、体部径が大きくなり、体部がやや張り出す。16は、口縁部端面を波状文で加飾する。口径30.8cm、淡黄褐色。17は、直立気味に立ち上がる口縁部に、端部はやや内傾する面をもつ。調整は内外面をハケ調整する。口径18.4cm、暗赤褐色土。底部は、約80%以上に葉脈痕がみられる。21は、焼成前穿孔のある底部で、下端にタタキ状の圧痕を伴う板オサエを施す。また、内面には、わずかにハケ痕跡が残り、のちにナデを施す。23は、下端を板オサエし、底面には4方向に葉脈痕が認められる。

25~30は、方形周溝墓の一画とみられる溝 S D 03から出土した。25は、太頸の広口壺で、ゆる



第40図 遺物実測図(1) 土器 1
1~15. 土坑 S K02

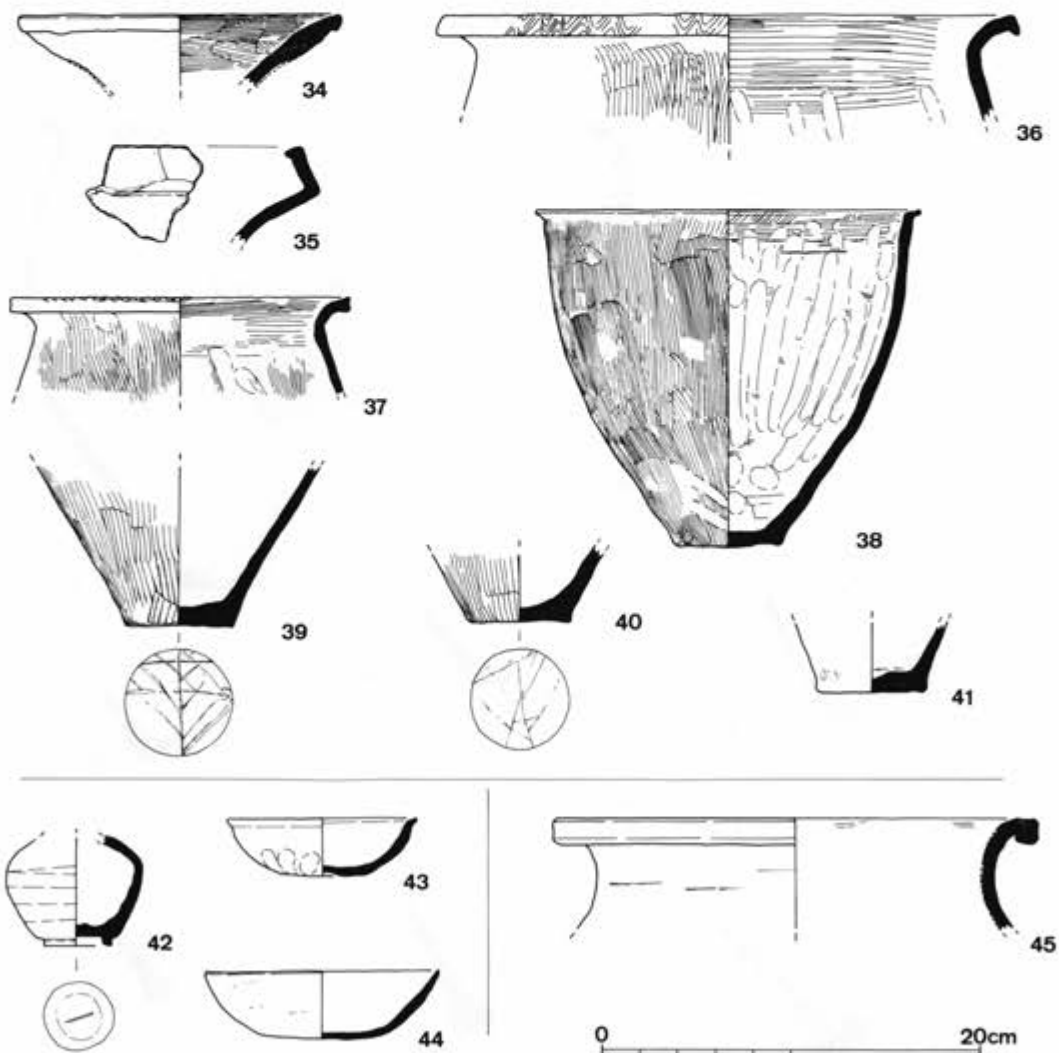


第41図 遺物実測図(2) 土器 2
 16~24. 土坑 S K 02 25~30. 溝 S D 03 31~33. 溝 S D 12

やかに外反する口頸部をもち、口縁端部に刻み目を施す。体部外面は、直線文・波状文で加飾する。口径21.8cm、淡橙褐色。26は、短く外反し、やや肥厚する口縁部をもつ。口径19.6cm、淡黄褐色。27は、ほぼ完形の大和形甕である。体部径が口径を凌ぎ、体部の張るプロポーションをもつ。外面をタテハケ、内面はナデ調整するが、底部周辺に部分的に板状工具によるナデの痕跡を残す。口径18.7cm・器高25.0cm、淡黄褐色。底部には、ゆるやかに窪む28・30や、平底の29がある。

31～33は、溝SD12から出土し、いずれも葉脈痕が残る。

34は、口縁部が大きく開く壺口縁部か。35は、屈曲して垂直気味に立ち上がる壺口縁部である。36は、短く外反する口縁部をもち、端部をわずかに下方に拡張し、端面に波状文を施す。復原口径30.0cm、淡黄褐色。38は、直口縁の甕であり、外面はタテハケ、内面には口縁部に粗いヨコハケ、体部に縦方向のナデを施す。胎土は、赤色斑粒を多く含む。口径20.2cm・器高17.8cm、暗赤褐色。39～41の平底の底部は、いずれも葉脈痕を留める。

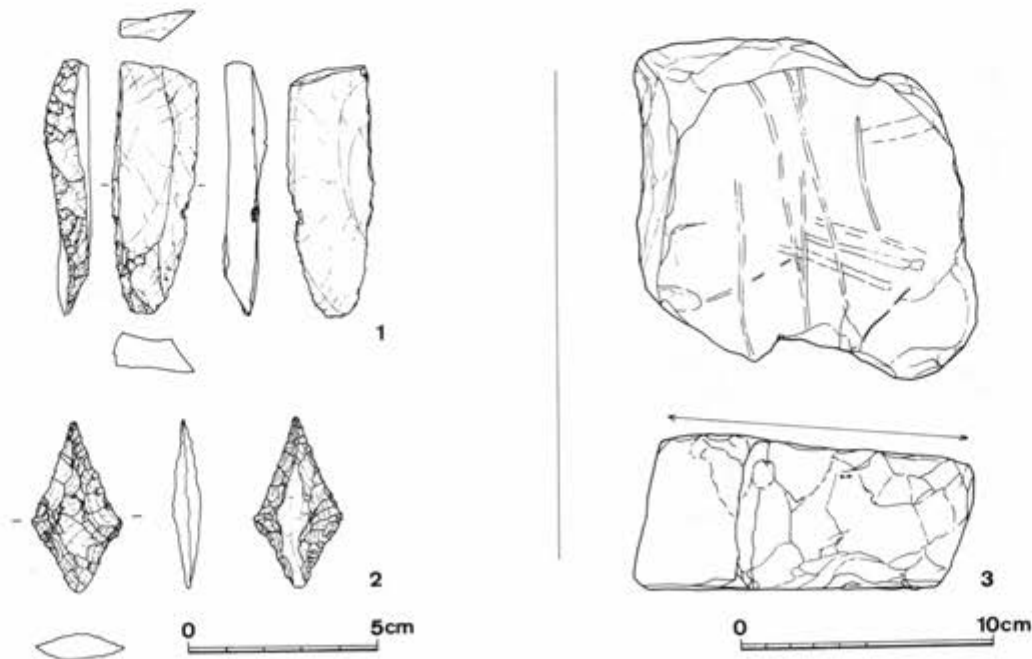


第42図 遺物実測図(3) 土器3
34～41. 土坑SK01 42～44. 溝SD15 45. 包含層

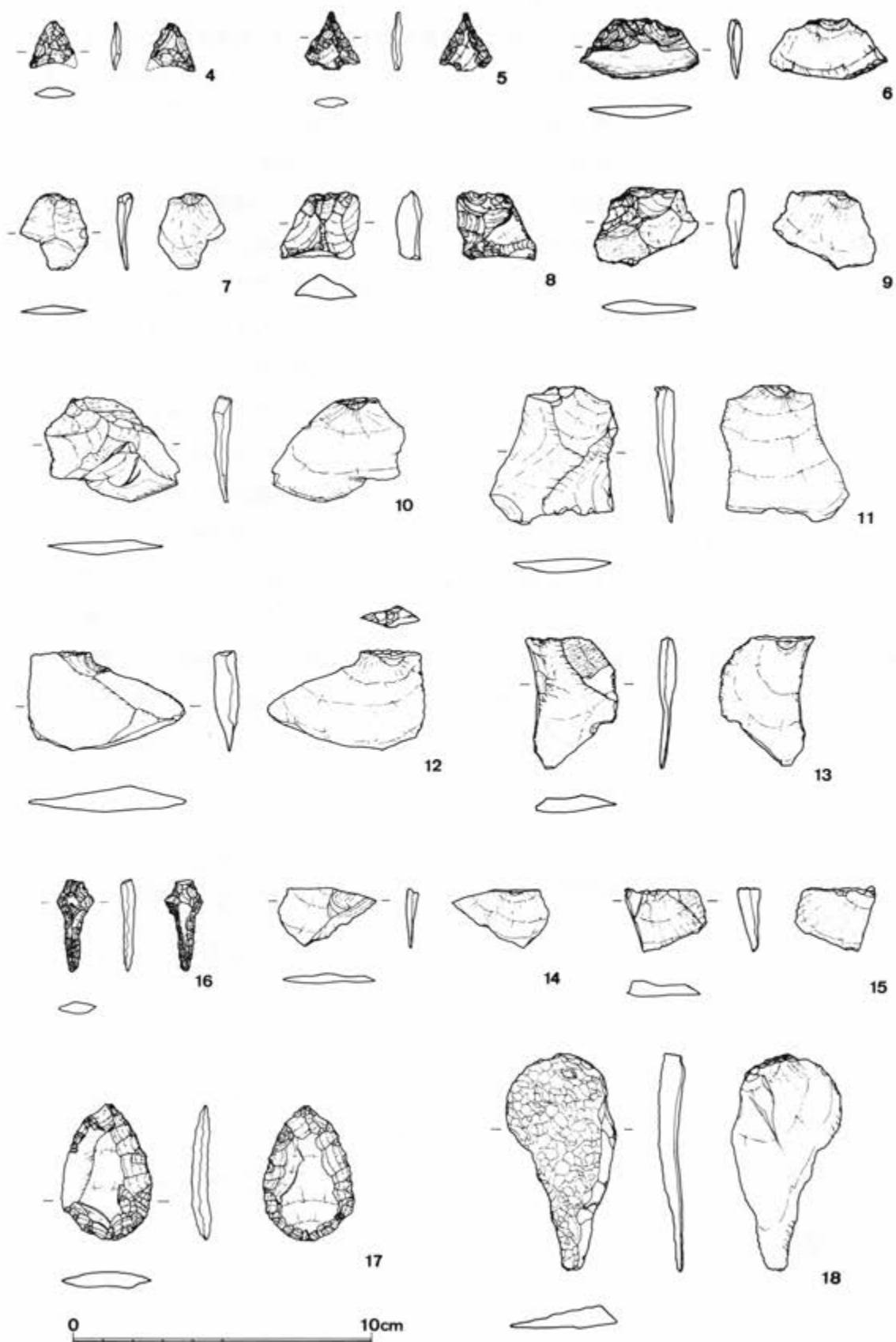
42は、肩部のやや張る壺Mで、口頸部を打ち欠く。底部外面は糸切りした後、小さな高台をつけ、外面はロクロナデにより仕上げる。43は、墨書人面土器にしばしば用いられる壺Bで、内湾気味に開く体部に、短く外反する口縁部をもつ。端部は、内傾する面をなし、体部外面は底部に指頭圧痕を残すが、ほかは未調整で終わる。口径10.0cm・器高3.0cm。44の椀Aは、外面の磨耗が著しいが、ケズリのちミガキが施される。口径12.4cm・器高3.8cm。

45は、肥厚し、やや下方に拡張する口縁部をもつ。口径25.4cm、淡黄褐色を呈する。

石器(第43・44図) 1は、包含層から出土したナイフ形石器である。サヌカイト製の横長剥片を加工し、一部欠損する。2は、包含層から出土した凸基有茎式の打製石鏃で、横長剥片を用いる。長さ4.5cm・厚さ0.65cm、サヌカイト製。3は、土坑S K02から出土した砂岩製の砥石である。平坦面の一面を使用しており、細かい擦痕と粗い筋状の搔痕が認められる。重さは、1,230gを測る。4～15は、土坑S K02から出土した。4は、凹基式の打製石鏃である。金山産サヌカイトの可能性もある。長さ1.6cm・厚さ0.3cm。5は、凸基有茎式の打製石鏃で、大剥離面を残して縁片部を調整する。長さ1.95cm・厚さ0.35cm。6は、刃部のある剥片で、横長剥片を用い、背面の下部を研磨している。8は、チャート製の横長剥片の縁片部を剥離調整しており、石鏃の未製品の可能性がある。7・11・13は、縦長剥片である。13は、側面に使用痕状の小剥離がある。いずれもサヌカイト製。9・10・12・14・15は、横長剥片である。12は、打面に打点調整の小剥離があり、弥生時代以前の所産である可能性がある。また、側面にも使用痕状の小剥離があり、下端に折面がある。いずれもサヌカイト製。16は、土坑S K10から出土した石錐である。長さ3.1cm・厚さ0.4cm。17は、同じくS K10から出土した凸基無茎式の柳葉形の石鏃である。18は、縦長剥片で、背面に自然面を残す。16～18は、いずれもサヌカイト製である。



第43図 遺物実測図(4) 石器 1
1・2. 包含層 3. 土坑S K02



第44図 遺物実測図(5) 石器2
 4~15. 土坑S K02 16・17. 落ち込みS X10 18. 包含層

(2) 第2トレンチ概要

第2トレンチは、第1トレンチの北側に、南北7m・東西48mのトレンチを設定したもので、面積は延べ約336m²を測る。

基準層位は、第1層—表土・層厚約0.3m、第2層—淡黄褐色粘質土・層厚約0.2~0.3m(遺物包含層)、第3層—淡黄灰褐色砂礫混じり粘質土(無遺物層・地山)である。第2層からは、弥生土器や須恵器の細片が出土している。第1トレンチで検出した暗黄褐色粘質土層(弥生時代遺物包含層)、及び黒灰褐色土層(無遺物層、黒ボク堆積か)は、安定した層位としては確認できない。調査地は、現在は広く平坦地となっているが、旧地形は、北側の標高がやや高く、上層は削平されているとみられる。

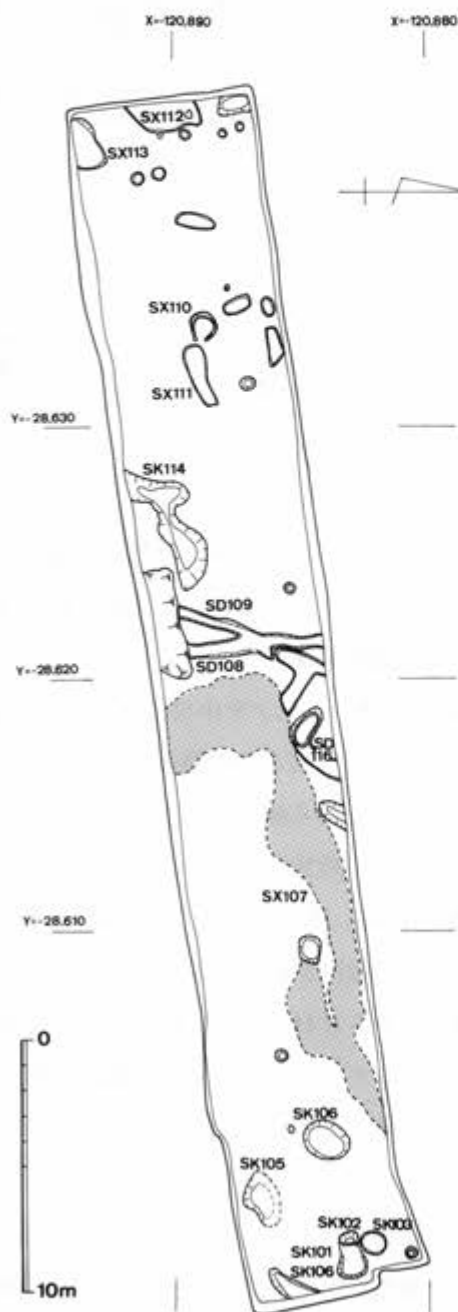
a. 第2トレンチの遺構

① 縄文時代の遺構

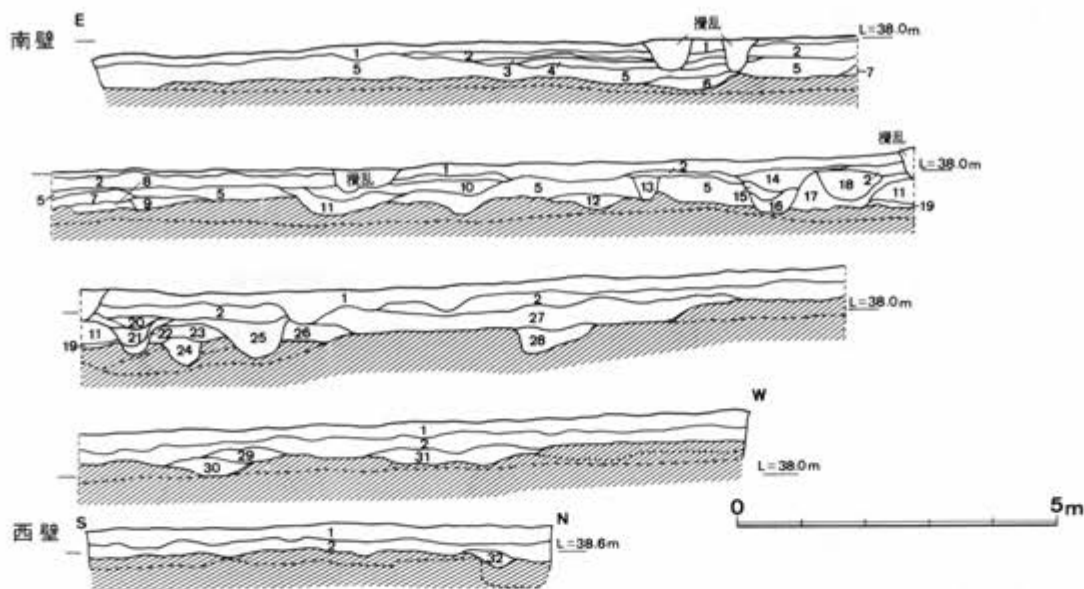
土坑S K 101・102 地山面で検出したもので、土坑S K 101と土坑S K 102は一部重複する。断面から観察すると、S K 101が掘削された後、S K 102が構築されている。S K 101は、長さ約1.8m・幅約0.9~1.2m、検出面での深さ約0.25mの不整形な土坑である。埋土は、基本的に暗褐色粘質土と茶褐色粘質土の2層からなる。検出面から約0.1m下で、被熱の痕跡のある人頭大の石材を検出し、底面から縄文時代中期末頃の深鉢片が出土した。土器片は、比較的大きな3つの破片がほぼ同じレベルで散乱しており、それぞれ異なる個体であることが判明した。人頭大の石材は、標石的に用いられたと考え、埋葬施設である可能性が高い。土坑S K 102は、長径約0.9m・短径約0.6m・深さ約0.5mを測る。

土坑S K 103 土坑S K 102の北側に接して検出した円形土坑である。径約0.9m・深さ約0.3mを測る。埋土は暗茶褐色土で、底面から被熱痕跡のある10cm大の小礫を検出した。埋土には若干の炭化物を含み、縄文土器とみられる土器細片が出土した。

土坑S K 105・S K 106 土坑S K 105は、不整形の土坑である。いずれも他の土坑と同様、埋土



第45図 第2トレンチ遺構平面図



第46図 第2トレンチ土層断面図

- | | | |
|---------------|--------------|------------------|
| 1. 灰褐色粘質土(表土) | 12. 暗茶灰褐色粘質土 | 24. 明黄褐色砂礫混じり粘質土 |
| 2. 淡黄灰褐色粘質土 | 13. 暗灰褐色粘質土 | 25. 灰褐色砂礫混じり粘質土 |
| 3. 淡灰褐色粘質土 | 14. 淡黄灰褐色粘質土 | 26. 黒灰褐色粘質土 |
| 4. 暗灰褐色粘質土 | 15. 暗黄褐色砂質土 | 27. 淡褐色砂礫混じり粘質土 |
| 5. 淡黄褐色粘質土 | 16. 暗黄褐色砂質土 | 28. 黒灰褐色粘質土 |
| (第2層—遺物包含層) | 17. 暗灰褐色シルト | 29. 淡黄褐色粘質土 |
| 6. 暗灰褐色粘質土 | 18. 暗褐色粘質土 | 30. 淡灰褐色粘質土 |
| 7. 暗茶灰褐色粘質土 | 19. 暗灰褐色砂礫土 | 31. 灰褐色砂礫混じり粘質土 |
| 8. 淡灰褐色粘質土 | 20. 暗灰褐色粘質土 | 32. 暗灰褐色粘質土 |
| 9. 茶灰褐色粘質土 | 21. 暗褐色粘質土 | |
| 10. 暗灰褐色粘質土 | 22. 淡褐色シルト | |
| 11. 黒灰褐色粘質土 | 23. 暗灰褐色砂礫土 | |

は暗茶褐色土であり、縄文時代に帰属する可能性が高い。土坑S K106は、トレンチ東側で検出した楕円形の土坑である。長径約1.9m・短径1.6mのを測る。

②その他の遺構

溝S D108 トレンチ中央部で検出した幅約0.5mの南北にのびる溝である。断面は台形で、検出面での深さは約5cmを測る。方位はやや西に振り、N-4°-Wを測る。溝内から、須恵器壺の体部とみられる破片が出土しており、奈良時代以降の所産とみられる。方位から判断すると、長岡京期の可能性がある。

溝S D109 溝S D108と一部重複して検出したもので、断面は逆台形状を呈する。S D108を切り込んで掘削されているが、時期を確定することはできない。

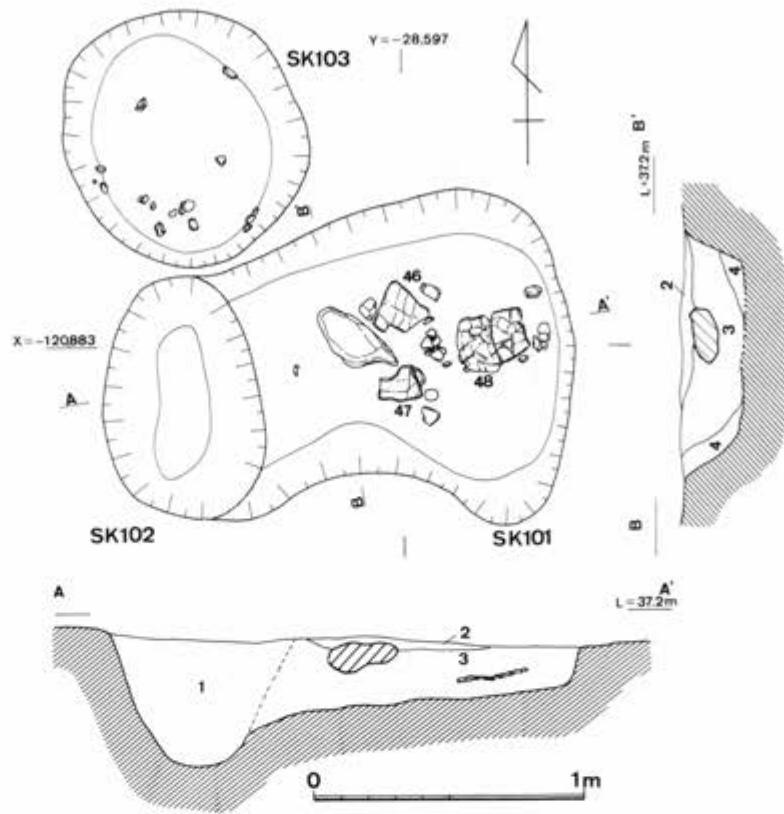
落ち込みS X112・S X113 不整形な落ち込み状の浅い土坑である。埋土は、暗灰褐色粘質土で、遺物などは含まず、帰属時期は不明である。

なお、S X107は、トレンチ中央部から検出した自然流路状の礫層である。幅1~3m・長さ約20mにわたって検出したもので、トレンチの外側へと伸びている。南側の断ち割りから観察すると、礫層の断面は、垂直または内傾気味に立ち上がっており、層厚約0.5~0.7mを測る。埋土は暗灰褐色砂礫土であり、10~15cmの円礫を多量に含む。地山面に入り込んでおり、古い時期に堆積した地山の礫層の可能性が高い。S X110・S X111は、どちらも黒灰褐色粘質土を埋土とす

る不整形な落ち込みである。こうした不整形な落ち込みは、第1トレンチでも4か所で確認できる。断ち割りの結果、地山下層の明黄褐色砂礫混じり土が上層に巻き上がっており、弥生時代以前の段階の大木などの倒壊(風倒木)による可能性が高いと思われる。

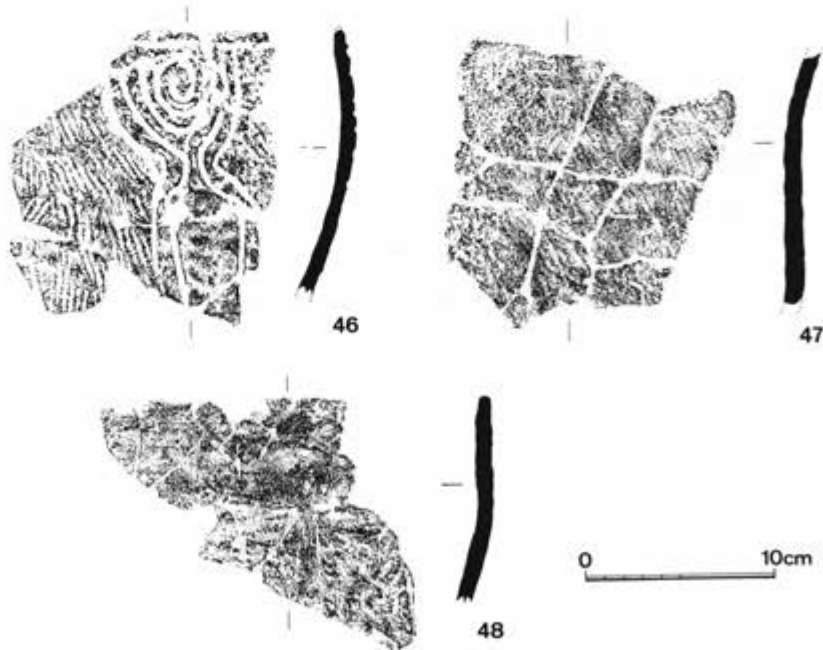
b. 第2トレンチの出土遺物

46は、深鉢の口縁部近くの破片である。渦巻文の両側に垂下沈線束を施し、沈線の区画外に縦方向の縄文を施す。胎土には、金雲母を多量に含んでおり、生駒西麓産とみられる。縄文時代中期末の北白川C式の範疇で捉えられるものであろう。器厚約0.8cm、暗茶褐色。47は、深鉢の体部片で、器面全体に縦方向の縄文を施す。生駒西麓産の胎土をもつ。器厚約1.0cm、暗茶褐色。48は、平口縁の無文の深鉢である。器厚約0.9cm、淡黄褐色。



第47図 土坑SK101～103実測図

- 1. 淡茶褐色粘質土
- 2. 暗褐色粘質土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 茶灰褐色粘質土



第48図 遺物実測図(6) 土器4
46～48. 土坑SK101

4. ま と め

調査成果は各時代にわたっており、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・長岡京期に各々の成果があった。

旧石器時代に関しては、ナイフ形石器が出土したことが注目される。乙訓地域では、下海印寺遺跡、南栗ヶ塚遺跡、今里遺跡、十三遺跡などが旧石器時代の遺物散布地として知られており、乙訓南部地域に新たな一例を加えることとなった。また、縄文時代の遺構では、中期末頃と推定される土坑群を検出し、一帯の丘陵上に、下海印寺遺跡などと並ぶこの時期の遺跡の存在が明らかになった。土坑の一つからは、北白川C式に帰属する深鉢が出土しているが、これは胎土から生駒山西麓地域からの搬入品とみられる。今回の調査の主たる成果は、弥生時代の遺構群を検出したことであり、従来から弥生土器の散布地として知られていた脇山遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。遺構の中で特に注目されるのは、方形周溝墓の一画をなすと推定される溝群の検出で、出土土器から中期前半(第Ⅲ様式前半)頃のものであることが判明した。また、土坑からは、中期前半(第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式前半)頃の特徴を持つ土器群が、比較的まとまった点数で石器とともに出土しており、これまで空白地域であった大山崎周辺の中期の土器様相を知る上で、良好な資料を得た。調査区内では、住居跡は検出されなかったが、墓域の一画が明らかになり、周辺に集落の存在が推定される。また、歴史時代以降の遺構としては、長岡京期とみられる溝が、部分的ながら検出されたことが注目される。調査地周辺は、長岡京期の南西隅にあたり、これまでこの時期の土地利用は疑問視されてきた地域であり、今回の調査ではこうした見方に再考を促す成果が得られた。

(野々口陽子)

注1 条坊名称は、山中 章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号)の復原に従った。

注2 林 亨、古閑正浩、寺嶋千春、岩崎 誠、小田桐淳、中島皆夫、山中 章、園下多美樹、中塚 良、小島孝修の各氏から、現地でご教示を得た。

調査参加者は、下記のとおりである(順不同、敬称略)。

高橋あかね、山田恵子、大橋宜雄、小島浩之、矢野正隆、三ツ橋耕平、西川真介、松下道子、荻野 冨紗子、関口睦美、中村美也、関野雅子

注3 林 亨『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会 1984

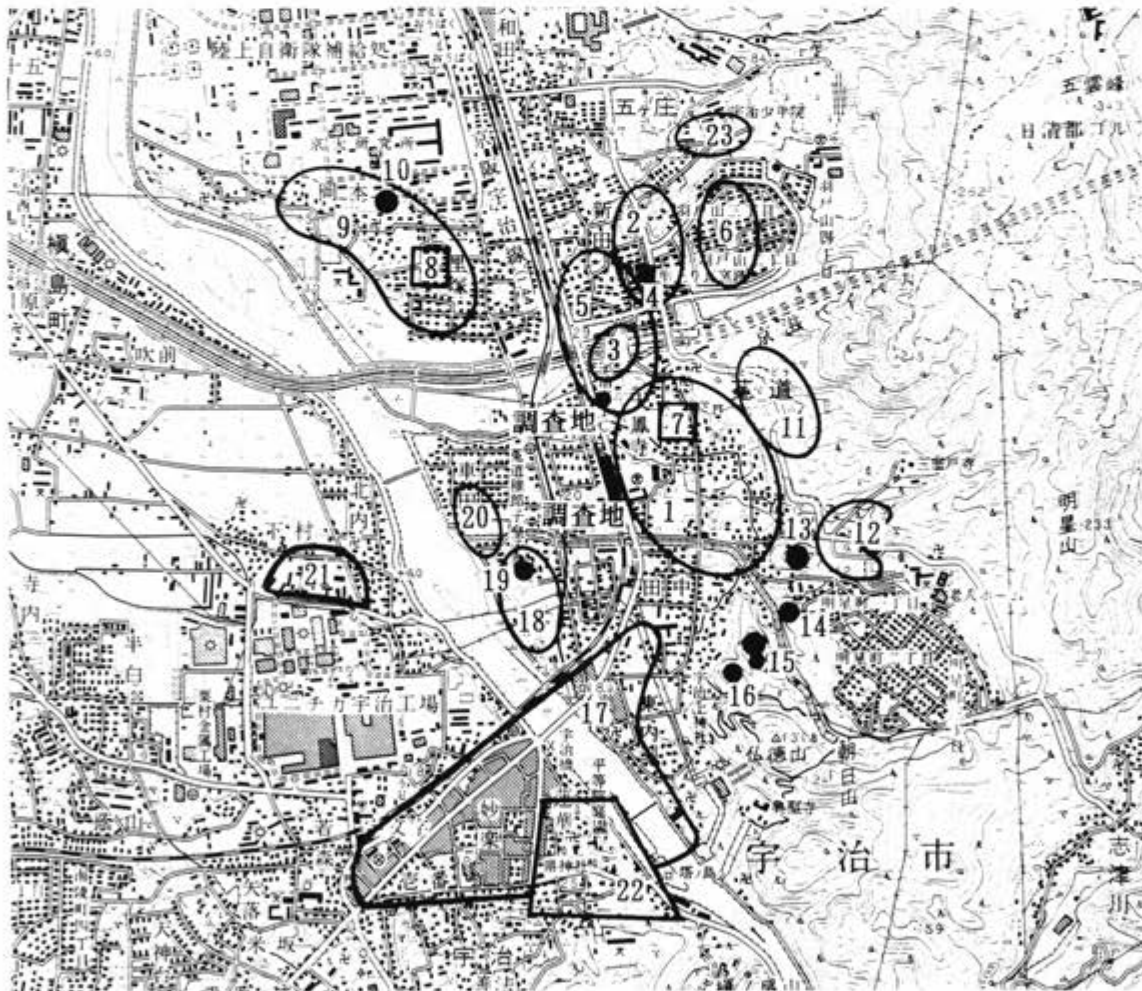
注4 林 亨『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第3集 大山崎町教育委員会 1982

注5 (財)向日市埋蔵文化財センターの中塚 良氏から、SX107の礫層は、ラミナ状の堆積を伴っており、土石流のタイプの層位を示すことや、第3層(地山)は、高位段丘層に相当する可能性が高いとのご教示を得た。

4. 菟道遺跡・西牟上り遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道京都宇治線の街路改良事業に伴って、京都府宇治土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、府道沿いの南北2か所で、相互の距離は約250mある。北の調査地は、宇治市菟道森本地内の府道の東側で、現況は畑地・荒地となっており、西牟上り遺跡の範囲に含まれる。南の調査地は、宇治市菟道出口地内の府道の西側で、現況は宅地跡で菟道遺跡の隣接地にあたる。両者の扱いを協議した結果、工事に先だって遺跡・遺物の埋没状況を把握するための試掘調査を行うことになった。



第49図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|----------|--------------|-----------|------------|------------|
| 1. 菟道遺跡 | 2. 牟上り遺跡 | 3. 牟上り古墳群 | 4. 牟上り窯跡 | 5. 西牟上り遺跡 |
| 6. 羽戸山遺跡 | 7. 大鳳寺跡 | 8. 岡本廃寺 | 9. 岡本遺跡 | 10. 瓦塚古墳 |
| 11. 東中遺跡 | 12. 三室戸寺子院群跡 | 13. 池山古墳 | 14. 妙見山古墳 | 15. 二子山古墳 |
| 16. 山本古墳 | 17. 宇治市街遺跡 | 18. 乙方遺跡 | 19. 菟道稚郎子墓 | 20. 三室津推定地 |
| 21. 槇島城跡 | 22. 平等院旧境内 | 23. 一番割遺跡 | | |

調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主査調査員石尾政信が担当した。現地調査は、菟道遺跡を平成8年11月25日に開始し、12月20日に終了した。西牟上り遺跡を、平成8年12月13日に開始し、平成9年2月13日に終了した。調査面積は、菟道遺跡が約360m²(うち試掘130m²)、西牟上り遺跡が約125m²、合計で約485m²である。なお、調査に係る経費は全額京都府宇治土木事務所が負担した。

調査にあたって、京都府宇治土木事務所、宇治市教育委員会をはじめ、関係諸機関の協力を得た。現地調査・整理作業には、学生諸氏などの参加があった^(註1)。記して感謝の意を表したい。

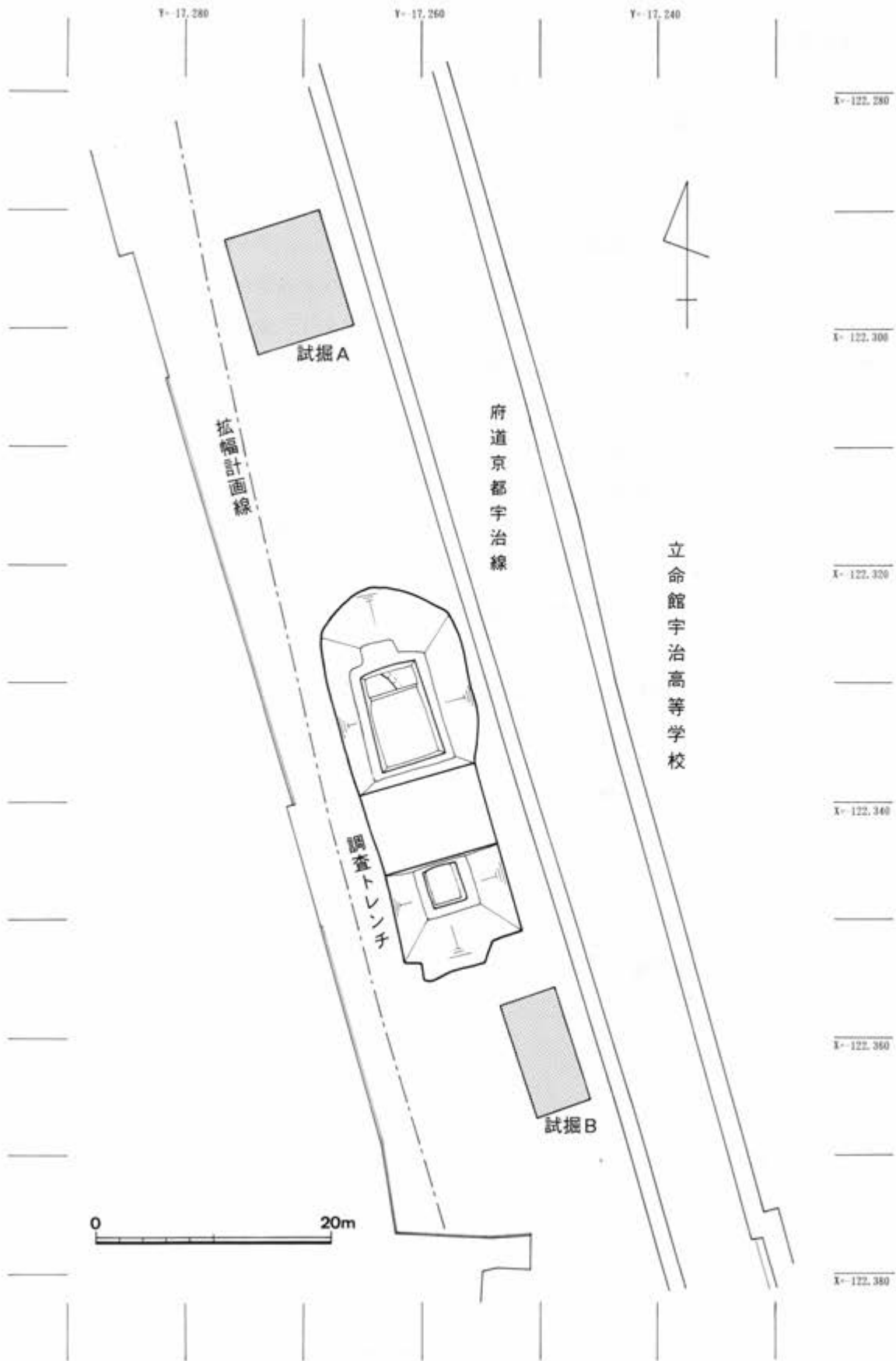
図面作成には、水準測量に宇治市公共水準点18を使用し、基準点測量に宇治土木事務所が設置した基準点を使用した。遺構図・地形測量図には国土座標を表示した。

2. 位置と環境

菟道遺跡は、『宇治市における史跡・名勝・埋蔵文化財等所在概要図』^(註2)によれば、府道京都宇治線の東側で宇治川右岸の段丘～段丘斜面に営まれた、南北約700m・東西約500m範囲に広がる遺跡と推定されている。宇治市教育委員会による近年の発掘調査で、古墳時代の村(竪穴式住居跡群)や古墳群、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物跡群・区画溝などが検出されている^(註3)。また、石や土器・瓦を敷いて地盤改良した道路遺構が北にのび、大鳳寺に向かう道も発見されている。そして、飛鳥～平安時代の遺物として、官人(役人)が身に付ける帯金具や、風鐸の舌部分・隆平永寶、大鳳寺で使用された瓦と同じ瓦などが出土している。飛鳥～平安時代の遺構・遺物から、古代の役所(宇治郡衙)の存在が推定されている。

西牟上り遺跡は、かつて弥生時代の石庖丁が採集されたと伝えられる遺跡である。今回の調査対象地の北方で当調査研究センターが実施した、京滋バイパスに伴う発掘調査で古墳3基(牟上り古墳群)のほか、柱穴群・土坑群・溝などが検出された^(註4)。前述した『埋蔵文化財等所在概要図』によれば、西牟上り遺跡は宇治川右岸の段丘～段丘斜面に営まれた、南北約550m・東西約300mの範囲に広がる遺跡と推定されている。遺跡のほぼ中央を天井川となった大鳳寺川が、東から西に急激に下る。遺跡の範囲内には牟上り古墳群も入る。遺跡の南部は菟道遺跡と重複している。また、菟道遺跡との関連が強いが、今回の調査地(北)の南東では、宇治市教育委員会が実施した近年の発掘調査で、古墳時代の竪穴式住居跡群・埴輪窯、白鳳～奈良時代の掘立柱建物跡群が検出されている^(註5)。

菟道遺跡・西牟上り遺跡の周辺には、北に牟上り遺跡・牟上り古墳・牟上り瓦窯跡・羽戸山遺跡など、南に池山古墳・二子山古墳・山本瓦窯跡・宇治市街遺跡などがあり、宇治市内でも重要な遺跡が密集する地域である。羽戸山遺跡は、弥生時代の高地性集落である。牟上り窯跡は、豊浦寺に供給された瓦を焼いた飛鳥時代の窯跡で、4基の登り窯・作業場跡などが見つかっている。現在は、住宅地の中に公園として登り窯跡が地下に保存され、国の史跡に指定されている^(註6)。



第50図 菟道遺跡調査地平面図

3. 調査の概要

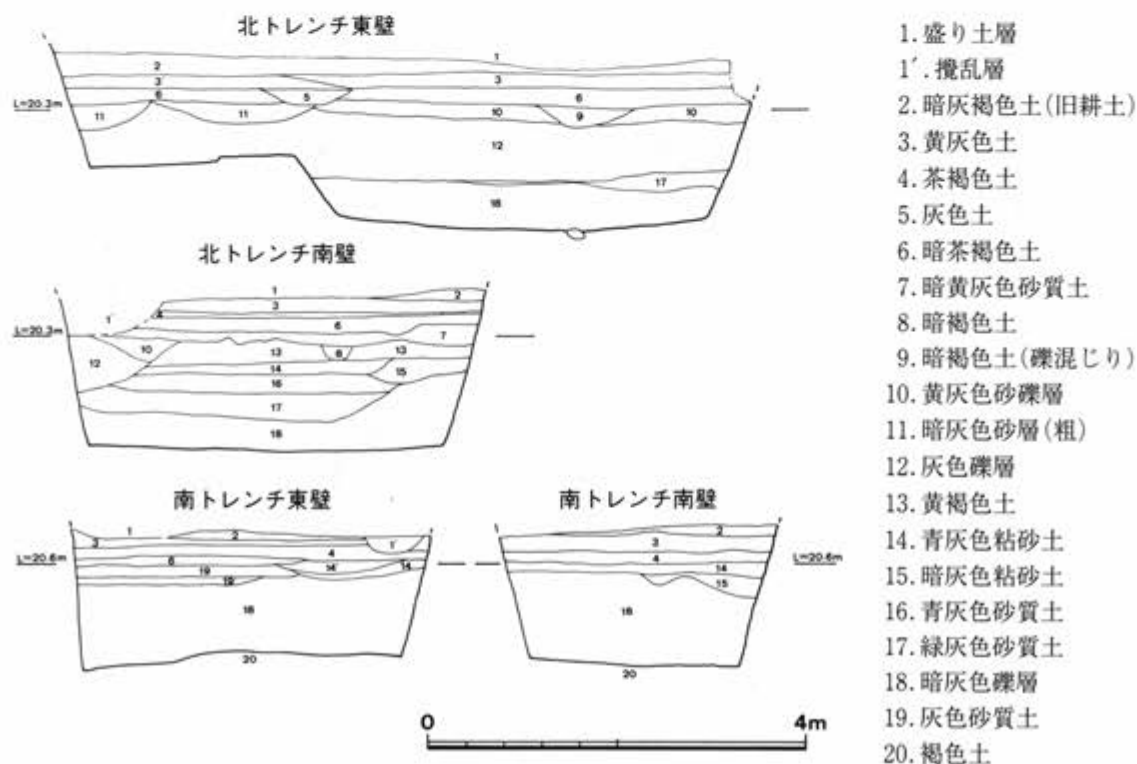
①菟道遺跡(北調査地) 第50・51図

調査対象地内で、南北2か所を重機で試掘を行った。北を試掘A、南を試掘Bと呼称する。2か所とも約3mの造成盛り土があり、湧水もみられた。湧水により掘削壁面の崩壊が著しく、下層の掘削は危険と判断し、現況写真を撮影した後、ただちに埋め戻した。その後、調査地中央部で盛り土層にゆるく傾斜をつけ、土止めを設置し、下層の掘削を実施した。調査トレンチ中央には、宅地に伴うコンクリート基礎が厚く残存していたので、トレンチを南北に分けた。

北トレンチは、盛り土の下に旧耕作土・床土があり、その下に黄灰色土・茶褐色土・暗茶褐色土・暗黄灰色砂質土が堆積する。南壁では、暗黄灰色砂質土の下に黄褐色土があり、黄褐色土に暗褐色土の柱穴と推定できるものが1か所確認できた。その下は、粘質土・粘砂土と暗灰色礫が堆積している。南壁の東端では、黄褐色土・粘質土・粘砂土を削り込んで黄灰色砂礫・灰色礫が堆積し、この礫層は東壁に連続する。東壁下層は、黄灰色砂礫・灰色礫の下が暗灰色礫で、河川堆積と推定できる。砂礫・礫層から少量の遺物が出土した。東壁中層では、暗茶褐色土に灰色土の溝状窪み、黄灰色砂礫に暗褐色の溝状窪みが確認できたが、遺物は含まない。

南トレンチでは、盛り土の下に旧耕作土・床土、その下に黄灰色土・茶褐色土や粘砂土・砂質土があり、これより下層は、暗灰色礫層が厚く堆積する。礫層は、北トレンチ同様の河川堆積と推定できる。

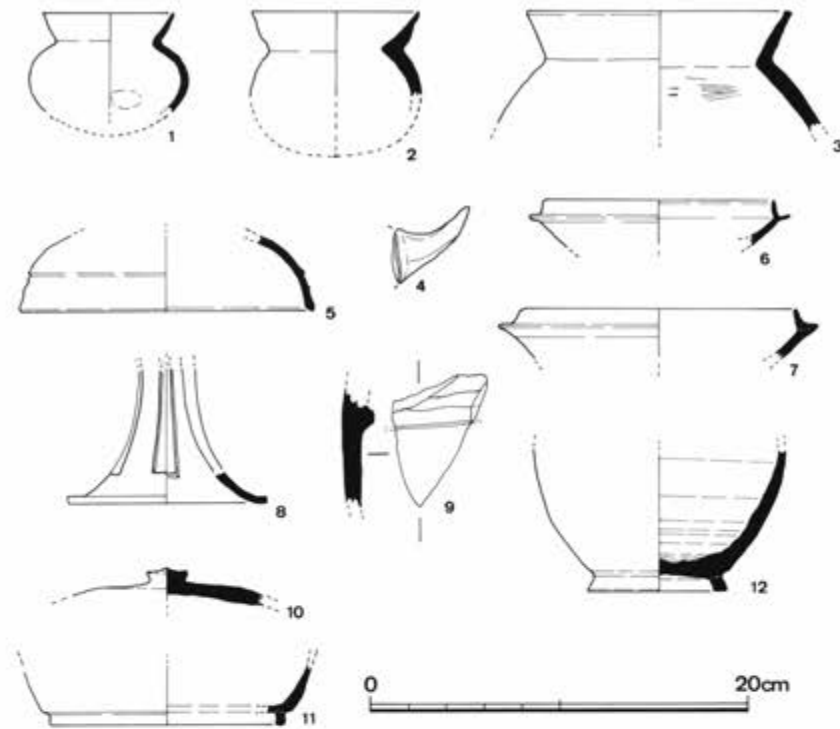
暗灰色砂層・粘砂土・砂質土から古墳時代の土器が、暗茶褐色土・暗灰色礫層から古墳時代～奈良・平安時代の遺物が出土した。いずれも、流れ込みによる2次堆積遺物と推定される。



第51図 菟道遺跡土層断面図

②西牟上り遺跡(南
調査地) 第53・54図

府道京都宇治線東側の調査対象地内で2か所を試掘したところ、表土から約0.8m下の暗灰褐色土で土器細片が採集できた。その後試掘で土器が出土した深さまで重機で掘削した。そこでは、1か所で土器が出土したが、周辺には遺物もほとんどなく、遺構と推定できるものは検出されなかった。掘り下げると



第52図 菟道遺跡出土遺物実測図

暗茶褐色土・灰褐色土、砂礫と砂礫混入土が互層となり、遺物も出土しないため、安定した地盤(暗褐色土)まで重機で掘削した。下層で1.2m×1.3mの方形土坑1か所を検出したが、出土遺物がなく時期は不明である。この土坑底面が湧水層まで達しているため、井戸の可能性はある。

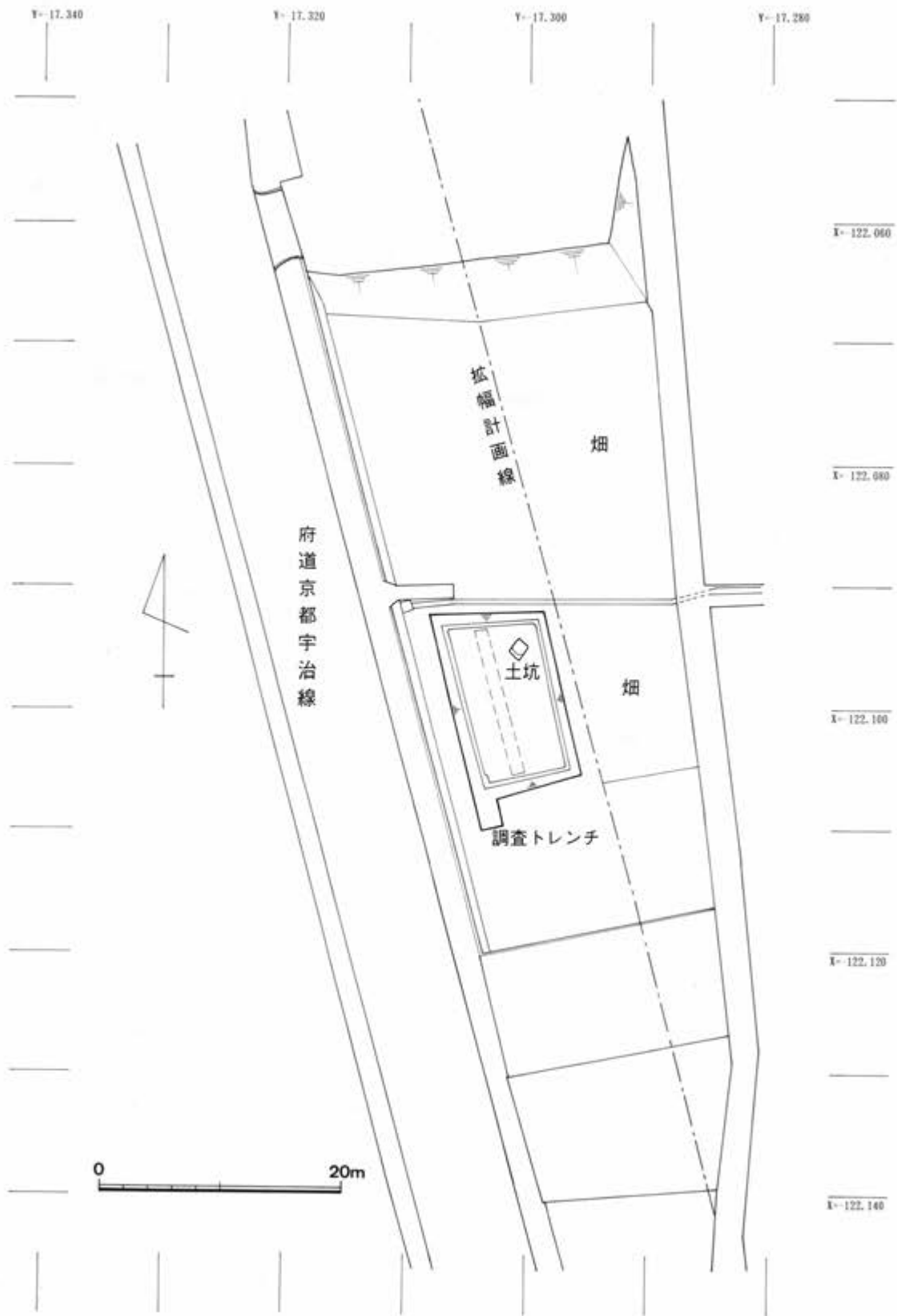
北壁中・下層では、茶褐色砂質土・黒褐色土(砂礫混入)が堆積し、その下に砂質土や砂礫・砂層があり、それらを挟み込むように礫層が混入する。東壁でも同様な堆積状況がみられることから、河川堆積による沖積地と判断した。

4. 出土遺物

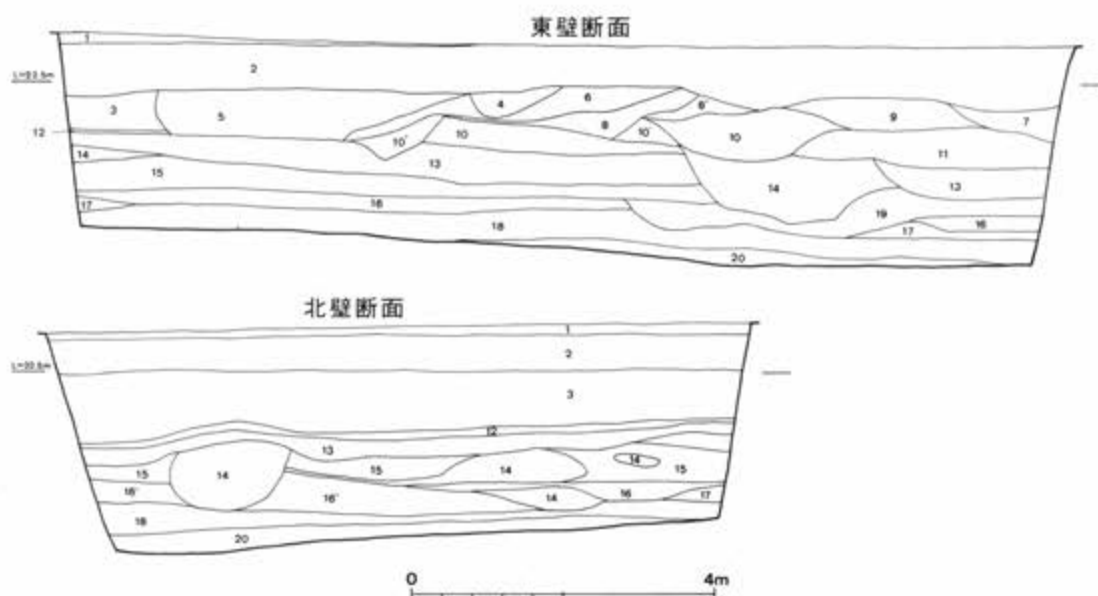
①菟道遺跡出土遺物(第52図)

北トレンチ暗茶褐色土から古墳時代後期の須恵器杯身(6)・同須恵器高杯脚部(8)や奈良時代須恵器蓋(10)・同須恵器杯B(11)が出土した。北トレンチ暗灰色砂層から古墳時代中期の土師器小型丸底土器(1・2)が、砂質土から古墳時代中期の土師器甕(3)や後期の土師器把手(4)・後期の須恵器杯身(7)が出土した。南トレンチ礫層から古墳時代後期の須恵器杯蓋(5)・埴輪片(9)、奈良～平安時代前期の須恵器壺(12)や瓦片・流木などが出土した。

上層の暗茶褐色土に古墳時代の須恵器や奈良時代の須恵器が混在し、中層の暗灰色砂層・砂質土に古墳時代の土師器・須恵器、下層の礫層に古墳時代の須恵器や奈良～平安時代前期の須恵器が含まれ、土層観察による堆積順序と出土遺物の時期に逆転がみられる。このため、出土遺物は2次堆積と推定される。また、出土遺物のうち、土師器類や瓦片は磨滅しているが、須恵器類は磨滅が少ないので、近くから流されてきたと推定できる。



第53図 西牟上り遺跡調査地平面図

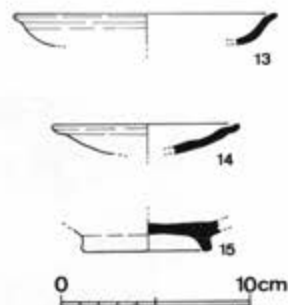


第54図 西牟上り遺跡土層断面図

- | | | | |
|---------------|----------------|------------------|-------------|
| 1. 暗茶褐色土(耕土) | 2. 淡褐色土 | 3. 暗灰褐色土 | 4. 暗茶褐色土 |
| 5. 灰褐色土 | 6. 暗灰褐色砂礫土 | 7. 暗灰褐色礫層 | 8. 茶褐色砂礫層 |
| 9. 暗茶褐色砂礫混入土 | 10. 茶褐色礫層 | 11. 茶褐色砂礫混入土 | 12. 茶褐色砂質土 |
| 13. 黒褐色土(砂礫含) | 14. 暗褐色礫層(大礫多) | 15. 暗茶褐色砂礫層 | 16. 暗灰褐色砂質土 |
| 17. 褐色礫層 | 18. 褐色砂層(粗) | 19. 暗茶褐色砂質土(砂礫混) | 20. 暗褐色土 |

②西牟上り遺跡出土遺物(第55図)

出土遺物は、図化できたものが少なく、いずれも暗茶褐色土などの包含層から出土した。出土遺物には、平安時代の土師器皿(13・14)・灰釉陶器底部(15)がある。これらは12世紀の所産であろう。他に、古墳時代の土師器体部片や近世の土面子などがある。



第55図 西牟上り遺跡出土遺物実測図

5. ま と め

①菟道遺跡の調査で、古墳時代～奈良・平安時代の遺物を包含する川跡を検出した。川跡と判断した礫層堆積の先後関係や、粘質土・砂質土を削って流入する砂礫層の方向を図面上で復原すると、流路は東西方向から北東方向に移動したようすがうかがえる。調査地の南方に東から西に流れる三室戸川、北方に東南から北北西に流れる戦川がある。検出した川跡は、流れの方位からみて、戦川の流路跡の可能性が高い。

川跡の堆積層からは、平安時代前期までの土器が出土し、それ以降の遺物がないので、流路の移動はその時期までに終了したと推定される。安定した地盤となるのは、流路の移動が終了した時期より遅れると推定されるので、調査地は段丘～丘陵斜面を中心とする菟道遺跡には含まれないと判断できる。また、床土などにも遺物をほとんど含まないため、水田などの土地利用が開始された時期はわからない。盛り土がない状況の調査地は、西側の低位段丘とほぼ同じ標高である。

②西牟上り遺跡の調査では、土坑1か所の検出と、上層で少量の遺物が出土したにとどまった。中・下層には、砂礫混入土や砂質土・砂礫層が厚く堆積するのが確認できた。これらから、この地は調査地北方を東から西へ流れる川、すなわち現在は天井川となっている大鳳寺川が形成した沖積地で、水田には適さない場所であることが判明した。狭い調査範囲の資料から判断するのは早急であるが、出土遺物は少なく、顕著な遺構も見られないので、周辺とは異なり人が生活した形跡は薄いといえる。

(石尾政信)

注1 調査参加者

杉本厚典・川嶋聡子・坪内達雄・小滝初代・丸谷はま子・山中道代

注2 宇治市教育委員会発行

注3 現地説明会資料「菟道遺跡発掘調査の概要」 宇治市教育委員会 1995

注4 小池 寛・荒川 史「京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

荒川 史「京滋バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

松井忠春・小池 寛・荒川 史他「京都府遺跡調査報告書(京滋バイパス関係遺跡)」第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987

注5 現地説明会資料「西牟上り遺跡発掘調査概要」 宇治市教育委員会 1995年2月

注6 杉本 宏・荒川 史・浜中邦弘・吹田直子「発掘ものがたり宇治」 宇治市歴史資料館 1996



西牟上り遺跡作業風景

5. 芝山遺跡発掘調査概要

1. はじめに

芝山遺跡は、城陽市の東部丘陵先端に立地し、昭和52年、平成5・6年の城陽市教育委員会による調査^(註1)や、当調査研究センターが昭和60・61年に実施した府道山城総合運動公園城陽線の建設に伴う事前調査^(註2)で、主に古墳時代～奈良時代にかけての遺物・遺構が多数確認されている。

今回の調査は、木津川右岸スタジアム公園整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、城陽市寺田築留地内に所在する。平成8年度の調査は、平成8年12月17日～平成9年1月27日までの間に実施した。調査面積は、約180㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主査調査員古瀬誠三が担当し、本概報を古瀬誠三が執筆した。調査及び概報の作成にあたっては、調査補助員、整理員の協力をいただいた^(註3)。また、調査の実施に際しては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会などの関係諸機関から多大な協力をいただいた。記して感謝したい。

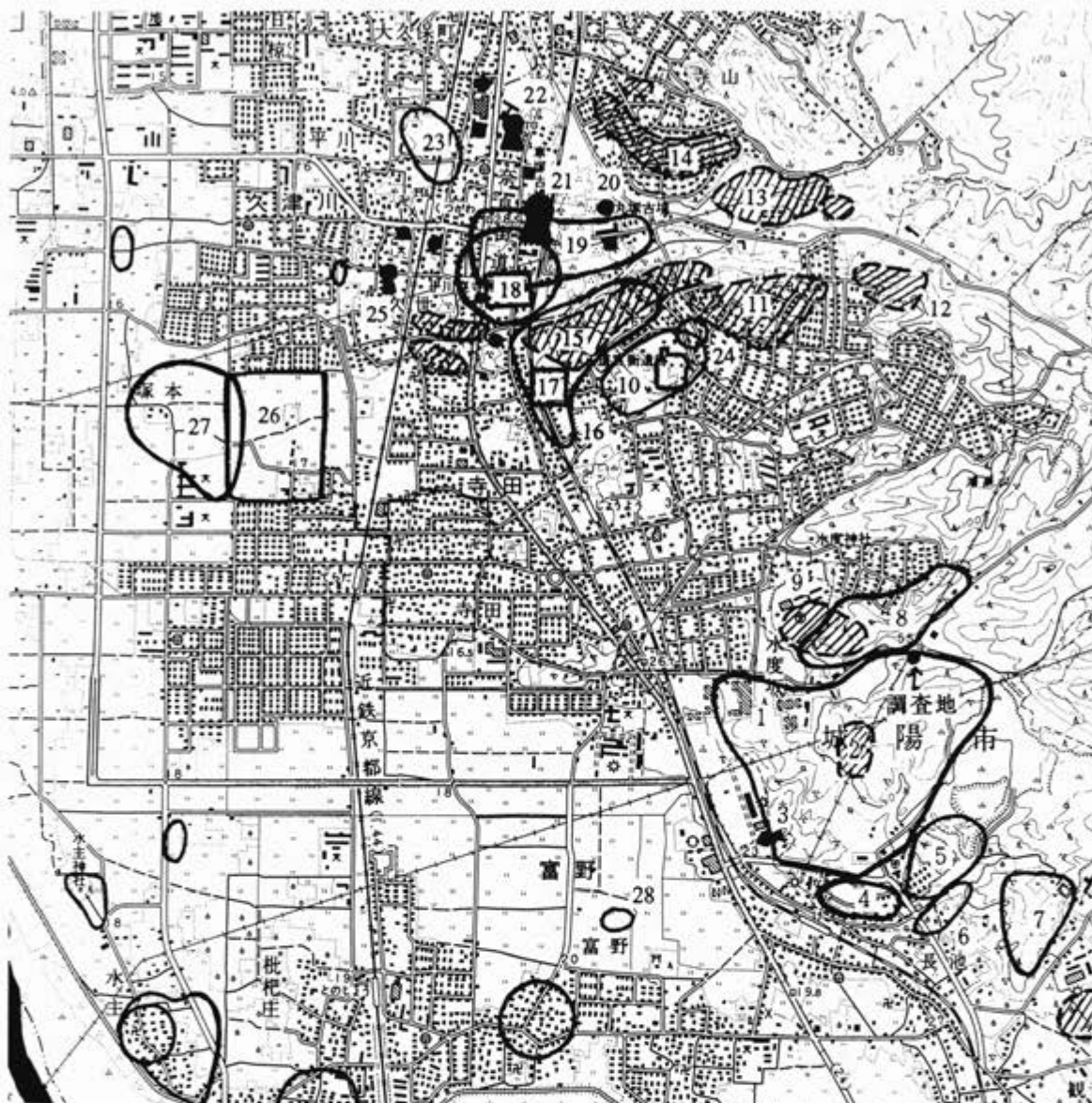
なお、本調査に係る経費は、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境(第56図)

芝山遺跡は、京都府城陽市寺田及び富野地内に所在し、宇治丘陵から西方にのびる低丘陵の先端に立地し、大阪層群が基層となっている。遺跡は、北に宮ノ平遺跡、南で森山遺跡に隣接する。遺跡地内には、梅の子塚古墳群などが所在している。

森山遺跡は、縄文時代後期から晩期の集落遺跡で、6基の竪穴式住居跡などが見つかっている。弥生時代の末には、芝ヶ原丘陵上に芝ヶ原墳丘墓(芝ヶ原古墳)が築造される。芝山遺跡内の梅の子塚古墳群や西山古墳群・尼塚古墳群・上大谷古墳群などのいわゆる、久津川古墳群が4世紀に形成され始める。5世紀に入ると、下大谷古墳群・平川古墳群・芝ヶ原古墳群・宮ノ平古墳群などが築造される。また、これらの丘陵上には、5世紀から6世紀初めにかけて、小型方形墳が群集して築造され、芝山遺跡内でも確認されている。6世紀中頃には、芝山丘陵の端部に長池古墳が築かれる。5世紀に最盛期を迎えた久津川古墳群の造墓活動は、6世紀には急速に衰え、その中心を城陽市南方に位置する青山古墳群などに移行する。

集落については、芝山・森山遺跡で4世紀、室木遺跡で5世紀のものが確認されている。6世紀末には、芝ヶ原遺跡・正道遺跡・芝山遺跡・森山遺跡などの集落が丘陵上に点々と営まれる。7世紀後半になると、正道遺跡に掘立柱建物跡群が出現し、8世紀には久世郡衙と推定される大型掘立柱建物跡群となる。芝山遺跡でも、8世紀の掘立柱建物跡群が見つかっている。さらに、正道廃寺・久世廃寺・平川廃寺・広野廃寺が造営され、南山城の中心的位置を持つようになる。



第56図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 芝山遺跡 | 2. 梅の子塚古墳群 | 3. 長池古墳 | 4. 森山遺跡 | 5. 鷺坂山遺跡 |
| 6. 河原遺跡 | 7. 柏平遺跡 | 8. 宮ノ平遺跡 | 9. 宮ノ平古墳群 | 10. 正道遺跡 |
| 11. 尼塚古墳群 | 12. 大谷古墳群 | 13. 上大谷古墳群 | 14. 西山古墳群 | 15. 芝ヶ原古墳群 |
| 16. 芝ヶ原遺跡 | 17. 久世廃寺 | 18. 平川廃寺 | 19. 横道遺跡 | 20. 丸塚古墳 |
| 21. 久津川車塚古墳 | 22. 芭蕉塚古墳 | 23. 室木遺跡 | 24. 正道廃寺 | 25. 箱塚古墳 |
| 26. 塚本東遺跡 | 27. 塚本遺跡 | 28. 東田部遺跡 | | |

3. 調査経過(第57図)

平成8年度の調査は、平成8年12月17日から第1トレンチ(長さ25m・幅6m)を設定し、調査を開始した。重機によって表土を掘削した後、人力による精査を行った。その結果、第1トレンチの北半部で谷状の落ちが検出された。この落ちは、昭和60年度調査で確認された大河原川(築留川)の旧流路へ続くと考えられたため、1月8日から第1トレンチ北側に人力で第2トレンチ(長さ5m・幅2m)の掘削を開始し、谷の広がりの確認に努めた。さらに、谷の東への延長を確認するため、1月13日に第1トレンチを南東方向へ幅3m・長さ6mにわたって拡張し、精査を

行った。この後、それぞれのトレンチの土層断面及び検出遺構の記録作成を行い、1月27日の重機による埋め戻し作業をもって、すべての現地作業を終了した。

4. 調査成果(第58・59図)

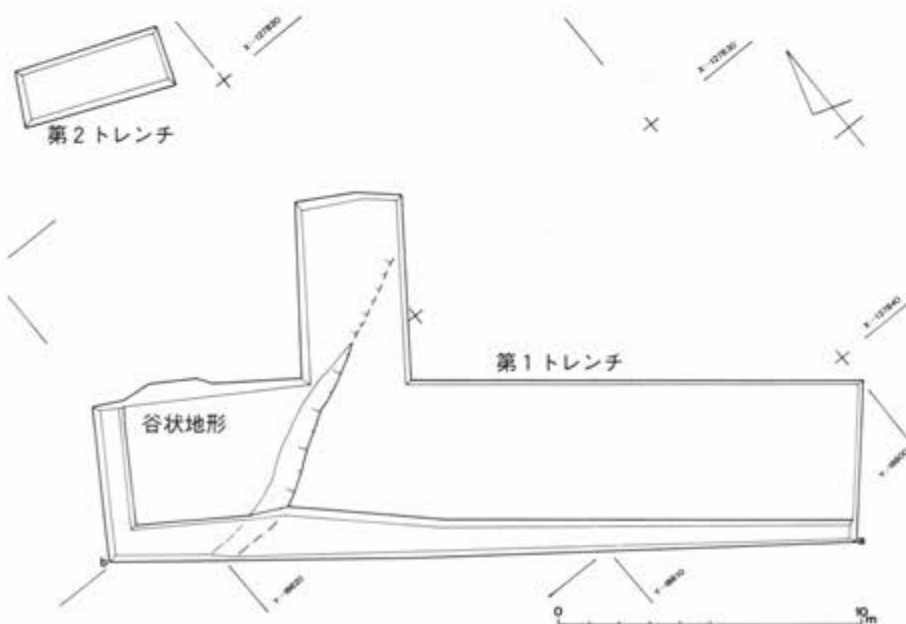
調査地は、昭和60・61年度に当センターが実施した調査地(D地区)の東に当たる。この調査では、大河原川(築留川)の旧河道が確認された。また、隣接する微高地から掘立柱建物跡と考えられる柱穴や溝・土坑などが検出されていることから、今回の調査でも、関連した遺構・遺物の検出が予想された。

(1) 第1トレンチ

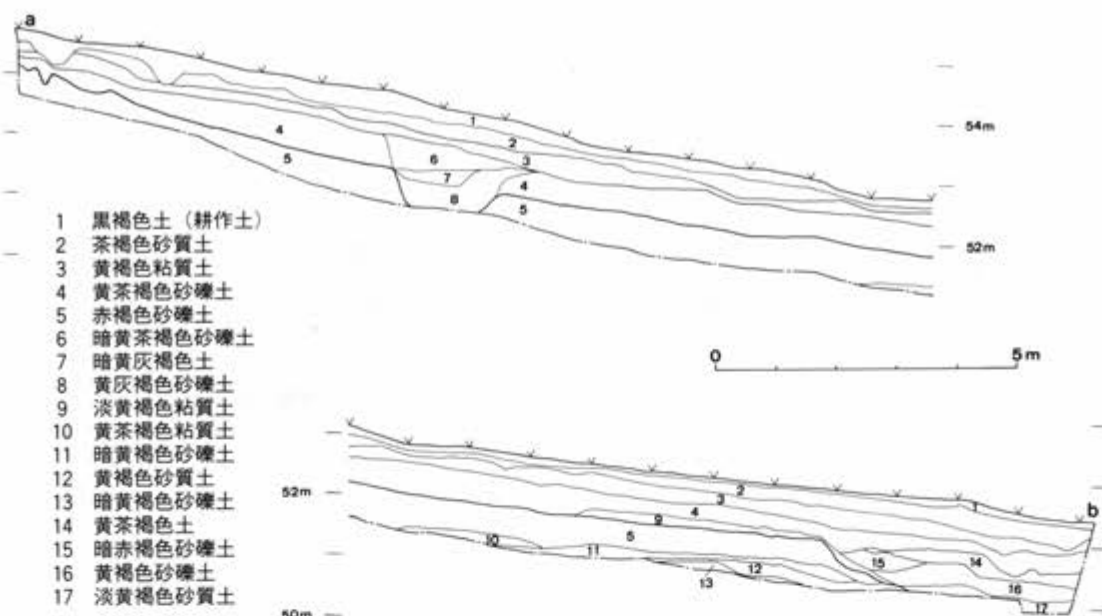
重機による掘削の結果、地表下約0.8~1mで、地山面と思われる赤褐色砂礫土の面を検出した。この面を精査したところ、トレンチ北半部で北に向かって落ち込む谷状地形が確認できた谷の肩部のラインは、ほぼ東西方向にのびている。ここで検出した谷状地形は、昭和60年度の調査で検出された旧河道のラインにほぼ一致していることから、旧河道によって形成された谷への落ち込みで



第57図 調査地位置図(網掛け部)



第58図 トレンチ平面図(図中a・bは、第59図に対応)



第59図 第1トレンチ南西壁断面図

あると考えられる。遺物は、土師器・須恵器片数点と近世の染め付け片1点が出土したのみである。他に顕著な遺構・遺物は、確認できなかった。

(2) 第2トレンチ

地表から約30~40cm掘削したところで西北西の方向に走る溝を検出した。この溝の時期は、はっきりした根拠をもてないが、18世紀と思われる陶磁器片が出土していることなどから、江戸時代末~近代のものと思われる。その下方は、約2.3mまで黄褐色の砂が厚く堆積しており、旧河道に向かう谷が短期間のうちに埋没した痕跡と考えられる。

4. ま と め

今回の調査の結果、この地点は大河原川(築留川)の旧河道に落ち込む谷部の南の肩に当たっていることが判明した。また、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、古墳時代と思われる土器片が、谷に落ち込む形でわずかに出土していることなどから、この地点は芝山遺跡の北端部に位置していることが明らかになった。

(古瀬誠三)

注1 近藤義行ほか「芝山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会) 1975、小泉裕司『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 城陽市教育委員会 1995

注2 小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

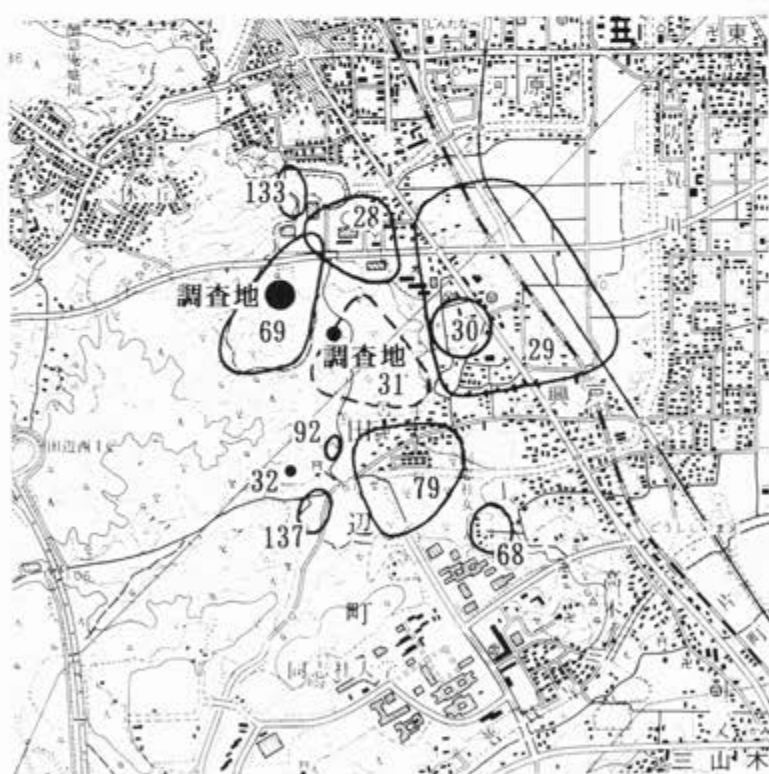
注3 主な調査参加者(敬称略): 辻井和子、渡辺 努

6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、府道八幡木津バイパス(通称山手幹線道路)の建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。昨年度に一部調査に着手したものの、調査期間や経費などの都合により一旦中断し、今年度に引き続き本調査を再開した。今年度の調査対象地は、周知の遺跡である田辺城跡と興戸古墳群(10号墳)とであったが、田辺城跡の下層から田辺奥ノ城古墳群と田辺遺跡が検出されたので、付表1に示すとおり、計4遺跡の調査を実施することとなった。

田辺城跡は、『田辺町遺跡分布調査概報』によれば、綴喜郡田辺町大字田辺小字奥ノ城と同丸山(一部)にまたがる、南西から北東方向に延びる丘陵上に位置する。南北約300m・東西40~140mの範囲に3か所の平坦地を造り曲輪を設けている。丘陵上からは田辺町の中心地から木津川沿いの南山城地域の北半部が見渡せる。かつて、その丘陵先端部にも曲輪と推定されるものが認められた。この曲輪推定地は、田辺町教育委員会によって調査され、上下2か所の曲輪で建物跡や土坑などが検出されている^(註1)。丘陵先端部分は、公共施設や国道307号線で現在は失われている。



第60図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|-------------|----------|----------|-------------|
| 28. 田辺遺跡 | 29. 興戸遺跡 | 30. 興戸廃寺 | 31. 興戸古墳群 |
| 32. 酒壺古墳 | 68. 興戸城跡 | 69. 田辺城跡 | 79. 興戸宮ノ前遺跡 |
| 92. 興戸宮ノ前窯跡 | | | |

今回の調査対象地は、3か所の曲輪のうち一番北に位置している。ここには南北約60m・東西約40mの平坦地と北東側の一段低い場所に約15m四方の平坦地がみられた。広い平坦地の南西部には、周囲より約1m高くなった土塁跡と推定される高まりが残存している。工事計画では、広い平坦地の東側の半分以上と一段低い平坦地全体を削土する予定である。

今年度は、昨年度の調査区を拡張し、石列が検出された東斜面、及び通路または堀切が予想される北方の尾根筋斜面地の調査を併せて実施し

付表1 調査遺跡一覧表

遺跡名称	所在地	調査面積 (㎡)
田辺城跡 田辺奥ノ城1・2号墳 田辺遺跡	京都府綴喜郡田辺町大字田辺小字奥ノ城	1,670
興戸古墳群	京都府綴喜郡田辺町大字田辺小字丸山	25

た。調査地の平坦部は標高82m前後、国道307号線との比高差は約30mある。

現地調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同主査調査員石尾政信が担当した。田辺城跡他は、平成8年5月1日に開始し、8月29日をもって終了した。なお、後述する石垣(石壁)や石段を検出し、後日、その石垣などの移転(将来は移築展示する計画)を田辺町教育委員会が行ったときに立会調査を併せて行い、その際に新たな発見もあった。調査面積は、田辺城跡が約1,670㎡、7月5日から12日に調査した興戸古墳群は約25㎡である。調査に係る経費は、京都府が全額負担した。

調査にあたって、京都府田辺土木事務所、田辺町都市整備課、田辺町教育委員会をはじめ、関係諸機関の協力を得た。また、北垣聡一郎(兵庫県立兵庫工業高等学校)、中井均(米原町教育委員会)、上原真人(京都大学)、百瀬正恒・吉村正親・堀内明博((財)京都市埋蔵文化財研究所)、鈴木重治(同志社大学)、福島克彦(大山崎町歴史資料館)などの各氏及び当センター理事から多くの御教示をいただいた。現地調査・遺物整理などには学生諸氏の参加があった^(注3)。感謝の意を表したい。本報告は、調査担当者及びセンター調査員の協力のもと、石尾政信と杉本厚典が執筆した。写真は、遺構の一部を調査第1課調査員田中 彰が撮影し、その他を石尾が撮影した。

(石尾政信)

2. 調査概要

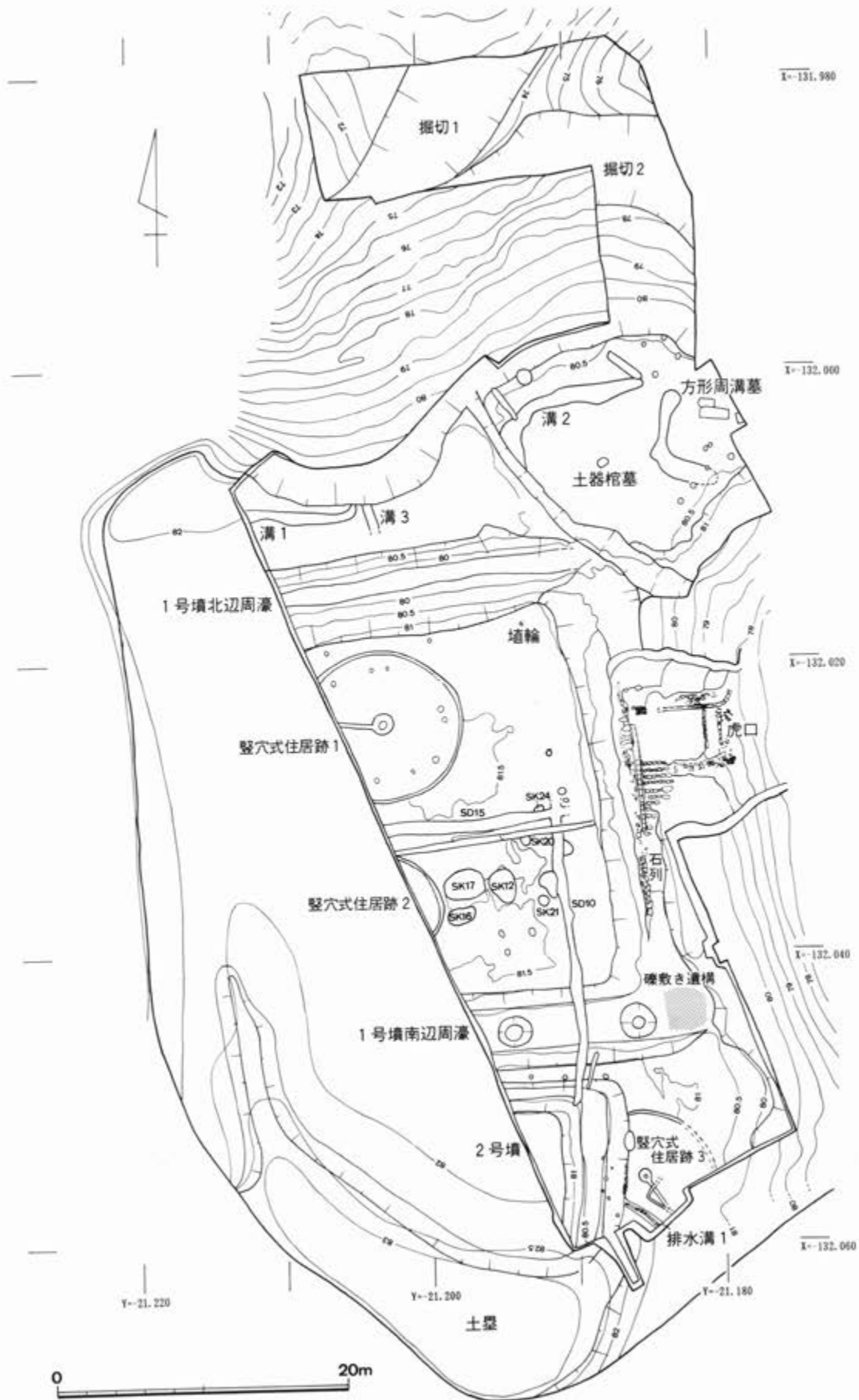
興戸古墳群の調査では、自然地形と判明した。田辺城跡の調査は、表土を重機掘削した後、人力で掘削した。広い平坦地では、表土直下から平坦部の区画溝と推定される東西溝3条と、北部で耕作にかかわる南北に平行する溝群を検出した。その下層では、中央部で東西溝とこれに切られた南北溝や土坑・柱穴が、北部で遺物包含層の掘削中に原位置をとどめたと推定される埴輪が見つかり、北端では溝跡を検出した。また、古墳の周濠や円形住居跡も検出した。北東部の一段低い平坦地で溝・柱穴・方形周溝墓などを検出した。石列の北方の斜面では、石段・石垣(石壁)を検出した。北斜面では堀切と推定される落ち込みから平瓦片などが出土したので、重機による部分掘削を含め、掘り下げを行った。以下、時代の古い順に記述する。

(石尾政信)

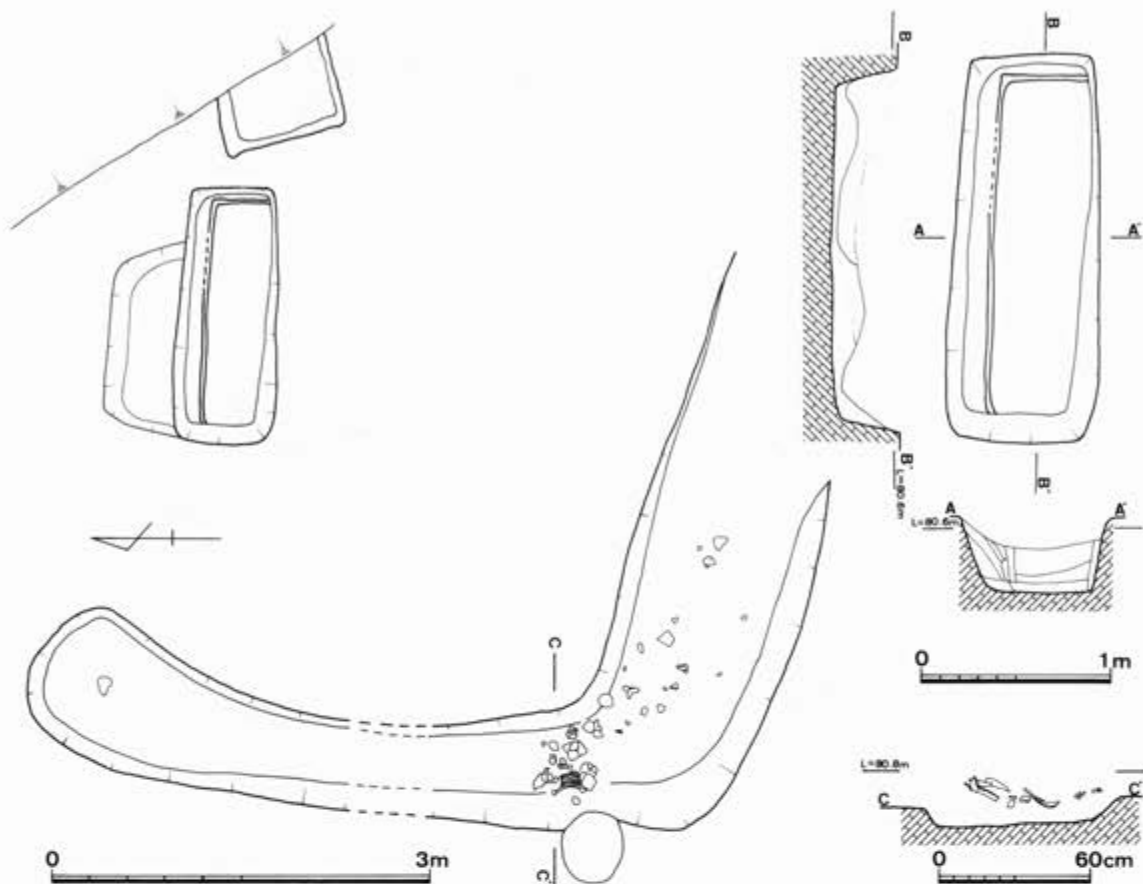
3. 検出遺構

①弥生時代の遺構

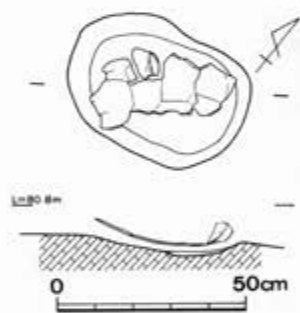
方形周溝墓 調査区北東部の東端で検出した。第一主体部は2m×0.8mの規模で、土色の違いから判断すると、箱式木棺と考えられる。周溝(深さ約10cm)の埋土は黄褐色土で、南辺部に炭



第61図 遺構平面図及び地形測量図



第62図 方形周溝墓実測図



第63図 土器棺墓実測図

化物が多く分布していた。第一主体部の西端及び周溝から弥生時代中期の土器が出土した。第一主体部の東方で主体部の可能性がある落ち込みを検出した。

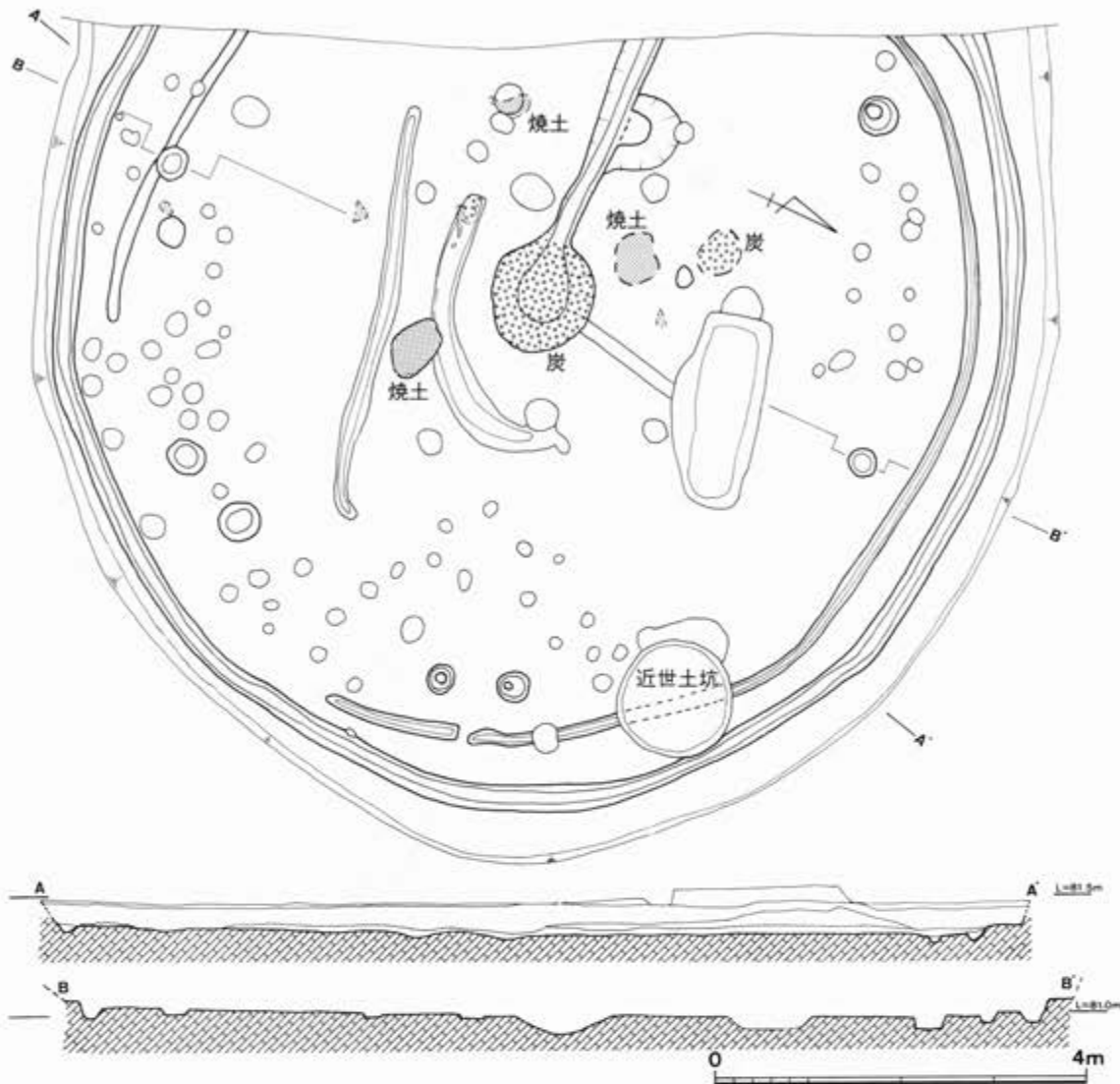
土器棺墓 方形周溝墓の西側で検出した径約50cmの範囲に弥生時代中期の土器が出土し、墓と推定した。頭位は西から35°南へ向いている。

竪穴式住居跡 1 北部で検出した直径約10.4mを測る大型の円形竪穴式住居跡である。中央に炭などで埋まった土坑があり、ここから西に向かって排水溝がのびている。中央土坑の周辺には、数か所の焼土面がある。周壁溝の内側に同様な溝がめぐり、住居の拡張があったことがわかる。弥生時代中期の土器が出土した。

竪穴式住居跡 2 住居跡 1 の南で検出した円形竪穴式住居跡の一部である。周壁溝がめぐり、直径約 8 m と推測できる。出土遺物はなかった。

竪穴式住居跡 3 南部で周壁溝の一部を検出した円形竪穴式住居跡である。直径10m前後と推定される。ここでも中央土坑があり、排水溝が南東にのびている。

また、竪穴式住居跡 3 の排水溝を切る直角に折れる溝(周壁溝)が検出されたので方形竪穴式住居跡の存在が推定される。これら以外に、調査区中央部で弥生土器が出土する小土坑 S K 20・21 なども検出した。



第64図 竪穴式住居跡1実測図

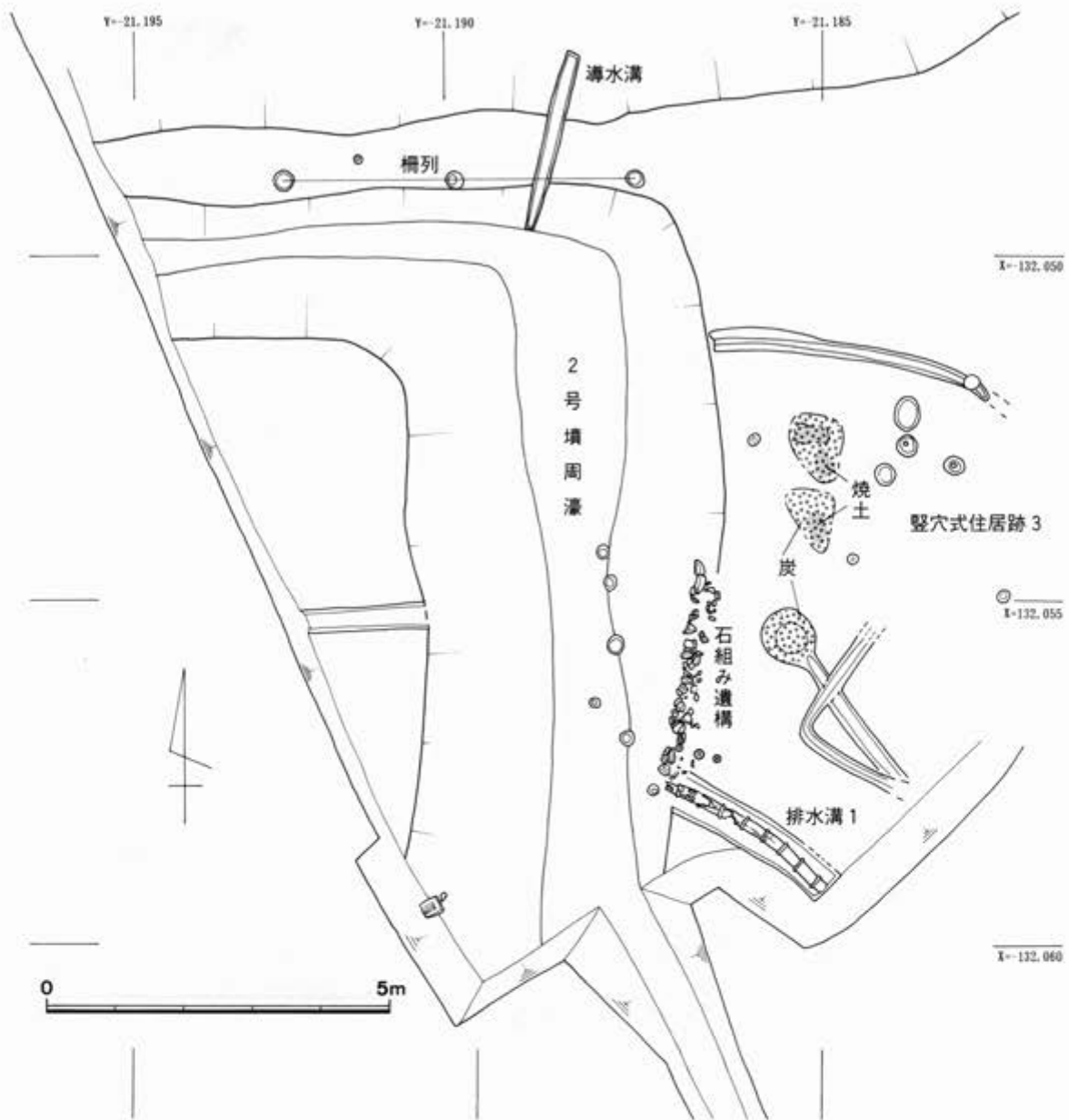
②古墳時代の遺構

田辺奥ノ城1号墳 住居跡1の北方で幅約5m・深さ約1.5m前後の周濠を東西約20mにわたって検出し、この周濠南端から約25m南で幅約5m・深さ約1.2mの周濠を東西約15mに渡って検出した。これを周濠北辺と南辺とすれば、一辺36m前後の方墳と推定される。東辺は中世の造作で明瞭でない。これを田辺奥ノ城1号墳と仮称する。南周濠の底面で直径2mの土坑を検出した。埋土の状況からすれば当初から存在した可能性が高い。主体部は削平されたようすで、中世には南周濠が完全に埋まってないことがわかった。周濠から多量の埴輪や須恵器などが出土した。

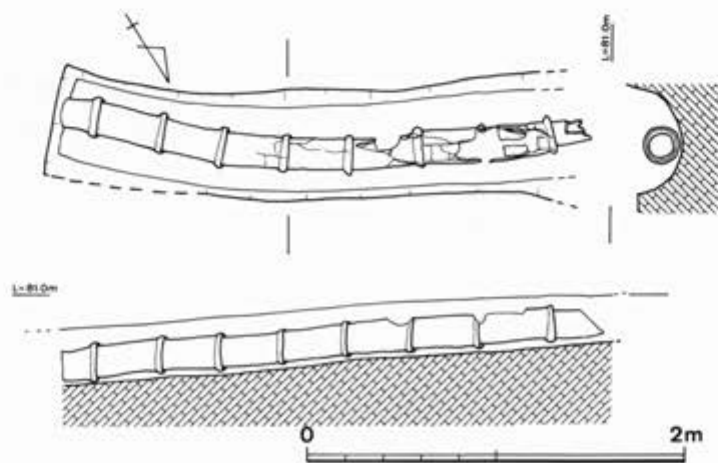
田辺奥ノ城2号墳 1号墳に接して造られた方墳で、北辺及び東辺周濠を検出した。北辺周濠は、1号墳に規制され幅約2mと狭く、東辺は幅約4.5m・深さ約80cmを測る。東辺周濠から多くの埴輪(形象埴輪を含む)が出土した。周濠は、中世には1号墳南の周濠と同様、完全に埋まってないことが判明した。

③中世の遺構

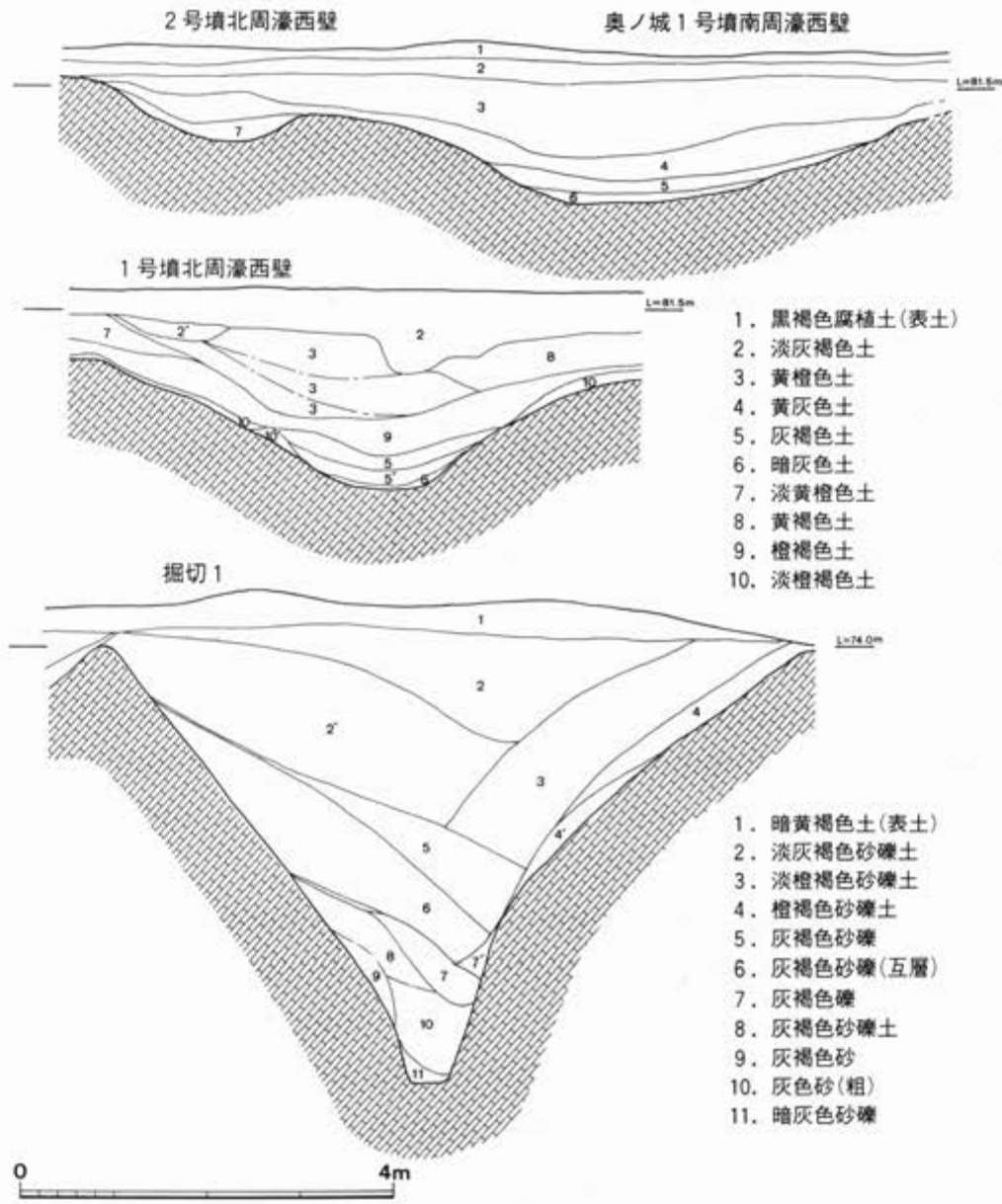
堀切1 北拡張部で検出した。直交して掘削してないため上部幅は明らかでないが、深さ約



第65図 2号墳周濠及び排水施設平面図



第66図 排水溝1実測図



1. 黒褐色腐植土(表土)
2. 淡灰褐色土
3. 黄橙色土
4. 黄灰色土
5. 灰褐色土
6. 暗灰色土
7. 淡黄橙色土
8. 黄褐色土
9. 橙褐色土
10. 淡橙褐色土

1. 暗黄褐色土(表土)
2. 淡灰褐色砂礫土
3. 淡橙褐色砂礫土
4. 橙褐色砂礫土
5. 灰褐色砂礫
6. 灰褐色砂礫(互層)
7. 灰褐色礫
8. 灰褐色砂礫土
9. 灰褐色砂
10. 灰色砂(粗)
11. 暗灰色砂礫

4.5m・底部幅0.5m以下で、いわゆる薬研堀の形状である。底部付近で土師器細片、上層で平瓦片が出土したが、時期がわかるものではない。掘切1は、尾根筋を切って曲がり、地形から北西にのびていることが推定できる。

掘切2 掘切1の東で検出したが、排土処理の都合上、一部分の掘削にとどまった。西方で掘切1に接続すると見られる。

溝1 北端で検出した幅約80cm・深さ約10cmの東西方向の素掘り溝で、東端が北に曲がる。溝内に拳大の礫が敷かれたような状況で検出した。土師器細片が出土した。建物に伴う雨落ち溝と考えられるが、対応する建物跡は明らかでない。

溝2 北東部で検出した幅約1m・深さ約0.2mの東西方向の素掘り溝で、西端が南に曲がる。溝内に径20cm前後の石や礫が落ち込んでいた。西方では土師器皿や土師器羽釜・平瓦片が出土した。建物に伴う雨落ち溝と考えられるが、対応する建物跡は明らかでない。

溝3 溝1の東で検出した幅80cm前後・深さ約20cmの南北方向の素掘り溝である。溝内から土師器皿や土師器羽釜、平瓦片に混じって炭が出土した。

土坑SK12・16・17 中央部で検出した円形を呈する浅い土坑である。土坑内から石や瓦片・瓦質播り鉢などが出土した。

溝SD10 中央部で検出した幅50～80cmの南北方向の素掘り溝である。この溝から東約3mで一段下がる地形となり、その間に築地などを想定できるが、明確な遺構(盛り土層など)は見られない。

礫敷き遺構 1号墳の南周濠がある程度埋まった後に、拳大の礫を敷いたようすで検出した。約4m四方の範囲で検出したが、本来はもう少し西にのびていたと推測される。通路として造られた可能性が高い。

導水溝 1号墳と2号墳の周濠をつなぐ、幅約20cmのほぼ垂直に掘削された溝である。導水のための施設と推定される。

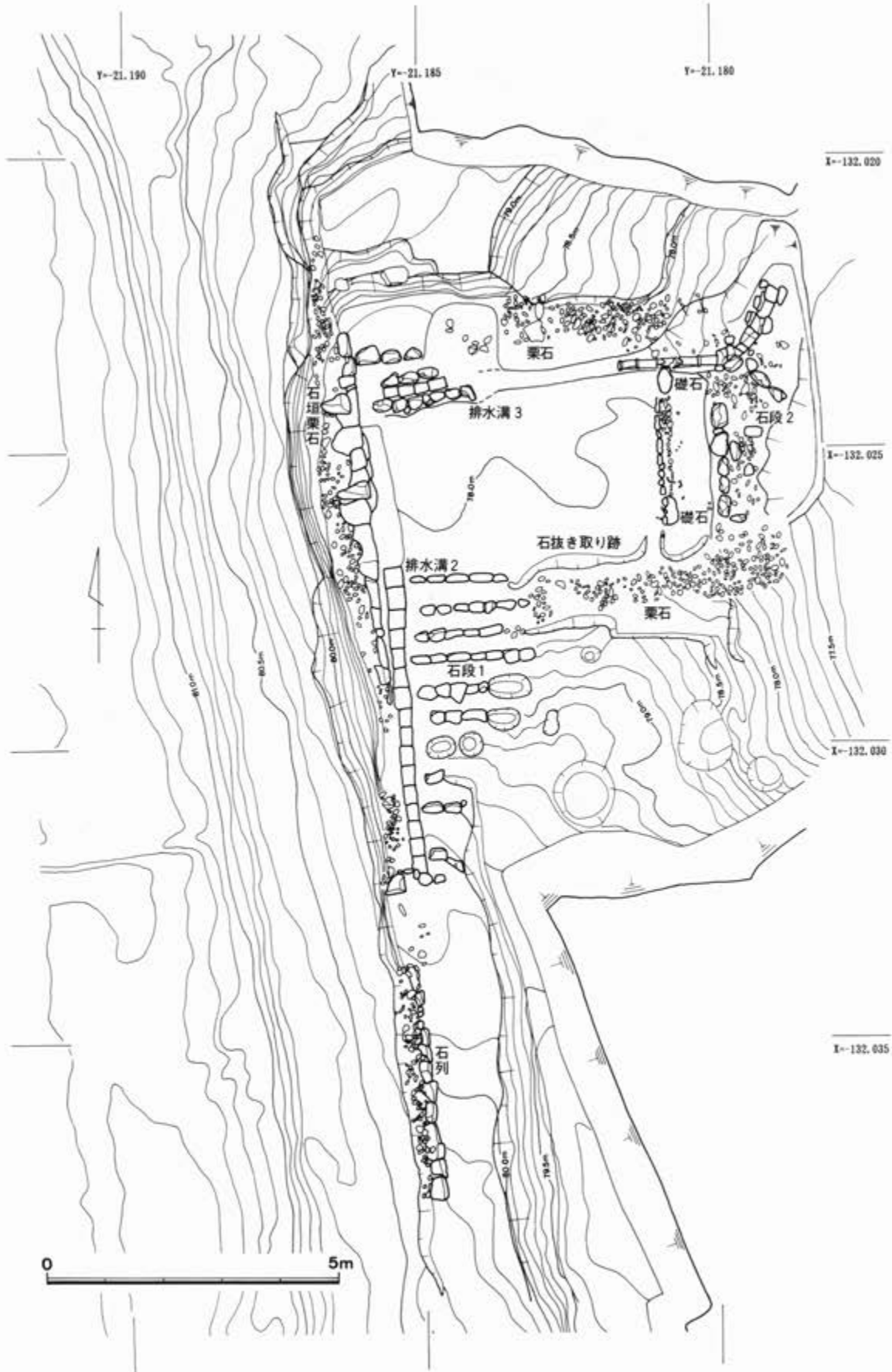
柵列 1号墳と2号墳の間の土手上で検出した。柱穴が2.5～2.6m間隔で東西に並ぶため、柵列と判断した。柵列は、西にのびる可能性が高い。

石組遺構 2号墳の周濠の東端で南北約3m・幅約0.5mの範囲に据え付けられた石組である。西側の石面をそろえ、高さ約30cmを測り、排水溝1の北で止まっている。石組西側の周濠底面で柱穴を検出しており、この場所に橋が架かっていた可能性がある。

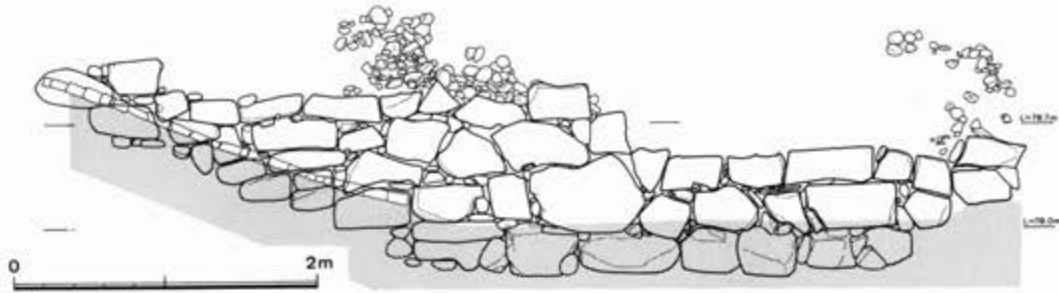
排水溝1 石組遺構に接し、2号墳周濠から南東方向にのびる暗渠排水溝で、瓦質土管が据え置かれていた。土管は9本分を確認し、さらにのびている。溝は、幅約60cm・深さ30cm前後に掘削し、土管を並べている。敷かれた土管以外に、径の小さいものが周濠から出土した。

石列 中央部の東で最初に検出した、南北約4mを測る石組列である。石列は1段のみ残存し、北に向かってゆるやかに下降している。排水溝2との間で、約1.3m範囲に石がなく、抜き取られた可能性が高いが、通路などの存在も考えられる。裏込めに栗石が使われている。

虎口 石列の北方で検出した。石垣(石壁)と石段を含めた全体の構造から虎口と推定される遺構である。東斜面を削り取り石垣を築き、裏込めに栗石を入れている。石垣は、反りがほとんど無い状態(86°前後)に東側の石面をそろえ、2～3段分が残存していた。栗石の残存状況から判断すれば、本来は1.5m以上の高さがあったと推測される。面をそろえた石垣の下には埋もれて見えないが、不ぞろいの根石を据え置く。石垣の石材には、割った花崗岩と自然石が用いられ、花崗岩には矢穴(鑿痕)が見られるものがある。石垣の南半では、南から北へ下降する石段1がある。石段の最も残りがよい場所で幅約2.1mを測り、自然石が7石据えられている。石垣と石段1(南石段)の間には、平瓦を敷き、割った瓦で側面を押さえた排水溝2が、南から北へ下降する。排水溝は石段の最下段でとぎれ、石垣の東には抜き取り跡のような窪みが見られた。抜き取り跡を含めた石垣北半の東側では、東西約5m・南北約3.5mの範囲が砂に粘土を混ぜた土で強く突き固めた平場となっている。この平場の北西隅には、石垣に直交した石列が3石残っていた。平場の南北両側では栗石が散乱し、石材の抜き取り跡が見られたので、両側にも石垣があったと推



第68図 推定虎口平面図



第69図 石垣(石壁)実測図

測される。また、平場の東端に小石を並べ、小石の両端では平石を据付けた礎石がみられるので、城門と推定できる。

後日、石材移転に伴う立会調査で、平場の北西隅の石列に接するように、平瓦を敷き自然石で護岸した排水溝3を検出した。排水溝3は、途中が壊され、東方では礎石に接して瓦質土管が埋設され、暗渠排水溝が造られていた。その東では再び瓦と自然石護岸の排水溝となり、下降しながらゆるやかに北に曲がる。城門礎石の東側も排水溝に沿って石段2(東石段)が北に曲がっているのが確認できた。ここでは石段が3段分残るが、それより東は急激に落ち込み、残存の可能性は低い。排水溝2が途中でとぎれていたのが、排水溝3の一部を壊し、その後に砂と粘土を突き固めた平場の再構築によることが判明した。

この一連の遺構は、一時期に埋まったようすで、埋土には瓦類(軒瓦を含む)と埴輪が多く、土器類はほとんど見られない。瓦には焼けたものがあり、排水溝の瓦にも焼けて変色したものが見られる。埋土や堆積土から出土したものには見られない。また、平坦部でも溝などに炭が混じるが、焼土層は認められない。

(石尾政信)

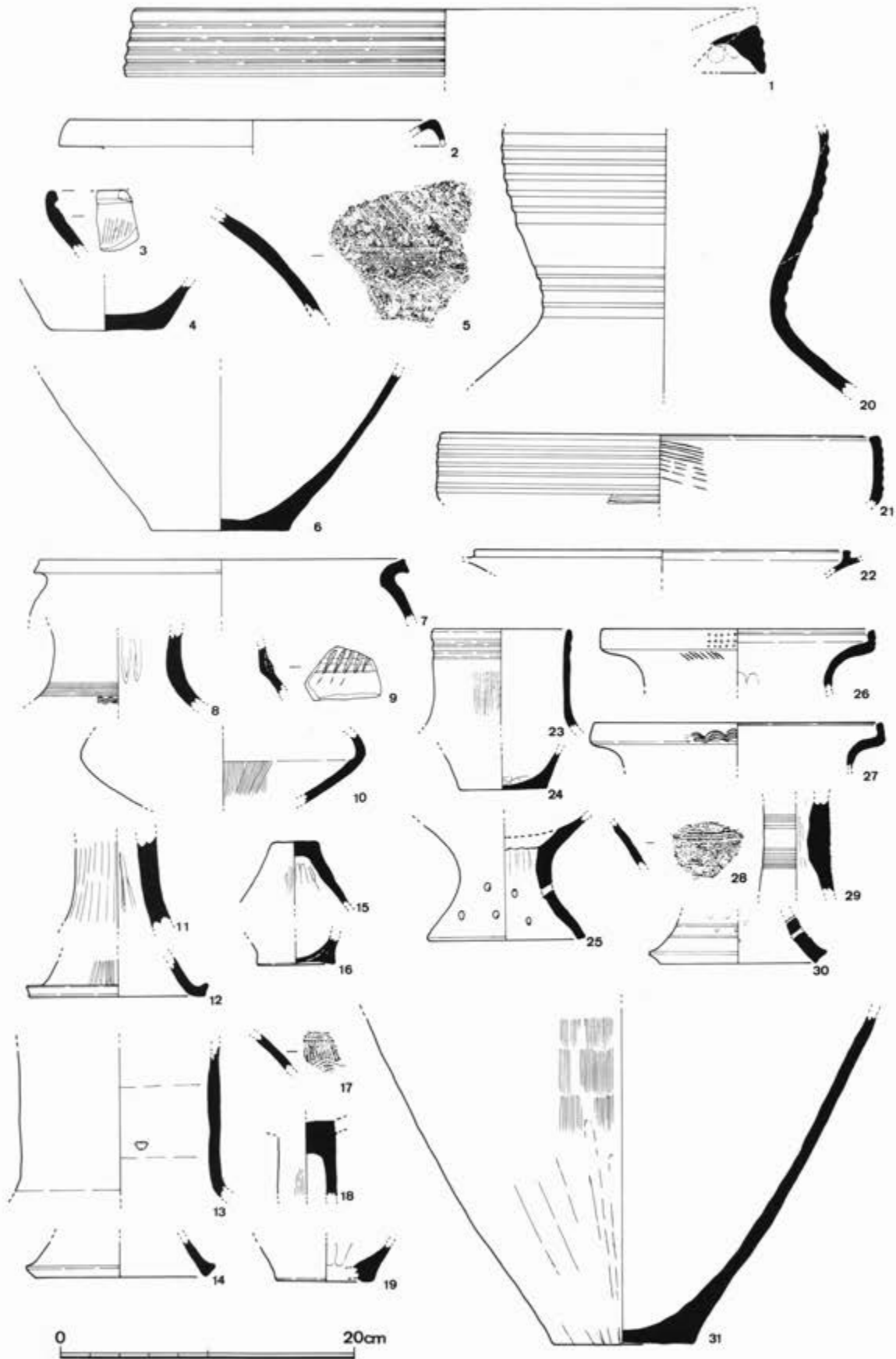
4. 出土遺物

今回の調査で、弥生時代から近世までの各時期の遺物が出土し、整理箱にして約50箱ある。そのなかでは、埴輪と瓦類が多い。以下、時代の古い順から記述する。

①弥生時代の遺物(第70図)

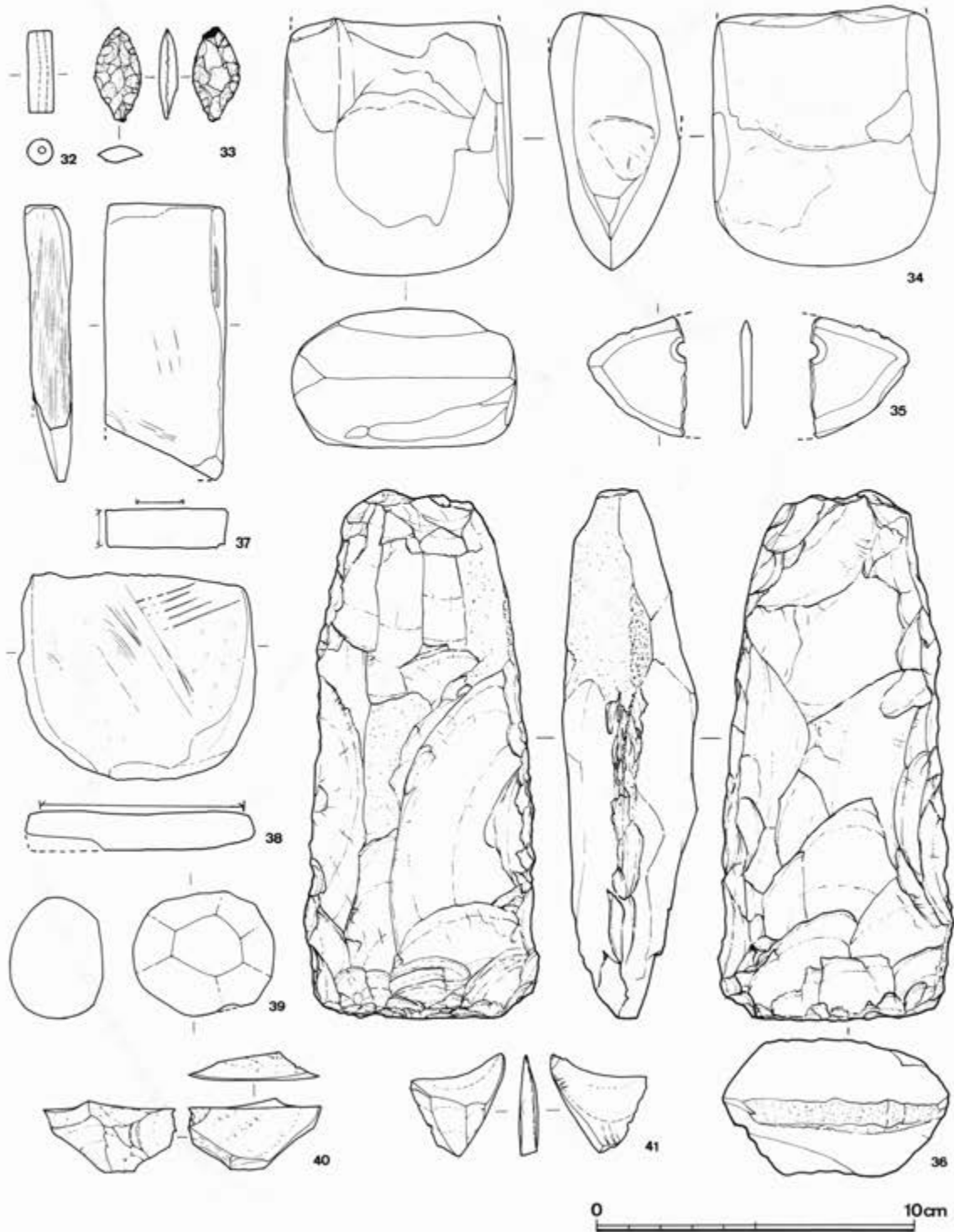
土器 出土した弥生土器の量はコンテナ3箱程度で、調査面積に比べて少ない。弥生時代の土器は、方形周溝墓(1～6・20)、土器棺(31)、竪穴式住居跡1(7～12・15・16)、竪穴式住居跡3(13・14・17・18・19)、土坑20(25～28)、土坑21(30)の諸遺構と、包含層(21～24・29)から出土した。

方形周溝墓で、最も土器が集中していたのは周溝の南西隅近傍で、大型器台(1)、大型太頸壺(20)、無頸壺(3)、壺肩部(5)などが見られる。土器に伴い、木炭の細片が散在していたが、土器はいずれも磨滅が激しく、煤及び被熱の痕跡は判然としない。第一主体部埋土内からは口縁部細片(2)が出土し、同西側肩部から甕底部(6)が出土した。底部(19)は、周溝北西部からの出土である。竪穴式住居跡1の資料としては、下層の細頸壺(8)、蓋(15)、底部(16)、上層の高杯脚



第70図 出土遺物実測図・拓影(1) 弥生土器

柱部(11)、高杯脚裾部(12)、無頸壺あるいは鉢と考えられる体部破片(10)を挙げることができる。その他、甕(7)、壺の頸部破片(9)もある。いずれも第IV様式に帰属する資料と考えられる。竪穴式住居跡3からは大型長頸壺(13)、高杯の柱状脚部(18)、脚裾部(14)、甕底部(19)、壺細片(17)の各土器が主に出土した。17を除き、第V様式前半の器種構成と形態的特徴を示す。竪穴式住居跡3を切り、方形プランの住居跡が設けられており、13・14・18はこれに伴う資料かもしれ



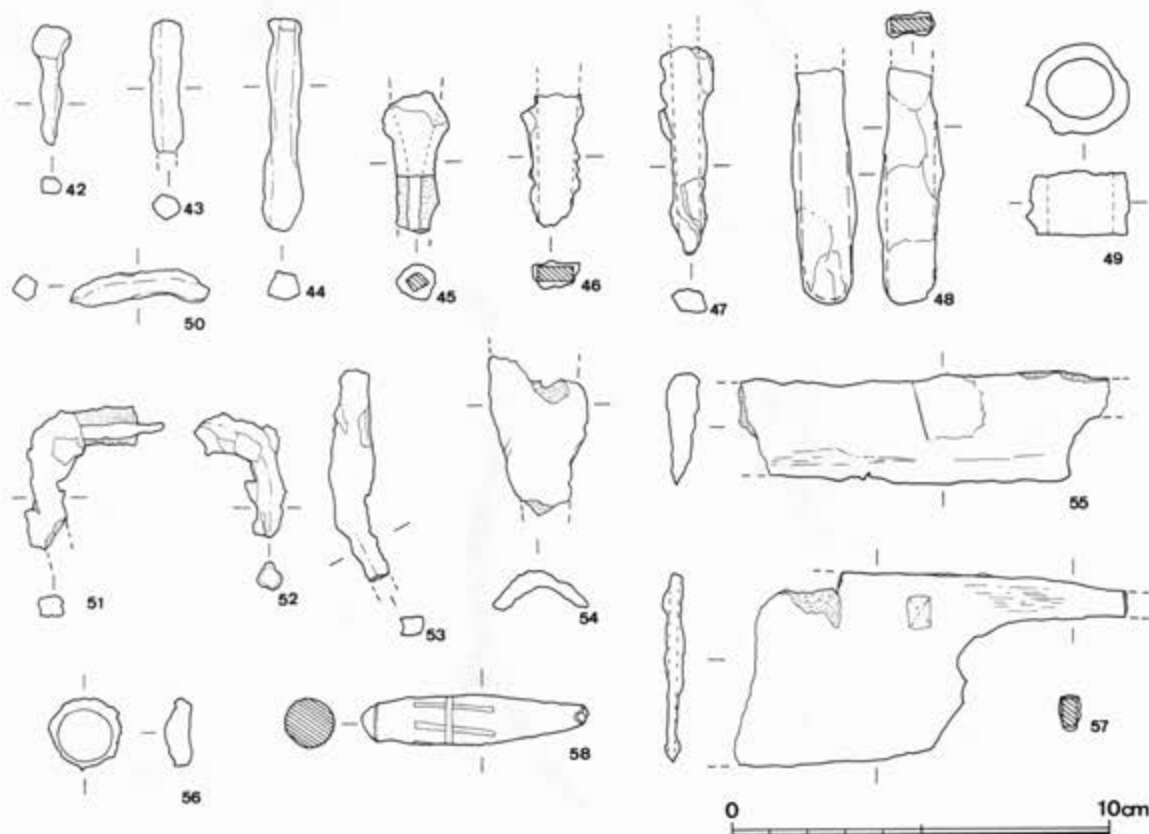
第71図 出土遺物実測図(1) 石器類

ない。土坑20では近江系の甕の破片(26~28)、台付鉢の脚台部分(25)を一括して取り上げた。26は、口縁部に刺突列点文を持ち、頸部を粗いタテハケで調整する。27は、口縁部に櫛描き波状文を施す。28は、櫛描き波状文と直線文とで構成される文様帯を肩部にめぐらす甕の破片である。これらの資料には、一般に第IV様式近江系甕の特徴とされる「櫛描き文三種」が成立していることが明確である。色調から、27・28は同一個体の可能性がある。さらに同じ土坑から、近江系甕の特徴である上げ底ぎみの底部も出土している。包含層出土資料のうち、台付鉢口縁部(21)、水差形土器あるいは直口短頸壺と考えられる頸部(23)は第IV様式の、水平口縁の高杯口縁部(22)は中期の形態的特徴をそれぞれ示す。

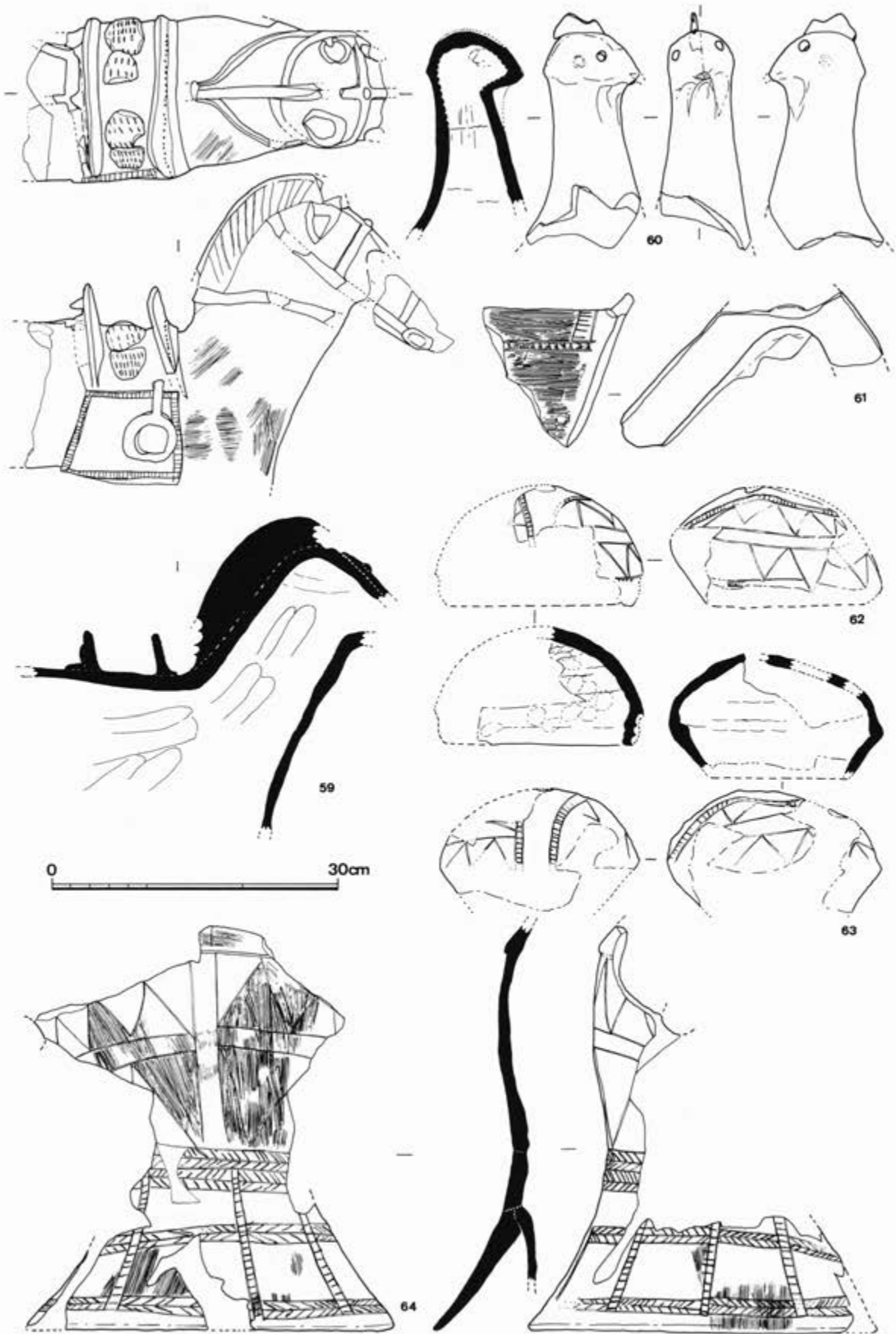
基本的に、以上の土器は、胎土中に石英、長石の粒が混和されていることで共通し、個体によって、赤色斑粒、チャートや粘板岩などの堆積岩類、ガラスのように透明な石英の有無といった点で差異が認められる。混和砂粒の主体が、旧巨椋池以北及び淀川流域の地域で顕著なチャートの垂角礫ではなく、花崗岩起源の砂粒である点に、この遺跡出土の弥生土器の混和材の特徴を見出すことができるかもしれない。また、近江系甕は、暗茶褐色を呈し、焼きもよくない。

他の破片資料の出土状況も考慮すると、墓域内から検出される土器は大型品(器台、壺)が特徴的であり、住居跡及びその周辺の土坑で出土する土器には甕、高杯が多い傾向が指摘できる。

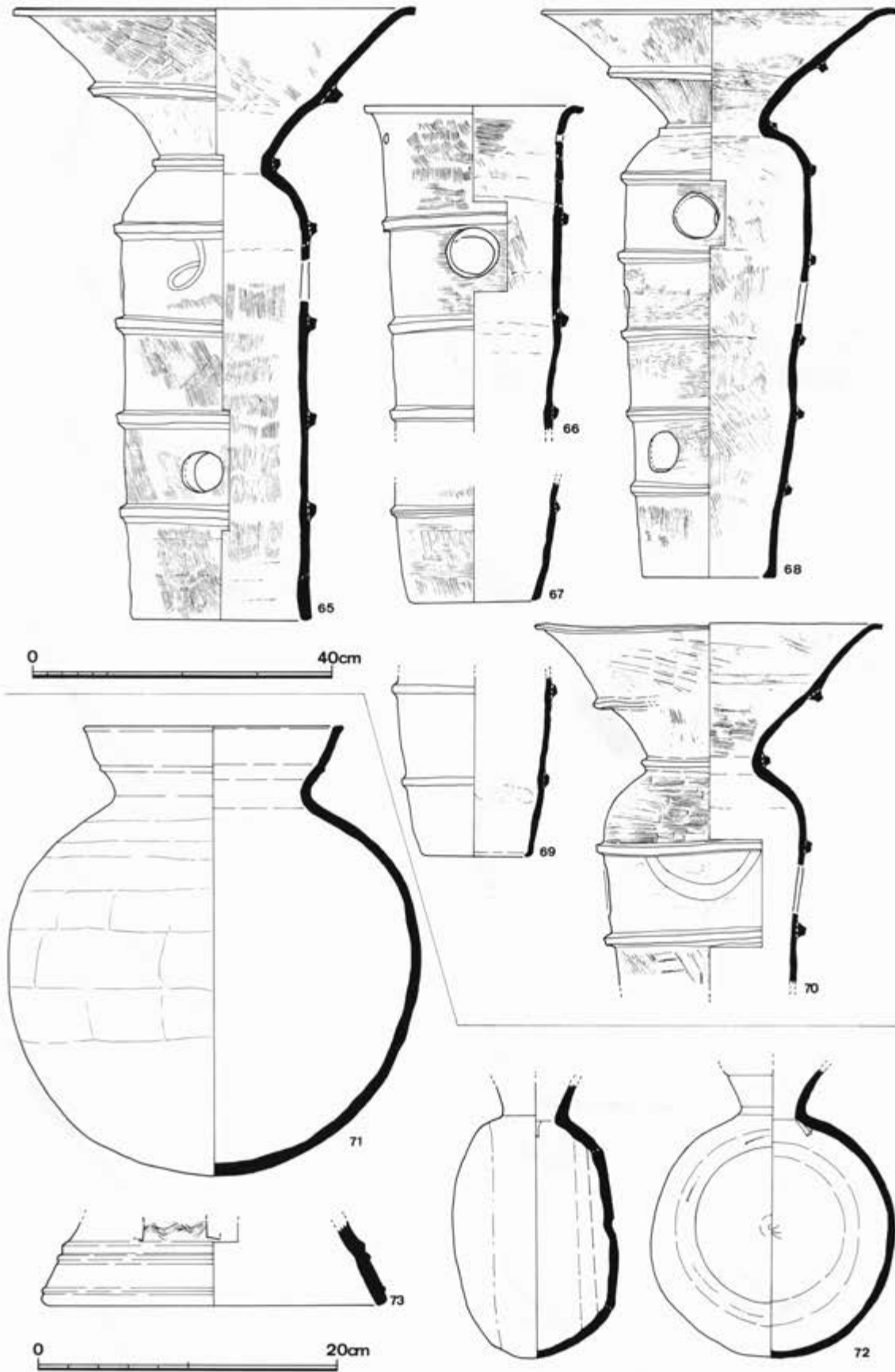
石器 弥生時代の石器のうち、遺構出土のものは竪穴式住居跡1床面直上からの打製石鏃(33)と同埋土からの磨製の太型蛤刃石斧(34)、不定形剥片(40)である。石庖丁(35)と打製石斧(36)は包含層から出土し、不定形剥片(41)は1号墳北側溝埋土中から出土した。磨製太型蛤刃石斧は幅



第72図 出土遺物実測図(2) 金属器

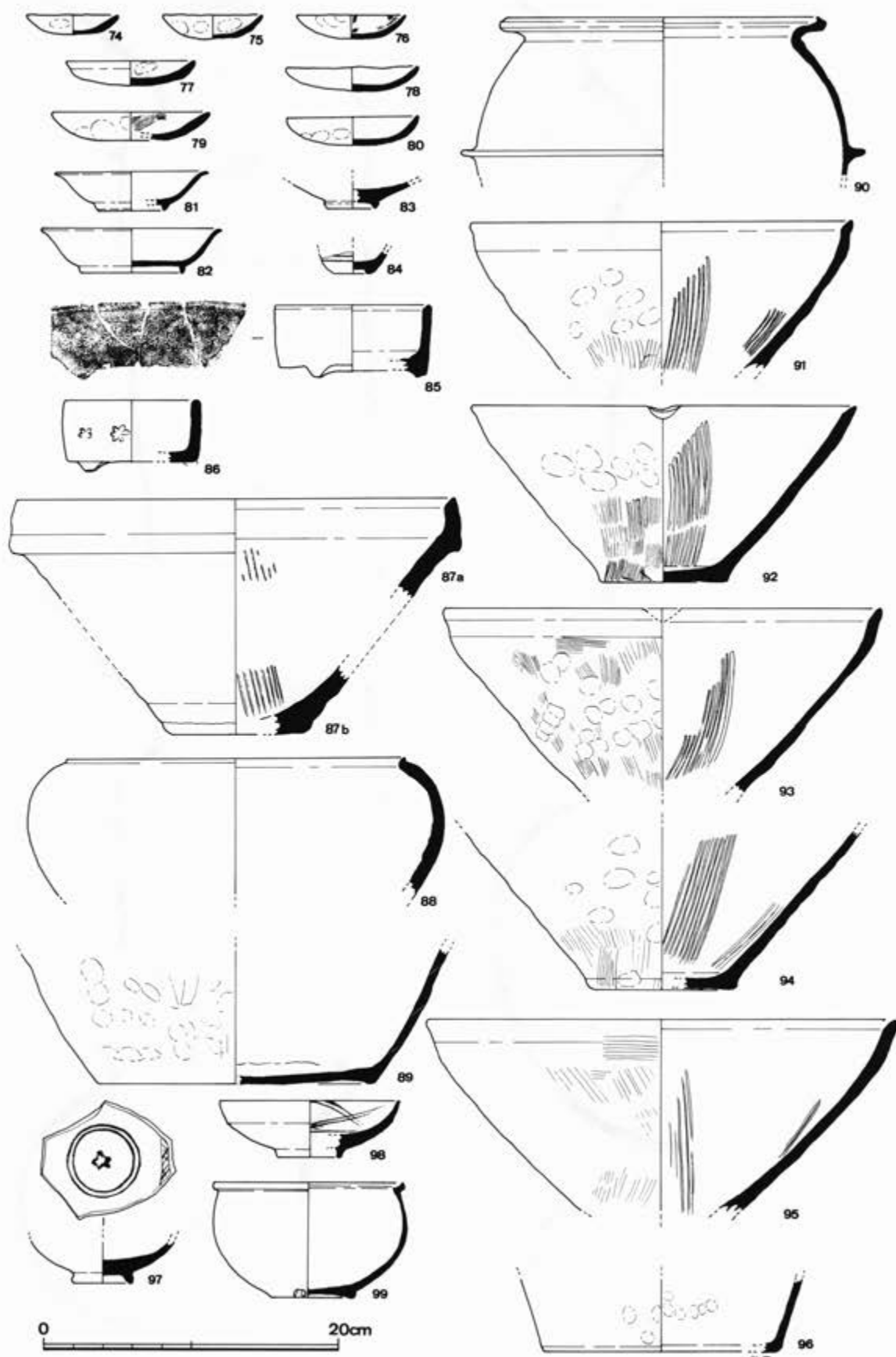


第73図 出土遺物実測図(3) 形象埴輪

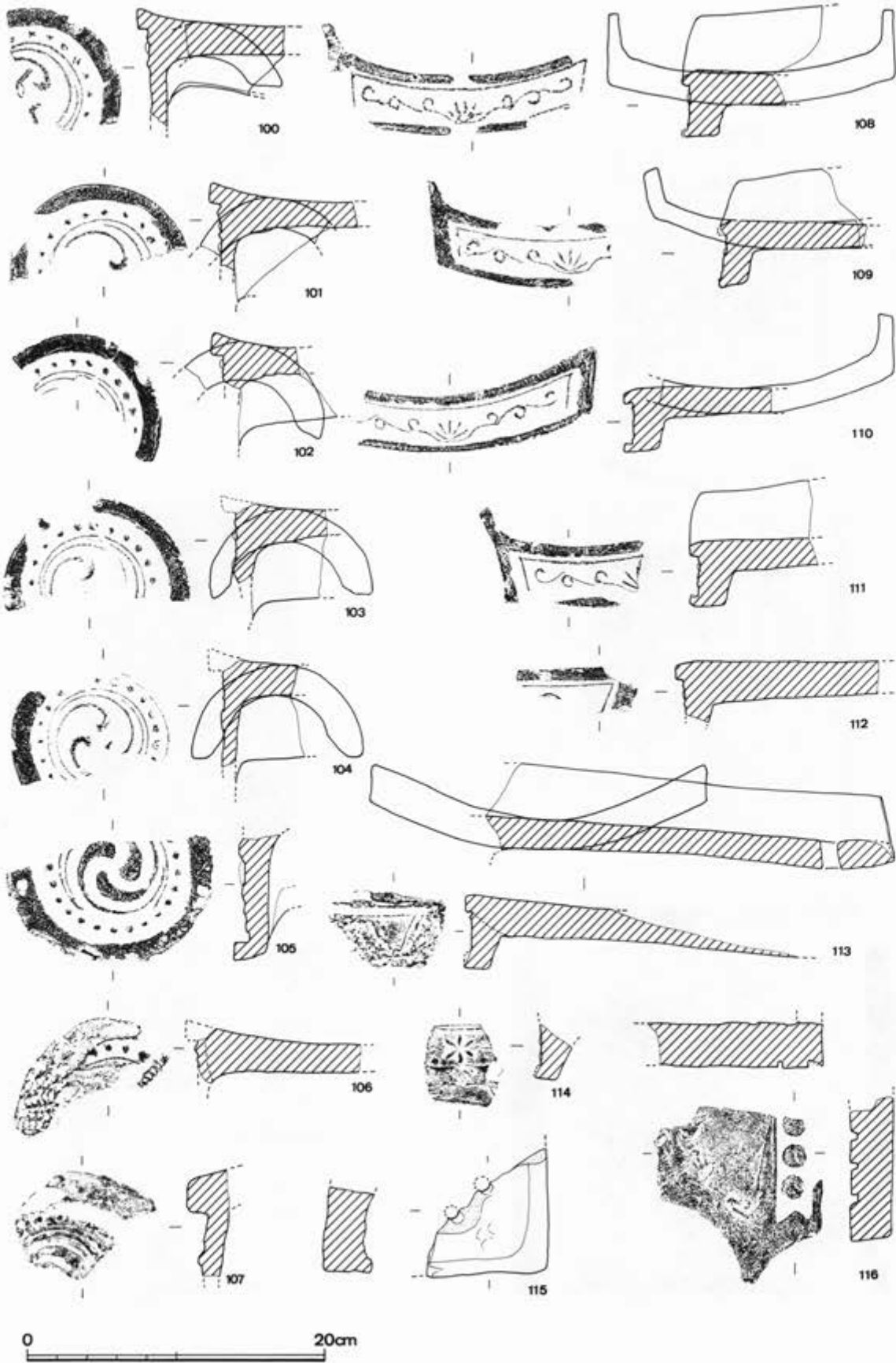


第74図 出土遺物実測図(4)

65~70. 埴輪 71. 須恵器甕 72. 須恵器堤瓶 73. 須恵器器台

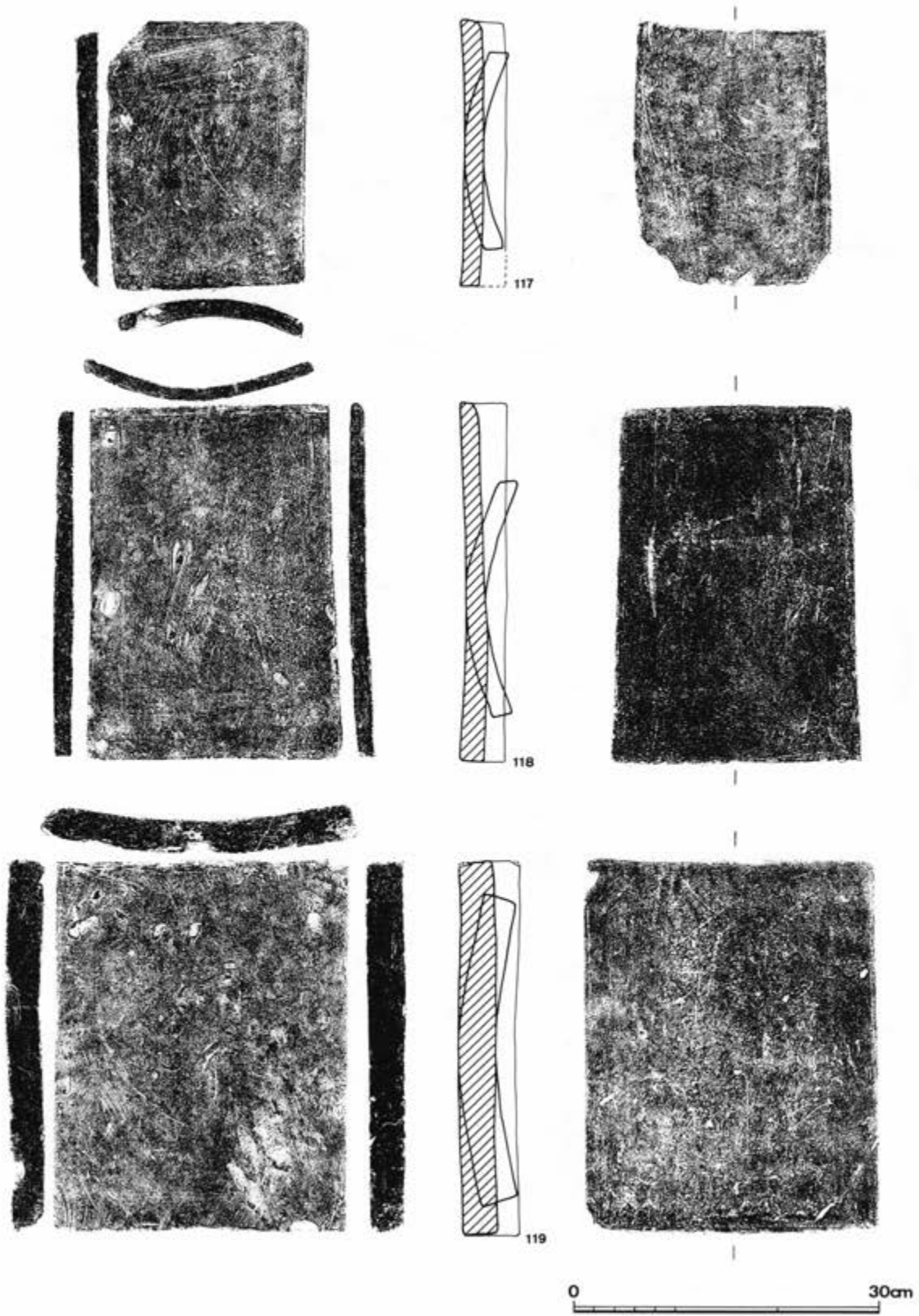


第75図 出土遺物実測図・拓影(2) 土器類



第76図 出土遺物実測図・拓影(3) 瓦類
 100~107. 軒丸瓦 108~114. 軒平瓦 115. 飾り瓦 116. 鬼瓦

7.1cm・長8.1cm以上で、基部を折損している。刃部は鋭利に研ぎ出されている。打製石斧は長さ16.4cm・幅7.1cm・厚さ4.3cmである。原礫を打割して偏平にした後、短冊形に大まかに形を整え



第77図 出土遺物実測図・拓影(4) 平瓦

ている。整形時の打撃による階段状剥離が発達しており、側縁部では敲打痕が顕著である。打製石鏃は凸基式で、長さ2.9cm・幅1.5cm・厚さ0.5cmと、小型の部類に入る。最大幅部は中程からやや先端寄りにある。石庖丁は外湾刃半月形と杏仁形の中間の平面形を呈する。背部にあたる端辺も研ぎ出されているため、平面形が杏仁形に近づくのかもしれない。刃部は両刃で、刃の研磨痕には刃部と平行する擦痕と直交するものがある。背部端辺には鋸歯状になっている部分も見られる。ポリッシュの存否は判別がつかない。紐部は両側穿孔で、敲打による窪みは観察されない。研磨時の擦痕が体部に顕著である。薄くて幅もなく、研ぎ減りしていると考えられる。石材は33・40・41がサヌカイトである。

石器は出土点数こそ少ないが、多くの種類が見られることが特徴である。また、サヌカイトの剥片の存在から、打製石鏃などがこの遺跡内で製作されていたことも推測される。石器の出土範囲が竪穴式住居跡1の周辺の調査区北西部に偏っている傾向も指摘しておきたい。

(杉本厚典)

②古墳時代の遺物(第71～74図)

古墳時代の遺物には埴輪、須恵器、金属器、管玉などがある。

59は、飾り馬を表現した馬形埴輪である。たてがみを切りそろえた馬に鞍・障泥・輪鐙を付け、顔に面繫、首に手綱などが表現されている。同一固体と推定される円形の鏡板を表現したものもある。60は、鶏冠が明瞭に表現され、目を丸くくりぬいた鶏形埴輪である。首から下を欠く。61は、切妻屋根を表現した家形埴輪の一部である。62は、三角板革綴を線彫りで表現した衝角付冑形埴輪である。綴は欠損し不明である。頂部に飾り羽根などを取り付ける穴を丸く穿つ。63も同様のものである。64は、線彫りで三角板革綴じ短甲と草摺を表現した甲形埴輪である。59～64は、よく似た胎土で色調も赤褐色～淡赤褐色を呈する。これらは2号墳の東周濠南端から出土した。

65は、垂直に立ち上がる円筒部に対して内湾する頸部と外反する口縁部が付く朝顔形埴輪で、口径53.8cm・高さ81.9cmを測る。円筒部に突帯が4か所付き、基底部から4段目に線刻し、2・4段目に円形の透かし孔を穿つ。内外面とも縦ハケの1次調整のみを施し、頸部の上下はナデ消す。色調は暗赤褐色～灰褐色を呈し、須恵質である。68は、開きぎみに立ち上がる円筒部に対して内湾する頸部と外反する口縁部が付く朝顔形埴輪で、口径46.4cm・高さ71.2cmを測る。基底部から2・4・5段目に円形の透かし孔を穿つ。外面に2次調整の横ハケがみられる。色調は淡茶褐色を呈する。70も、口径46.4cm・残存高48.0cmを測る同様の朝顔形埴輪で、色調は黄褐～灰褐色を呈し、須恵質である。頸部から2段目に線刻し、円形の透かし孔を穿つ。66は、口縁部直下に小円孔を穿ち、上から2段目に円形の透かしを穿つ円筒埴輪である。外面に2次調整の横ハケがみられる。65・66は1号墳北辺周濠、70は同南辺周濠、68は2号墳東辺周濠、69は同北辺周濠から出土した。67は、1号墳北辺周濠の南側に据え置かれていた。これらの埴輪には、65のように外面の2次調整を省略するものがあり、埴輪分類(川西編年)のV期に相当するものを含む^(注4)。

71は、口径17.0cm・高さ30.0cmを測る須恵器甕である。内外面をていねいにナデ調整し、色調は淡灰色を呈する。1号墳北辺周濠から出土した。72は、残存高19.1cmを測る須恵器提瓶である。

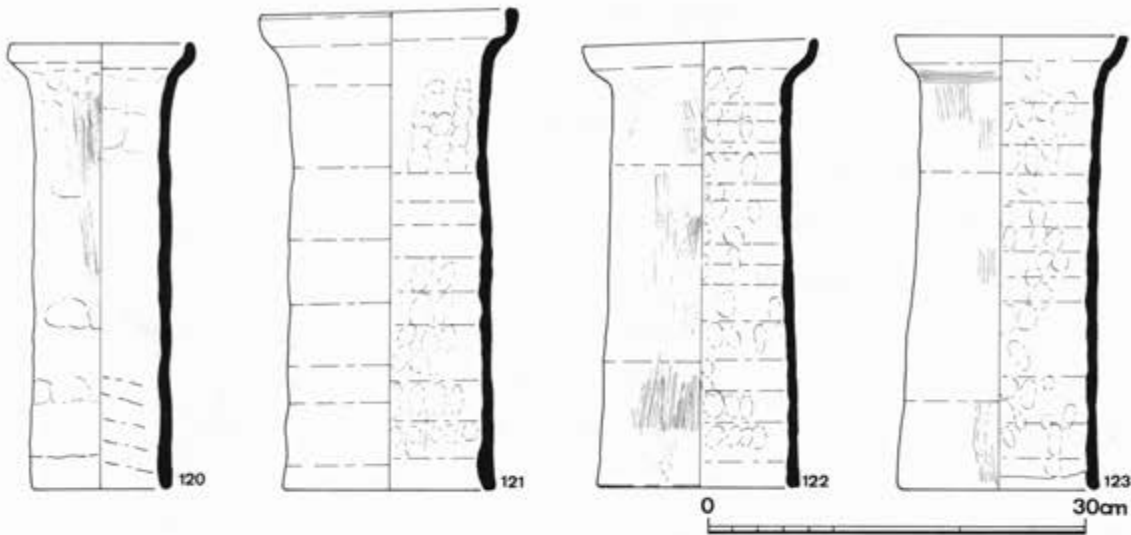
色調は灰色を呈し、外面に自然釉・窯壁が付着する。1号墳南辺周濠から出土した。73は、須恵器器台の底部で包含層から出土した。そのほかに、32の緑色凝灰岩製管玉が北東部包含層、48の鉄製刀子、55の鉄刀が平坦地包含層から出土している。

③中世以降の遺物(第75～77図)

遺構からは、土師器皿74・75・80が溝3から、同90が溝2から、備前焼鉢88が土坑SK16から、近世土坑から肥前磁器皿98、陶器鉢99が出土した。また、虎口の埋土下層から瓦質香炉86が出土した。その他は古墳周濠上層を含む平坦地の包含層から出土した。土師器皿類は、16世紀のものであろう。外面に花文をスタンプした瓦質香炉86は、被熱し口縁部下半が赤く変色している。瓦質香炉85・86は16世紀のものであろう。81～83は中国製白磁皿、84は同白磁青花小椀で16世紀前半まで、肥前磁器椀97・同皿98は18世紀、99は19世紀のものである。87a・bは小片を図面上で復原した備前焼播り鉢、89は同大甕で16世紀のものである。大和型土師器羽釜90は、口縁部が強く外反し、口縁端部を内方につまみ上げ、体部最大径付近に鈎が付き、器壁が薄く精緻な胎土で淡黄褐色を呈し、16世紀後半のものである。^(註5)大和型瓦質播り鉢91～95は、いずれも16世紀後半のものである。96は、瓦質深鉢である。

瓦類は、軒丸瓦100～104、軒平瓦108～112、飾り瓦115、鬼瓦116が、虎口の埋土下層から、軒丸瓦106が同上層から出土した。同時に出土した丸瓦片には、凹面に懸け瓦ですべり止めが付くもの、吊り紐痕のあるもの、長円形の圧痕、角材による内叩き痕があるものがみられる。軒平瓦105が土塁北側から、同107が東斜面から、軒平瓦114が平坦地包含層から出土した。軒平瓦113は、平坦地北方斜面の土木工事中に採取した。軒丸瓦100～104は、内区が左巻き巴文で、巴頭は尖りぎみで尾が長くのび、内外区の境界の界線に接する。外区に珠文を密に配する。丸瓦部の凸面にヘラミガキを密に施す。これらは同範の可能性が高い。106は、丸瓦端面に瓦当接合用のきざみ目が見られる。105は、左巻き巴文で巴頭が大きく、尾が長くのびる。軒平瓦107～111は、内外区の境界の界線が下を除いてめぐり、五葉の花文を中心飾りとし、主葉のみの唐草が3回反転する。唐草は中心飾りの下で繋がる。これらは、懸瓦として作られ左右に鱗が付く。同範の可能性が高い。112も界線がめぐり、内区に唐草の一部が見られるが全体は不明である。113は、112と同文様の可能性が高いもので、平瓦部狭端側に釘穴をあける。114は、五葉の花文を中心飾りとする。108～111は、界線がめぐり、15世紀の様相を残すが唐草が細く単純であるため、16世紀前半まで下る可能性がある。時期は下るが、よく似た文様構成のものが勝龍寺城から出土している。^(註6)虎口周辺での軒瓦の組合せは、軒丸瓦100～104と軒平瓦108～111であろう。虎口埋土から出土した瓦類には、丸瓦凹面に角材による内叩き痕を残すもの、瓦当との接合時に丸瓦端面にキザミをつけるもの(106)があり、法隆寺出土瓦からみれば16世紀に入るものである。^(註7)

全体がわかる平瓦には、排水溝2に敷かれた118・119、排水溝3に敷かれた117などがある。117の凸面に糸切りの後に、一部に粗いヘラ削りとナデを施す。長さ26.1cm・狭端幅18.3cm・厚さ1.9cmを測る。118は、長さ34.1cm・中央幅22.7cm・同厚さ1.95cmを測る。119は、凸面に糸切りの後にナデを行う。長さ36.2cm・中央幅28.1cm・同厚さ3.65cm・重さ5.5kgを測る。



第78図 出土遺物実測図(5) 瓦質土管

瓦質土管は、排水溝1で9本、西側の2号墳周濠から2本、排水溝3の東方で5本出土した。120は2号墳周濠から、121は排水溝1から、122・123は排水溝3からの出土である。いずれも粘土紐を積み上げて作る土管専用品である。内面を指押さえの後に横ナデし、外面を縦ハケの後ナデ、屈曲部にヨコナデを行う。受け部に屈曲する段が付き、製作技法が同じで法量が酷似する土管が奈良市古市城跡から出土している^(注8)。大和の土管形土器Ⅱ類に相当する^(注9)。120は、受け部径14.2cm・高さ35.2cmを測り、淡黄灰色～黒灰色を呈する。121は、受け部径20.2cm・高さ38.1cmを測り、黒灰色を呈する。122は、受け部径18.5cm・高さ35.71cmを測り、黒灰色を呈する。

この時期のものに石製品としては、砥石37、砥石状製品38、礫39が包含層から出土している。金属製品では、鉄釘42～47、鉄製庖丁57、用途不明鉄製品49～54や、用途不明銅製品56が包含層から出土している。また、銅製の近世キセル58が包含層から出土している。

(石尾政信)

5. ま と め

この調査で、弥生時代中期の住居跡や墓が検出され、高地性集落が営まれていたこと、古墳時代中～後期には田辺奥ノ城1号墳・2号墳と今回名付けた古墳が造営されるなど、古代からの複合遺跡であることがわかった。このように、弥生時代には高地性集落が、古墳時代(5世紀後半～6世紀前半)には比較的大型の古墳が営まれたことから、この遺跡がこの地域で重要な位置を占めていたことが知られる。

中世には、1号墳北周濠から北方に0.6～1mの盛り土を行い、より広い平坦地を確保すると同時に、急な斜面(切崖)を造って防御性を高め、城としたと考えられる。また、南西～西側に土塁が残るので、全体に土塁がめぐっていたと推定される。1号墳南周濠は、完全に埋めないで一部を通路として利用し、1号墳南周濠と2号墳周濠の土手を立ち切って周濠に溜まりすぎた水を排水溝1から流したようで、巧みな土地利用が行われていたことがうかがえる。平坦面では、

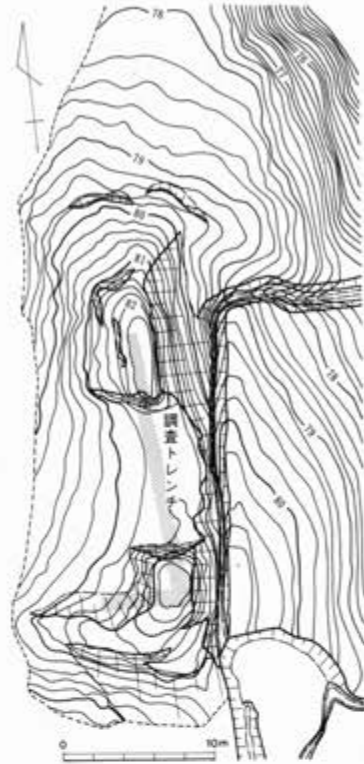
溝・土坑・柱穴が検出されたが、建物跡に復原できるものはなかった。後世に削られたのであろう。

平坦地の東斜面で検出した虎口と推定される遺構の築造時期は、出土した瓦の文様にまとまりが認められることから、瓦の示す時期(15世紀末～16世紀前半)と考えられる。平場に埋められた土管(排水溝3)は、16世紀前半までさかのぼる新資料となる。一方で、同類の土管が出土した古市城跡では、16世紀前半まで存続した墓地を破壊して城を造っており、その築城時期が16世紀中葉と推定されているため、虎口築造時期が16世紀中葉まで下がる可能性も残る。また、排水溝2・3に使用された瓦や埋土の瓦に焼けて変色したものがある。『経覚私要鈔』文明2(1470)年7月26日には「山城事者、田那部(辺)ハ悉焼了、(以下略)」とあり、焼けた瓦との関係が注目されるが、平坦部に焼土層はなく石垣なども焼けた形跡は認められない。おそらく焼けた瓦は他の場所から運んできたと考えられよう。

明確な通路は検出されていないが、北方から登って石段1(東)を西に折れると虎口城門があり、それ(門)を過ぎると石垣を見て南に折れ、石段2(南)を登り、石敷遺構付近から平坦部に入る通路が想定できよう。平坦部では、16世紀第3四半期の遺物が出土しているので、城はこのころまで存続したのであろう。

なお、興戸古墳群では、前述のように、試掘調査で自然地形であることが判明した(第79図)。

(石尾政信)



第79図 古墳状隆起測量図

注1 鷹野一太郎「田辺城跡」(『田辺町遺跡分布調査概報』 田辺町教育委員会) 1982

注2 鷹野一太郎氏の御教示による。

注3 調査参加者 杉本厚典・山田一郎・岡 浩正・藤村 俊・中井淳史・堀ノ内淳・五百髯一・川上祐司・益田顕太郎・大海友軌・小田邦彦・坂手華子・室林由香・小滝初代・丸谷はま子・山中道代

注4 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『古墳時代政治史序説』所収 塙書房) 1988

注5 川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」(『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会) 1990

注6 岩崎 誠ほか「勝龍寺城発掘調査報告」(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1991

注7 小林謙一・佐川正敏「法隆寺出土古瓦速報(2)」(『伊阿留我・法隆寺昭和資材帳調査概報』⑩ 小学館) 1989ほか、佐川正敏・花谷 浩・毛利光俊彦ほか『昭和資材帳15 法隆寺の至寶・瓦』小学館 1992

注8 森下恵介・西崎卓哉他「古市城跡発掘調査報告」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度 奈良市教育委員会) 1981.3

注9 佐藤聖聖「大和における瓦質土器の展開と画期」(『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会) 1996

7. 柿添遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道八幡木津線の道路整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府相楽郡精華町北稲八間柿添・下粕柿添に所在する。当調査研究センターでは、過去、平成6・7年の2年度にわたって、この遺跡の試掘・発掘調査を実施してきた。昨年度の第2次調査では、古墳時代前期末～中期の集落跡の一部や、条里地割りに則った中世の耕作地跡などを確認している^(注1)(Ⅰ区)。

今年度の調査は、昨年度の試掘調査で溝状遺構を確認した地点(Ⅱ区)の発掘調査と予定路線内での新たな試掘調査を行う予定で、平成8年8月19日に開始した。試掘調査地で、古墳時代前期末～中期・奈良時代の溝状遺構を検出したので、試掘部分を拡張して調査を行った(Ⅲ区)。調査面積は、約960㎡である。この調査は、12月6日に終了した。なお、12月5日に関係者を対象とした説明会を実施した。

調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎・同主任調査員引原茂治である。調査経費は、京都府土木建築部に全額負担していただいた。調査にあたっては、京都府教育委員会・精華町教育委員会・地元住民の方などから、協力していただいた^(注2)。また、現地調査にあたっては、各大学生及び近隣地域在住の有志の方々に参加していただいた。感謝したい。なお、この概要は、上記引原が執筆し、写真も引原が撮影した。

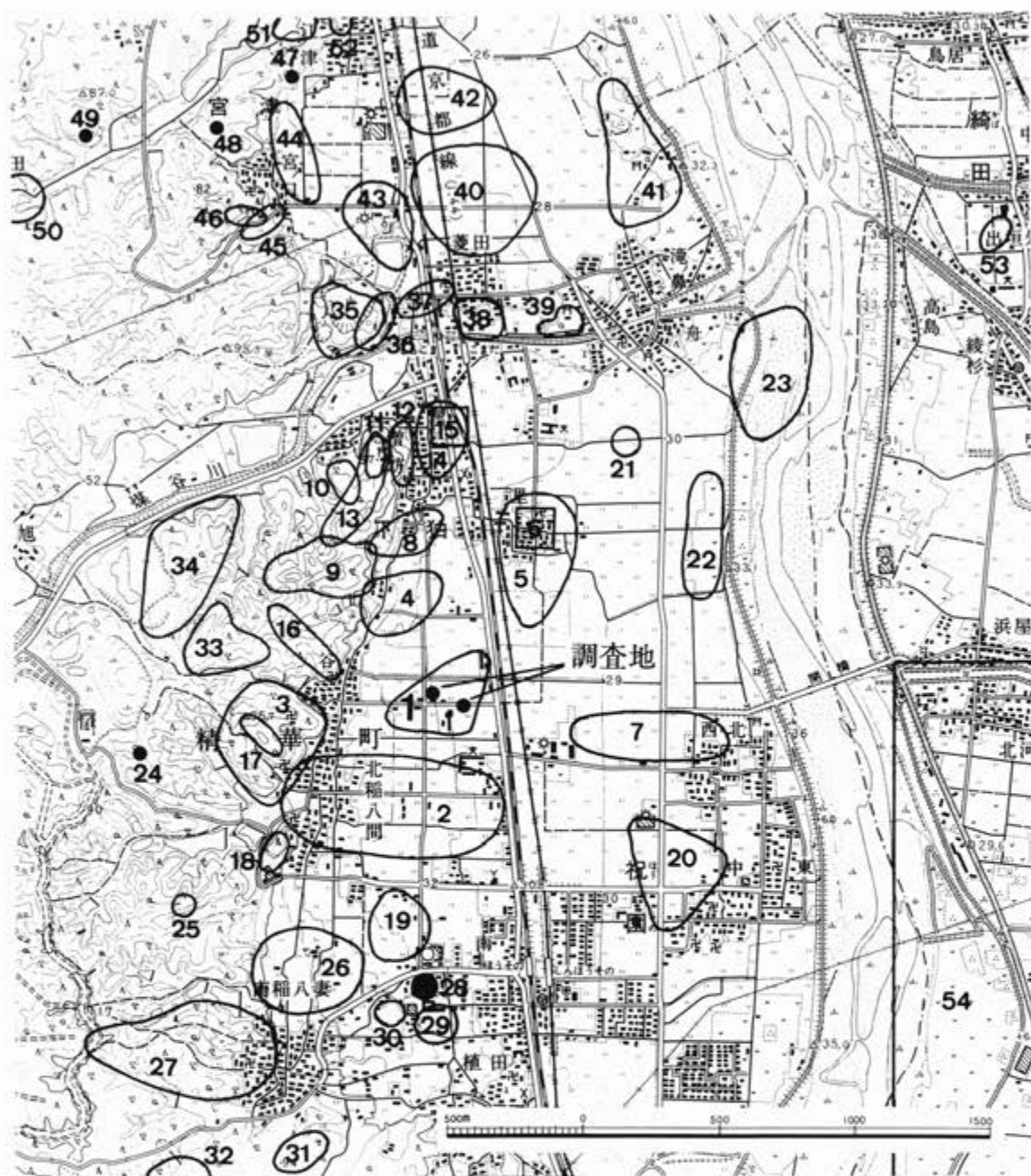
2. 位置と環境

柿添遺跡は、木津川西岸に広がる沖積地に形成された小扇状地上に位置する。周辺には、多くの遺跡が分布する。

この遺跡の南側には、古墳時代前半期から中世にかけての集落跡が検出された北稲遺跡がある。さらにその南側では、古墳時代前半期の祭祀遺構と考えられる礫敷遺構が検出された北尻遺跡がある。

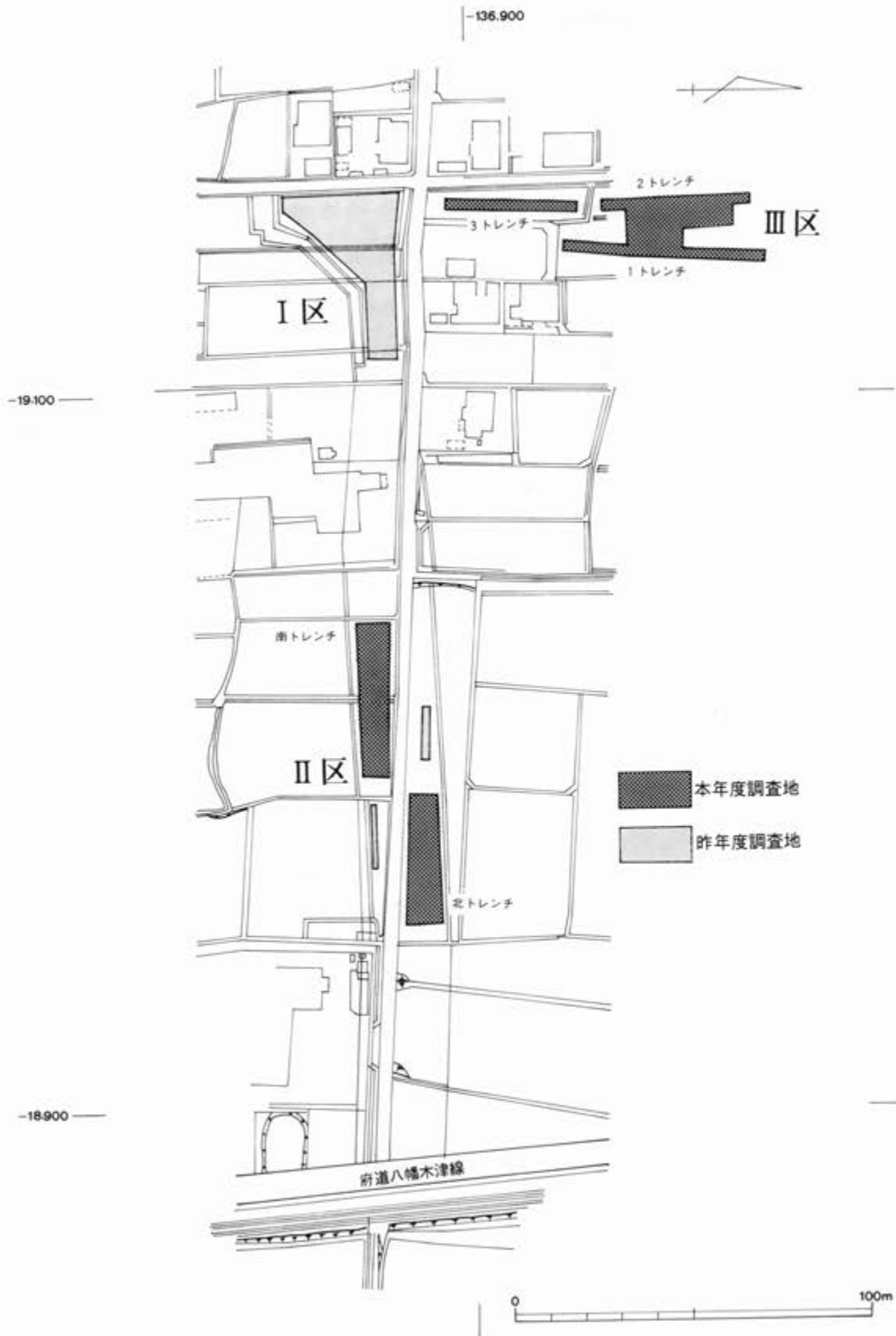
歴史時代の遺跡としては、7世紀の創建と考えられている里廃寺が、この遺跡の北側に位置している。川原寺式の軒瓦が出土している。

中世の遺跡としては、15世紀の山城国一揆に関連する稲屋妻城跡と考えられている城山遺跡や政ヶ谷遺跡がこの遺跡の西側及び南西側に位置している。両遺跡とも顕著な城郭施設の痕跡は認められない。15世紀の城は、山城ではなく平地にあったとする説もある。このほか、多数の石造物が出土し中世墓地跡と考えられる百久保地先遺跡が、木津川の河川敷にある。また、中世集落跡である椋ノ木遺跡も、その全容が明らかになりつつある。

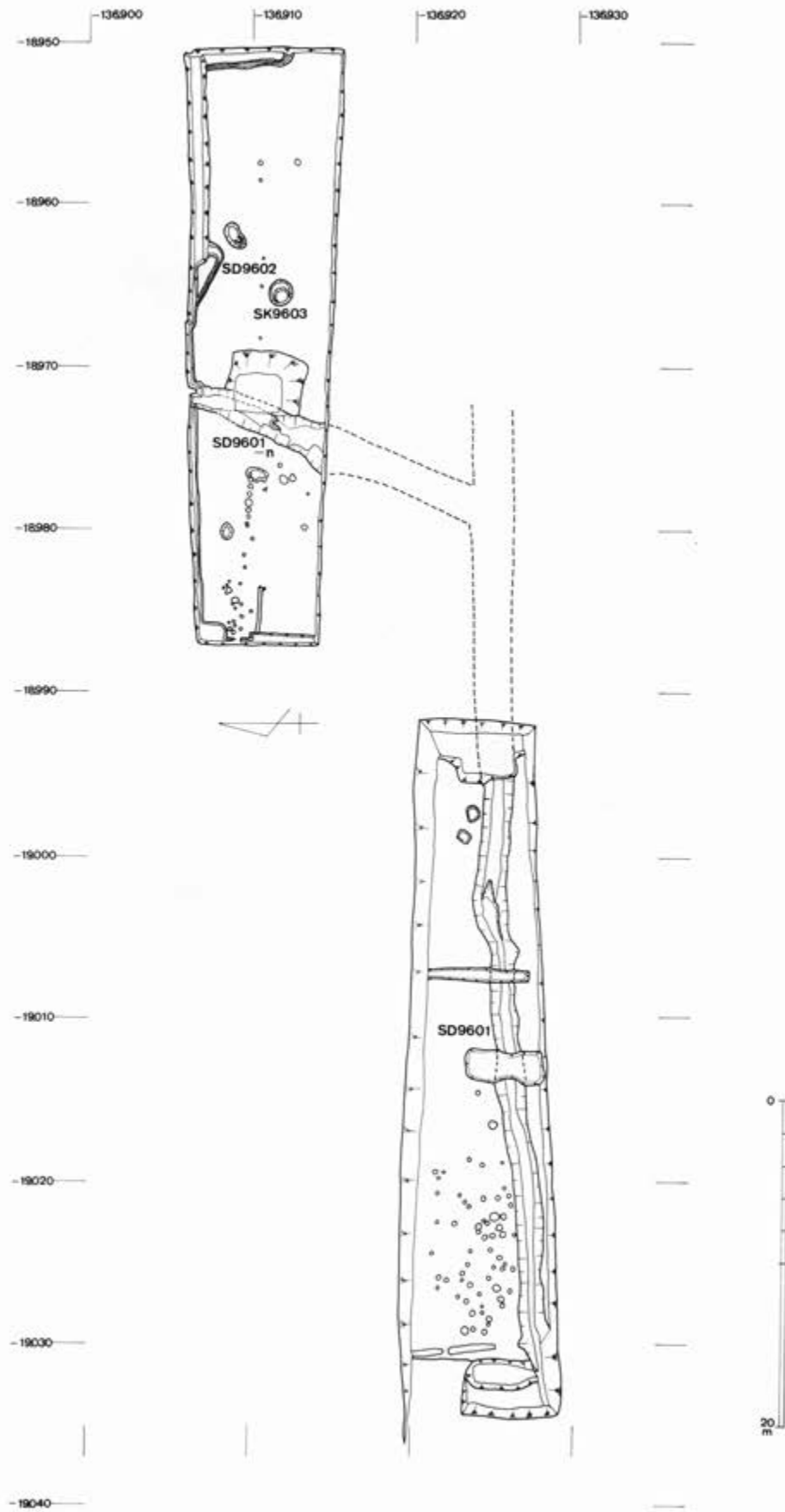


第80図 調査地位置図

- | | | | | |
|--------------|-------------------|----------------|-----------------|------------|
| 1. 柿添遺跡 | 2. 北稻遺跡 | 3. 城山遺跡(稲屋妻城跡) | 4. 片山遺跡 | 5. 里遺跡 |
| 6. 里廃寺 | 7. 西垣内遺跡 | 8. 下馬遺跡 | 9. 大福寺遺跡 | 10. 長芝遺跡 |
| 11. 鞍岡神社遺跡 | 12. 鞍岡山遺跡 | 13. 鞍岡山古墳群 | 14. 拝殿遺跡 | 15. 下粕廃寺 |
| 16. 石塚古墳群 | 17. 城山古墳群 | 18. 国名平古墳群 | 19. 北尻遺跡 | 20. 中垣内遺跡 |
| 21. 石ヶ町遺跡 | 22. 棕ノ木遺跡 | 23. 百久保地先遺跡 | 24. 南打越古墳 | 25. 胡麻谷古墳群 |
| 26. 南稲遺跡 | 27. 政ヶ谷遺跡 (稲屋妻城跡) | 28. 丸山古墳 | 29. 祝園遺跡 | |
| 30. 森垣外遺跡 | 31. 藤山古墳群 | 32. 砂留古墳群 | 33. 袋谷古墳群 | 34. 大谷古墳群 |
| 35. 平谷古墳群 | 36. 薬師山遺跡 | 37. 西ノ口遺跡 | 38. 前川原遺跡(大北城跡) | |
| 39. 春日神社遺跡 | 40. 山路遺跡 | 41. 元屋敷遺跡 | 42. 桑町遺跡 | 43. 宮の口遺跡 |
| 44. 屋敷田遺跡 | 45. 白山遺跡 | 46. 宮の口古墳群 | 47. 江津古墳 | 48. 宮津古墳 |
| 49. 葛蒲谷古墳 | 50. 奥山田池遺跡 | 51. 三山木廃寺 | 52. 佐牙垣内遺跡 | 53. 西ノ口遺跡 |
| 54. 恭仁京右京推定地 | | | | |



第81図 トレンチ配置図



第82図 II区平面図

3. 検出遺構

今回の調査は、昨年度発掘調査を行ったⅠ区の東側約100mのⅡ区と、町道を挟んでⅠ区の北側に隣接するⅢ区で実施した。Ⅱ区は、昨年度の試掘調査で溝状遺構を確認し、発掘調査の必要地点となったところである。Ⅲ区は、古墳時代前期末～中期の集落跡の一部を確認したⅠ区に隣接する地区であり、まず試掘調査を行い、遺構・遺物の残存状況を確認することにした。その後、主要な部分を拡張して調査した。

①Ⅱ区

この地区では、2か所で調査地を設定した。町道を挟んで南西と北東の、ほぼ対角線上に位置する。仮に南西の調査地を南トレンチ、北東の調査地を北トレンチと称する。南トレンチは、昨年度の試掘調査で、東西方向の溝状遺構を確認した地点である。北トレンチも、南北方向の溝状遺構を検出した地点である。この溝状遺構は、南トレンチのものが北に分岐したものであることを、昨年度確認した。

a. 南トレンチ

ここでは、東西方向の溝状遺構やピット群などを検出した。ピット群は建物などとしてまとまるものはなかった。

溝状遺構 S D 9601 西から東方向にほぼ直線的にのびており、主軸方向は座標の東西から北に約4°振る。この溝状遺構は、幅約1.6m・深さ約1m・検出長約36mである。断面は、逆台形状である。顕著な出土遺物がなく、その時期・性格などは不明である。

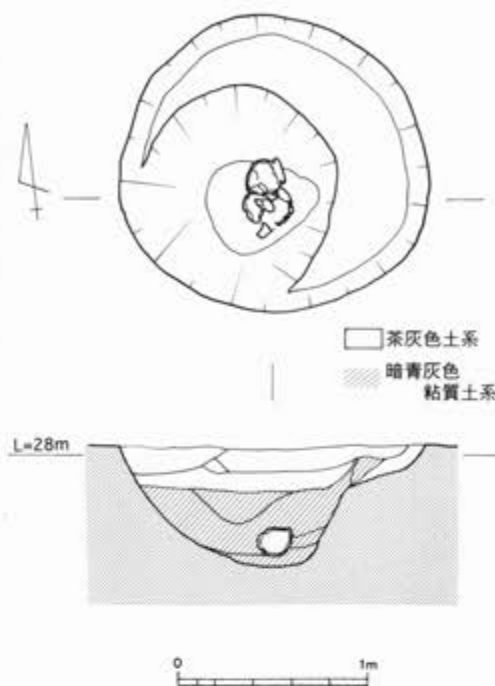
b. 北トレンチ

ここは、耕土表面が、南トレンチより低くなっており、かなり削平されているものと考えられる。トレンチ西端では、ほぼ耕土・床土下が地山という状況である。東に向かって地山面が下がっており、床土と地山との間に包含層がある。ここでは、S D 9601の北側分岐部分のほかに、溝状遺構や土坑・杭列などを検出した。

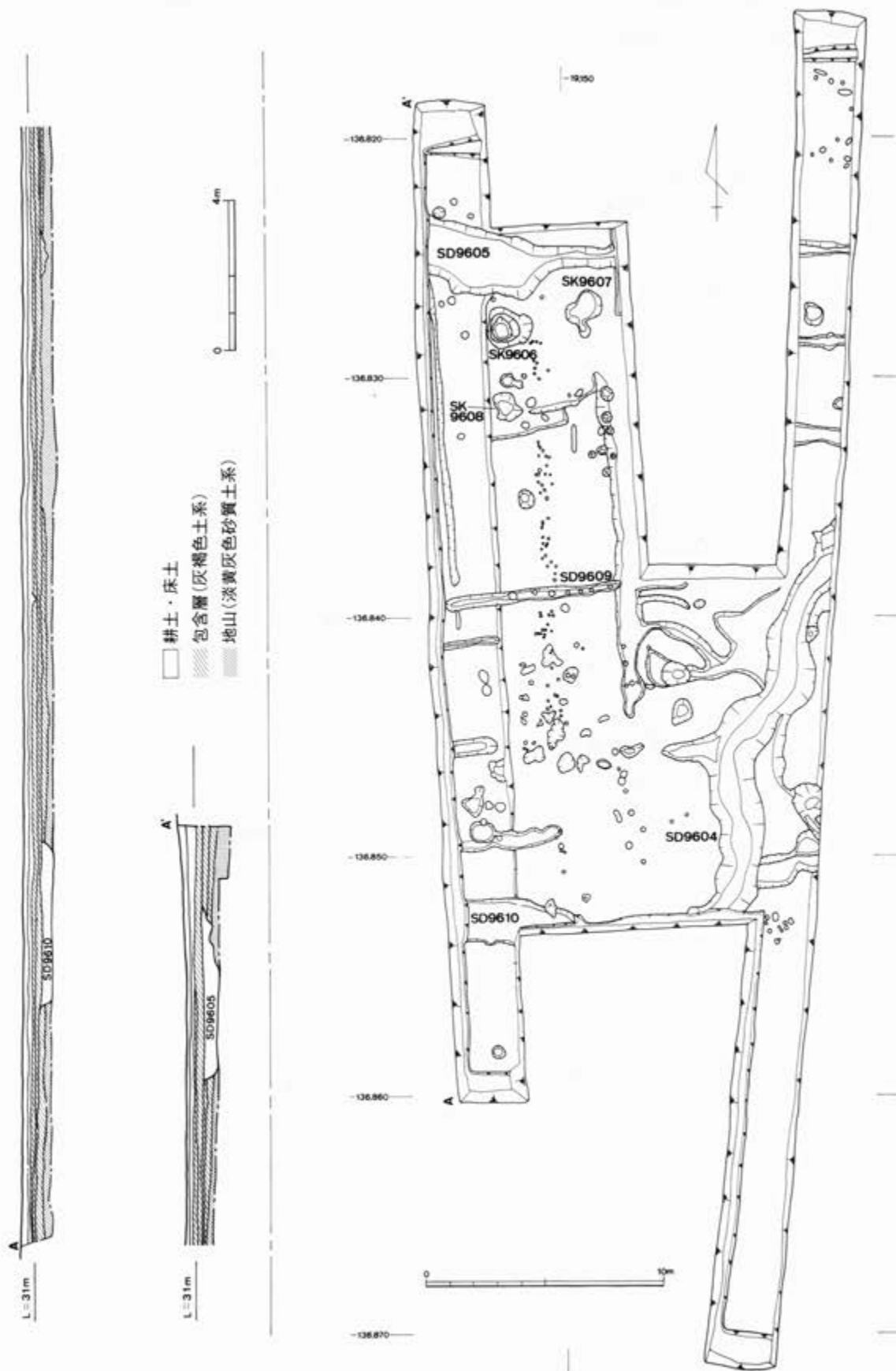
溝状遺構 S D 9601-n S D 9601の北側分岐部分である。幅約2m・深さ約0.5mで、主軸方向はほぼN-20°-Eである。顕著な出土遺物はない。

溝状遺構 S D 9602 トレンチ東半部北側で検出した。「L」字状に屈曲しており、南西側は幅約20cm・深さ約5cm、南東側は幅約80cm・深さ約9cmを測る。竪穴式住居跡の周壁溝とも考えられるが、用地限界のため調査不能で、時期・性格は不明である。

土坑 S K 9603 S D 9602の南側約3mで検出した。直径約1.6m・深さ約0.6mで、二段状に掘り込んでいる。底部から、古墳時代の土師器甕2個体が出土した。



第83図 土坑 S K 9603 実測図



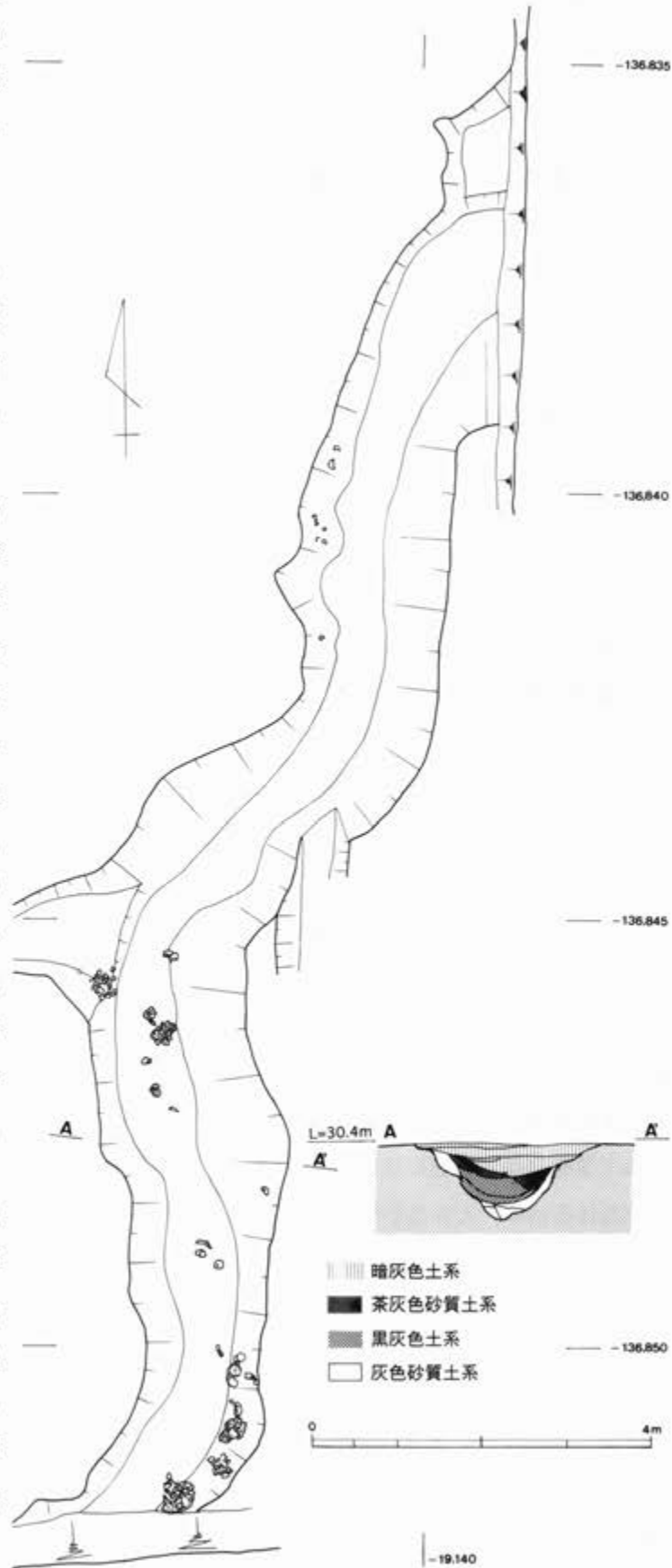
第84図 III区平面図

なお、このトレンチで検出した杭列には基部の木質が残存しているものが多い。方向は、ほぼ座標軸の東西方向で、現地表面に残る条里地割りの方向に沿っている。

②Ⅲ区

この地区は、古墳時代前期末～中期の集落の一部を確認したⅠ区の北側に隣接する。当初、3か所の試掘トレンチを設定し、調査を開始した。このうち、Ⅰ区に最も近接し、この遺跡が立地する小扇状地の扇中央部付近に位置するのが3トレンチである。ここでは、断片的な溝状遺構やピット・耕作溝などを検出したのみで、顕著な遺構は残存していなかった。良好な地点であるからこそ、かえって後世の削平を受けたと考えられる。1・2トレンチでは、古墳時代や奈良時代の溝状遺構などを確認したので、両トレンチの間を拡張して調査した。ここでは、溝状遺構や土坑・ピット・耕作溝・杭列などを検出した。主な検出遺構は、以下のとおりである。

溝状遺構 S D 9604 調査地東側に位置する。南西から北東へ蛇行気味にのび、幅約2.2m・深さ約0.95mを測る。検出長は、約15mである。断面は、逆台形状である。この埋土中から、古墳時代の土師器甕・高杯などが出土した。また滑石製有孔円板2点や手捏ねのミニチュア土器も出土した。



第85図 溝状遺構 S D 9604実測図

溝状遺構 S D 9605 調査地北側で検出した。東西方向にのびる。東側では幅約0.9m・深さ約0.38mで、断面「U」字状であるが、西側では幅約2.4m・深さ約0.53mと広がり、溜まり状になる。8世紀中葉頃の須恵器・土師器などが出土した。また、土馬の脚の一部とみられるものも出土している。

溝状遺構 S D 9610 調査地南側で検出した。東西方向にのびるが、東端は南東方向に湾曲する。幅約1.9m・深さ約0.14mである。断面は浅い「U」字状を呈する。8世紀中葉頃の須恵器盤片などが出土した。

4. 出土遺物

今回の調査では、古墳時代から中・近世にかけてのさまざまな遺物が出土した。以下、主なものについて略述する。

①土坑 S K 9603出土遺物

土師器甕1は、内外面磨滅のため調整の詳細は不明であるが、内面はヘラ削りされる。土師器甕2は、外面ハケ目調整・内面ヘラ削りである。口縁端部を内側に肥厚させる。いわゆる布留式甕の形態である。外面に煤が付着する。

②溝状遺構 S D 9604出土遺物

土師器甕3は、外面ハケ目調整であるが、内面は磨滅のため不明である。口縁部は、斜め上方に立ち上がる。土師器甕4は、外反する口縁部をもつ。調整は、磨滅のため不明である。土師器甕5は、外面ハケ目調整、内面にはヘラ削りの痕跡がみられる。口縁部は、内傾気味に立ち上がる。

土師器高杯6は、口縁部が内湾気味で、杯部内面はナデ調整である。土師器高杯7も内湾気味の口縁部をもち、内面はナデ調整である。土師器高杯8は、磨滅のため調整不明である。ミニチュア土器9は、手捏ねで、胎土は粗い。

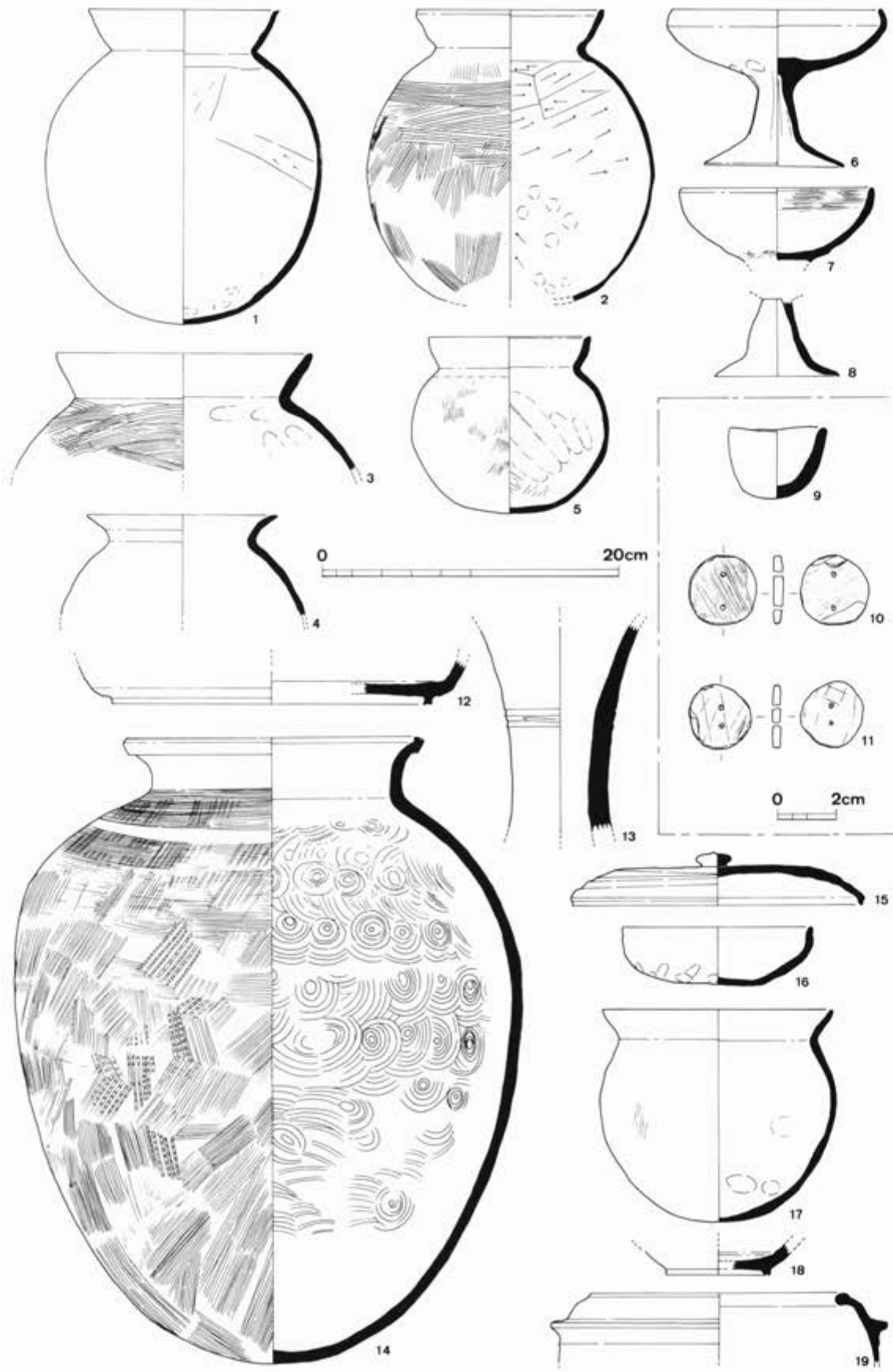
有孔円板10は、緑味を帯びた滑石製で、双孔である。有孔円板11も、同様のものであるが、表面があまり平滑に仕上げられていない。

③溝状遺構 S D 9605出土遺物

須恵器甕14は、外面に格子タタキ目・内面に同心円タタキ目がある。焼成はやや軟質である。須恵器杯蓋15は、天井部から口縁部にかけてなだらかに降る。宝珠つまみをもつ。焼成は良好である。土師器杯16は、口縁端部がわずかに外反する。内面はナデ調整である。土師器甕17は、磨滅のため調整不明である。外面にハケ目の痕跡がみられる。

④その他の出土遺物

須恵器盤12は、溝状遺構 S D 9610出土である。高台は貼り付けで、底部外周よりやや内側に付く。須恵器13は、Ⅲ区包含層出土である。長頸壺の頸部とみられる。焼成は良好で、上部には自然釉が付着する。緑釉陶器碗18は、Ⅲ区包含層出土である。見込みには沈線がめぐる。高台は貼り付けで、畳付には段をもつ。近江系のものとみられる。土師器羽釜19は、内傾する口縁部をもつものである。大和産か。



第86図 出土遺物実測図

5. ま と め

今回の調査では、古墳時代の溝状遺構や土坑などを検出した。それぞれの具体的な性格は不明であるが、S D9604から手捏ねのミニチュア土器や有孔円板などの祭祀関連の遺物が出土しているのが注目される。また、これら古墳時代の遺構から出土した土器は、I区で出土したものとはほぼ同様である。したがって、今回検出した遺構も、昨年度検出した古墳時代前期末～中期の集落跡に関連すると考えられる。

S D9605からは、完形に復原できる土器とともに、図示できなかったが土馬の脚の一部も出土している。須恵器は8世紀中葉頃のものと思われるが、あるいはその時期に付近で何らかの祭祀が行われていた可能性も考えられる。

II区で検出したS D9601は、顕著な出土遺物がなく、時期・性格ともに不明であるが、その方向は、条里の方向に正確には合致していない。それから分岐するS D9601-nでは、全く異なる。このことは、この溝状遺構を考える上での留意点になろう。

(引原茂治)

注1 有井広幸「柿添遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第72冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 調査参加者

新谷二三代・五百磐顕一・筒井由香・木下町子・芳谷與子・木本昌英・久田 亨・岸本貢一・小原志奈子・青木満里子・坂手華子・三浦公靖・室林由香・山口良太・小松厚子

参考文献

- 『精華町史』本文篇 精華町史編纂委員会 1996
- 伊賀高弘「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 伊賀高弘「北稲・柿添遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

8. 森垣外遺跡第1次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、山手幹線街路整備事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町大字南稲八妻小字森垣外に所在し、すでに遺物散布地として知られていた。府道の新設計画に伴い、遺構・遺物の残存状況を把握するための試掘調査を行い、遺跡の内容を確認することを調査の目的とした。

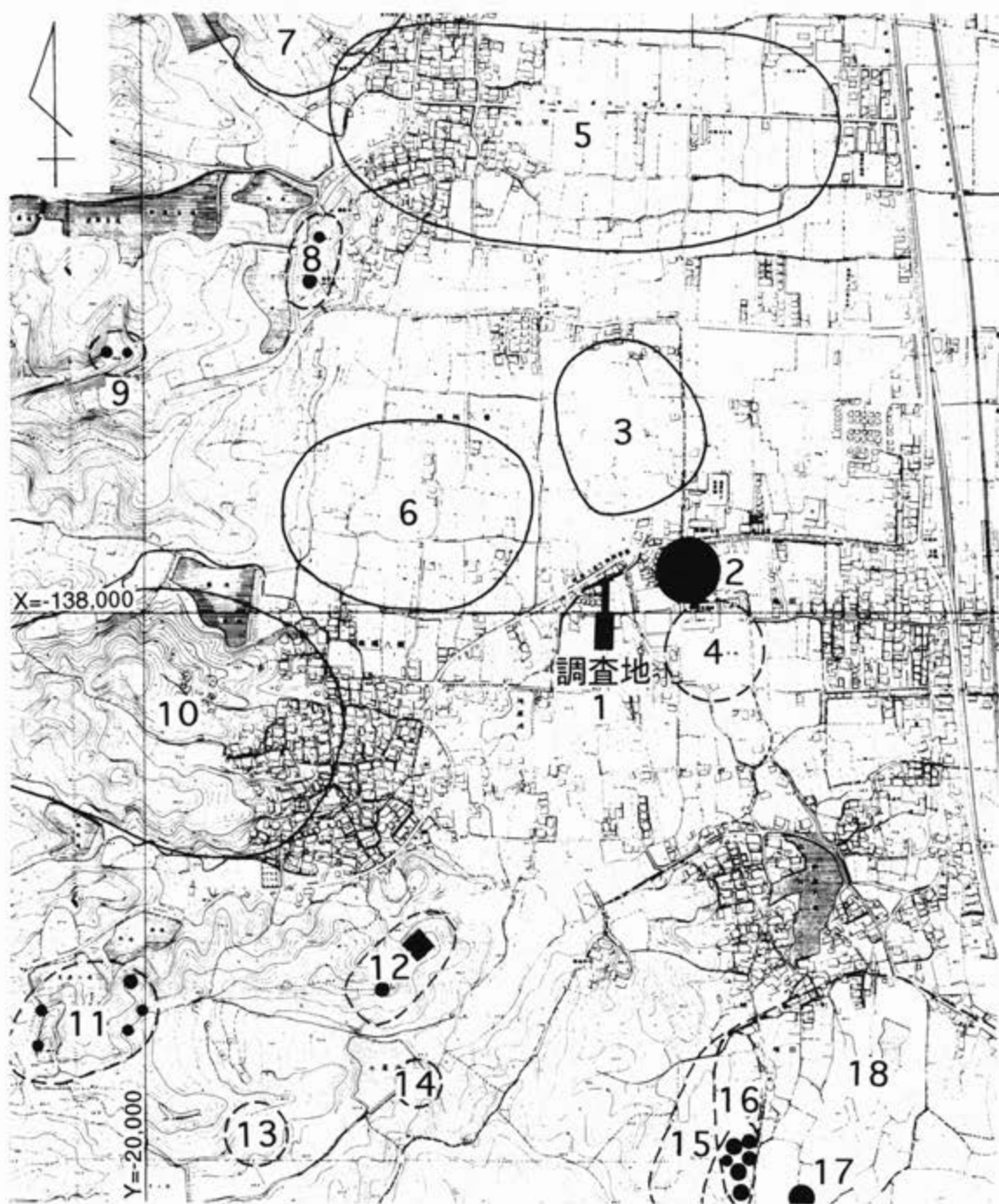
森垣外遺跡は、木津川左岸の、南西から北東に広がる台地の端部に位置し、北東方向には、精華町の中央部から北部にかけての広い沖積地が展開する。調査地の東約100mには丸山古墳と呼ばれる円形の小山があり、ながく古墳か否かの判断が保留されていたが、1986年に精華町教育委員会により発掘調査が行われ、古墳の兆候は確認されなかった^(注1)。北側隣接地には、中世・奈良・古墳時代の遺物や古墳時代の祭祀跡と考えられる遺構などが確認された北尻遺跡^(注2)がある。南は低丘陵を挟んで、畑ノ前遺跡が広がる。畑ノ前遺跡では、弥生時代中期の集落や、古墳時代後期の畑ノ前古墳群、奈良時代の掘立柱建物跡群が見つかった^(注3)。東側の丘陵部には、山城国一揆関係の城として知られる稲屋妻城跡と推定されている政ヶ谷遺跡が存在する。

調査地付近には棚田状の水田が営まれ、精華町の中心部に見られる条里地割りの南西部分にあ



第87図 調査地位置図(1/50,000)

たり、歴史地理学の成果によれば、付近はほぼ正方位の相楽郡条里内の荒陵里に含まれるといわれている。中世には、調査地北側一帯に稲八妻荘があったとされ、調査地付近がこの荘園に含まれていた可能性もある(第87・88図、図版第53-(1))。



第88図 調査地周辺遺跡分布図(1/10,000)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 森垣外遺跡 | 2. 丸山古墳 | 3. 北尻遺跡 | 4. 祝園遺跡 | 5. 北稲遺跡 |
| 6. 南稲遺跡 | 7. 城山遺跡 | 8. 国名平古墳群 | 9. 胡麻谷古墳群 | 10. 政ヶ谷遺跡 |
| 11. 砂留古墳群 | 12. 蔭山古墳群 | 13. 堂所遺跡 | 14. 水落遺跡 | 15. 畑ノ前遺跡 |
| 16. 畑ノ前古墳群 | 17. 植田大塚古墳 | 18. 畑ノ前東遺跡 | | |

調査期間は平成8年12月17日～平成9年2月13日で、調査面積は約340㎡である。調査に係わる経費は、全額京都府土木建築部が負担した。

現地の調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員有井広幸が担当し、執筆は有井が担当した。写真は、遺構を有井が、遺物を引原がそれぞれ撮影した。調査にあたり、地域の方がたをはじめ、精華町教育委員会、京都府木津土木事務所、精華町区画整理課などの関係機関、調査補助員、整理員諸氏の協力をいただいた^(18.5)。記して感謝する。

2. 調査の内容

調査トレンチは、路線方向と地形に沿って南北方向に4か所設置した。いずれのトレンチでも、中世・古墳時代の各包含層の分布と、各時代の遺構が確認できた(第89図)。

a. 基本層序(第90図、図版第53-(2)・(3))

今回の調査地周辺には、南西から北東方向にゆるやかに傾斜する台地の斜面に棚田状に水田が広がる。調査地最高所の16bt付近の水田面は標高約41.1m、18bt付近で約40.6m、17bt付近で約40.2m、11bt付近で約39.7m、最も低い10bt付近で約39.2mを測る。今回、北向きに設定したトレンチの古墳時代以降の遺物包含層の厚さは、各トレンチとも北に行くにつれ厚みを増す。暗褐色系の古墳時代の包含層は、各水田の南側では中世以降の水田造成による削平でほとんど残らず、現耕作土直下で遺構面となる。古墳時代の遺構面は、明黄灰色シルトまたは灰色微砂の地山検出面(標高約40.7～38.6m)に広がる。

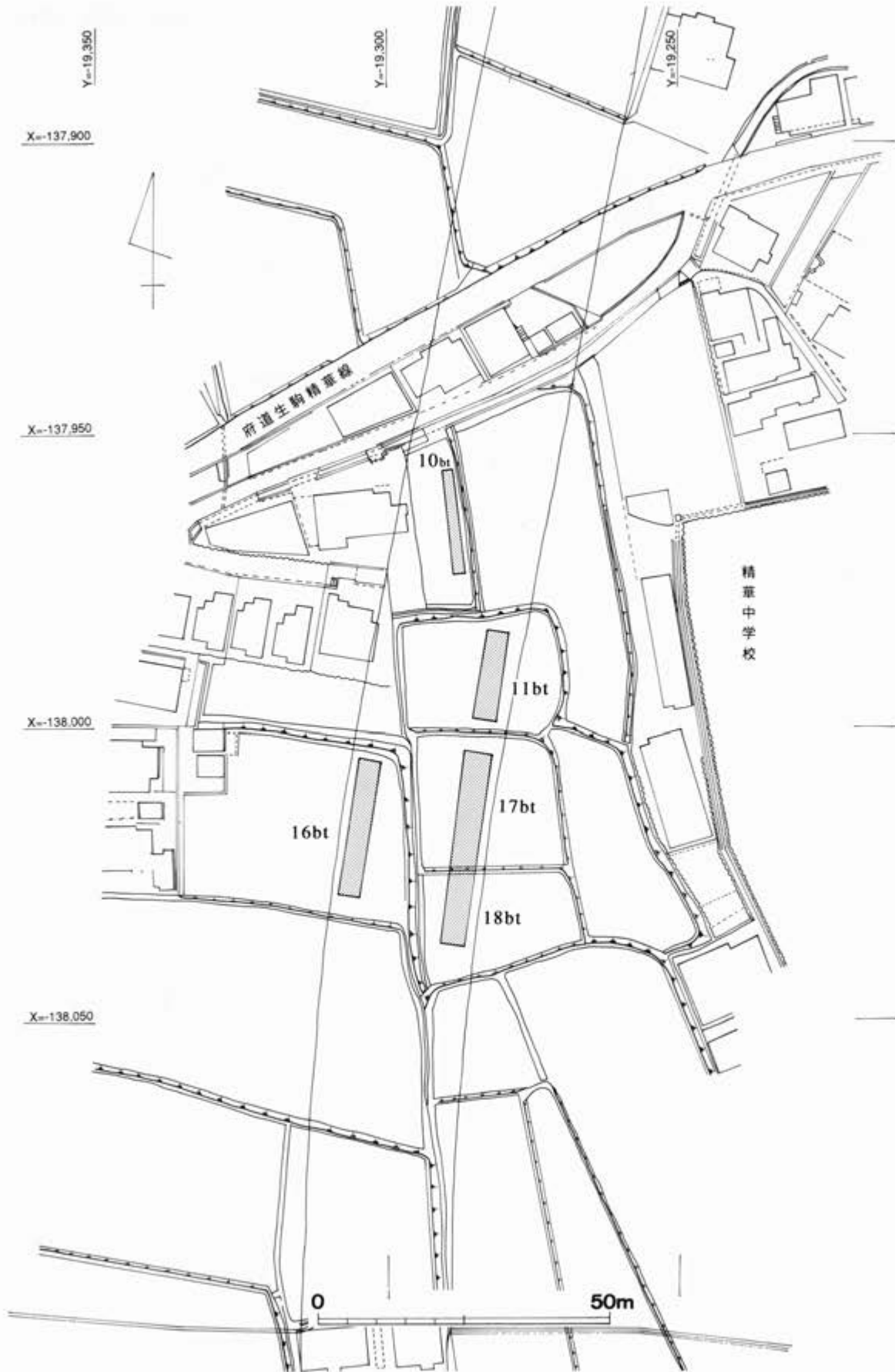
灰色系の中世の包含層は、16・18bt南端付近を除いて各トレンチ全域で確認できた。この層は、ほぼ水平に堆積するが、各トレンチとも北側で厚くなり、約0.2～0.3mになるところもある。土層断面の観察から、中世以後近世にかけて水田面積が徐々に拡大した状況が確認できた。中世遺構面は、古墳時代包含層直上に広がる(標高約40.7～38.7m)。

b. 各トレンチの検出遺構(第91図、図版第54～57)

10bt 10番地に設置した、2m×18mの規模のトレンチである。すぐ北側を河川が流れるため、その影響が懸念されたが、河川による堆積はなく、旧河道はさらに北側に位置し^(18.6)、用水関連で現在の場所に移された可能性がある。中世の遺構は、条里に沿う南北方向の耕作溝2条、ピット5か所を確認した。古墳時代では、溝3条、土坑2基、ピット列1、他ピット10数個を確認した。トレンチ中央付近で検出したS D186は、南東・北西方向に続く。検出長約2m・幅約1.4m・深さ約0.2mの規模で、断面が弓形である。

遺物は、中世包含層・遺構から瓦器片・土師器片、古墳時代包含層・遺構から須恵器甕片・杯身・杯蓋、土師器片がそれぞれ出土した。古墳時代の溝S D186から、須恵器杯身、土師器片がまとめて出土したほか、滑石製有孔円板1点(13)も出土した。時期は、古墳時代中期末頃である。

11bt 11番地に設置した、4m×15m規模のトレンチである。中世の遺構は、トレンチ全域で条里に沿った南北方向・東西方向の耕作溝16条を確認した。古墳時代では、トレンチ中央東側の



第89図 トレンチ配置図(1/1,000)

S D85は、検出長約5.5m・幅約1.3m・深さ約0.4m、断面逆台形で円弧を描く。ほぼ完形の須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯・甌がまとまって出土した。このほか、大小の溝、ピット、トレンチ北端で土坑1基(竪穴式住居跡?)を検出した。

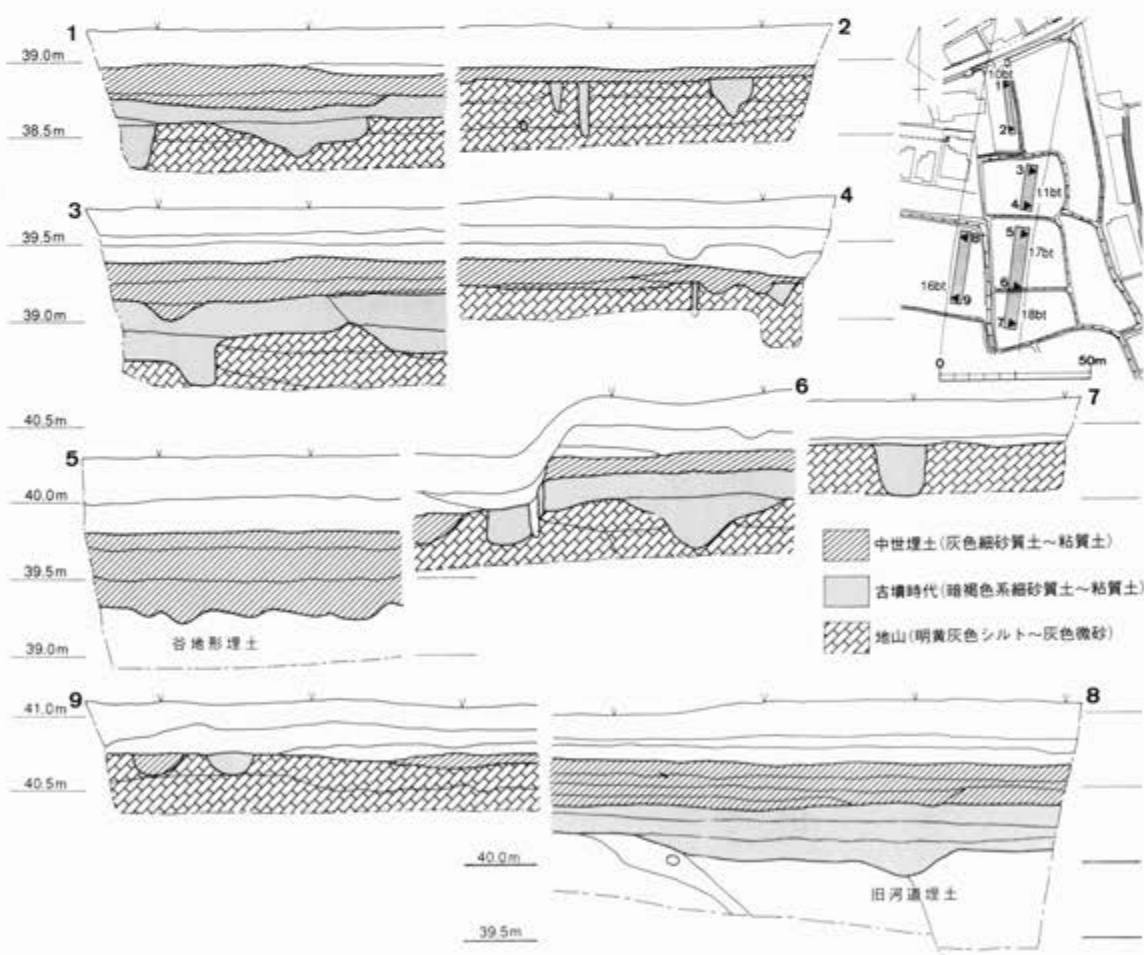
遺物は、中世の瓦器片・土師器片、古墳時代中期末頃の須恵器・土師器が出土している。

16bt 16番地に設置した、4m×26m規模のトレンチである。中世の遺構としては、南半部に条里に沿った南北方向・東西方向の耕作溝6条を、また北半部では等高線にほぼ沿う、条里に対して斜め方向の耕作溝10条を確認した。古墳時代では、南半部で2棟の掘立柱建物跡(S B 141・148)と多数のピット群、北半部で土坑2基(竪穴式住居跡?)、北端で土師器・炭の混じった直径約1mの不整形土坑S K 109や溝S D 108を検出した。また、北端では、時期・規模不明の旧河川NR04の南岸を確認した。

遺物は、中世関係では、瓦器片・土師器片、古墳時代では、古墳時代中期末頃の須恵器・土師器が出土している。掘立柱建物跡付近では、完形の須恵器杯身1点がピット内から出土した。また、NR04付近の側溝から弥生時代のサヌカイト製石鏃が1点出土している。

17・18bt 17番地から18番地にかけて設定した、4m×35m規模のトレンチである。

中世の遺構は、17btでは、中央部に条里に沿った南北・東西方向の耕作溝9条、土坑2基(S



第90図 トレンチ土層断面図(1/40)



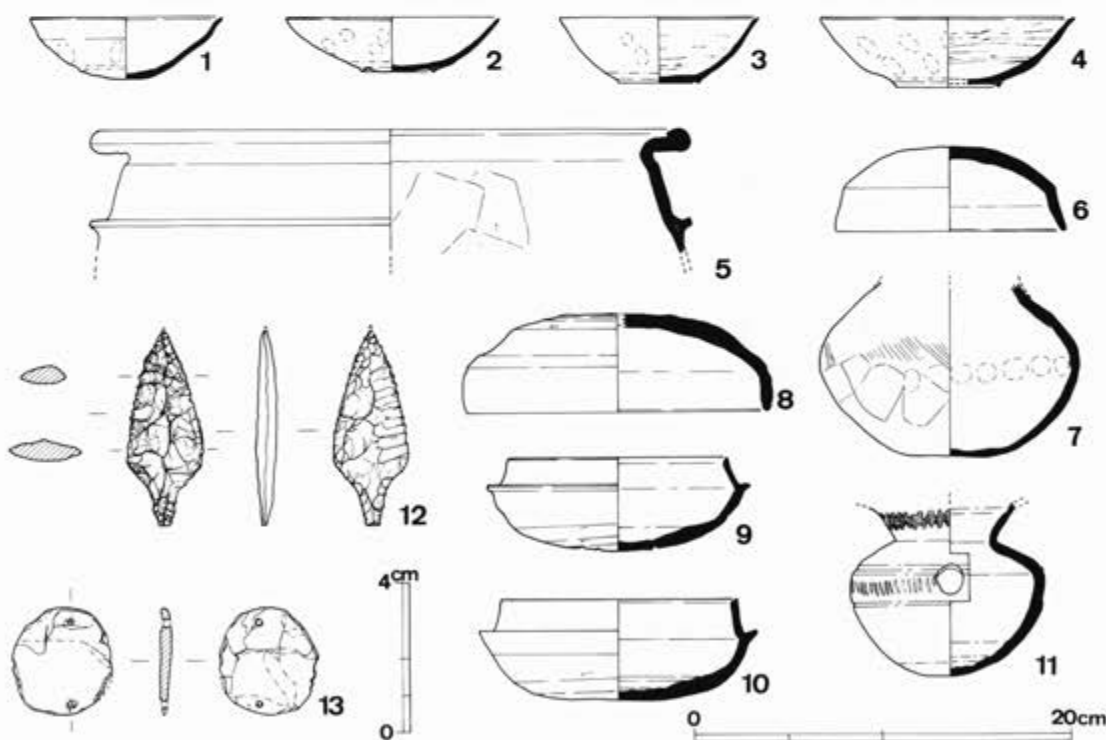
中世遺構

古墳時代遺構

第91図 遺構全体図(1/400)

K01・256)、北半部で掘立柱建物跡S B75(2間×2間)・S B65(1間以上×2間以上)の2棟、ピット群などを検出した。各掘立柱建物跡の一部柱穴には根石を伴っている。S K01・256は、幅約0.5m・深さ約0.2mの規模で、ともに床面西端から拳大の石が枕にしたように出土し、土壇墓になると考えている。また、曲物の入った井戸S E64は、直径約0.6m、一部を掘り下げて作業を中止したため深さは不明である。S K04は、谷地形の一部になると思われる、中世頃に埋没した深さ約0.4mの窪地である。その南側の円弧を描く溝S D02はこの窪地につながる。18btでは、南半部で条里に沿った南北・東西方向の耕作溝10数条、北半部で等高線に沿った耕作溝10数条を検出し、掘立柱建物跡1棟S B47(2間×2間以上)も確認した。3棟の掘立柱建物跡のピット内(P-177・75・49)や溝、井戸からは、14世紀前後の瓦器片・土師器羽釜・白磁片などが出土しており、集落の一部を確認した(図版第55)。また、17btの建物跡付近からは鉄滓が出土しており、周辺で鍛冶作業を行っていた可能性がある。

古墳時代では、17bt中央部から北側にかけて土坑S K244やピット群を確認し、一部は掘立柱建物跡S B236(2間以上×2間以上)になる。17bt中央部から18bt中央部にかけては、南西から北東方向に続く、ほぼ平行する溝4条(S D223・227・228・235)を確認した。S D223からは須恵器甕・^{はそう}甕・杯類がコンテナ4箱ほど出土した。18bt南半部では、須恵器甕を伴う土坑S K254、溝S D210・221のほか、ピット群を確認した。遺物は、古墳時代中期末頃の須恵器甕・杯身・杯蓋、土師器高杯・甌などが出土している。



第92図 出土遺物実測図(石製品1/2、他は1/4)

- | | | | |
|---------------------|-----------------|---------------|-----------------|
| 1・5. 18bt 包含層 | 2・3. 18bt S B47 | 4. 17bt S D02 | 6. 11bt 包含層 |
| 7・9・10. 11bt S D223 | 11. 18bt S D223 | 12. 16bt 包含層 | 13. 10bt S D186 |

c. 出土遺物(第92図、図版第58)

提示した遺物は一部のもので、出土遺物の総量は整理用コンテナで25箱に達した。

1～4は、17・18btから出土した瓦器碗である。口縁端部内側に浅い沈線が残り、内面に粗いミガキを施す。高台部分は、細い粘土紐を無造作に貼り付けている。5は、18btから出土した土師質の羽釜片である。6・7は、11btから出土した土師器である。6は、須恵器の蓋に似た器形で、外面はナデで仕上げ、内面天井部は指オサエの後ナデを施す。外面端部に一部黒斑がある。7は、直口壺の口縁のみを欠く例である。8～10は11bt、11は18btから出土した須恵器である。8・9は軟質の焼成で、9は外面底部に粘土紐の痕跡が残る。12は、16bt出土のサヌカイト製石鏝で先端部を一部欠く。13は、10bt出土の滑石製有孔円板である。両面に剝離痕の段差が残り、縁には2か所出土時に付いた傷がある。二つの穴は片側から穿ち、逆面の穴の周囲に穿孔の影響による小さな剝離痕が残る。

3. ま と め

調査地全域で中世の条里に伴う耕作跡とともに、集落の一部を、また、古墳時代中期末頃の集落の一部とそれに付随する遺構を確認した。中世の遺構は、遺物から14世紀前後(鎌倉時代末)を中心とした時期で、掘立柱建物跡3棟・井戸1基などがあり、未掘部分に集落が広がっていると考えている。鉄滓も出土しており、付近で鍛冶作業をしていたとみられる。

古墳時代の遺構は、掘立柱建物跡群、竪穴式住居跡の可能性のある土坑があり、溝などから残りのよい土器も多く出土しており、調査地周辺からさらに南側の丘陵部にかけて集落が広がっている可能性がある。

今回の調査地周辺から南の台地付近は、今まで調査が行われたことがなく、今後さらにこの遺跡の内容が明らかになるよう調査の進展が望まれる。

(有井広幸)

注1 平良泰久『精華町史』史料篇I 1989 83～96頁参照。

注2 伊賀高広「北尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注3 注1文献、7～62頁参照。

注4 足利健亮『精華町史』本文篇 1996 第四章第五節、235～245頁参照。

注5 調査に参加していただいた方がたは以下のとおりである(敬称略)。

五百髻顕一・小原志奈子・小松厚子・坂手華子・三浦公靖・室林由香・山口良太・青木満理子・新谷二三代・林 益美・古川良子・芳谷興子

注6 調査地南西の谷から流れてくるこの小河川は北尻遺跡内を流れていた可能性がある。注2文献の105～108頁で、古墳時代から中世にかけての遺物を含む自然河道が検出されており、この旧流路が本来の河川の位置であろう。

圖 版



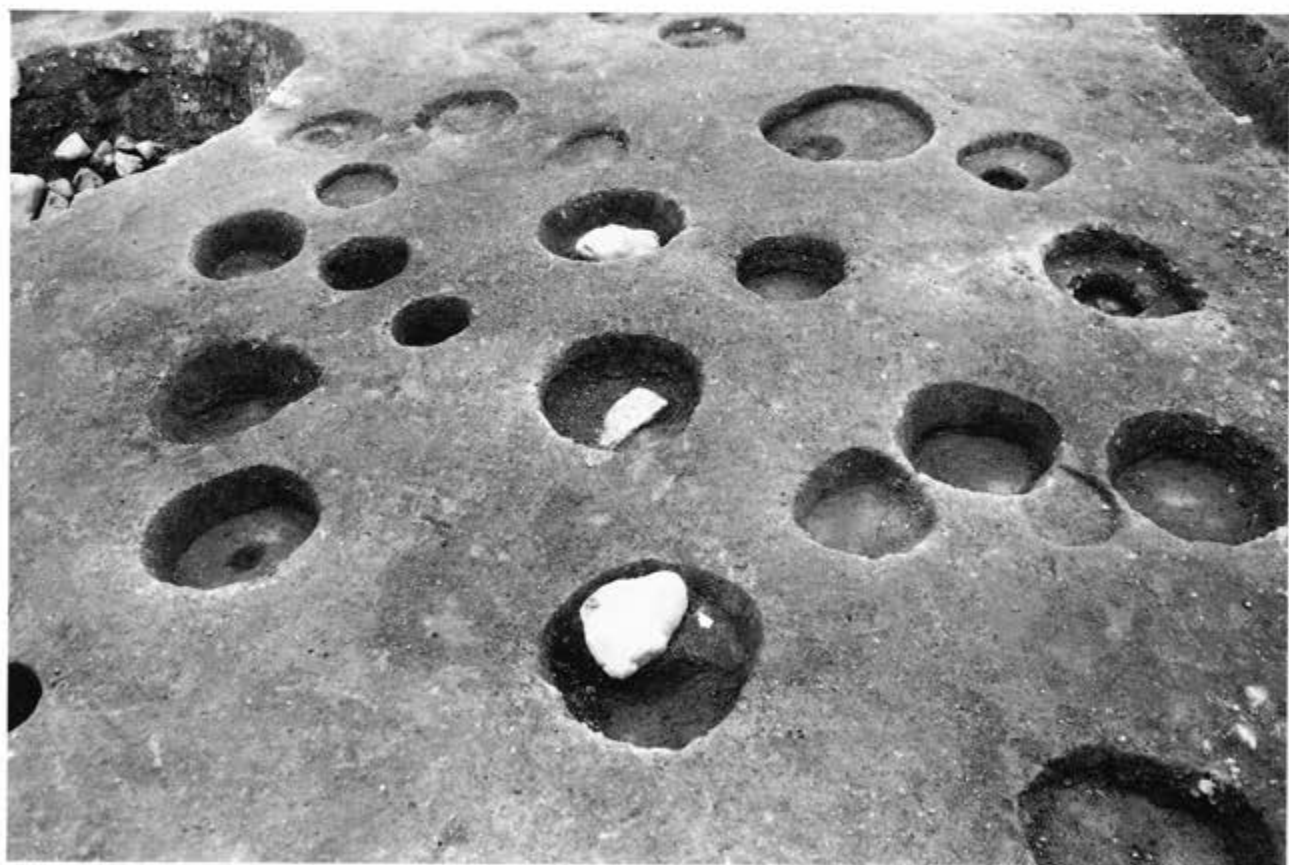
(1)第1区遺構検出状況(東から)



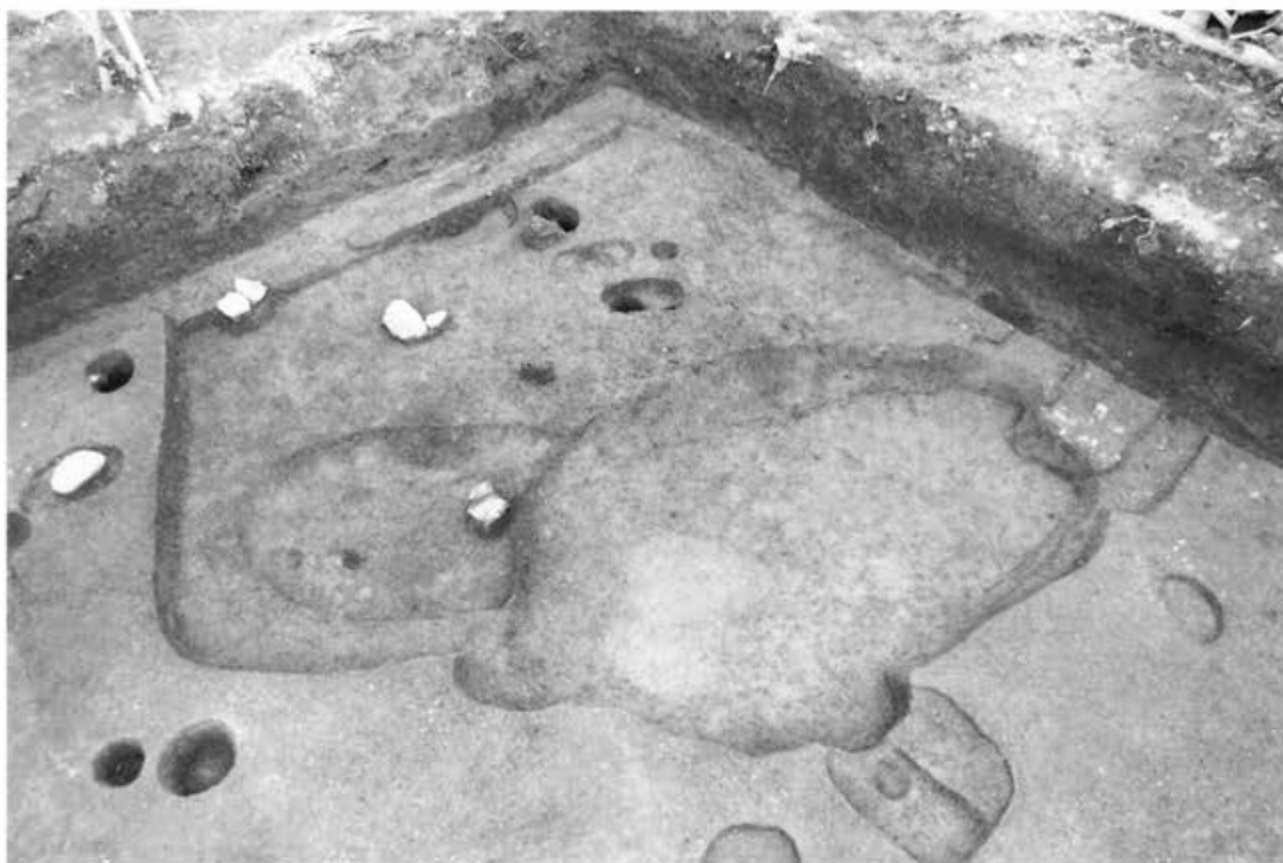
(2)第1区SK01検出状況(南から)



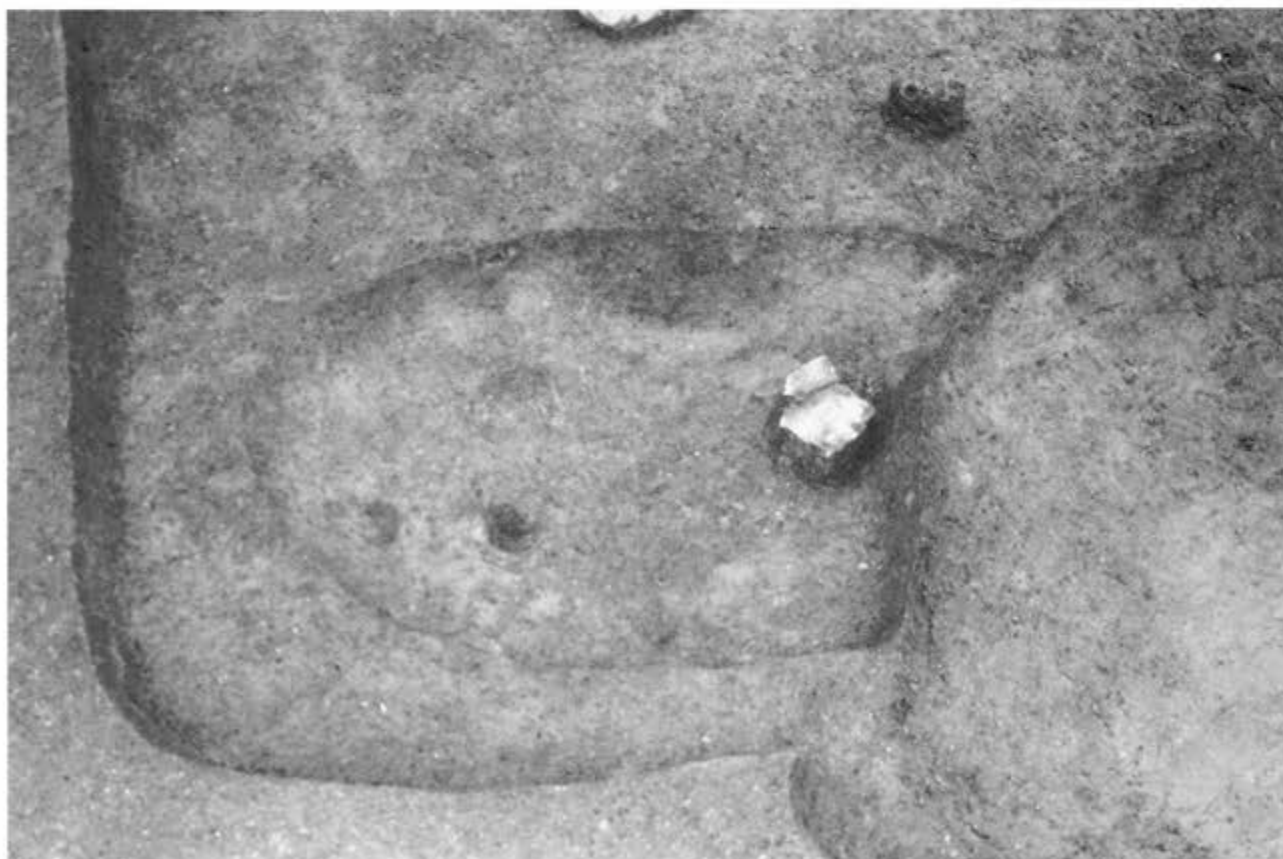
(1)第2区遺構検出状況(西から)



(2)第2区S A01検出状況(北から)



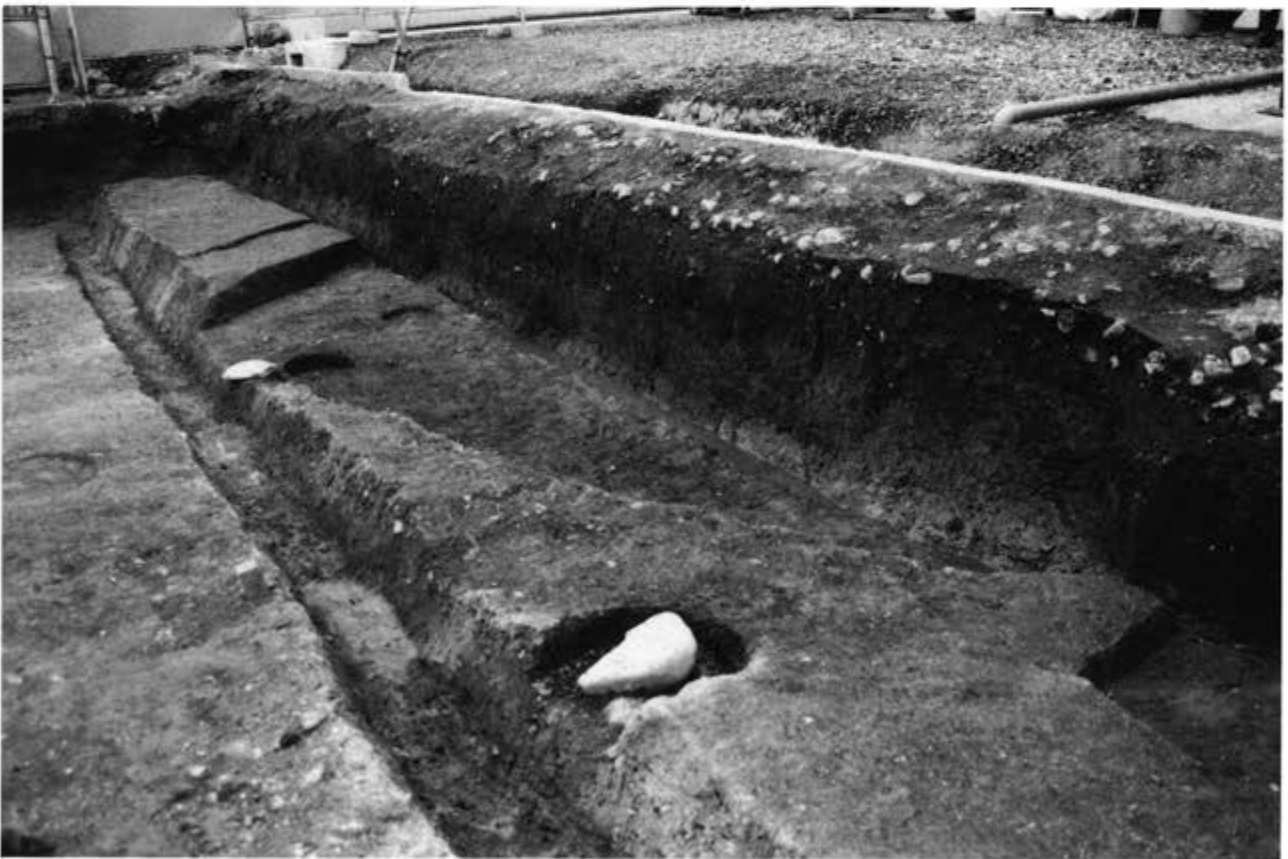
(1)第2区S H01検出状況(南から)



(2)第2区S K01検出状況(南から)



(1)SH02・SH03検出状況（東から）



(2)SH02・SH03検出状況（北東から）



(1) S H01遺物出土状況



(2) S H02・S H03遺物出土状況

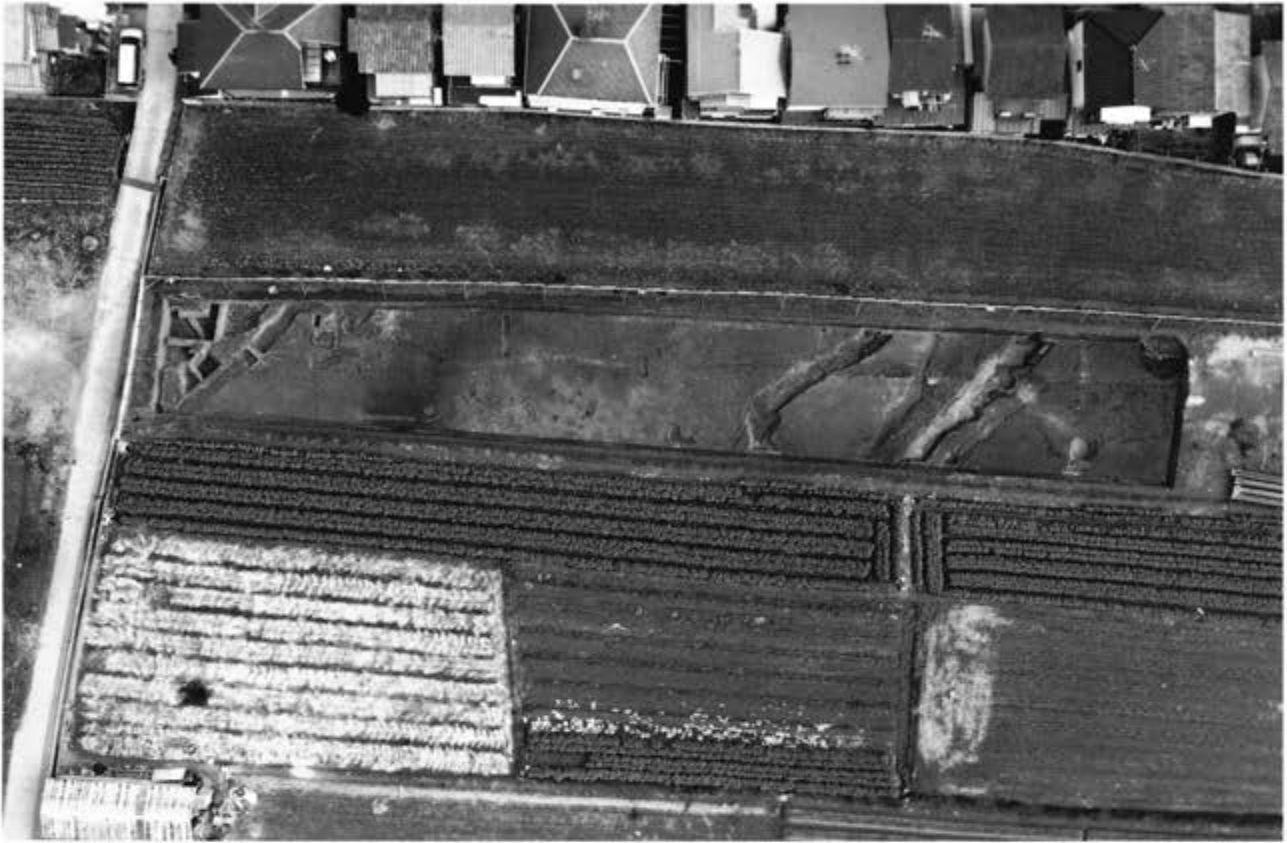




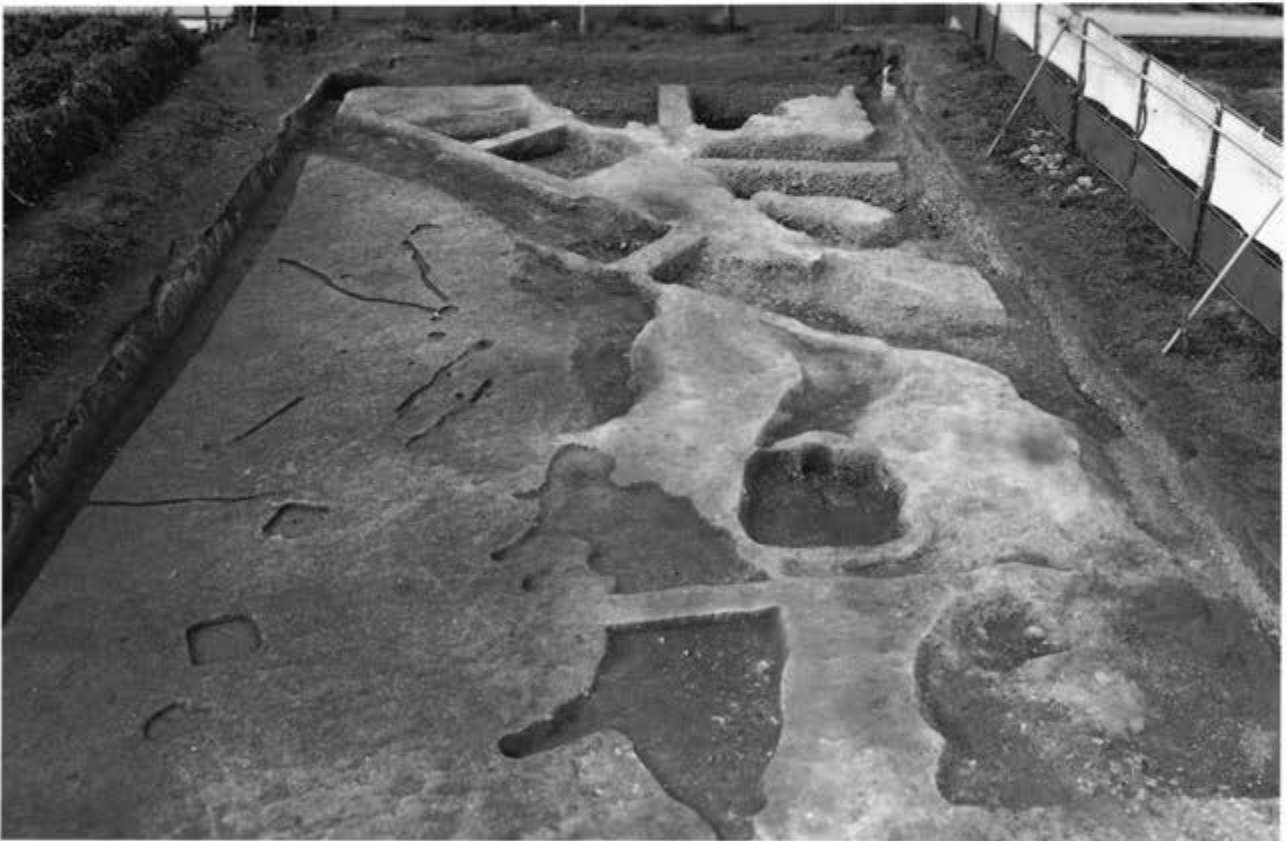
(1)調査地全景 (南から)



(2)調査地全景 (左が北)



(1)北地区全景(左が北)



(2)北地区北部遺構検出状況(南から)



(1)土坑S K54703遺物出土状況（北西から）



(2)土坑S K54703出土土器細部（南東から）



(1)井戸跡S E54718堆積状況(西から)



(2)井戸跡S E54718遺物出土状況(西から)



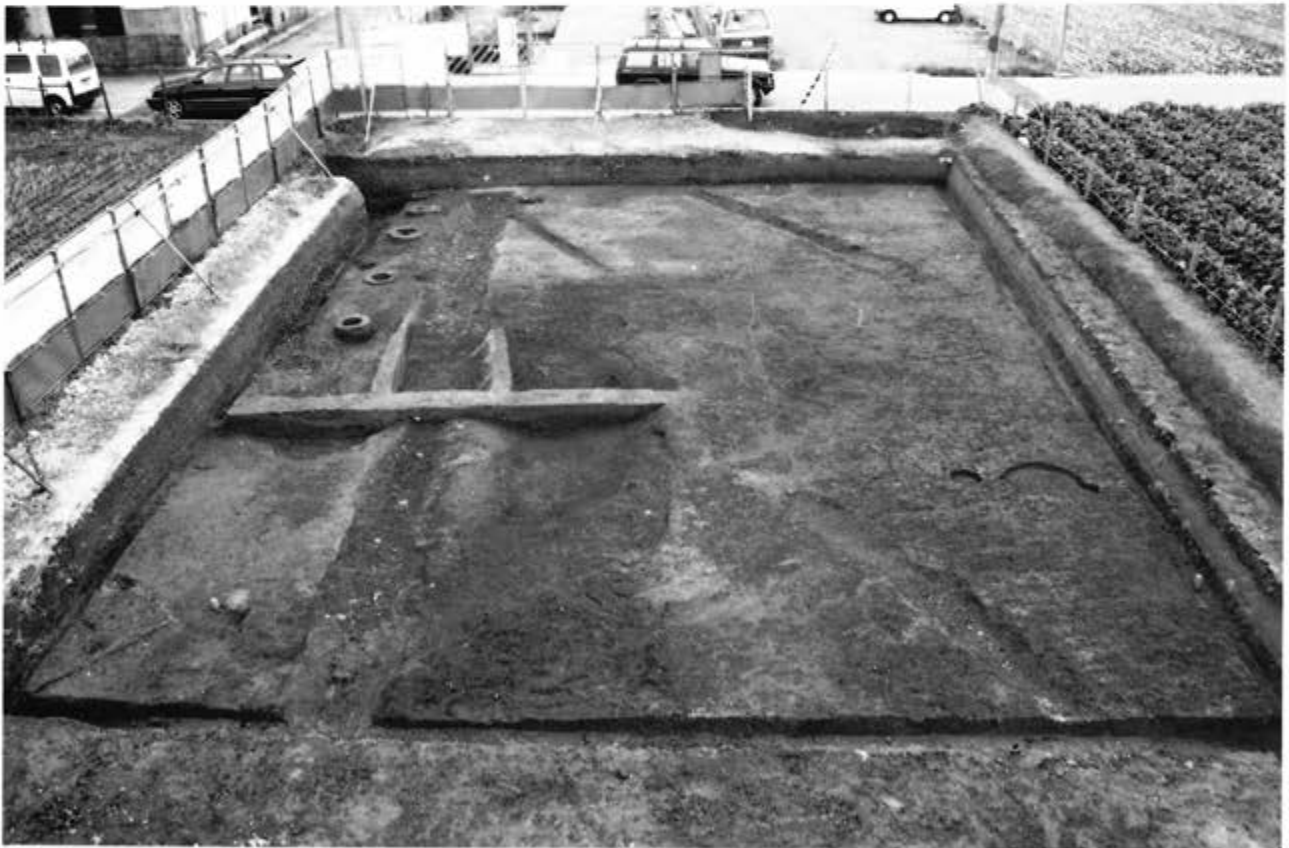
(1)井戸跡S E54718完掘状況(東から)



(2)北地区主要部の状況(南から)



(1)溝跡 S D54715埋土の状況 (北西から)



(2)北地区拡張部全景 (北から)

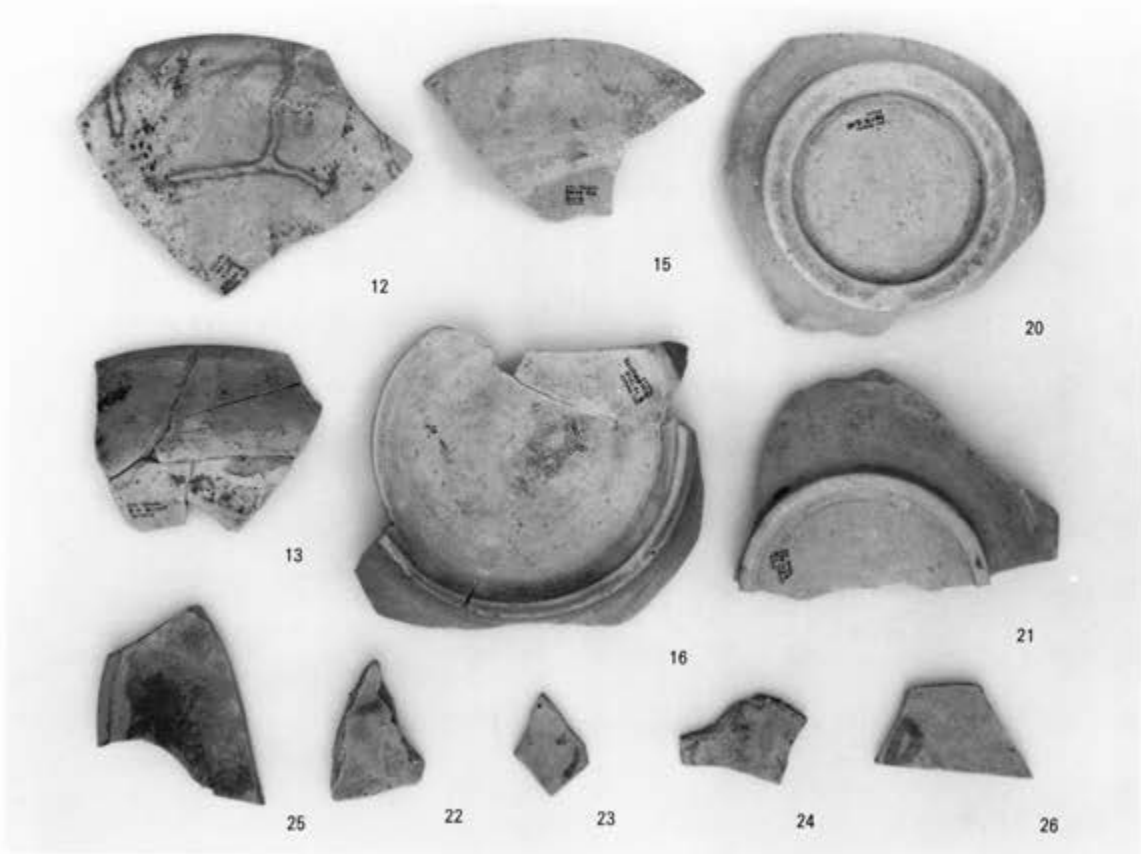
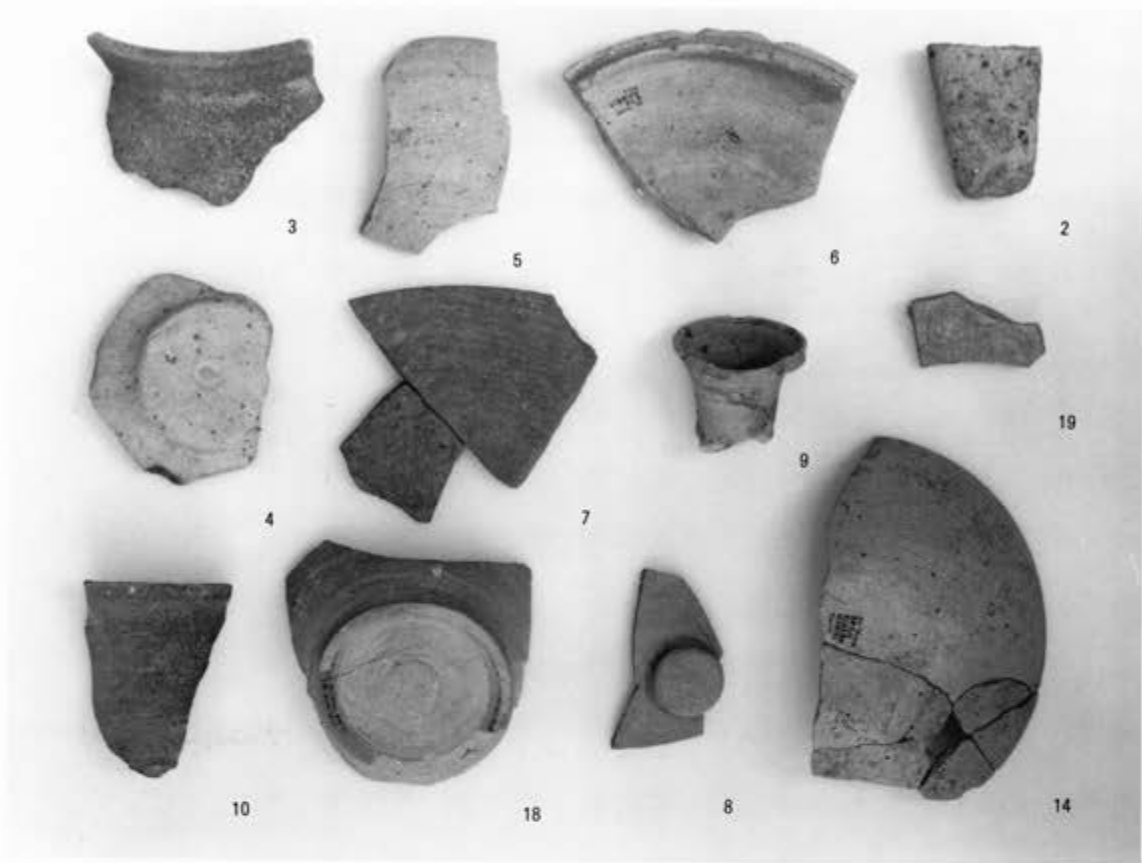


(1)南地区上層遺構全景(南から)



(2)南地区下層遺構全景(南から)

図版第14 長岡京跡右京第547次



出土遺物(1)



30



31



34



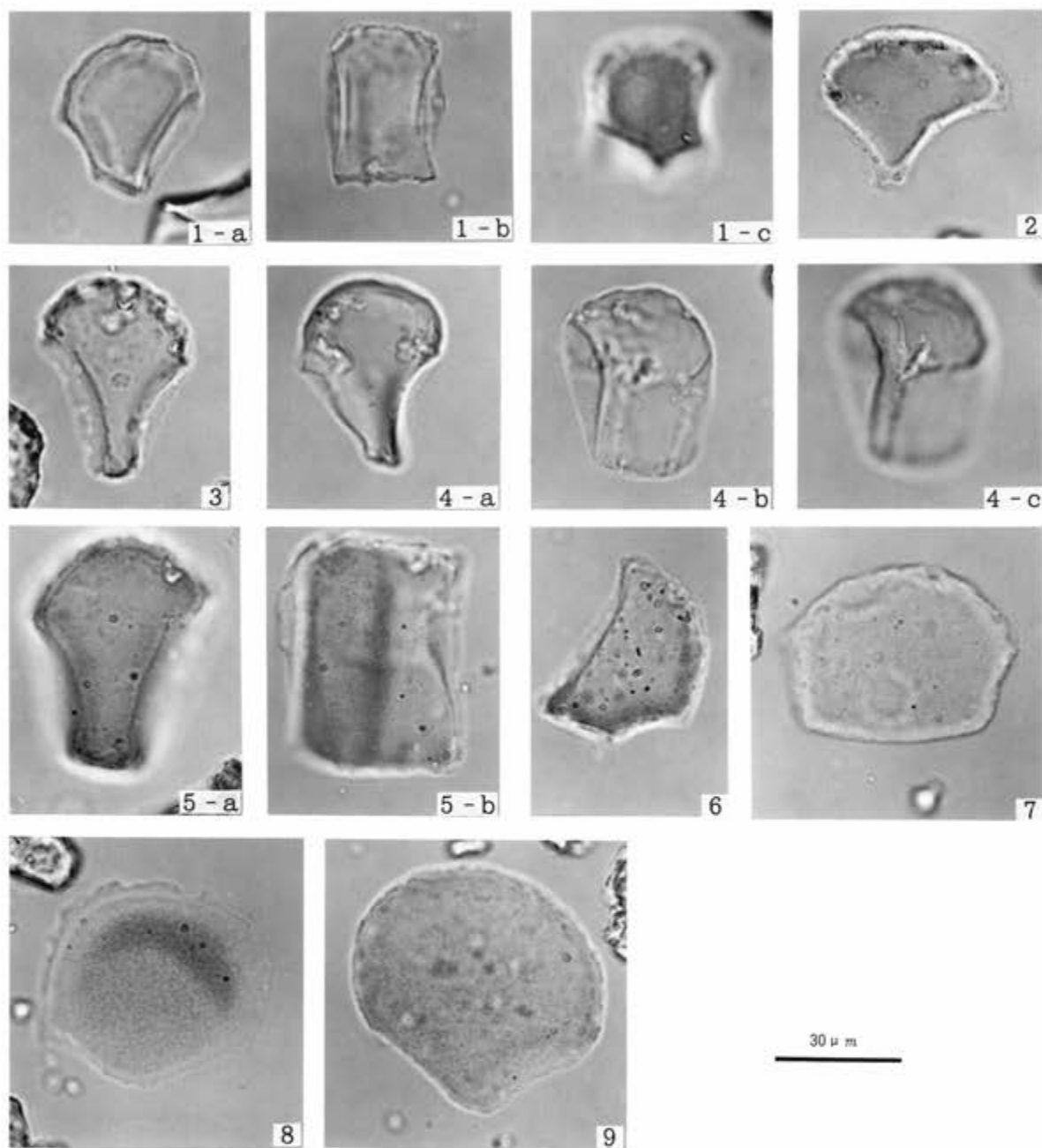
27



29



28



長岡京跡の植物珪酸体

1~4 : イネ (1-a, 2, 3, 4-a : 断面、1-b, 4-b, -c : 側面、1-c : 裏面)

1 : 試料3、2, 3 : 試料4、4 : 試料6

5 : ネザサ節型 (5-a : 断面、5-b : 側面) 試料4

6 : クマザサ属型 (断面) 試料3

7 : ジュズダマ属 (断面) 試料9

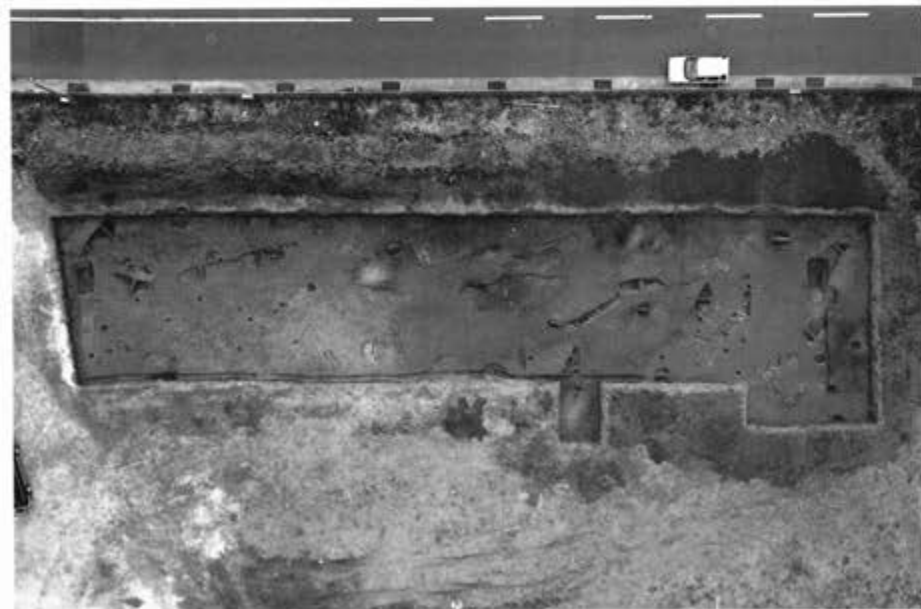
8、9 : ヨシ属 (断面) 試料9



(1)第1トレンチ
調査前全景（東から）



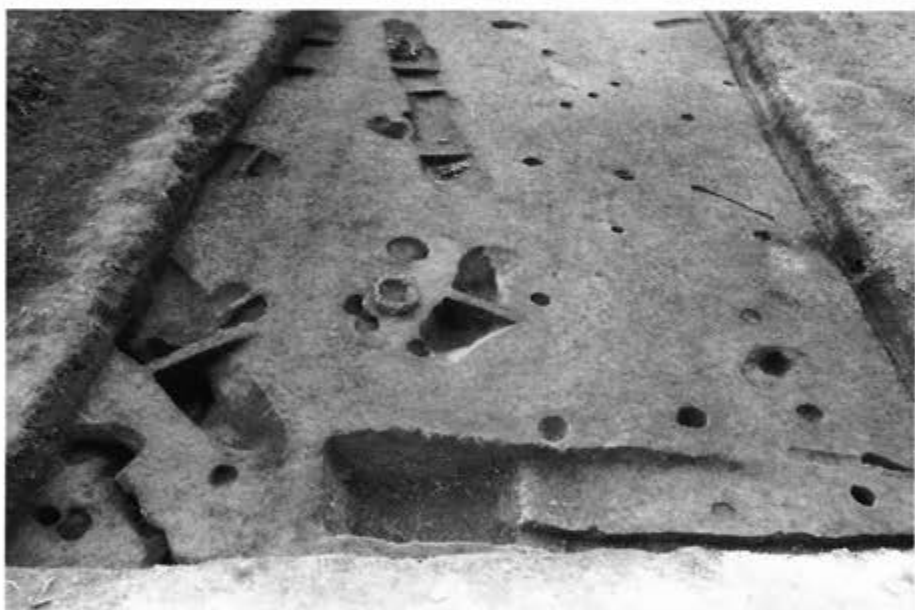
(2)調査地遠景（北東から）



(3)第1トレンチ全景



(1)第1トレンチ
北壁土層断面(南から)



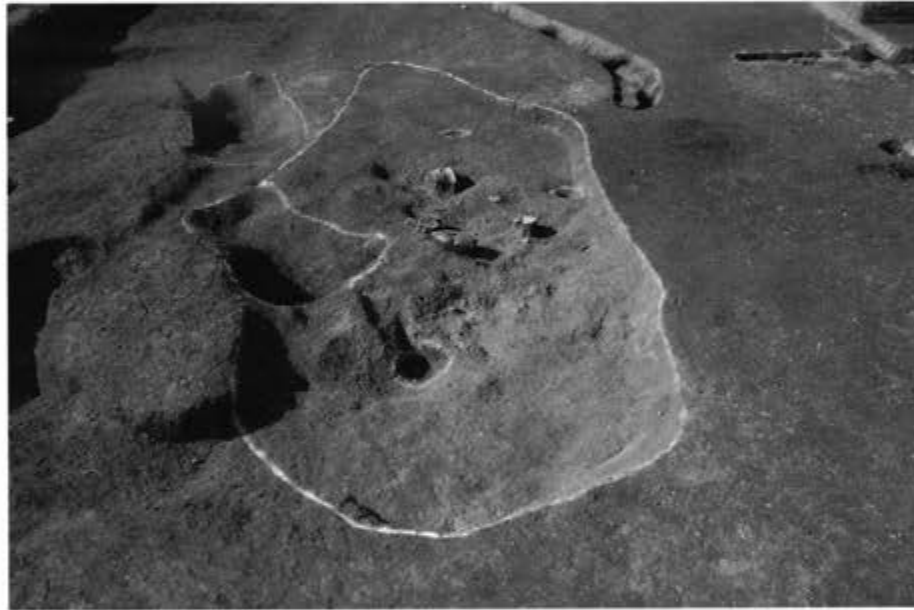
(2)第1トレンチ
溝S D03・13・21(東から)
〈方形周溝墓か〉



(3)第1トレンチ
溝S D03遺物出土状況
(北から)



(1)第1トレンチ
土坑S K02検出状況



(2)第1トレンチ
土坑S K02 (東から)



(3)第1トレンチ
土坑S K02遺物出土状況



(1)第1トレンチ
溝SD15(南から)



(2)第2トレンチ
掘立柱建物跡SB20



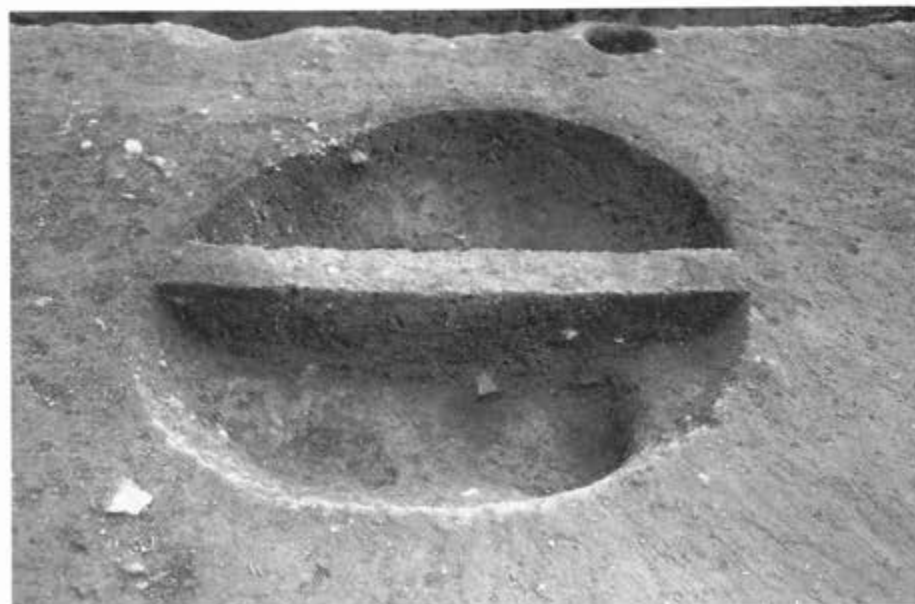
(3)第2トレンチ全景



(1)第2トレンチ
土坑群(東から)



(2)第2トレンチ
土坑S K101・102・103
(東から)



(3)第2トレンチ
土坑S K106(北から)



7



27



1



38



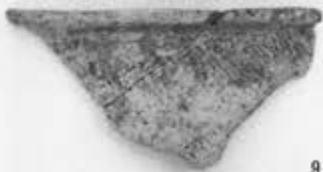
26



45



6



9



10



15



17



36



16



37



46



47



48



43



1



1



2



2



16



16



4



4



5



5



17

17



18

18



12



6



6



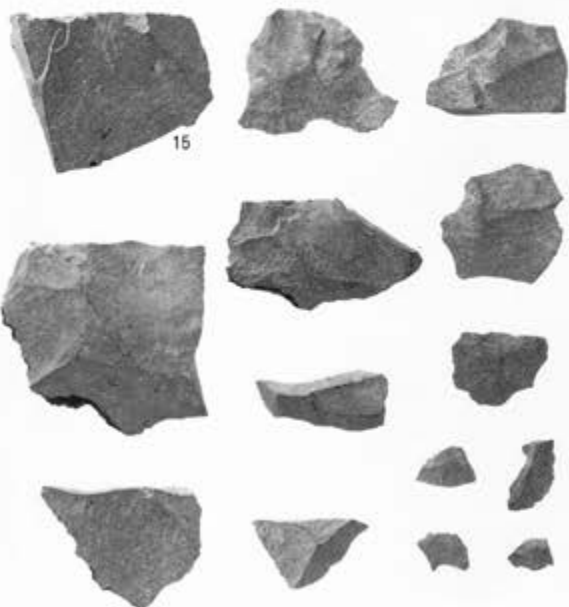
12



8



8



15



3



(1)菟道遺跡調査前風景（南から）



(2)菟道遺跡調査トレンチ全景（南から）



(1)菟道遺跡北トレンチ中・下層 (南から)



(2)菟道遺跡南トレンチ下層 (北から)



(3)菟道遺跡試掘A地点 (南から)



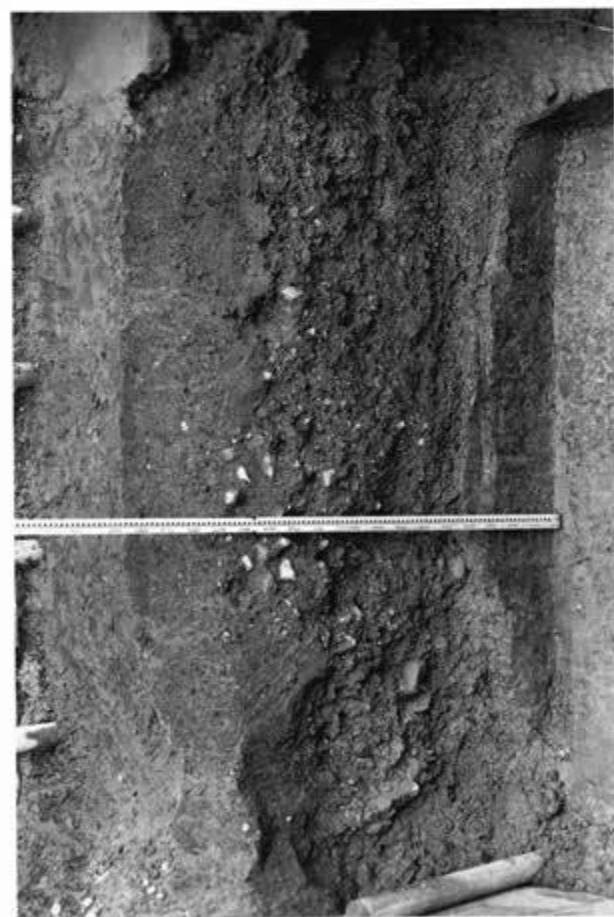
(4)菟道遺跡試掘B地点 (南西から)



(3)菟道遺跡北トレンチ東壁断面



(4)菟道遺跡北トレンチ南壁断面



(1)菟道遺跡南トレンチ東壁断面



(2)菟道遺跡作業風景



(1)西準上り遺跡調査前風景（北から）



(2)西準上り遺跡調査トレンチ全景（南から）



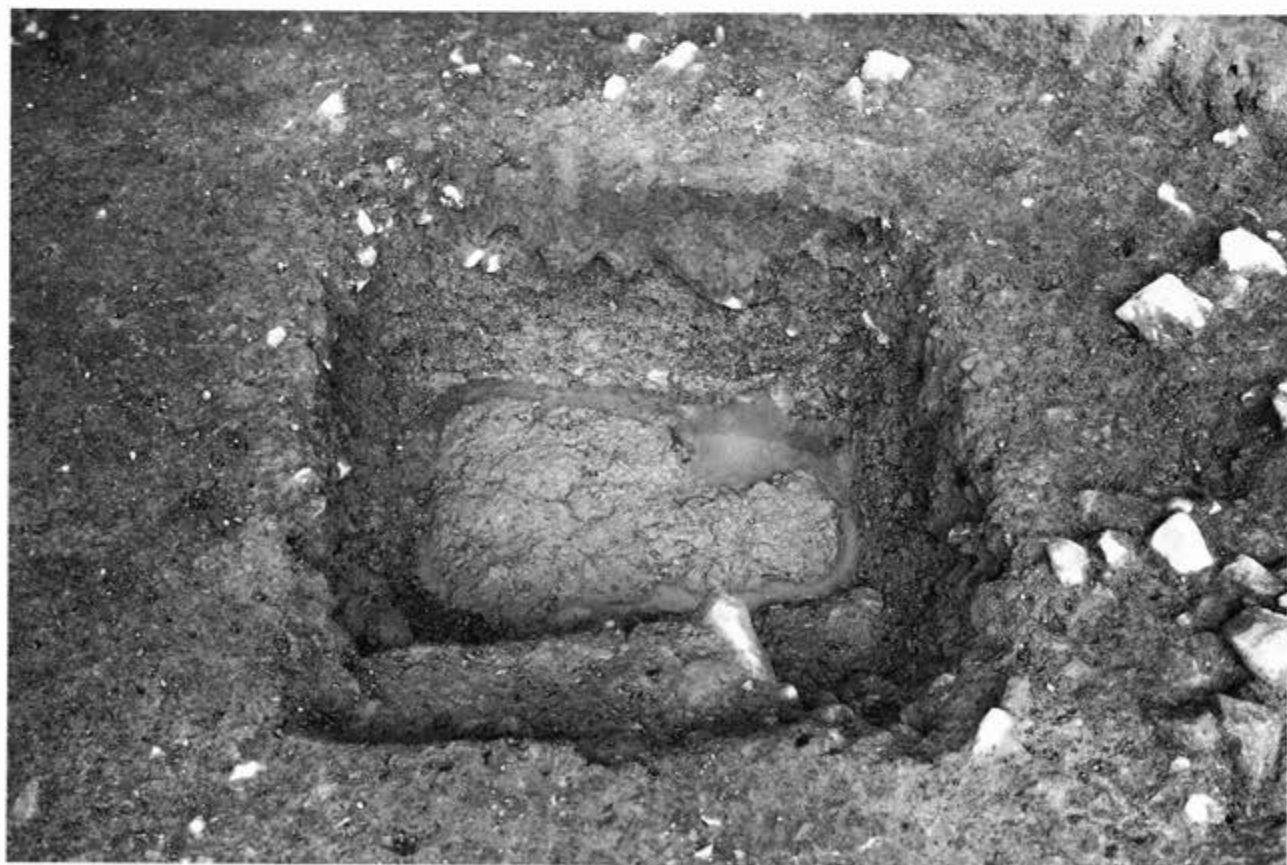
(1)西隼上り遺跡調査トレンチ北壁断面



(2)西隼上り遺跡調査トレンチ東壁断面



(1)西牟上り遺跡断ち割りと南壁断面



(2)西牟上り遺跡方形土坑（南西から）



(1)調査地全景（北西から）



(2)第1トレンチ精査風景（北西から）



(1)第1・第2トレンチ完掘状況（北西から）



(2)第1トレンチ南西壁断面（北から）



(1)調査地遠景（南から）



(2)調査地全景（南東から）



虎口全景（北東から）



(1)虎口平場と石段1 (北から)



(2)虎口西面の石垣 (東から)



(1)石垣下層及び平場断ち割り状況（北北東から）



(2)石垣断面（南から）



(3)石垣下層の根石据付け状況（北から）



(3)石垣部分・矢穴のある花崗岩



(4)瓦敷き排水溝2南端(東から)



(1)平場東端の城門南礎石



(2)平場東端の城門北礎石



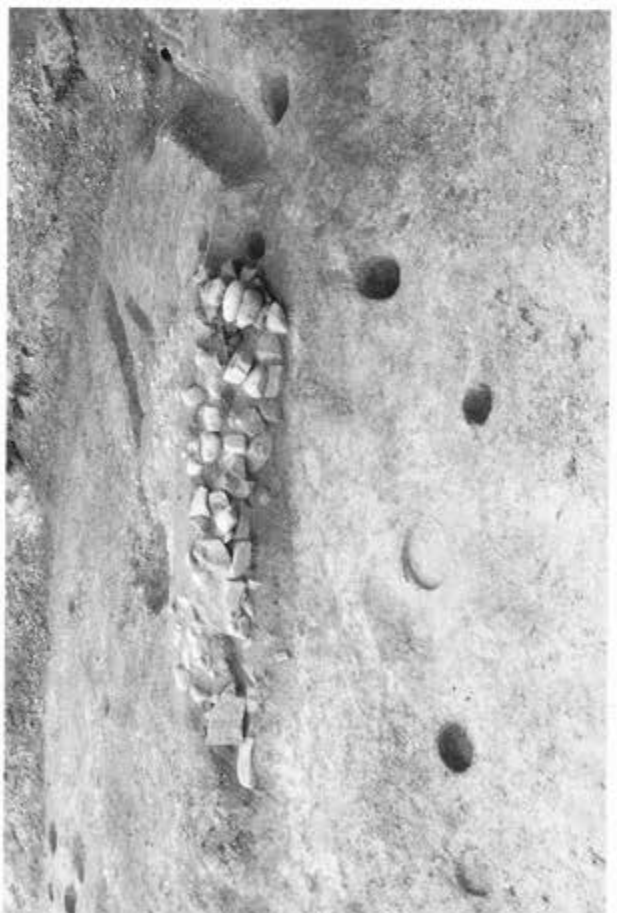
(3)瓦敷き排水溝3 (東から)



(4)平場東側の石段と排水溝 (北東から)



(1)石列 (北東から)



(2)号墳周濠底部の柱穴と石組遺構 (西から)



(1) 2号墳周濠と石組遺構ほか（南から）



(2) 暗渠排水溝1（北西から）



(3) 導水溝と柵列（東から）



(1)堀切1断面(北から)



(2)溝3(東から)



(3)溝1(西から)



(3)奥ノ城1号墳北周濠(西から)



(4)1号墳北周濠南側テラスの埴輪出土状況(南から)



(1)奥ノ城1号墳北周濠西壁土層断面



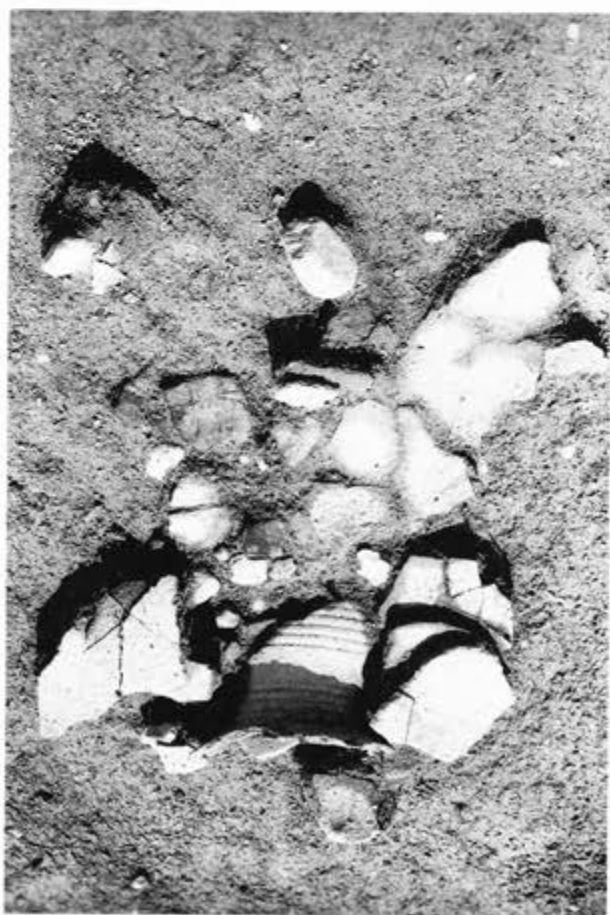
(2)奥ノ城1号墳南周濠西壁土層断面



(3)方形周溝墓(西から)



(4)方形周溝墓第1主体部(西から)



(1)方形周溝墓内土器出土状況(南から)



(2)土器棺墓(西南から)



(3) 竪穴式円形住居跡2 (東から、手前は中世土坑)



(4) 竪穴式円形住居跡3 (東から)



(1) 竪穴式円形住居跡1 (南から)



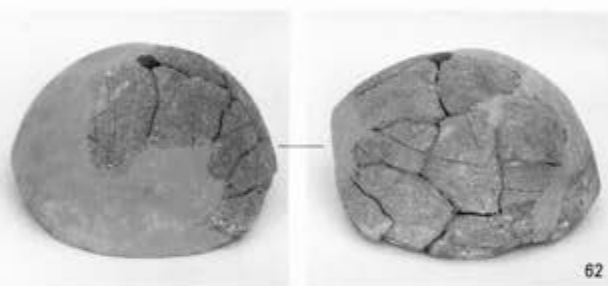
(2) 円形住居跡1の中央土坑と排水溝 (西から)



60



59



62



64



71



116





100



101



102



103



104



105



108



110



109



111



112



120



121



122



123



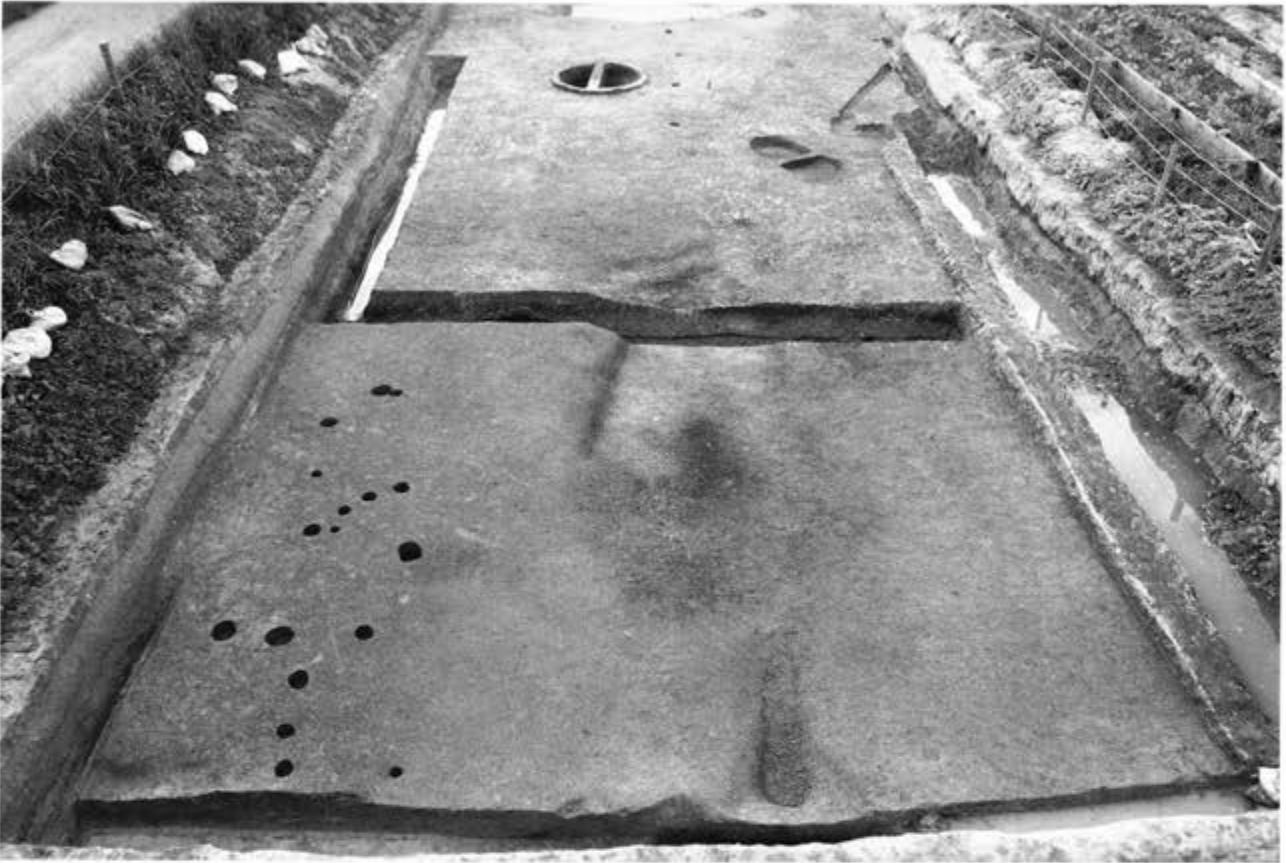
118



(1)Ⅱ区・南トレンチ全景（西から）



(2)Ⅱ区・北トレンチ西半部（西から）



(1)Ⅱ区・北トレンチ東半部(東から)



(2)Ⅱ区・北トレンチ土坑SK9603(南から)



(1)Ⅲ区全景(南から)



(2)Ⅲ区溝状遺構S D9604(北から)



(1)Ⅲ区溝状遺構 S D9605 (東から)



(2)Ⅲ区溝状遺構 S D9605遺物出土状況 (東から)



2



1



3



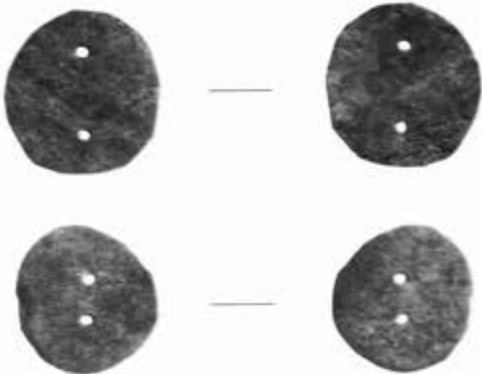
4



5



6



10

11



8



9



15



14



16



17

(1)出土遺物(2)



12



18



19

(2)出土遺物(3)

図版第53 森垣外遺跡第1次



(1)調査前風景
(南から、右端丸山古墳)



(2)16 b t 西壁断面
(南東から)



(3)17 b t 南端付近東壁断面
(西から)



(1)10 b t 中世面全景 (南から)



(2)11 b t 中世面全景 (南から)



(3)16 b t 中世面全景 (南から)



(4)17・18 b t 中世面全景 (南から)



(1)17b t 中世建物跡群全景 (北から)
S B 65 (手前西側)
S B 75 (中央)



(2)S B 65 (ピット177) 遺物出土状況 (南東から)



(3)S B 75 (ピット75) 遺物出土状況 (南東から)



(4)18b t 中世建物跡 (S B 47) 全景 (南から)



(5)S B 47 (ピット49) 遺物出土状況 (東から)



(1)10 b t 古墳時代面全景 (南から)



(2)11 b t 古墳時代面全景 (南から)



(3)11 b t 中央付近 S D85遺物出土状況 (西から)



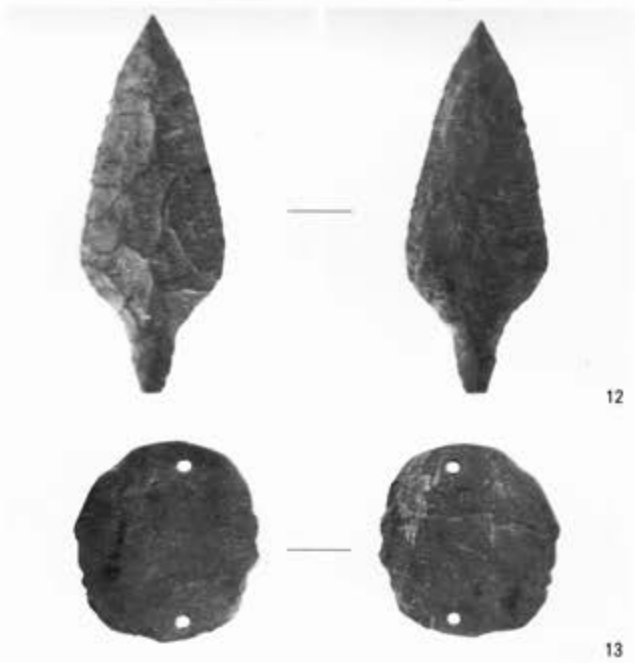
(1)16 b t 古墳時代面全景 (南から)



(2)17・18 b t 古墳時代面全景 (南から)



(3)18 b t 北端付近 S D223・S D227 遺物出土状況 (西から)



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第77冊							
編著者名	田代 弘・柴 暁彦・伊野近富・野々口陽子・石尾政信・古瀬誠三・杉本厚典・引原茂治・有井広幸							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone		075(933)3877		
発行年月日	西暦		1997 年		3 月		26 日	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかかいどう ういせきだ い42じ 中海道遺跡 第42次	むこうしもずめちよ うごしょかいどう・ なかかいどう 向日市物集女町御 所海道・中海道	208	3	34° 57' 39"	135° 41' 44"	19961028 ～ 19970227	455	道路整備
ながおか きょうあと うきょうだ い547じ 長岡京跡右 京第547次	ながおかしやうし いのうち・にしの きょう 長岡京市井ノ内・ 西ノ京	209	91	34° 56' 26"	135° 41' 41"	19961007 ～ 19970213	1,100	道路建設
ながおかし やうあと うきょう うだい541 じ・わきやま いせき 長岡京跡右 京第541次・ 脇山遺跡	おとくにぐんおおや まざきちやうおおあ ざえんみやうじこあ ざとりいまえ 乙訓郡大山崎町大 字円明寺小字鳥居 前	303	18	34° 54' 39"	135° 41' 13"	19960909 ～ 19961206	830	宅地造成
とどういせ き 菟道遺跡	うじしとどうでく ち 宇治市菟道出口	204	64	34° 53' 50"	135° 48' 40"	19961125 ～ 19961220	360	道路改良
にしはやあ がりいせき 西集上り遺 跡	うじしとどうもり もと 宇治市菟道森本	204	32	34° 53' 57"	135° 48' 38"	19961213 ～ 19970213	125	道路改良
しばやまい せき 芝山遺跡	じやうやうしてら だちくどめ 城陽市寺田築留	207	56	34° 50' 51"	135° 47' 47"	19961217 ～ 19970127	180	スタジアム 公園整備
たなべじ やうあと ほか 田辺城跡他	つづきぐんたなべ ちやうおおあざたな べこあざおくのしろ 綴喜郡田辺町大字 田辺小字奥ノ城	342	69	34° 48' 35"	135° 46' 6"	19960501 ～ 19960829	1,670	道路建設

かきぞえい せきだい3 じ 柿添遺跡第 3次	そうらくぐんせいか ちょうきたいなはち まかきぞえ・しも まかきぞえ 相楽郡精華町北稻 八間柿添・下狛柿 添	366	47	34° 45' 58"	135° 47' 27"	19960819 ～ 19961206	960	道路建設
もりがいと いせきだい 1じ 森垣外遺跡 第1次	そうらくぐんせいか ちょうみなみいなや づまもりがいと 相楽郡精華町南稻 八妻森垣外	366	26	34° 45' 20"	135° 47' 21"	19961217 ～ 19970213	340	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中海道遺跡 第42次	集落	弥生・古墳・室町		竪穴住居3・柱穴群・土坑		弥生土器・須恵器・ 土師器		
長岡京跡右 京第547次	都城	弥生・長岡京期・ 鎌倉・室町		杭列・流路・地境溝		弥生土器・須恵器・ 土師器		
長岡京跡右 京第541次	都城	長岡京期		掘立柱建物		須恵器・土師器		
脇山遺跡	集落・墓	縄文・弥生		溝・土坑		縄文土器・弥生土器 石器		
菟道遺跡	集落	古墳・奈良・平安		流路		土師器・須恵器・瓦		
西牟上り遺 跡	集落	不明		土坑		土師器・灰釉		
芝山遺跡	集落	古墳・飛鳥・江戸		谷状遺構・溝		土師器・陶磁器類		
田辺城跡	城館	室町		虎口(石垣・石段)・土塁・堀 切		軒丸瓦・軒平瓦・土 師器・磁器・土管		
田辺奥ノ城 古墳群	古墳	古墳		方墳2		埴輪・須恵器・管玉		
田辺遺跡	集落	弥生		竪穴住居3・方形周溝墓・土 器棺墓		弥生土器・石器		
柿添遺跡第 3次	集落	古墳・奈良・鎌倉 ・室町・江戸		溝・土坑		土師器・須恵器・有 孔円板		
森垣外遺跡 第1次	集落	古墳・鎌倉		掘立柱建物・溝・井戸・土坑		須恵器・土師器・石 鏝・滑石製有孔円板 ・瓦器・鉄滓		

京都府遺跡調査概報 第77冊

平成9年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)